

きた じ  
北 地 遺 跡

—北地南線農道整備事業に伴う発掘調査報告書—

2011.3

香南市教育委員会

きた じ  
北 地 遺 跡

—北地南線農道整備事業に伴う発掘調査報告書—

2011.3

香南市教育委員会



裏面



断面



表面

赤色顔料の残る破鏡 (ST1 出土 青銅鏡)



ST11



ST10

A区の遺構

弥生時代中期初頭～前半の集落  
Ⅱ様式の竪穴住居



## 序

香南市は、平成 18 年 3 月に 5 町村が合併し 5 年目をむかえました。それぞれ旧自治体では地域の特性から行政の方策に隔たりが多く、合併後はそれらを解消することに重点をおきながら進めてまいりました。今後の文化財行政におきましては、地域の特徴を持った数多くの文化財を地域づくりに活用できるような政策を講じていければと考えております。

平成 21 年 4 月に開設しました香南市文化財センターでは、遺跡の発掘調査や整理作業を行うとともに、市内で発掘した数多くの土器等の遺物や民具を展示し一般に公開しております。また、イベント等を開催し広く市内外の方々に香南市の歴史や文化に触れていただきながら、地域の観光やまちづくりに寄与し、地域になくってはならない施設となることを目標にしております。

この文化財センター開設後 4 冊目となる本書の北地遺跡は、野市町西野の物部川左岸に位置し、周辺は物部川の恵みを受けて古くから農業が盛んに行われてきました。香南市で最も遺跡が集中した地域ですが、近年宅地化が進み、それに伴って記録保存のための発掘調査も多く行われております。

本遺跡は、弥生時代の集落跡や奈良時代から平安時代前半の役所跡であり、中でも弥生時代前期末から中期前半にかけての竪穴住居が確認されたのは、県内でもほとんど例が無く大変貴重な資料であると聞きます。

本書は、香南市の歴史を広く知っていただくとともに、埋蔵文化財に対する一層のご理解をいただきますことを願って刊行するものです。文化財保護の資料として広く活用されれば幸いです。

最後になりましたが、高知県教育委員会、高知県埋蔵文化財センターをはじめ多数の方々のご協力をいただいたことに心からお礼申し上げます。

平成 23 年 3 月

高知県香南市教育委員会  
教育長 別役 朋之





# 例 言

1. 本書は、野市町（現香南市）教育委員会が平成15年度に実施した野市町北地南線農道整備事業に伴う記録保存のための緊急発掘調査報告書である。
2. 北地遺跡は、高知県香南市野市町下井551-1番地他に所在する。
3. 試掘調査は平成15年4月21日から5月30日にかけて実施し、発掘調査は平成15年7月1日から9月30日にかけて実施した。
4. 調査対象面積 1,300 m<sup>2</sup>  
試掘調査面積 100 m<sup>2</sup>  
発掘調査面積 1,000 m<sup>2</sup>
5. 試掘調査・発掘調査時（平成15年度）の調査体制は以下のとおりである。

事務担当	北村 暢敏（野市町教育委員会 生涯学習課 主幹）
調査員	更谷 大介（助野市町開発公社 埋蔵文化財調査員）
6. 北地遺跡の整理作業及び報告書作成作業は、平成20年度まで更谷大介（香南市教育委員会生涯学習課 嘱託）と溝渕真紀（同）が担当して、遺物の整理・点検作業を行った。平成21・22年度の報告書作成作業は、松村信博（香南市文化財センター主任調査員）と宮地啓介（香南市文化財センター調査員）が20年度までの成果を引き継ぎ、分担して行った。
7. 報告書刊行時（平成22年度）の香南市教育委員会生涯学習課文化振興保護係の体制は以下のとおりである。

課 長	吉田 豊	臨時職員	水田 紀子
係 長	山本 八也	〃	小松 経子
主任調査員	松村 信博	〃	宮本 幸子
主 監	竹中 ちか	〃	齋藤 美幸
調 査 員	宮地 啓介		
8. 本書の執筆分担は、第Ⅰ～Ⅱ章・Ⅲ章第1・2節・Ⅴ章を松村が担当、第Ⅲ章第3節と第4節については、出土遺物についての説明・記述を松村が、遺構についての説明・記述を宮地が担当、編集作業、遺物観察表作成、遺物写真撮影については松村が行った。現場写真は更谷大介による。

なお、巻頭の青銅鏡（破鏡）写真については、高知県歴史民俗資料館岡本桂典氏より提供していただいた。
9. 発掘現場作業員は下記の方々である。精力的に作業に従事された方々に対し、記して敬意を表す。（敬称略）

佐野宣重・榎尾俊喜・土居豊・清藤勝秀・河村みさ子・安丸秀美
10. 重機による表土剥ぎ、排土運搬、埋め戻しについては（株）共運工業の便宜、助力を得た。

11. 平成21・22年度の報告書作成に関する整理作業については、作業ごとに以下のメンバーで分担して行った。

注記・接合等 水田紀子・小松経子

遺物実測 小松経子・宮本幸子・齋藤美幸・福島賀代子・水田紀子・伊野広高・  
山本八也・松村信博

トレース 齋藤美幸・小松経子・宮本幸子・宮地啓介・松村信博

遺構の原図作成 宮地啓介

12. 下記の方々には現地での調査、報告書作成過程を通じて貴重なご助言・ご教示をいただいた。記して感謝する次第である。（敬称略・所属は2010年度）

古市晃（神戸大学）・岡本桂典（高知県歴史民俗資料館）・出原恵三・吉成承三・池澤俊幸・久家隆芳・島内洋二（以上高知県埋蔵文化財センター）・浜田恵子（高知市教育委員会）・安井敏夫（高知県越知町立横倉山自然の森博物館）

また、出土した青銅鏡については、自然科学分析及び保存処理を（株）吉田生物研究所に依頼し、報文を頂き、IV章自然科学分析として本報告書に掲載した。

13. 出土遺物、写真その他図面類の関係資料は香南市文化財センター（香南市香我美町山北1553-1）で保管している。遺跡番号は、03-NKである。

# 本文目次

第Ⅰ章 調査の経緯及び方法	
第1節 調査の経緯	1
第2節 試掘調査	3
第3節 調査区の設定と調査の方法	7
第Ⅱ章 位置と環境	
第1節 位置と自然環境	9
第2節 歴史的環境	10
第Ⅲ章 調査の成果	
第1節 基本層序	18
第2節 調査区の概要と遺構配置	23
第3節 弥生時代の遺構と遺物	31
第4節 古代以降の遺構と遺物	117
遺物観察表	133
第Ⅳ章 自然科学分析	
野市町北地遺跡出土金属製品の成分分析結果（株）吉田生物研究所	163
第Ⅴ章 まとめ -北地遺跡 集落の変遷-	165

# 図版目次

第1図 高知県の行政区画と北地遺跡の位置	1
第2図 北地南線農道整備工事対象地位置図（S=1/5,000）	2
第3図 試掘TR1 推積状況（S=1/50）	3
第4図 農道予定地と試掘トレンチ位置図	4
第5図 調査区とグリッドの設定及び公共座標	8
第6図 北地遺跡周辺の地形（旧野市町域・深淵北遺跡報告書より）	9
第7図 北地遺跡と高知平野東半の遺跡（S=1/50,000）	13
第8図 北地遺跡周辺の地形と遺跡	15
第9図 北地遺跡セクション図1（S=1/60）	19

第10図	北地遺跡セクション図2 (S=1/60)	21
第11図	北地遺跡セクション図3 (S=1/60)	22
第12図	北地遺跡調査区遺構全体図 (S=1/400)	23
第13図	A区遺構配置図 (S=1/200)	25
第14図	B区遺構配置図 (S=1/200)	26
第15図	C区南遺構配置図 (S=1/200)	27
第16図	C区中央遺構配置図 (S=1/200)	28
第17図	C区北遺構配置図 (S=1/200)	29
第18図	D区遺構配置図 (S=1/200)	30
第19図	弥生時代の主な遺構 (ST・SK・SD・P)	31
第20図	ST1 平面・セクション図 (S=1/40) 出土遺物 1 弥生土器 (S=1/4) 青銅鏡 (S=1/2)	33
第21図	ST1 出土遺物 2 弥生土器 (S=1/4) 石器類 (S=1/4・1/2)	34
第22図	ST2 平面・エレベーション図 (S=1/40) 出土遺物 弥生土器 (S=1/4) 石器類 (S=1/2)	35
第23図	ST3 平面・エレベーション図 (S=1/40)	36
第24図	ST3 出土遺物 弥生土器 (S=1/4)	37
第25図	ST4 及び周辺遺構平面図 (S=1/60) 出土遺物 1 弥生土器 (S=1/4)	38
第26図	ST4 出土遺物 2 石器類 (S=1/3・2/3)	39
第27図	ST5 平面・エレベーション図 (S=1/40) 出土遺物 弥生土器 (S=1/4) 石器類 (S=1/2・2/3)	40
第28図	ST6 平面・エレベーション図 (S=1/60)	41
第29図	ST6 出土遺物 1 弥生土器 (S=1/4)	42
第30図	ST6 出土遺物 2 石器類 (S=1/2・1/3)	43
第31図	ST7 平面・エレベーション図 (S=1/40) 出土遺物 1 弥生土器 (S=1/4)	45
第32図	ST7 出土遺物 2 弥生土器 (S=1/4)	46
第33図	ST7 出土遺物 3 弥生土器 (S=1/4)	47
第34図	ST7 出土遺物 4 弥生土器 (S=1/4)	48
第35図	ST7 出土遺物 5 弥生土器 (S=1/4)	49
第36図	ST7 出土遺物 6 弥生土器 (S=1/4)	50
第37図	ST7 出土遺物 7 弥生土器 (S=1/4)	51
第38図	ST7 出土遺物 8 弥生土器 (S=1/4) 石器類 (S=1/2・1/4)	52
第39図	ST8 平面・エレベーション図 (S=1/60) 出土遺物 弥生土器 (S=1/4) 石器類 (S=1/3)	54
第40図	ST9 平面・エレベーション図 (S=1/40) 出土遺物 弥生土器 (S=1/4)	55
第41図	ST10 平面・エレベーション図 (S=1/60) 出土遺物 弥生土器 (S=1/4)	56
第42図	ST10 出土遺物 石器類 (S=1/2・1/3)	57
第43図	ST11 平面・エレベーション図 (S=1/60)	58
第44図	ST11 出土遺物 弥生土器・土師器 (S=1/4)	59
第45図	ST11 出土遺物 石器類 (S=2/3)	60
第46図	SK2・3 平面・エレベーション図 (S=1/40) 出土遺物 石器類 (S=1/2・1/3)	62
第47図	SK4・SX1 平面・エレベーション図 (S=1/40) SK4出土遺物 弥生土器 (S=1/4)	63
第48図	SK5～7 平面・エレベーション図 (S=1/40)	63
第49図	SK8～10 平面・エレベーション図 (S=1/40) SK8 出土遺物 弥生土器 (S=1/4)	64

第50図	SK11 平面・エレベーション図 遺物出土状況 (1/20) 完掘 (S=1/40) 及び出土遺物 弥生土器 (S=1/4)	66
第51図	SK15~22 平面・エレベーション図 (S=1/40) SK19出土遺物 弥生土器 (S=1/4)	67
第52図	SK23・24 平面・エレベーション図 (S=1/40)	68
第53図	SK25 平面・エレベーション図 (S=1/40) 出土遺物 弥生土器 (S=1/4)	69
第54図	SK26~33 平面・エレベーション図 (S=1/40)	70
第55図	SK35及び周辺遺構 平面・エレベーション図 (S=1/40) 出土遺物 弥生土器 (S=1/4)	71
第56図	SK37 平面・エレベーション図 (S=1/40)	72
第57図	SK38 平面・エレベーション図 (S=1/40) 出土遺物 石器類 (S=1/2)	72
第58図	SK39・40 平面・エレベーション図 (S=1/40)	72
第59図	SK41 平面・エレベーション図 (S=1/40) 出土遺物 石器類 (S=1/2)	73
第60図	SK43・44及び周辺遺構 平面・エレベーション図 (S=1/40)	73
第61図	SK45 平面・エレベーション図 (S=1/40) 出土遺物 石器類 (S=1/4)	74
第62図	SK46~49 平面・エレベーション図 (S=1/40)	75
第63図	SK50 平面・エレベーション図 (S=1/40) 出土遺物 弥生土器 (S=1/4)	76
第64図	SK51~58 平面・エレベーション図 (S=1/40)	78
第65図	SK61 平面・エレベーション図 (S=1/40) 出土遺物 弥生土器 (S=1/4)	78
第66図	SK68 平面・エレベーション図 (S=1/40) 出土遺物 弥生土器 (S=1/4)	79
第67図	SK62・63・65・66・67・69 平面・エレベーション図 (S=1/40)	80
第68図	SK70 平面・エレベーション図 (S=1/40) 出土遺物 1 弥生土器 (S=1/4)	82
第69図	SK70 出土遺物 2 石器類 (S=1/3)	83
第70図	SK71・72・73A・73B・74・77 平面・エレベーション図 (S=1/40)	83
第71図	SK75 平面・エレベーション図 (S=1/40) 出土遺物 石器類 (S=1/2)	84
第72図	SK78 平面・エレベーション図 (S=1/40) 出土遺物 石器類 (S=1/3)	84
第73図	SK81 平面・エレベーション図 (S=1/40)	85
第74図	SK82 平面・エレベーション図 (S=1/40) 出土遺物 弥生土器 (S=1/4)	85
第75図	SK83~87 平面・エレベーション図 (S=1/40) 出土遺物 弥生土器 (S=1/4)	87
第76図	グリッドN-3 土器8~10出土地点 平面・エレベーション図 (S=1/40)	88
第77図	土器棺墓 (土器9・10) 出土遺物 弥生土器 (S=1/4)	89
第78図	SD3・SD3-2 (石列) 平面・セクション図 (S=1/40)	90
第79図	SD3-2 (石列) 及び上層包含層出土遺物 1 弥生土器 (S=1/4) 石器類 (S=2/3・1/3)	91
第80図	SD3-2 (石列) 及び上層包含層出土遺物 2 石器類 (S=1/4・1/3)	92
第81図	SD58・59 平面・エレベーション図 (S=1/40)	94
第82図	SD59 出土遺物 磨製石斧未製品 (S=1/3)	94
第83図	ピット出土遺物 1 弥生土器 (S=1/4・1/2)	96
第84図	ピット出土遺物 2 弥生土器 (S=1/4)	97
第85図	P429 遺物出土状況 平面・エレベーション図 (S=1/20) 出土遺物 弥生土器 (S=1/4)	98
第86図	ピット出土遺物 3 石器類 (S=1/3・1/2)	98
第87図	遺構配置図 (SX1~11) 及びSX2~4 平面・エレベーション図 (S=1/40) 出土遺物 弥生土器 (S=1/4)	107

第88図	土器集中地点（土器5～7）出土遺物 弥生土器（S=1/4）石器類（S=1/3）	108
第89図	古代以降の溝から出土した弥生時代の遺物 弥生土器（S=1/4・1/2）石器類（S=1/3・1/4）	110
第90図	包含層出土遺物－弥生時代－1 弥生土器（S=1/4）	111
第91図	包含層出土遺物－弥生時代－2 磨製石鏃（S=2/3）	112
第92図	包含層出土遺物－弥生時代－3 石包丁（S=1/2）	113
第93図	包含層出土遺物－弥生時代－4 磨製石斧基部（S=1/3）	114
第94図	包含層出土遺物－弥生時代－5 スクレイパー類（S=1/2）	115
第95図	包含層出土遺物－弥生時代－6 敲石・磨製石斧未製品（S=1/3）	116
第96図	古代以降の主な遺構及び遺物出土地点位置図	117
第97図	SB1 平面・エレベーション図（S=1/80）	118
第98図	SB2 平面・エレベーション図（S=1/80）出土遺物 土師器・須恵器・軽石（S=1/3）	118
第99図	SB3 平面・エレベーション図（S=1/80）出土遺物 土師器・須恵器（S=1/3）	119
第100図	SB4 平面・エレベーション図（S=1/80）出土遺物 須恵器（S=1/3）弥生土器（S=1/4）	120
第101図	SB5 平面・エレベーション図（S=1/80）	121
第102図	SK42 平面・エレベーション図（S=1/40）出土遺物 白磁（S=1/3）	121
第103図	SK76 平面・エレベーション図（S=1/40）出土遺物 土師器（S=1/3）弥生土器（S=1/4）	122
第104図	SK100・101 平面・エレベーション図（S=1/40）	122
第105図	SK100 出土遺物 砥石（S=1/3）	122
第106図	SD溝・溝状遺構配置図（弥生時代の遺構も含）	124
第107図	遺構（SD・P）出土遺物－古代以降－土師器・須恵器・白磁・瓦質土器（S=1/3）	131
第108図	包含層出土遺物－古代以降－土師器・須恵器（S=1/3）	132
第109図	物部川下流左岸段丘上の遺跡	166
第110図	磨製石斧未製品	167
第111図	祭祀に用いられたと考えられる陰陽石	168
第112図	弥生時代の主な遺構の時期ごとの地点分布	169
第113図	高知県出土の弥生時代の鏡	171
第114図	墨書実測図	173
第115図	墨書赤外線写真と墨書須恵器底面画像	174
第116図	北地遺跡周辺の弥生時代集落居住域（推定）の変遷	178

## 表 目 次

表1	北地遺跡と高知平野東半・物部川下流域の遺跡	12
表2	ピット計測表	99
表3	ピット出土遺物	104
表4	溝及び溝状遺構（SD）出土遺物	105
表5	遺物観察表（土器）1～19	135
表6	遺物観察表（石器）1～7	154

# 写真図版目次

- 巻頭図版1 赤色顔料の残る破鏡 (ST1 出土 青銅鏡)  
巻頭図版2 弥生時代中期初頭～前半の集落 II 様式の竪穴住居

- 図版1 北地遺跡全景 (上空から)  
図版2 調査前の景観と調査風景  
図版3 試掘調査で検出された遺構とC区北端の状況  
図版4 C区北半の遺構とSK2  
図版5 D区 SK11の調査  
図版6 D区の景観 遺構完掘状況  
図版7 ST1とC区北半の遺構  
図版8 ST1 遺物出土状況と床面遺構  
図版9 C区 遺構完掘状況と周辺の景観  
  
図版10 C区 遺構完掘状況 (SD23・SD-H・SB4)  
図版11 C区 弥生土器出土状況  
図版12 B区の土坑 (SK50とSK70)  
図版13 A区 西端の調査  
図版14 A区 西端遺構完掘 (ST9・11)  
図版15 A区 ST10  
図版16 B区 遺構完掘状況  
図版17 B区と周辺の景観  
図版18 C区 竪穴住居完掘 (ST2・3・8)  
図版19 C区 竪穴住居 (ST7)  
図版20 C区の遺構  
図版21 ST1・2 出土遺物  
図版22 ST3・4 出土遺物  
図版23 ST5・6 出土遺物  
図版24 ST7 出土遺物 (1)  
図版25 ST7 出土遺物 (2)  
図版26 ST7 出土遺物 (3)  
図版27 ST7 出土遺物 (4)  
図版28 ST7 出土遺物 (5)  
図版29 ST7 出土遺物 (6)  
図版30 ST7 出土遺物 (7)  
図版31 ST8・9 出土遺物  
図版32 ST10・11 出土遺物  
図版33 ST11 出土遺物

- 図版34 SK4・8・11・19・25・35 出土遺物
- 図版35 SK50・68・70 出土遺物
- 図版36 SK3・70・78・82・85・87 出土遺物
- 図版37 土器 9・10 (土器棺)
- 図版38 SD3・SD3-2 (検出された石列) 及び上面包含層 P149・174
- 図版39 遺構出土遺物 (ピット出土遺物)
- 図版40 遺構出土遺物 (ピット出土遺物)
- 図版41 包含層出土遺物 (弥生土器)
- 図版42 包含層出土遺物 (石器類)
- 図版43 墨書土器 (447・457)
- 図版44 古代～中世 出土遺物



# 第 I 章 調査の経緯及び方法

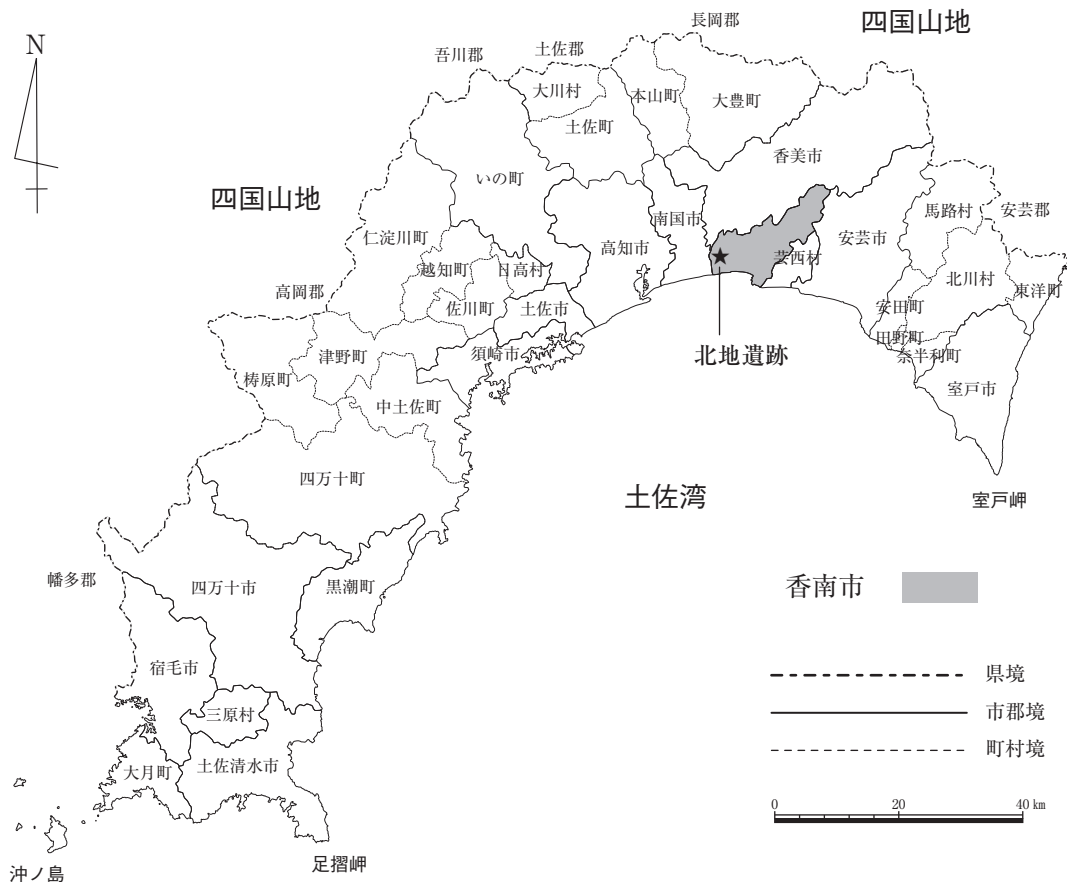
## 第 1 節 調査の経緯

本調査は高知県香美郡野市町（現香南市野市町）北地南線農道整備事業に伴う記録保存のための緊急発掘調査である。

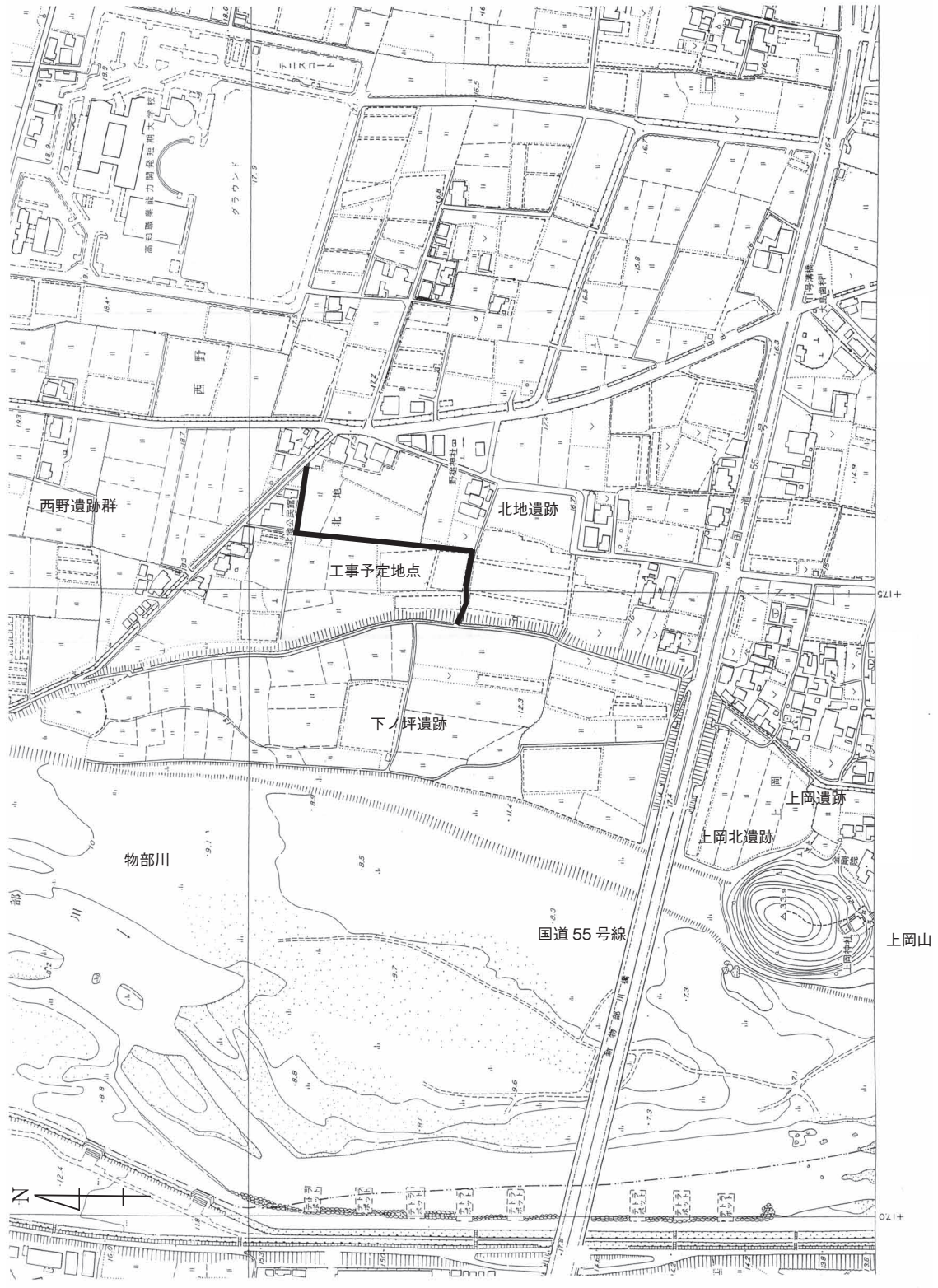
平成 15 年度に、野市町下井 551 - 1 番地他に所在する北地遺跡包蔵地内で、北地南線農道整備事業が計画された。事前に事業区域内の埋蔵文化財の有無を確認し、埋蔵文化財の保護と事業の円滑な調整を図ることを目的として、野市町（現香南市）教育委員会が主体となって試掘確認調査を行う。調査は平成 15 年 4 月 21 日から実施、調査に際しては、高知県教育委員会文化財課と(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターの協力を得た。

12ヶ所の試掘トレンチを設定、調査の結果、弥生時代及び古代（奈良・平安時代）の遺構・遺物を検出した。工事施工予定地全域に埋蔵文化財が遺存しており、工事施工による遺跡への影響が考えられるため、事前の発掘調査による記録保存を行うこととなった。

試掘調査期間は平成 15 年 4 月 21 日から 5 月 30 日にかけてであり、調査面積は約 100㎡である。試掘調査の結果を受けて本発掘調査の範囲を確定、平成 15 年 7 月 1 日から 9 月 30 日にかけて、工事対象面積約 1,300㎡のうち、約 1,000㎡について本発掘調査を実施した。



第 1 図 高知県の行政区画と北地遺跡の位置

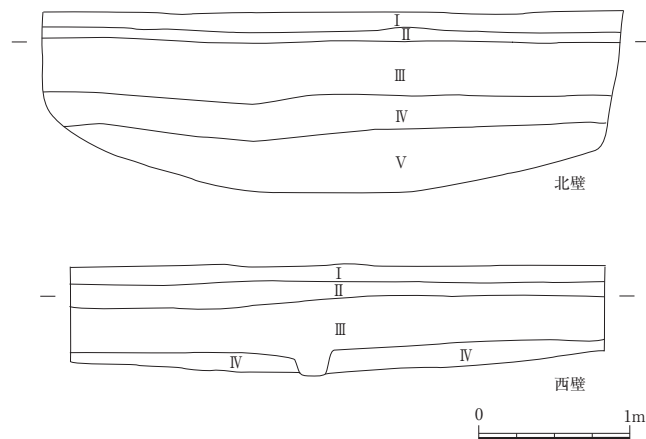


第2図 北地南線農道整備工事対象地位置図 (S=1/5,000)

## 第 2 節 試掘調査

調査対象地内に 12 箇所の試掘トレンチを設定、調査区の北側 TR1 から TR5 まで調査した後、南側の TR6～8 から南北方向の農道予定地を南から北に向かって (TR9～12) 順次確認調査を進めていった。設定したトレンチの位置は第 4 図のとおりである。基本層序は第 3 図に示したとおりであり、I 層が表土、II 層が灰茶色シルト質土、III 層が黒褐色シルト質土、IV 層が茶黒褐色シルト質土、V 層が明黄色シルト質土、VI 層が明黄色シルト質土に 1 cm～人頭大の礫を含む層となっており、一部削平されているものの、調査対象地全域が同様の堆積状況を示している。

なお、試掘調査の時点で出土した遺物の中で、図示可能な遺物については、本報告第 III 章遺構と遺物の項でまとめて記述することとし、ここでは試掘トレンチの位置と基本層序、出土遺物などの概要のみを報告する。



第 3 図 試掘 TR1 堆積状況 (S = 1/50)

DL=17.0m

### 試掘トレンチの概要

#### TR1

調査区の北側、東西線の東端に位置する。

トレンチ南側にピットを検出したが遺物は認められない。弥生土器と土師器の小片が I 層から 10 点、II 層から 34 点出土、須恵器は合計 6 点確認され、小片だが赤彩土師器が出土している。近世以降の磁器も 2 点出土している。

#### TR2

調査区の北側、東西線の TR1 西側に位置する。

遺構は、柱穴と溝状の遺構が確認でき、柱穴の底より土師器高坏が出土した。II・III 層から弥生・土師器小片 60 点、土師器 11 点、須恵器 3 点など古代の遺物も一定量含んでいる。赤彩土師器と製塩土器小破片 2 点も確認された。製塩土器と把握可能な土器片は、今回の調査においてこのトレンチ以外には確認できていない。緑色岩の磨製石斧基部も 1 点出土している。

遺構として P96、弥生土器細片 6 点が出土。詳細な時期の特定はできない。

#### TR3

調査区の北側、東西線の西端に位置する。

遺構は、柱穴と溝状の遺構が確認でき、土坑には切り合い関係が認められる。土坑内から弥生土器 (田村式・第 II 様式) が出土している。表土～III 層にかけて弥生・土師器小片が 45 点、土師器 2 点、



須恵器 5 点出土している。円盤状高台と輪高台の資料が確認されている。

遺構として SK12 から土器片 20 点、SK14 上から土器小片 1 点が出土、これらの遺構は古代の掘立柱建物を構成する柱穴である。

#### TR4

調査区南北線の北端に位置する。

遺構は石列状遺構や土坑・溝が確認でき、壺棺・甕棺も出土している。石列状の遺構内には、弥生前期末～中期初頭に位置付けることができる土器が認められる。また、石列状遺構の南側には磨製石斧や弥生土器が出土している。

壺棺・甕棺は弥生時代後期後半で、壺棺内には高坏が認められる。Ⅲ層より弥生土器を中心とする土器片が約 300 点出土している。土師器も混在する。土師器と特定できるもの 10 点、須恵器 5 点など古代の遺物も確認されるものの、量は少ない。備前播鉢も 1 点出土している。

#### TR5

調査区、南北線の TR4 南側に位置する。

遺構は竪穴住居跡 (ST1) を検出している。Ⅲ層 (黒褐色シルト質土) からは、弥生土器や土師器の細片約 40 点が出土した。

#### TR6

調査区の南側、東西線の西端に位置する。Ⅴ層より上にあたる層は後世に削平されており、遺構・遺物とも確認できなかった。

#### TR7

調査区の南側、東西線の TR6 南側に位置する。

柱穴跡だと思われる遺構を検出した。Ⅲ層 (黒褐色シルト質土) からは、弥生土器や土師器の細片が出土、弥生土器の底部が 1 点確認されている。

#### TR8

調査区の南側、東西線の TR6 東側に位置する。

Ⅱ層までは埋め立て土となっているが、Ⅲ層 (黒褐色シルト質土) 以下の層は残存している。Ⅲ層からは、弥生土器や土師器の細片が出土した。

#### TR9

調査区、南北線の南端に位置する。

性格不明遺構を検出した。Ⅲ層 (黒褐色シルト質土) からは、土器小片 23 点、磁器・陶器 2 点が出土した。

#### TR10

調査区、南北線の TR9 北側に位置する。

遺構は、溝・性格不明遺構を検出した。溝にサブトレンチを入れて断面の調査を行い、溝底部より石包丁が出土した。弥生土器・土師器小片が約 60 点出土している。

#### TR11

調査区、南北線の TR10 北側に位置する。

遺構検出面まで掘削し、精査は本発掘調査で行う。Ⅲ層 (黒褐色シルト質土) から弥生土器・土師器約 70 点が出土、弥生前期末、中期の貼付口縁、円盤状高台 (糸切底) など異なる時期の資料

が混在する。

## TR12

調査区、南北線の TR11 北側に位置する。

遺構検出面まで掘削し、精査は本発掘調査で行う。Ⅲ層（黒褐色シルト質土）からは、弥生土器や土師器の細片が出土した。

## 試掘調査のまとめ

試掘調査の結果、農道が整備されるほぼすべての範囲に遺構・遺物を確認することができた。

検出された土器の時期は大きく分けて「弥生時代前期末～中期前半」・「弥生時代後期前半～中葉」・「奈良時代～平安時代のはじめ」の3つの時期である。TR4 で検出された弥生前期末～中期初頭の石列状遺構、同トレンチで確認された弥生時代後期前半～中葉の壺棺・甕棺、TR2 で確認された奈良時代の土師器（高坏）が出土した柱穴など、各時期の遺構が確認されている。

本遺跡は、平成6・7・8年度に発掘調査を行った下ノ坪遺跡の東に隣接した自然堤防上に立地しており、二つの遺跡間には深い関係があると考えられる。

下ノ坪遺跡は弥生時代後期前半に盛行している。しかし、弥生時代後期3期を待たずに突然消滅する。これは弥生時代の拠点集落田村遺跡と同様の現象である。

下ノ坪遺跡の遺物包含層や竪穴住居の埋土には、砂礫・砂・シルトなどの堆積がみられ、田村遺跡でも同様の状況が確認されている。このことは、後期Ⅱの段階で、物部川水系で大規模な洪水が発生したことを示している。これ以降、下ノ坪遺跡は廃絶し、その後古墳時代まで空白となっている。弥生時代前期末ごろは、自然堤防上の本遺跡付近に集落を形成していたと考えられる。その後、弥生時代後期初頭から後期Ⅱ期までの間、下ノ坪遺跡付近で集落を営んでいたと思われ、洪水（氾濫）が起こった時、下ノ坪遺跡の集落は廃絶、人々は一段高い場所に避難し、集落を営んだと考えることができる。

（以上、更谷大介氏のまとめより）

### 第 3 節 調査区の設定と調査の方法

調査対象地全域に A～D 区の 4 調査区を設定した。これらの 4 つの調査区は工事対象区域の農道の形に即して設定した便宜的なものである。農道は東西方向に走る部分と、南北方向に走る部分があり、それぞれ東西線・南北線と仮称する。東西線は北側と南側に分かれており、南北線は一時退避所の設置により広がった部分を境に南北に分けることができる。調査区の呼称は南から北に向かって順番に A 区、B 区、C 区、D 区と設定、南側の東西線が A 区、南側の南北線が B 区、北側の南北線が C 区、北側の東西線が D 区にあたる。(第 5 図)

調査に際しては、農道の方向に合わせて任意の座標軸を決め、4 m グリッドを設定して調査を進めた。設定したグリッドは、北西端の測量杭を用いて、その杭番号を 4 m グリッドの呼称とする。杭番号は東西方向をアルファベットで、南北方向をアラビア数字で示す。東西方向は、東から西に向かって Z・Y・X・・・と Z からアルファベットの逆順にグリッドを設定、西端グリッド (A 区) は H となる。また、南北方向は、北から南に向かって 1 から 38 までのグリッドを設定し、調査地点の位置関係を示す。調査対象地全体の北東端が Z-1、南西端が H-38 である。

測量杭の設定      北→南 1～38      東→西 Z～H

#### 調査区の範囲

A 区 西 (H) → 東 (N)、北 (36) → 南 (38) の範囲。幅約 5 m、総延長約 24 m。調査面積は約 120m<sup>2</sup>。

B 区 北 (26) → 南 (36)、西 (O) → 東 (Q) の範囲。北端幅約 10 m、南端幅 3.8 m、総延長約 38 m。調査面積は約 260m<sup>2</sup>。

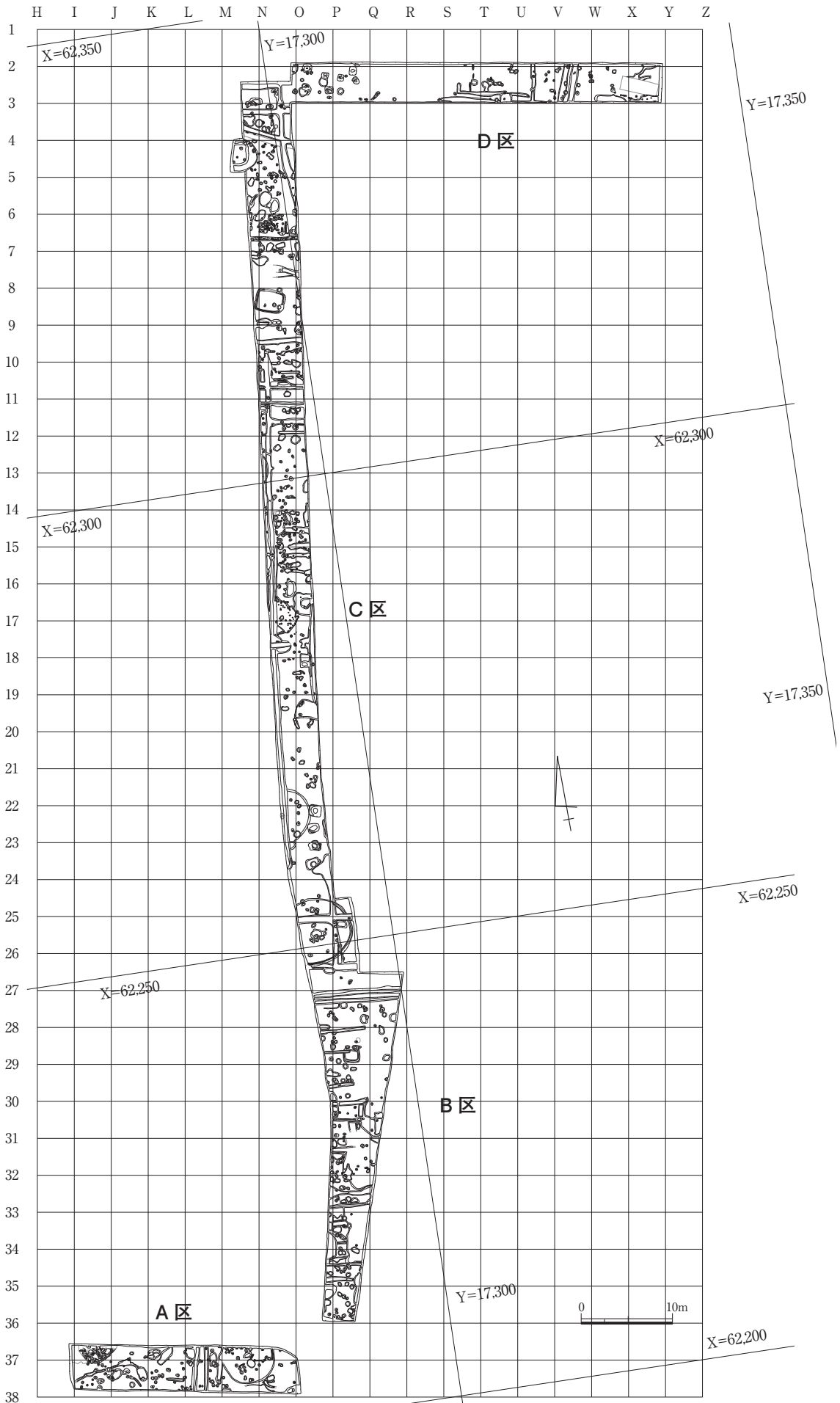
C 区 北 (2) → 南 (26)、西 (M) → 東 (P) の範囲。幅約 4.1～5.1 m、総延長約 100 m、南端拡張部のみ幅約 6 m (長さ 8 m)。調査面積は約 460m<sup>2</sup>。

D 区 西 (O) → 東 (Y)、北 (1) → 南 (2) の範囲。幅約 4.1～4.2 m、総延長約 40 m。調査面積は約 160m<sup>2</sup>。

各調査区の調査面積合計は約 1,000m<sup>2</sup>となる。

調査の手順としては、耕作土、包含層直上まで重機を用いて堆積土を除去した後、包含層掘削、遺構検出、遺構埋土掘削を手作業で進めた。平面実測及び土層断面図については、縮尺 20 分の 1 を基本とし、状況に応じて 10 分の 1 等、他の縮尺を用いて実測を行った。

第 5 図に示す公共座標は世界測地系に即した座標である。グリッドの座標軸は、公共座標の座標軸から約 10 度東に傾いている。



第5図 調査区とグリッドの設定及び公共座標



## 第II章 位置と環境

### 第1節 位置と自然環境

北地遺跡は、高知県香南市野市町下井551-1番地他に所在する。物部川の段丘面上面に立地し、物部川に接する下段には下ノ坪遺跡と上岡北遺跡、上岡遺跡が、同じ段丘面の北隣には西野遺跡群が、さらに北側には深淵遺跡があるなど、周辺一帯の物部川段丘面に遺跡が分布している。

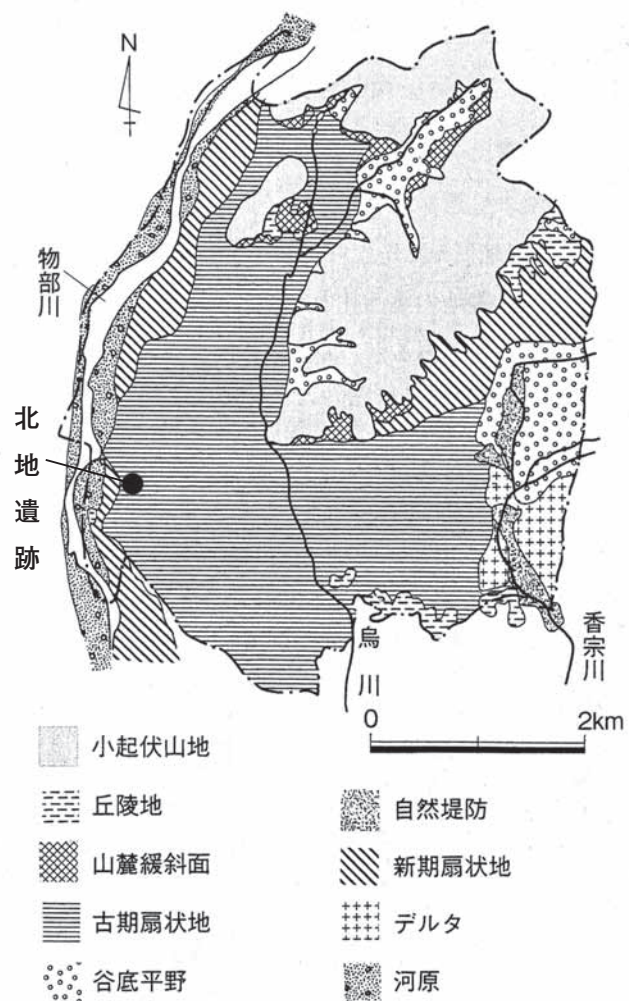
昭和40年代から一帯に遺物が散布することが知られており、遺跡の南端を走る南国バイパス建設の際にはまとまった土器の出土が報告されている。<sup>(1)</sup> 土器の採取できる地点を中心に、南北約350m、東西約400m、約9ヘクタールの範囲が「北地遺跡」として埋蔵文化財包蔵地として指定されている。

近年の開発に伴って、北地遺跡の東側一帯も何箇所か試掘調査が行われているが、東側には今のところ、遺跡は確認されていない。

行政区画的には、高知平野東端の香南市<sup>(2)</sup>に属している。野市台地の東端に当たり、物部川段丘上にあたる。段丘の下段また、遺跡の南から三宝山にかけて、仏像構造線が走っている。遺跡周辺の地質構造帯は四万十帯北帯であり、砂岩や泥岩を中心とした岩石層を示すが、北側になる秩父帯南帯のチャートや石灰岩、物部川上流域の三波川帯の緑色岩類も河川的作用により運ばれてきている。<sup>(3)</sup> 出土する石器には用途に応じた多様な石材が認められる。

北地遺跡の南西には、このエリアのランドマークだったと考えられる「上岡山」がある。物部川対岸の旧三島村（現南国市久枝）には、高知空港の滑走路になる際、取り除かれて現在はなくなった通称「命山」という標高28mの小丘陵（室岡山）があった。<sup>(4)</sup>

物部川は土佐3大河川の一つであり、総延長71km、流域面積468平方キロメートル、高知平野の東半分、通称香長平野をつくった河川である。遺跡は現河口まで約2kmの地点の左岸にあり、物部川



第6図 北地遺跡周辺の地形（旧野市町域・深淵北遺跡報告書より）

の下流域にあたる。現在は国道 55 号線と旧国道 55 号線である県道 364 号線が遺跡をはさんで東西南方向に走っている。南 1 km の場所に赤岡町と南国市を結ぶ旧街道である「下街道」が主要交通路として機能しており、物部川左岸の渡し場付近には宿もあり、昭和初期までは、にぎわっていたようだ。<sup>(5)</sup>

(1) 「下井南国バイパス」「下井ラノ丸」「西野ルノ丸」など出土した土器は、現在、野市図書館地下倉庫に保管されている。

廣田典夫「原始編 第二章 弥生時代 第一節」『野市町史 上巻』平成 4 年 野市町史編纂委員会

(2) 香南市は平成 18 年 3 月、赤岡町・香我美町・野市町・夜須町・吉川村が合併して誕生した。2010 年 7 月現在、面積 126.49km<sup>2</sup>、人口約 34,000 人。

(3) 『四国地方－日本の地質 8』共立出版 1991 年

(4) 『高知県の地名』平凡社 1983 年

(5) 『香南市文化財めぐり 吉川町を歴史探訪』香南市教育委員会 2009 年  
谷合卓氏（香南市文化財保護審議委員）の御教示による。

## 第 2 節 歴史的環境

### －香南市域 物部川下流域から香宗川下流域にかけての遺跡－

物部川下流域の左岸（香南市側）では、川沿いの河岸段丘上に遺跡が集まっている。特に北地遺跡周辺には弥生時代前期末から近世にかけての遺跡が集中している。弥生時代に集落が拡大、弥生時代から古墳時代にかけて、この周辺で発掘調査により調査された竪穴住居は 96 棟にのぼる（2010 年 4 月現在）。それ以降においても、奈良～平安前期の官衙関連遺跡である深淵遺跡・下ノ坪遺跡、近世の石積み堤防が確認された上岡北遺跡など注目される遺跡が多い。

### 旧石器～縄文時代

深淵遺跡で縄文晩期の土器片が出土しているものの、縄文時代以前の遺跡は少ない。複数の集落が確認されはじめるのは、今から約 2,400 年前、弥生時代前期末になってからである。香南市全体を見渡しても、現段階で縄文時代の遺跡は 4 遺跡で、遺構が確認されたのは晩期の十萬遺跡のみである。<sup>(1)</sup> また、香南市内から旧石器は確認されていない。香南市に隣接する南国市や香美市では国分川水系を中心に奥谷南遺跡、高間ヶ原遺跡、新改西谷遺跡など旧石器時代遺跡の存在が知られている。<sup>(2)</sup> 香南市に続く物部川水系にも佐野楠目山遺跡など、新たに確認される旧石器時代の遺跡も現れはじめた。<sup>(3)</sup>

### 弥生時代

前期前半西見当 I 式段階の土器と遺構が検出された徳王子大崎遺跡は注目される。<sup>(4)</sup> 香南市域で、はじめて確認された弥生時代前期前半にさかのぼる集落遺跡である。香南市域でも高知平野の他地域同様、前期末～中期初頭と後期後半～古墳時代初頭の 2 時期に遺跡数の増加が認められる。また、同時に直後の時期の遺跡数減少も顕著である。

#### ・前期末～中期初頭

市内全域で集落が確認され始める時期である。土器が出土したのは、当遺跡に近接した上岡遺跡<sup>(5)</sup>、下ノ坪遺跡<sup>(6)</sup>、西野遺跡群<sup>(7)</sup>、香宗川流域の下分遠崎遺跡<sup>(8)</sup>、十万遺跡、拝原遺跡<sup>(9)</sup>などであり、物部川対岸の弥生時代を通じて機能した拠点集落田村遺跡群からの分村でできた集落だといわれている。香南市内の弥生遺跡は、同時期の田村遺跡群との関連を抜きにしては語れない。<sup>(10)</sup>

#### ・中期前半～中葉

北地遺跡、下分遠崎遺跡、十万遺跡などいくつかの集落は、前期末から集落が継続する。下分遠崎遺跡からは、大量の土器とともに木製品や種子、獣骨・魚骨など大量の自然遺物が出土している。当時の生活復元のための大きな手がかりを提供した。この時期は、田村遺跡群でも遺構がきわめて少なくなる時期で、遺構、特に竪穴住居はほとんど見つかっていない。

#### ・中期後半

香南市域で、この時期明確にまとまった遺物が出土したといえる遺跡は現段階では確認できていない。これに対して、田村遺跡群は集落が拡大していく時期にあたり、土器の出土量も増加してくる。

#### ・中期末～後期初頭にかけた

仏像構造線周辺の上麓部に形成された高地性集落（本村遺跡<sup>(11)</sup>、笹ヶ峰、鬼ヶ岩屋、龍河洞など）が確認されている。後期初頭になると下ノ坪遺跡など平野部にも新たに集落が形成される。

本村遺跡では竪穴住居7棟や段状遺構など、当地域において中期末から後期の初めにかけての短期間機能した丘陵上のムラの様子が明らかになった。瀬戸内の影響が強い凹線土器の割合が高く、ガラス製の勾玉も出土している。

#### ・後期前半～中葉

下ノ坪遺跡が盛行し、集落は周辺へと広がっていく。田村遺跡群の集落最盛期とも重なる。このころになると鉄器の普及も進み、遺跡からの出土量も増加する。青銅器の受容も特徴的で、西野遺跡群出土の銅矛の再加工品、時期は異なるが兎田八幡宮伝世の絵画銅剣（中期中葉）など、遺跡周辺には特異な青銅器が存在する。銘々器である小型鉢が増加する後期中葉（V-4期）の標識遺跡である深淵遺跡<sup>(12)</sup>や下ノ坪遺跡には、直径7～8m大の大型住居が出現する。ガラス玉など威信財も出土しており、他の住居との明確な違いが認められる。

#### ・庄内期（弥生時代終末～古墳時代初頭）

弥生時代終末から古墳時代にかけて、集落が増加し、他地域からの土器の持ち込みが目立つようになる。鉄器の普及はさらに加速し、土器のタタキ目顕在化が顕著となる。庄内式土器はじめ各地の搬入土器が、江見遺跡、兎田柳ヶ本遺跡、西野遺跡群、東野土居遺跡など、当該期の遺跡から出土している。大半は集落遺跡だが、兎田柳ヶ本遺跡からは平野部に形成された周溝を持つ墓域が検出されている。<sup>(13)</sup>

#### 古墳時代

香我美町拝原遺跡から4世紀の住居跡が確認されているが、4世紀から6世紀前半にかけての集落は、このエリア（物部川下流域左岸川沿い段丘上）では見つかっていない。6世紀の後半になって、深淵遺跡や下ノ坪遺跡では竈を持つ竪穴住居が出現する。

香南市域でみつかった古墳の大半は後期古墳だが、市内で最古の古墳である徳王子天皇古墳は5世紀代の中期古墳だとされる。周辺では大崎山古墳、大谷古墳、溝淵山1号（竹ノ内）古墳などの

例がある。6世紀後半代の古墳であり、周辺で集落が確認されはじめる時期とも連動している。(深淵遺跡・下ノ坪遺跡・西野遺跡群・東野土居遺跡)

7世紀末～8世紀初めの須恵器窯・徳王子窯跡が知られている。この地域には礎石の存在を根拠に、古代寺院の存在の可能性が追求されてきたが、近年の発掘調査で、8世紀初めの瓦頭が出土(東野土居遺跡)、古代寺院があった可能性が高まっている。<sup>14)</sup>

古代(奈良～平安前期)

8世紀には、下ノ坪遺跡や深淵遺跡など官衙的な性格を持つ遺跡の存在が知られるようになってくる。香南市域においても、8世紀から9世紀にかけて香宗川流域の曾我遺跡や十万遺跡など官衙関連遺跡(郷家だと想定されている)が確認されるようになる。深淵遺跡からは二彩陶器や緑釉陶器、曾我遺跡からは近江産や洛北産を中心に総数45点以上の緑釉陶器が出土している。曾我遺跡は高知県で最も多くの緑釉陶器を出土した遺跡である。<sup>15)</sup>

古代の役人の存在を直接想起できる革帯装飾具が出土した遺跡だけでも、深淵遺跡(銅製蛇尾)、下ノ坪遺跡(石製丸軻)、十万遺跡(石製丸軻)、東野土居遺跡(石製丸軻・2009年の試掘調査時に出土)と4遺跡にのぼる。石製丸軻が確認されたのは、県内では物部川と香宗川に挟まれたこの地域だけである。

これらの郡衙や郷家に関すると考えられる遺跡群の中でも、特に注目されるのは、下ノ坪遺跡で

表1 北地遺跡と高知平野東半・物部川下流域の遺跡

番号	遺跡名	主な時代	番号	遺跡名	主な時代	番号	遺跡名	主な時代
1	北地遺跡	弥生～古代	22	東野土居遺跡	古墳～近世	43	町田堰東遺跡	縄文～中世
2	父養寺古墳	古墳	23	香宗城跡	中世	44	山田堰	近世～
3	日吉山古墳群	古墳	24	宝鏡寺跡	中世	45	新改西谷遺跡	旧石器・古代・中世
4	亀山窯跡	古代	25	曾我遺跡	弥生～中世	46	ひびのき遺跡	弥生・古墳
5	深淵北遺跡	弥生・古代・中世	26	下分遠崎遺跡	弥生	47	ひびのきサウジ遺跡	弥生～近世
6	深淵遺跡	縄文～中世	27	岡ノ芝遺跡	古墳～中世	48	伏原大塚古墳	古墳～中世
7	西野遺跡群	弥生～古代	28	十万遺跡	縄文～中世	49	白猪田遺跡	古墳・古代
8	下ノ坪遺跡	弥生～古代	29	花宴遺跡	弥生～古墳	50	土佐国府跡	弥生～中世
9	母代寺土居屋敷遺跡	弥生・古代・中世	30	徳王子大崎遺跡	弥生・古墳・中世	51	三島遺跡	弥生～古代
10	上岡北遺跡	弥生・近世	31	徳王子広本遺跡	弥生～中世	52	東崎遺跡	弥生～中世
11	上岡遺跡	弥生・古代	32	徳王子前島遺跡	弥生～中世	53	大領遺跡	古墳～中世
12	高田遺跡	平安	33	クノ丸遺跡	弥生～近世	54	岩村遺跡群	弥生～中世
13	小山谷古墳	古墳	34	江見遺跡	古墳	55	寺ノ前遺跡	弥生～中世
14	鬼ヶ岩屋洞穴遺跡	弥生	35	大東遺跡	古墳～近現代	56	修理田遺跡	弥生～古代
15	アゴデン白岩窯跡	古代・中世	36	須留田城跡	中世	57	大篠小学校校庭遺跡	弥生
16	竹ノ内山古墳	古墳	37	住吉砂丘遺跡	弥生	58	里改田遺跡	弥生～中世
17	大谷城跡	中世	38	南中曾遺跡	弥生・古墳	59	田村城跡	中世
18	大谷古墳	古墳	39	野口遺跡	弥生～中世	60	田村遺跡群	縄文～近現代
19	大崎山古墳	古墳	40	林田シタノヂ遺跡	縄文～中世	61	前ノ山城跡	中世
20	本村遺跡	弥生	41	林田遺跡	弥生～中世	62	烏ヶ森城跡	中世
21	兔田柳ヶ本遺跡	弥生・古墳	42	加茂遺跡	古墳～中世	63	折年遺跡	縄文～近世



第7図 北地遺跡と高知平野東半の遺跡 (S=1/50,000)

ある。長岡京・太宰府以外に出土例のない四仙騎獣八稜鏡や赤彩土師器、製塩土器、硯類など大量の出土遺物とともに、一辺 20 m 近い大型の建物群も確認され、郡衙関連の川津ではないかと遺跡の性格についても検討が進められている。

#### 古代から中世へ

9 世紀後半から 10 世紀になると、今まで盛行していた遺跡が地点を変えたり、規模が縮小されたりするなど、律令制の崩壊過程に入ったことが、遺跡の上にも反映されるようになる。深淵遺跡（7～9 世紀）の官衙的機能は、北方にある深淵北遺跡<sup>(6)</sup>（9～12 世紀）へと移り、官衙関連の建物群が検出された下ノ坪遺跡からも、10 世紀後半以降の遺物はほとんど確認されていない。

律令制の崩壊は大きく進み、10 世紀から 11 世紀にかけて古代から中世への転換期となる。この時期、この物部川左岸段丘上の北地遺跡周辺で確認される遺跡や遺物出土量は少なくなる。

#### 中世

11 世紀後半から 12 世紀には、土佐でも各地で荘園が成立、香南市域でも大忍荘・夜須荘・吉原荘・須留田別府・香宗我部保などが次々に成立するようになる。この時期には、曾我遺跡や深淵北遺跡、母代寺土居屋敷遺跡などの調査例がある。深淵北遺跡は、古代末から中世前期にかけて機能した川津であり、白磁など日宋貿易にかかわる遺物や布目瓦が出土している。院政期の寺院建立に対応した瓦需要の増加に応え、亀山窯などで生産された瓦の積み出し港としての役割も担っていたと考えられている。亀山窯に近い母代寺土居屋敷遺跡からは、屋敷跡と大量の瓦と土器による廃絶儀礼がのこる井戸が確認されている。<sup>(7)</sup> 出土した遺物から、亀山窯の瓦工人に関する屋敷である可能性が高い。

遺跡北方には、夜須行宗が源希義救援に駆け付けたものの、希義討死を聞き引き返したと伝えられる野々宮の森がある。12 世紀末には、中原秋家が地頭として着任、その子孫は香宗我部氏として中世を通じて勢力を拡大していく。戦国期、長宗我部元親の弟、親康が香宗我部を継ぎ、兄の片腕となって土佐、四国制覇へと向かう。15 世紀から 16 世紀にかけて、土佐全域で 700 箇所以上の山城が築かれるが、香南市域でも 43 箇所の中世城郭が確認されている。

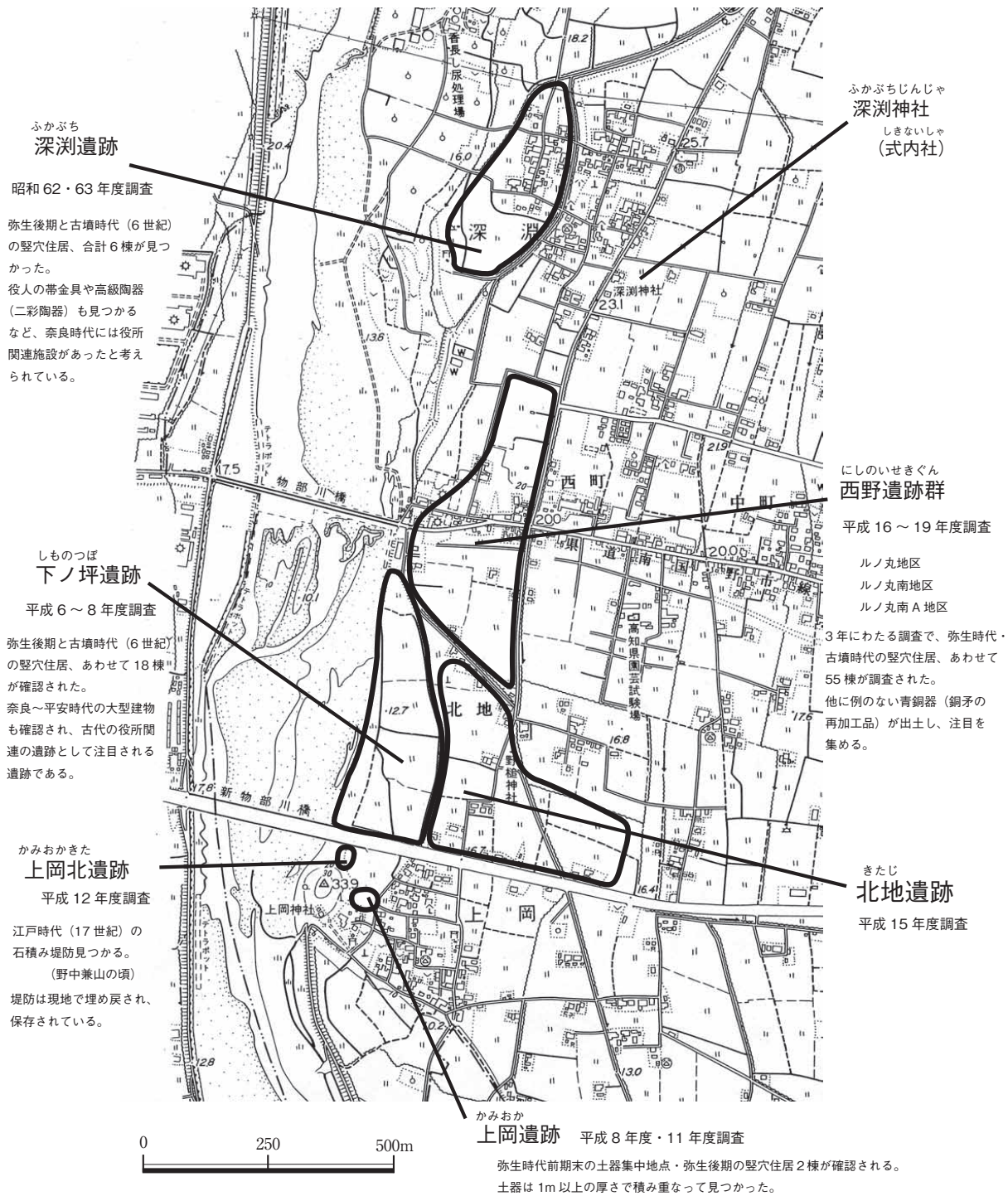
野市台地から香宗川流域、さらに東の夜須川流域は中世の石造物が多く残されている地域である。五輪塔や線刻地蔵などは文献資料の少ない中世の景観復元の手がかりとなり得るものであり、地域にとって貴重な石造物である。

#### 近世

近世に入ると、野市台地の開墾が、土佐藩家老野中兼山によって進められ、17 世紀半ば過ぎには野市台地の開墾がほぼ終了する。開墾によって得られた耕作地は野市台地だけで合計 702 町歩に達する。これ以降、近世郷村として野市町は発展する。幕末には、市内で大石弥太郎（円）・新宮馬之助・安岡嘉助など郷土を中心に人材を輩出するその背景には近世前期以降の野市台地の開拓をきっかけとした郷土階層の隆盛があった。

近世の遺構で注目されるのは、北地遺跡の南、上岡北遺跡で発掘された石積みの堤防である。<sup>(8)</sup> 堤防の上面からは 18 世紀後半から 19 世紀にかけての陶磁器が出土している。しかし、堤防内からの時期判定可能な出土遺物は皆無であり、遺物から、この堤防状遺構の時期を特定することはできない。この堤防の時期は石積み当時の絵図面と堤防の形態をもとに、野中兼山の時期に比定されている。

遺構の歴史的意義を確認した上で、当時の野市町教育委員会は迅速に施設建設計画の設計変更を行った。上岡北遺跡の堤防は、先人の残した歴史を伝える貴重な文化財として、現地でそのまま埋め戻され、大切に保存されている。



第 8 図 北地遺跡周辺の地形と遺跡

## 参考・引用文献

- 『野市町史 上巻』野市町史編纂委員会 1992年
- 『夜須町史 上巻』夜須町史編纂委員会 1984年
- 『香我美町史 上巻』香我美町史編纂委員会 1985年
- 『香我美町史 下巻』香我美町史編纂委員会 1993年
- 『吉川村史』吉川村史編纂委員会 1999年
- 『赤岡町史 改訂版』赤岡町史編纂委員会 2008年
- (1) 『十万遺跡発掘調査報告書』香我美町教育委員会 1988年  
十万遺跡からは縄文時代晩期中葉の貯蔵穴が確認されている。他には手結遺跡から有舌尖頭器（草創期）が、拝原遺跡から宿毛式・松ノ木式・片粕式（後期）の土器片が出土している。
- (2) 『奥谷南遺跡Ⅲ』高知県埋蔵文化財センター 2001年
- (3) 松村信博・山崎真治「高知県出土の後期旧石器時代新出資料と細石刃文化期の遺跡」  
(『第17回 中四国旧石器談話会資料』2000年)
- (4) 『徳王子大崎遺跡現地説明会資料』(財)高知県埋蔵文化財センター 2008年
- (5) 『上岡遺跡』野市町教育委員会 2005年
- (6) 『下ノ坪遺跡Ⅰ』野市町教育委員会 1998年  
『下ノ坪遺跡Ⅱ』野市町教育委員会 1998年  
『下ノ坪遺跡Ⅲ』野市町教育委員会 2000年
- (7) 『西野遺跡群第2次調査概要報告書』香南市教育委員会 2006年
- (8) 『下分遠崎遺跡発掘調査報告書(1)』香我美町教育委員会 1989年  
『下分遠崎遺跡』(財)高知県埋蔵文化財センター 1993年  
『下分遠崎遺跡Ⅳ』香南市教育委員会 2010年
- (9) 『拝原遺跡』香我美町教育委員会 1993年
- (10) 出原恵三『南国土佐から問う弥生時代像 田村遺跡』新泉社 2009年
- (11) 『本村遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会 1993年
- (12) 『深淵遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会 1989年
- (13) 『兎田柳ヶ本遺跡』香南市教育委員会 2010年
- (14) 恒石真生・谷合卓『伝・香宗城礎石は古代寺院礎石の転用と鑑定』野市町文化財保護審議会 2005年  
2010年度香南市東野土居遺跡の発掘調査で8世紀の瓦頭が出土した。予想されていた寺院の存在を示す資料である。
- (15) 『曾我遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会 1989年
- (16) 『深淵北遺跡』野市町教育委員会 1996年
- (17) 『母代寺土居屋敷遺跡』香南市教育委員会 2010年
- (18) 『上岡北遺跡』香南市教育委員会 2008年

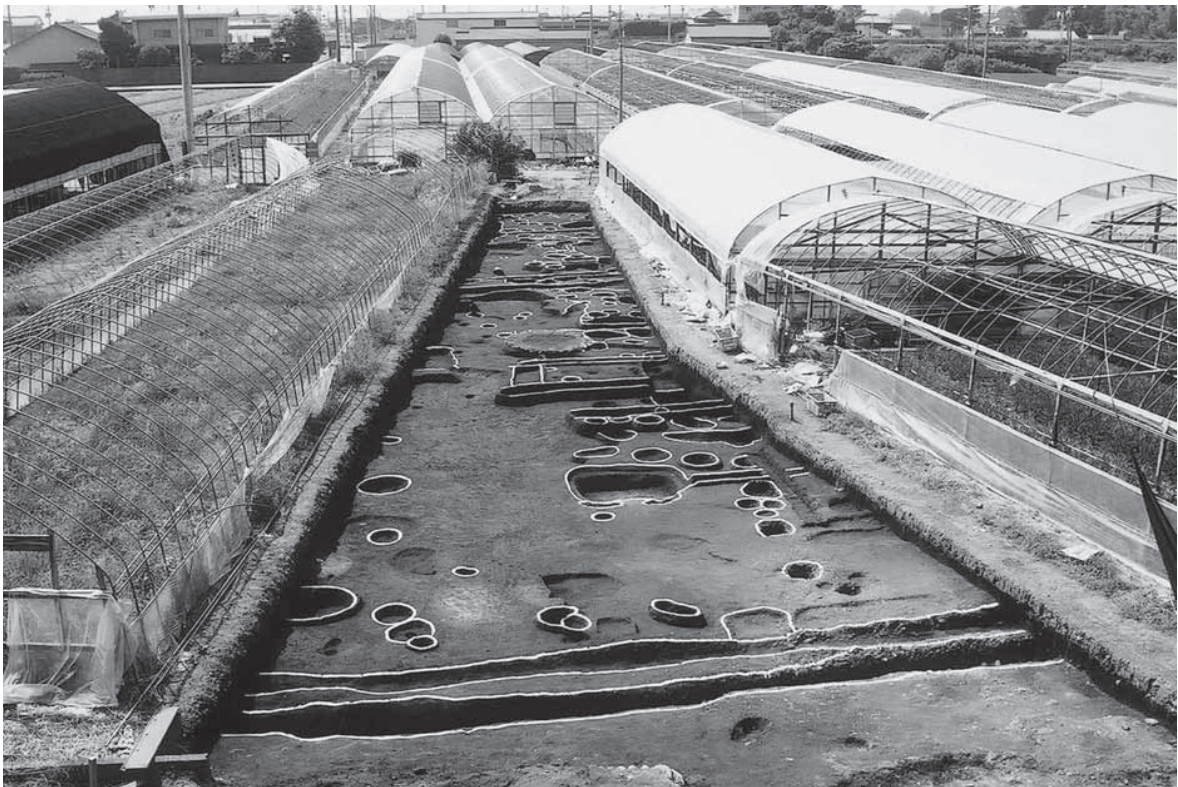


## 第Ⅲ章 調査の成果

今回の調査では、大別して弥生時代前期末～中期中葉、後期前半～中葉、古代（奈良～平安）、古代末～中世の各期の遺構が確認されている。南から北へ、A～Dの4つの調査区を設定したが、この設定は農道の形に即した便宜的なものである。本報告では、弥生時代と古代以降に分けて遺構・遺物の報告を行いたい。

ただし、検出面は1面であり、すべての時期の遺構が重なっている。細片のみ出土する遺構も多く、少量の出土遺物のみでは形成時期が特定できない遺構もある。出土遺物と遺構の形態・方向、周辺の遺構との関連など可能な限り時期特定を行っていきたい。出土遺物の中で、土器は図示した資料（394点）のみ観察表にまとめて提示し、それ以外の出土資料については文章中あるいは表中にまとめて報告する。石器については、出土資料のうち123点（S1～S123）について、器種・石材・法量（長さ・幅・厚さ・重量）を示した計測表を作成、その中で必要と考えられるもの70点については図示して報告することとする。

土器・石器以外の遺物としては、青銅鏡の破鏡が1点出土しており（ST1）注目される。



B区の遺構と周辺の景観

## 第1節 基本層序

調査区全体を通じた基本層序は以下の通りである。I層が表土、II・III層が遺物包含層であり、IV層上面が遺構面である。地表面から遺構検出面までの深さは40cm前後、包含層の厚さは10～30cm程度である。

- I層 表土・基盤層 灰色シルト層
- II層 黒褐色シルト層
- III層 茶灰色シルト層
- IV層 黄灰色シルト層～黄灰色（あるいは黄橙色）シルトに1～10cm大の礫を含む

第9図～11図に調査区全体の堆積状況を示した。第9図がA区の西壁、北壁、第10図がD区の北壁、C区の西壁、第11図がB区からC区にかけての西壁の堆積状況である。いずれも60分の1のスケールで示した。セクションポイントは第2節第12図中に示す。標高の基準となるデータラインは、17.0mである。

A区のセクション図で、①が西壁、②が北壁の堆積状況を示している。I～IV層は基本層序と同様である。a～jの土層は以下の通りである。

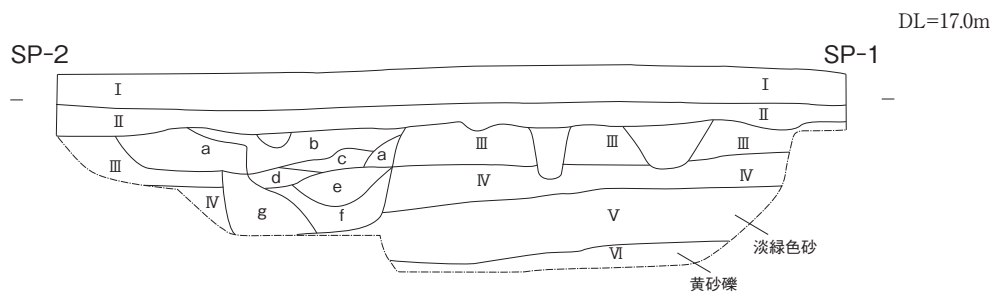
- a 灰色粘砂土 ST9溝埋土
- b 茶灰色シルトに黄灰色シルトが混じる
- c II層に1～5センチ大の礫が混じる
- d 濃茶灰色シルト
- e 黒褐色シルトに黄灰色シルトが混じる
- f 黄灰色シルトに灰色粘土が混じる
- g III層にIV層が混じる
- h 灰色粘土
- i 黄灰色シルト～砂質土に1～3cm大の礫
- j III層にII層が混じる

D区のセクションは、第10図の③に示したものである。北壁であり、IV層上面までがセクション図に示されており、それ以外の層はない。

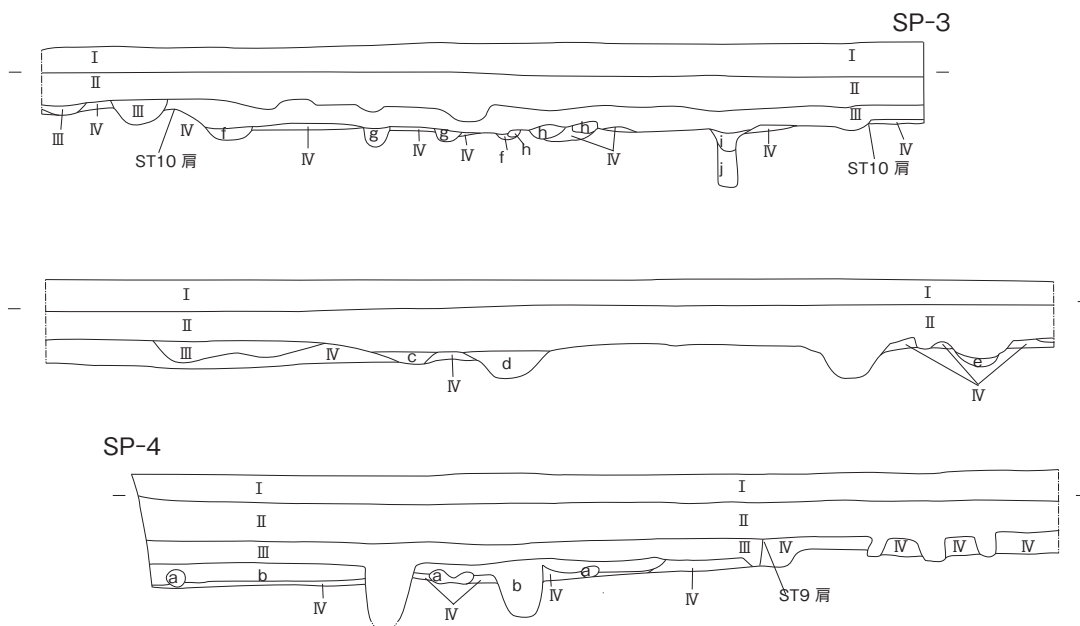
第10図の④・⑤と第11図の⑥・⑦は南北方向に延びるBC区の堆積状況を北から南に向かって記録したセクション図で、北（C区）④→⑤→⑥→⑦ 南（B区）の順番になっている。I～IVの基本層序は他の地点と同様で、それ以外の層は、以下の通りである。



A区西端  
北壁の堆積状況



①A区 西壁セクション図



②A区 北壁セクション図

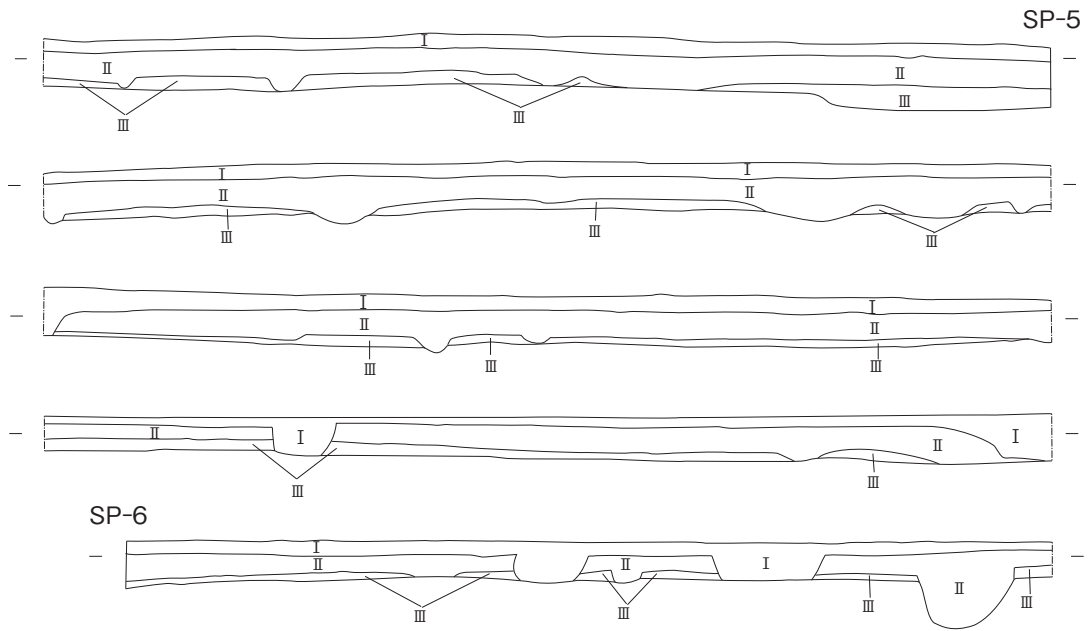


第9図 北地遺跡セクション図1 (S=1/60)

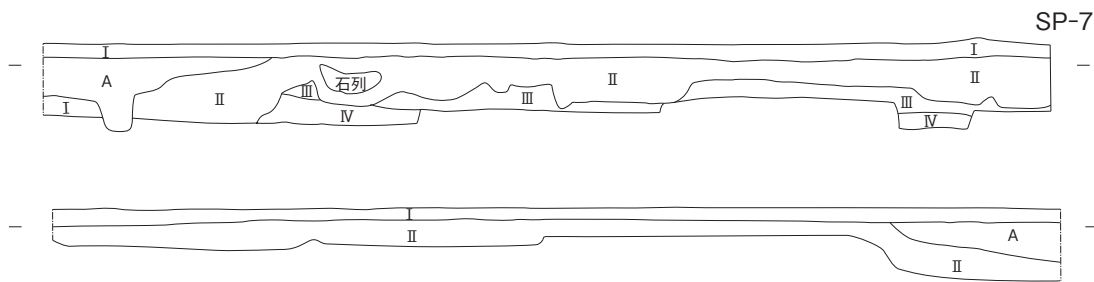
- A 黒色シルト
- B 灰色シルト
- C 橙色礫～シルト層 (山土)
- D 灰色シルトに黒色シルトが混じる
- E 黄灰色シルト ST8 埋土
- F 黒灰シルトに黒色シルトが混じる
- G 黒灰シルト
- H 黒色シルト SD-H 埋土
- J 濃黒色シルト SD-23 埋土
- K 茶灰色シルト～砂質土
- L 濃黒色シルト SD-25 埋土
- M 濃黒色シルト
- N 灰黒色シルト
- O 灰茶色シルト
- P 灰色シルト



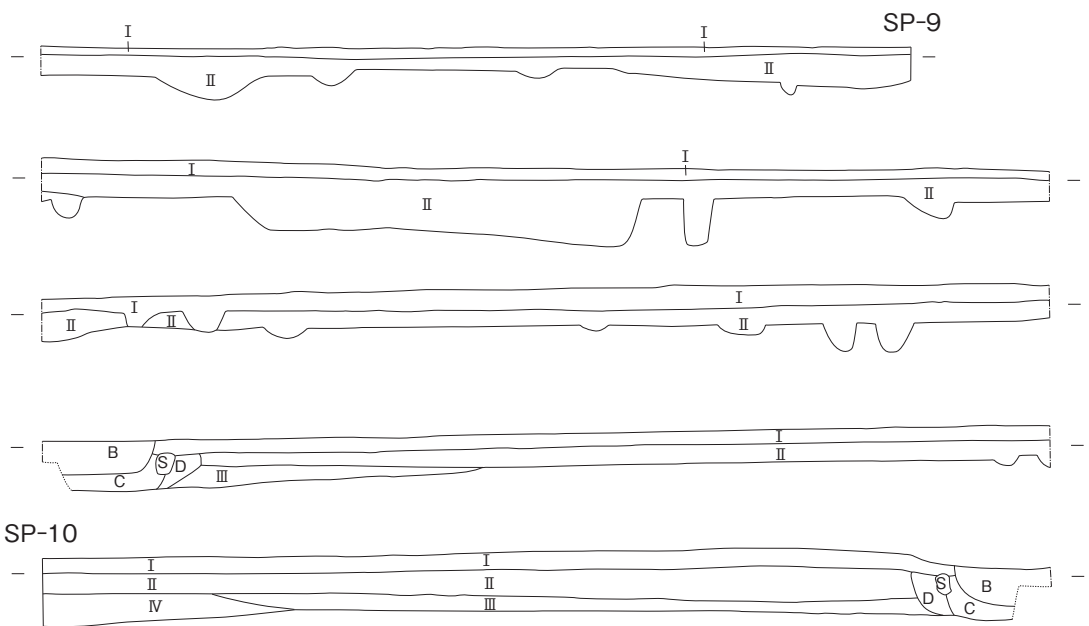
調査区 セクション (SD3-2 東壁)



③D区 北壁セクション図



④C区 西壁セクション図 (北)

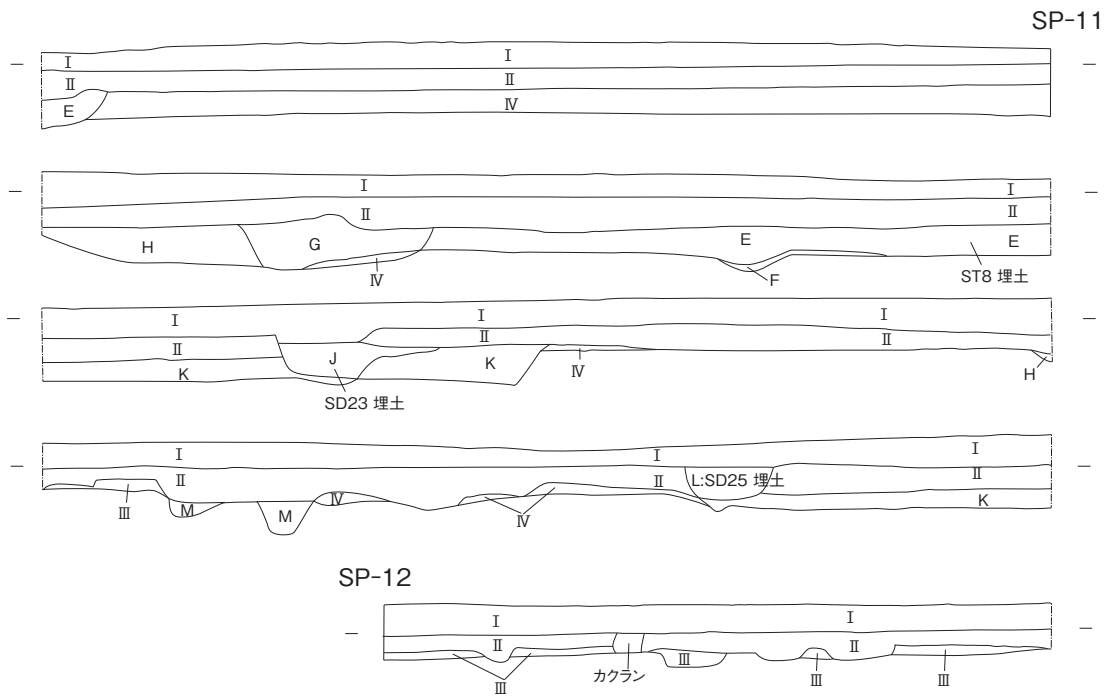


⑤C区 西壁セクション図 (中央)

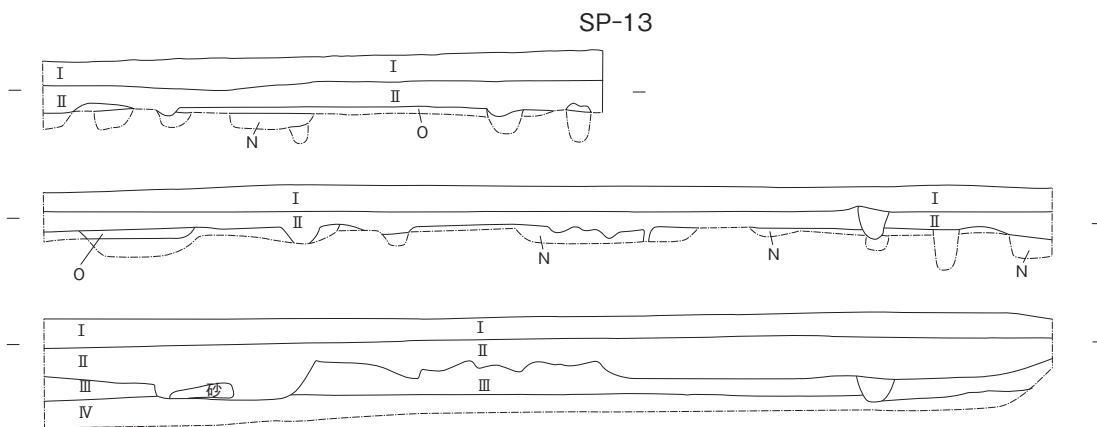
DL=17.0m



第10図 北地遺跡セクション図2 (S=1/60)



⑥C区 西壁セクション図 (南)



⑦B区 西壁セクション図

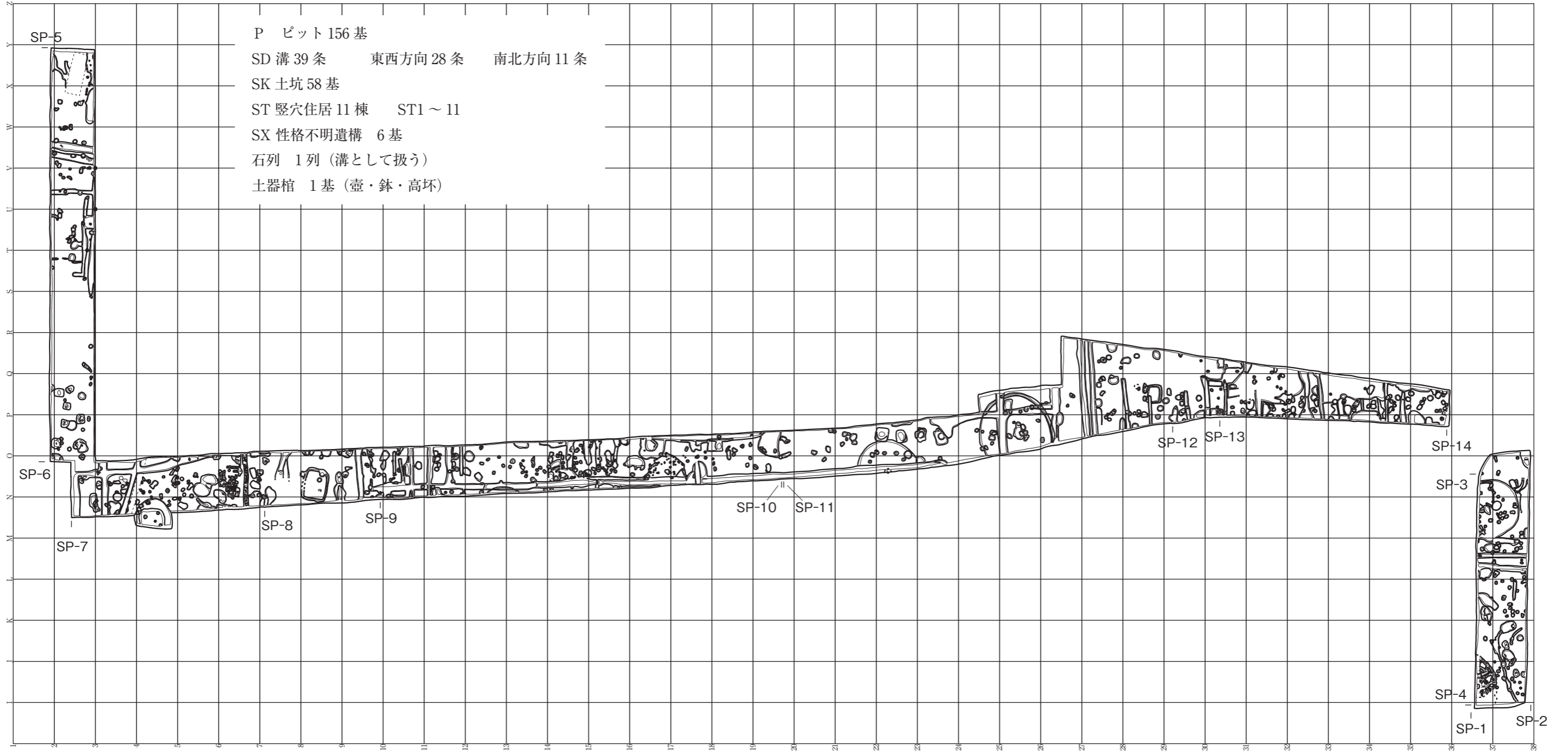


第11図 北地遺跡セクション図3 (S=1/60)

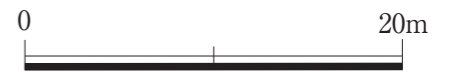
DL=17.0m

第2節 調査区の概要と遺構配置

※全調査区を通じて、検出された遺構の中で、遺物が出土したものは以下の通りである。



第12図 北地遺跡調査区遺構全体図 (S=1/400)







1 A区の概要

調査区南端の東西線に設定した調査区で、総延長 24 m、調査面積約 120㎡である。

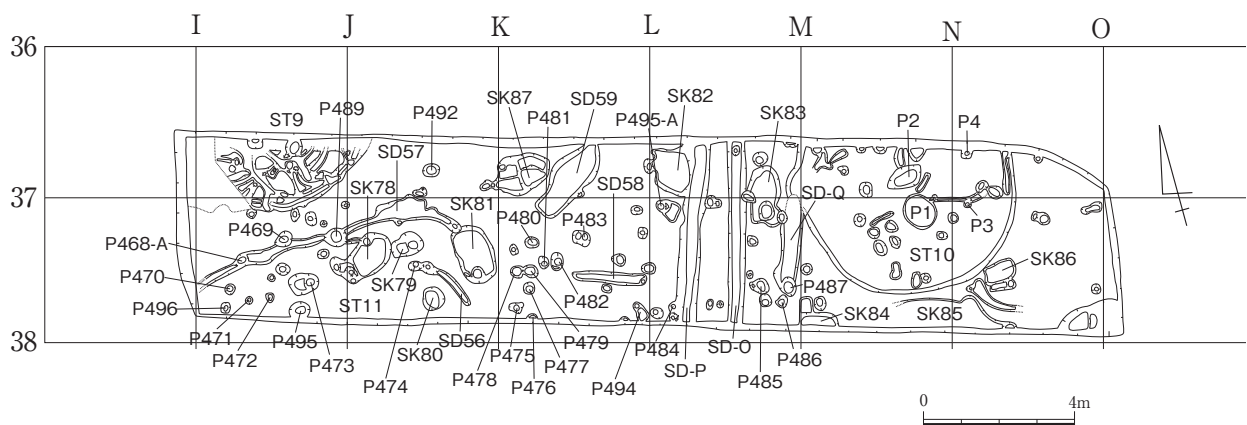
遺物が出土した遺構

- P ピット 15 基
- SD 溝 4 条 東西方向 1 条 南北方向 3 条
- SK 土坑 5 基
- ST 竪穴住居 3 棟 ST9・10・11
- SB 掘立柱建物 1 棟
- 土器集中地点 3 箇所

A区からは、弥生時代前期末～中期中葉にかけての遺物と、弥生時代後期前半の遺物、糸切り底の土師器、近世陶磁器が確認されている。包含層出土遺物は細片も含めて約 1,700 点、遺構出土遺物は 911 点、合計約 2,600 点の遺物が出土している。

第 13 図が A 区の遺構配置図である。

弥生時代中期初頭の竪穴住居（ST11）と中期前半の竪穴住居（ST10）が確認されている。県内でも極めて例の少ない時期の竪穴住居として注目される遺構である。ST9 は出土遺物は少ないが、弥生時代後期前半の竪穴住居だと考えられる。中近世の遺物も確認されたが、中近世だと時期の特定できる遺構はない。古代の遺物は、少ないが、遺構は確認されている。



第 13 図 A 区遺構配置図 (S=1/200)

## 2 B区の概要

調査区の南側、南北線の待避所拡張部から南に設定した調査区で、総延長約38 m、調査面積 240㎡である。

遺物が出土した遺構

P ピット 23 基

SD 溝 9 条 東西方向 7 条 南北方向 2 条

SK 土坑 13 基

ST 竪穴住居 2 棟 ST4・5

SB 掘立柱建物 1 棟

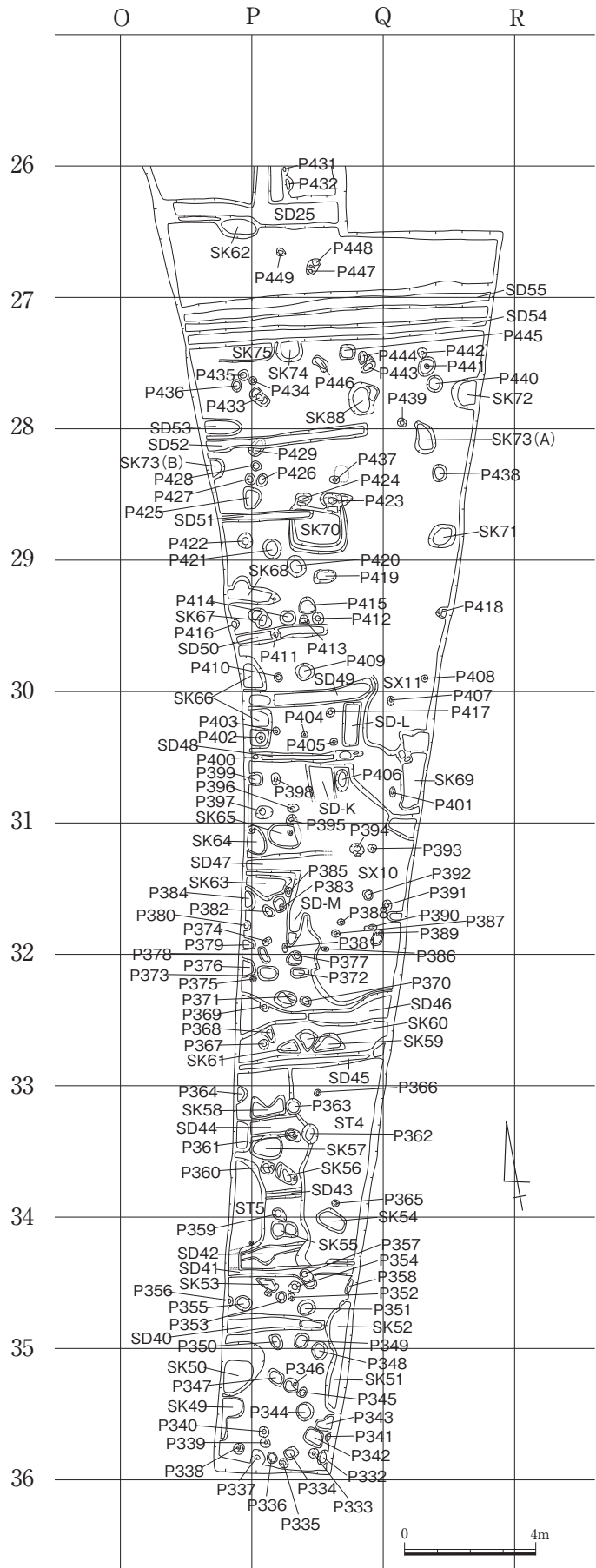
土器集中地点 1 箇所

B区からは、弥生時代中期初頭から中葉にかけてと後期前半、6世紀代と8～9世紀、奈良～平安時代前期、近世の遺物が確認されている。包含層出土遺物は細片も含めて1,090点、遺構出土遺物は1,340点、合計約2,400点の遺物が出土している。

6世紀代の遺物は今回の調査でほとんど出土していないが、B区から甌の角状把手部分の小破片が確認されている。東西方向並びに南北方向に直交する溝は、正確な時期特定はできないが、出土遺物からも古代に機能していた溝だと考えられており、形成時から一定期間の当遺跡内での地割り・土地利用を考える上でも重要な遺構である。

ST4・5は弥生時代中期中葉の竪穴住居である。ST4では石器製作が行われていたと考えられている。

東西方向の溝（SD55）から、墨書土器（須恵器・坏）が出土している。



第 14 図 B区遺構配置図 (S=1/200)

### 3 C区の概要

調査区中央から北半にかけて、南北線の待避所より北の区間に設定した調査区で、総延長約 100 m、調査面積 480㎡である。

遺物が出土した遺構

P ピット 89 基

SD 溝 20 条 東西方向 17 条

南北方向 3 条

SK 土坑 33 基

ST 竪穴住居 6 棟 ST2・3・8

ST1 (青銅鏡出土) ST6 ST7 (旧 SK1)

SX 性格不明遺構 1 基

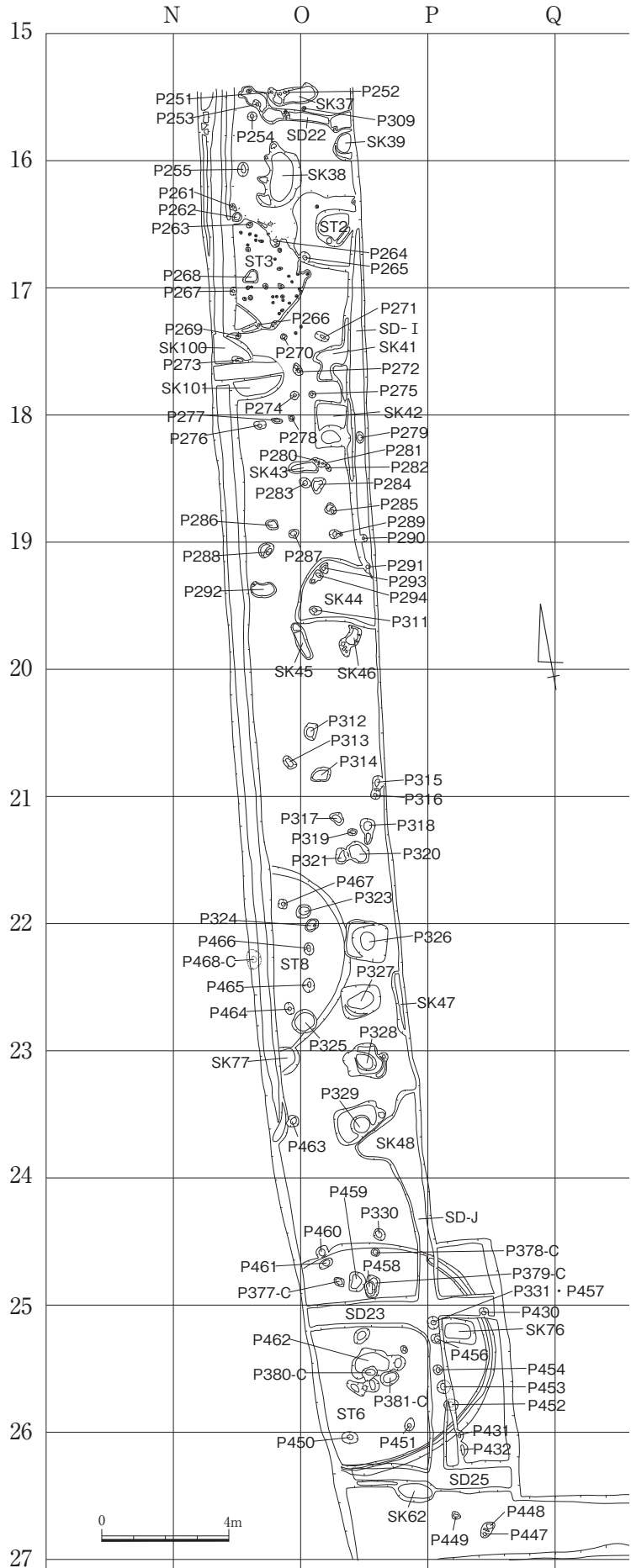
石列 1 列 (溝)

甕棺 1 基

壺棺 1 基

C区からは弥生時代前期末～中期中葉、後期後半、古代(奈良～平安前期)中世(11・12～14世紀)近世の遺物が出土している。包含層出土遺物は細片も含めて1,880点、遺構出土遺物は6,600点とまとまった遺物を出土する遺構が多い。合計約8,500点の遺物が出土している。特に弥生時代後期前半の竪穴住居ST7には遺物が集中、1,500点を超える土器が出土した。

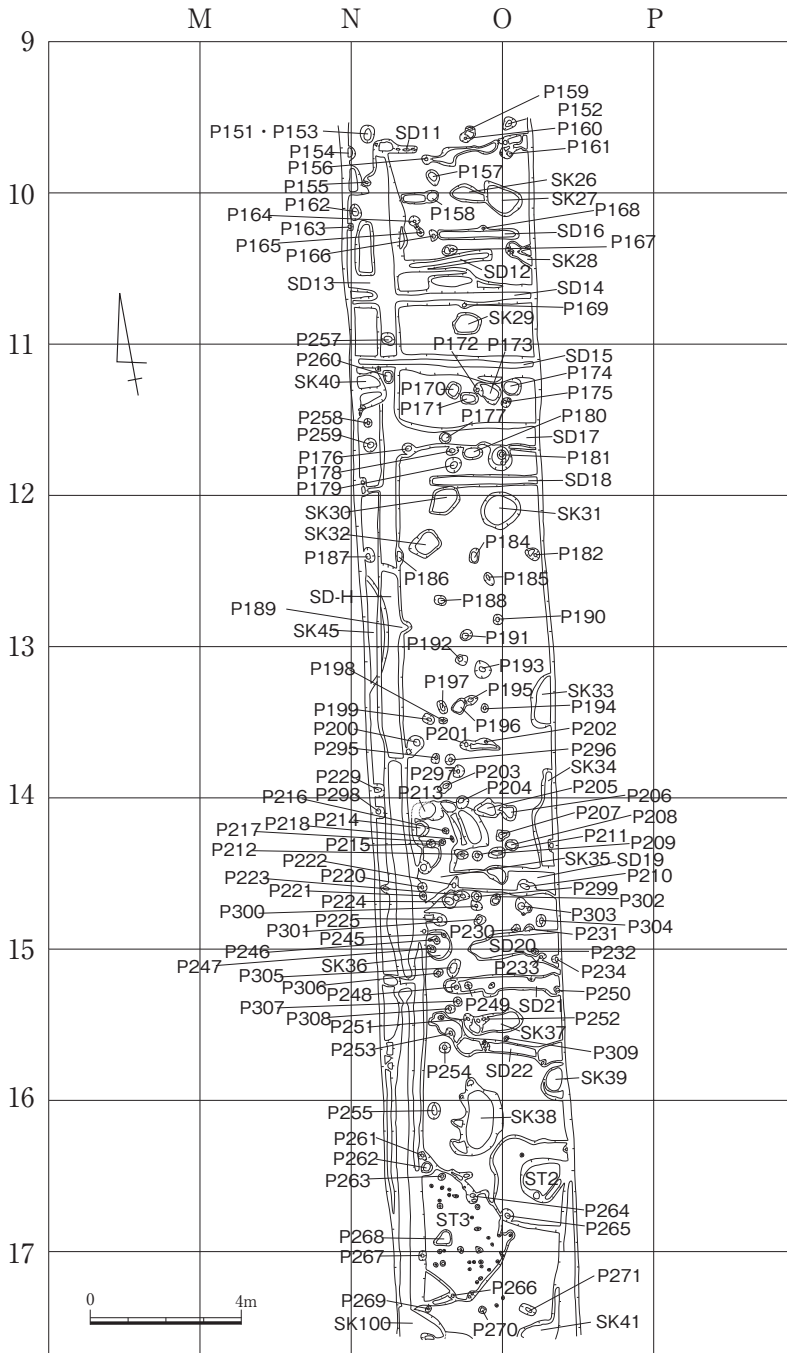
C区の南には弥生中期中葉の竪穴住居(ST6・8)、中央から北半にかけては、中期初頭の竪穴住居(ST3)と溝・土坑など遺構が、北半には後期前半の竪穴住居(ST1・2・7)が点在している。C区南端からは9世紀



第 15 図 C区南遺構配置図 (S=1/200)

はじめの方形ピットを持つ大型掘立柱建物が確認されている。周辺の包含層からは赤彩土師器片も出土している。

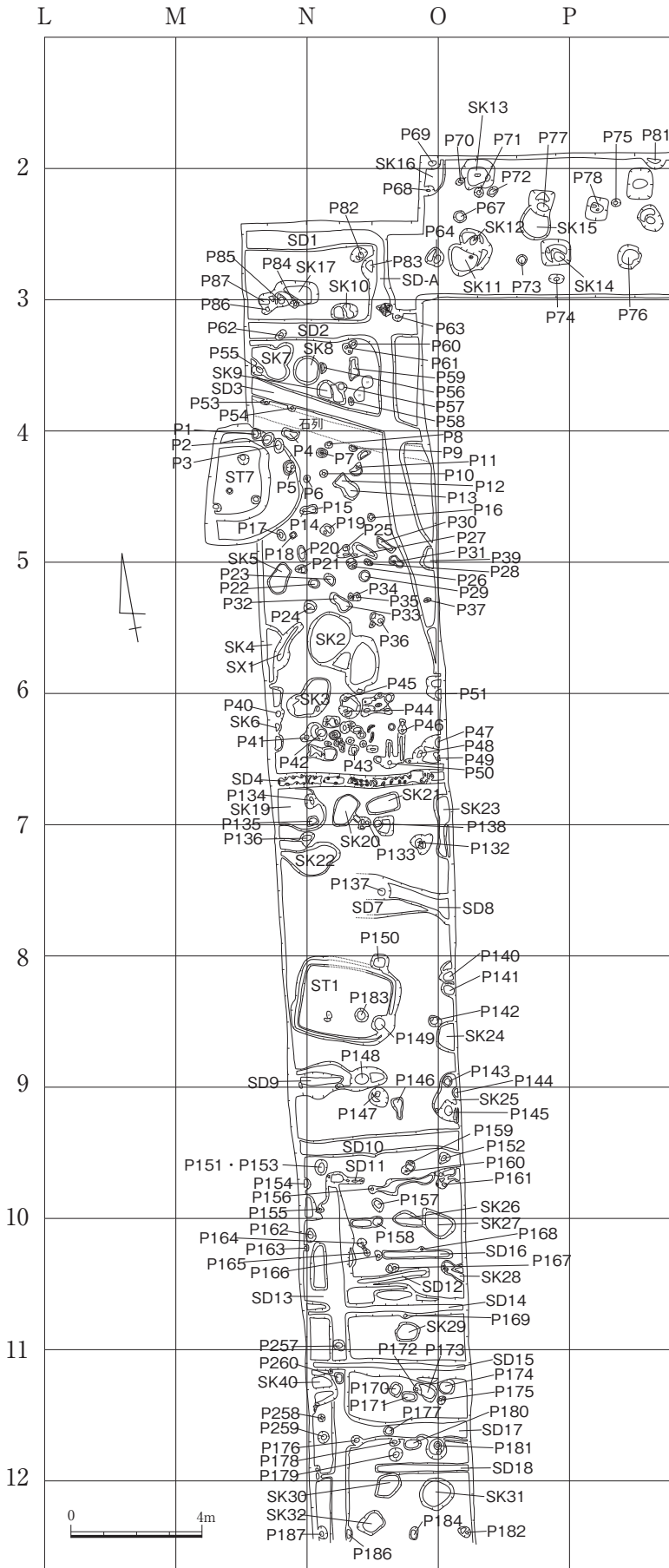
検出された溝はB区と同様、直交し、計画的に設定された地割りであることがわかる。これと異なる方向の溝も確認されている。これらの溝については、出土遺物と遺構の切り合い関係から弥生時代前期末～中期初頭の溝だと考えている。検出された際に石列状遺構として調査が進められた礫列も、並行して走るこの溝の最終埋積時に投棄された礫が検出されたものと理解している。



第 16 図 C 区中央遺構配置図 (S=1/200)

後期前半の竪穴住居 (ST7) に近接した地点から、土器棺墓 (土器 9・10) が確認されている。

C区以外でも同様であるが、小規模なピットも多く検出されており、建物もさらに多く復元可能だと考えられる。調査範囲の制約もあり、調査データをまとめて提示した上で、今後の検討課題としておきたい。



第 17 図 C区北遺構配置図 (S=1/200)

#### 4 D区の概要

調査区北端の東西線に設定した調査区で、総延長 40 m、調査面積 160㎡である。

遺物が出土した遺構

P ピット 29 基

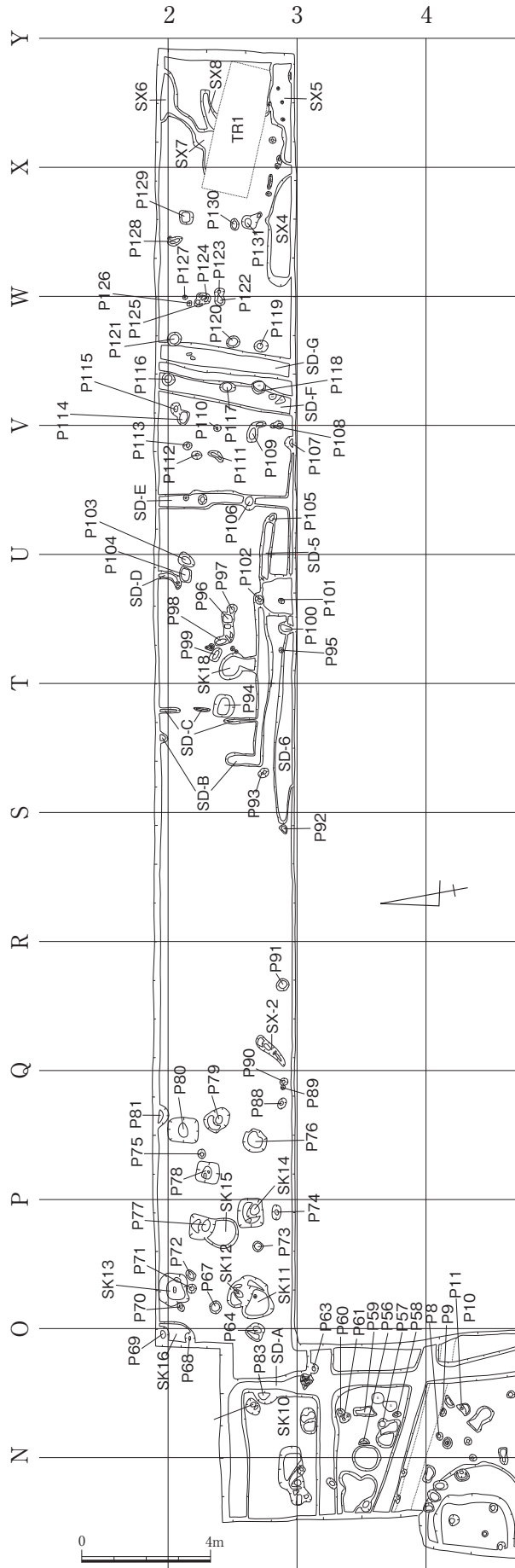
SD 溝 6 条 東西方向 3 条  
南北方向 3 条

SK 土坑 7 基

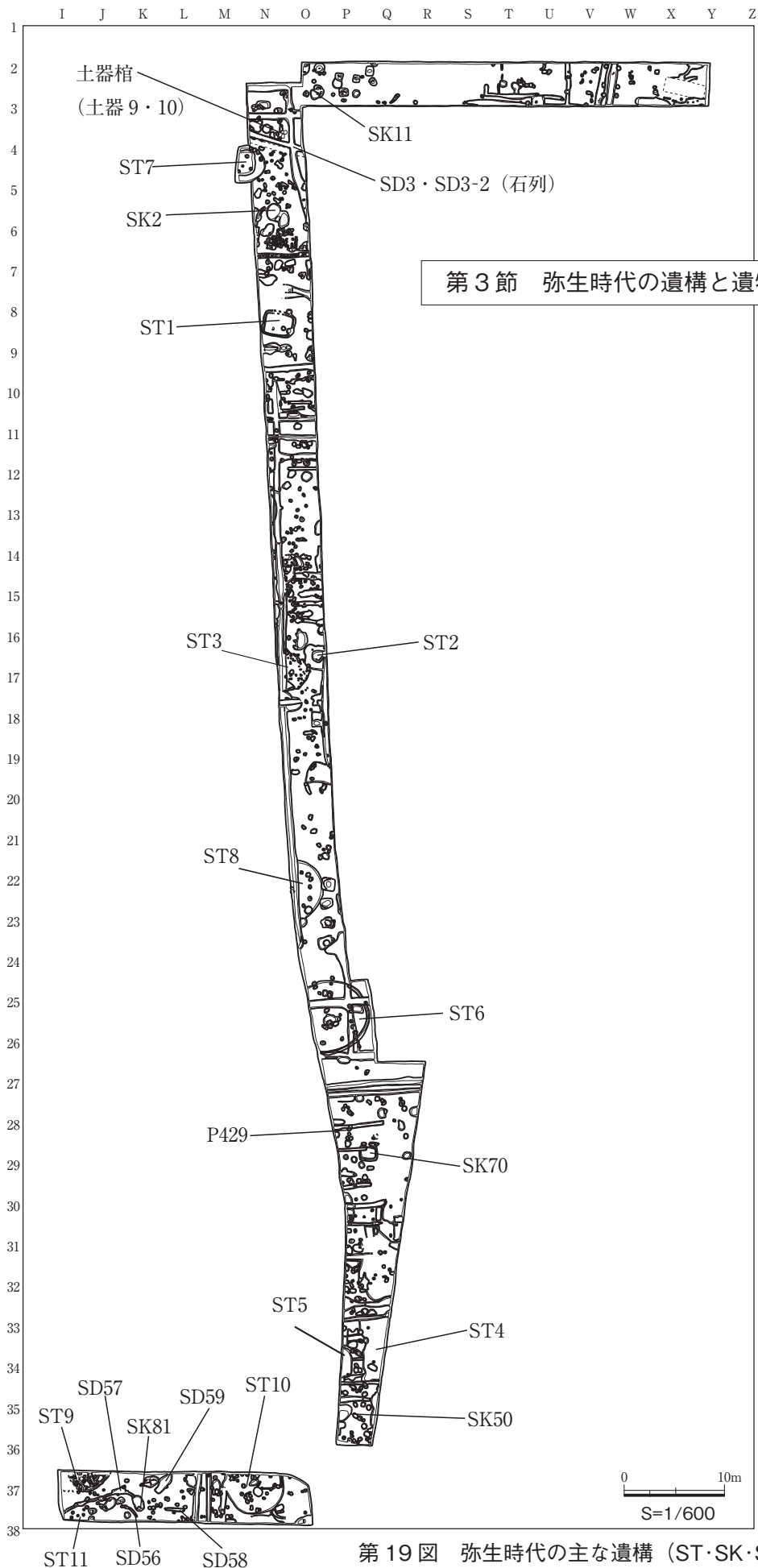
SX 性格不明遺構 5 基

D区からは弥生時代前期末～中期中葉と後期前半の遺物と古代、中世、近世の遺物が出土している。包含層中から 280 点、遺構中から 375 点、合計約 650 点で、他の調査区と比べ、古代の遺物の割合が高い。特に 8～9 世紀を中心とした時期の遺物が多く認められる。

調査区の西端には、弥生時代中期初頭の良好な一括資料が得られた土坑 (SK11) がある。この土坑と切り合い関係のある 8 世紀中葉から後半にかけての掘立柱建物の存在など、8 世紀の遺構・遺物には注目すべきものがあり、包含層から墨書土器が確認されている。東隣の下ノ坪遺跡と同様の性格を持つ建物群が形成されていたようだ。



第 18 図 D区遺構配置図 (S=1/200)



第19図 弥生時代の主な遺構 (ST・SK・SD・P)

## 1. 竪穴建物 (ST)

合計 11 棟の竪穴建物が確認されている。検出地点は、A 区が ST9～11、B 区が ST4・5、C 区が ST1～3、6～8 であり、弥生時代中期前半から中葉にかけてと弥生時代後期前半の大きく 2 時期に分かれる。

### ST1

調査区 (C 区) M8/N8 グリッドに位置する。P149・150 に切られる。検出高は 16.82 m を測る。平面形態は隅丸長方形を呈し、長径 3.20 m、短径 2.40 m、深さ 24cm を測る。埋土は黒褐色シルトである。床面から P183 を検出している。主柱穴を構成するピットの可能性が考えられるが、遺構の一部を試掘 TR で破壊されており、全体の形状は不明である。壁際から幅 10～30cm、深さ 2 cm を測る壁溝を 1 条検出している。

出土遺物は、弥生土器片 442 点と石器類 6 点及び青銅鏡の破鏡 1 点である。土器は口縁部 12 点、文様が確認できる個体 10 点、底部 11 点が出土し、石器は打製石包丁 1 点、敲石 2 点、頁岩とサヌカイトの剥片が 1 点ずつ、石剣が 1 点確認されている。

図示し得た遺物は 1 の青銅鏡、2～19 の土器 18 点と 19～21 の石器 3 点である。2～4 が長頸壺であり、5・6 が口縁が大きくラッパ状に開き口唇が凹状になった壺、7～9 が甕口縁で、7 は頸部でくの字状に強く屈曲する。10 が頸胴界に列点文を施文する壺胴部、11～13 は壺底部、14～17 は甕底部で、18 は台付鉢 (土器) 脚部である。19 は簾状文状に刺突を連続させる文様のある土器片だが、これは他時期 (弥生中期前半) の混入資料だと考えられる。11 の底部はハケ調整で丁寧に仕上げられ、わずかにタタキ目の跡も確認できる。また、14 の甕には内面ヘラケズリが確認される。

19 の頁岩製の打製石包丁は、平坦剥離により側縁の一辺に刃部を形成するが、きわめて粗雑なつくりである。20 は扁平な砂岩楕円礫の敲石であり、表裏面に敲打痕・擦痕、縁辺部には敲打による剥離痕が残る。21 は全面に擦痕が残り、側縁に稜を形成する。折損により全体形状は不明だが、弥生時代の石剣の一部だと考えられる。

竪穴建物床面から出土した青銅鏡の破鏡 (1) も注目される資料である。直径は復元すると 10.2 cm になると推定される。外区の厚さは 0.6cm、内区の厚さは 0.2cm、内区は僅かしか残っていないが、櫛目文が確認される。青銅鏡の正確な鏡式は不明だが、鋳あがりや色調から中国鏡であり、漢の時代に属するものである。

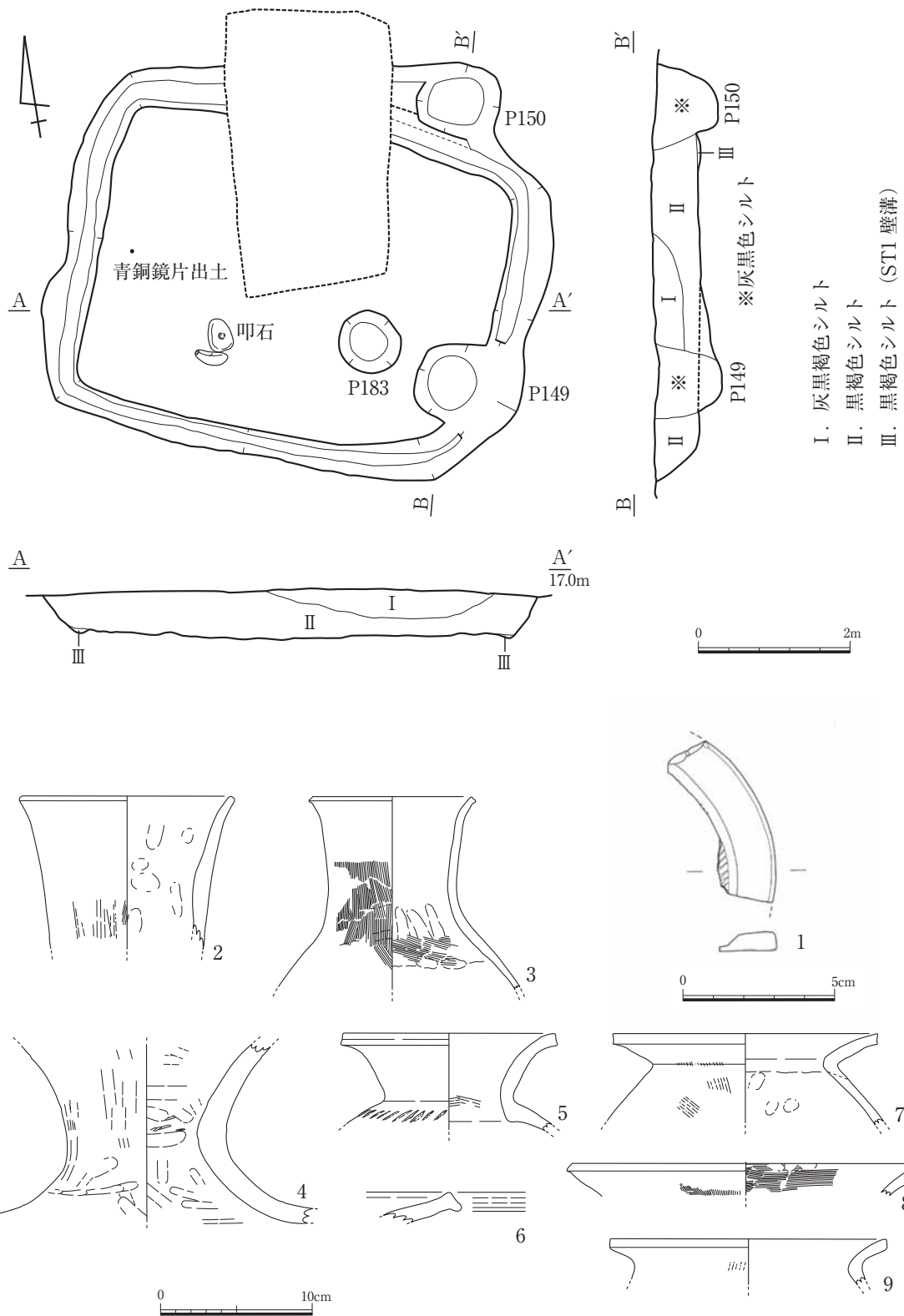
ST1 の所属時期は弥生時代後期前半 (後期 II 期、V-2・3 期) である。

### ST2

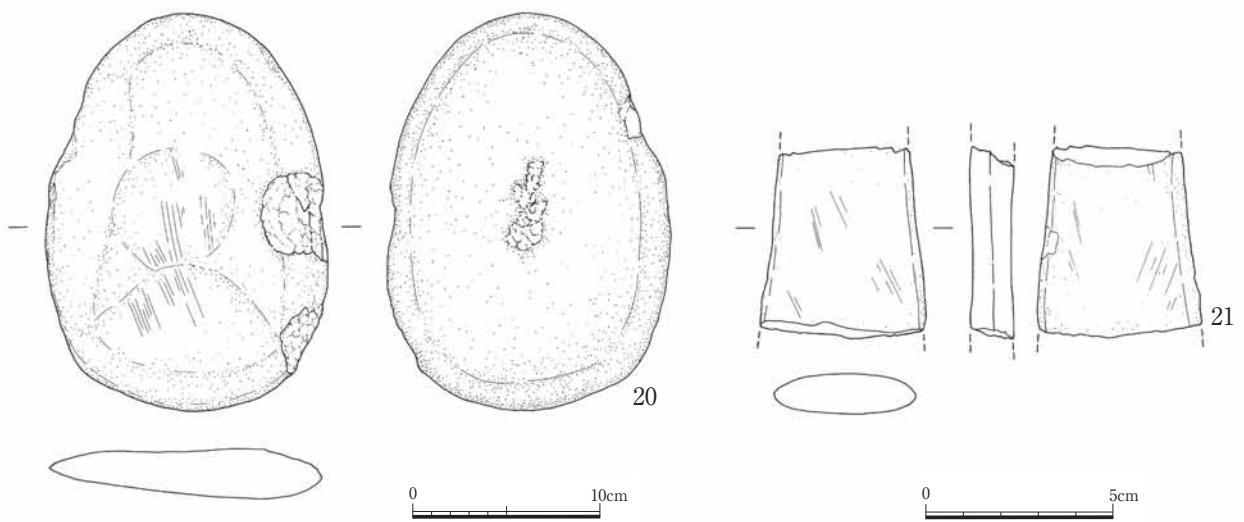
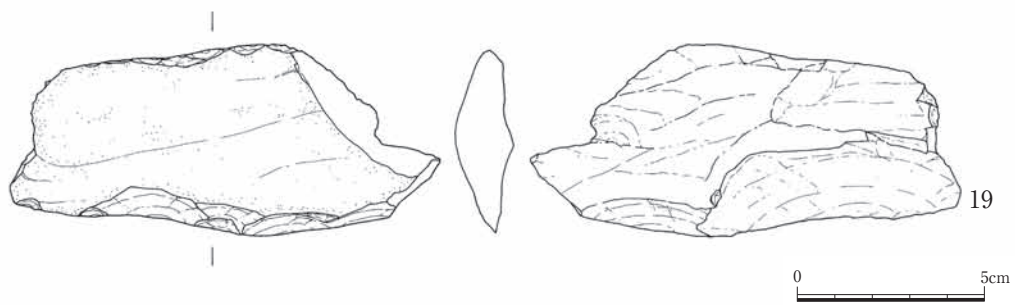
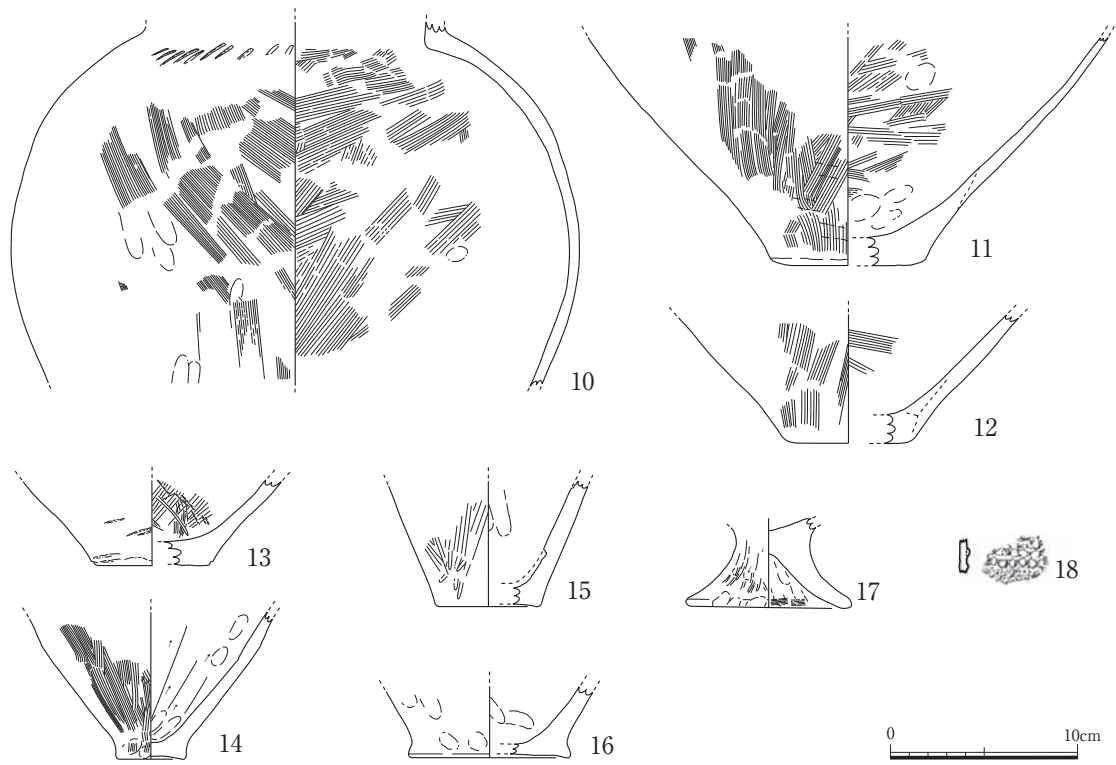
調査区 (C 区) N16/O16 グリッドに位置する。東側は調査区外のため未検出である。ST3/SD-I と切り合い関係にある。検出高は 16.63 m を測る。平面形態は隅丸方形を呈し、長径 2.45 m、短径 2.10 m (検出高)、深さ 9 cm を測る。床面から長径 1.42 m (検出高)、短径 1.19 m、深さ 9 cm を測る土坑状の落ち込みを検出している。また P265 (径 35cm、深さ 20cm) は主柱穴を構成するピットの可能性が考えられるが、他のピットは小規模である。

出土遺物は細片も含めて約 200 点の弥生土器と 1 点の打製石包丁が出土している。



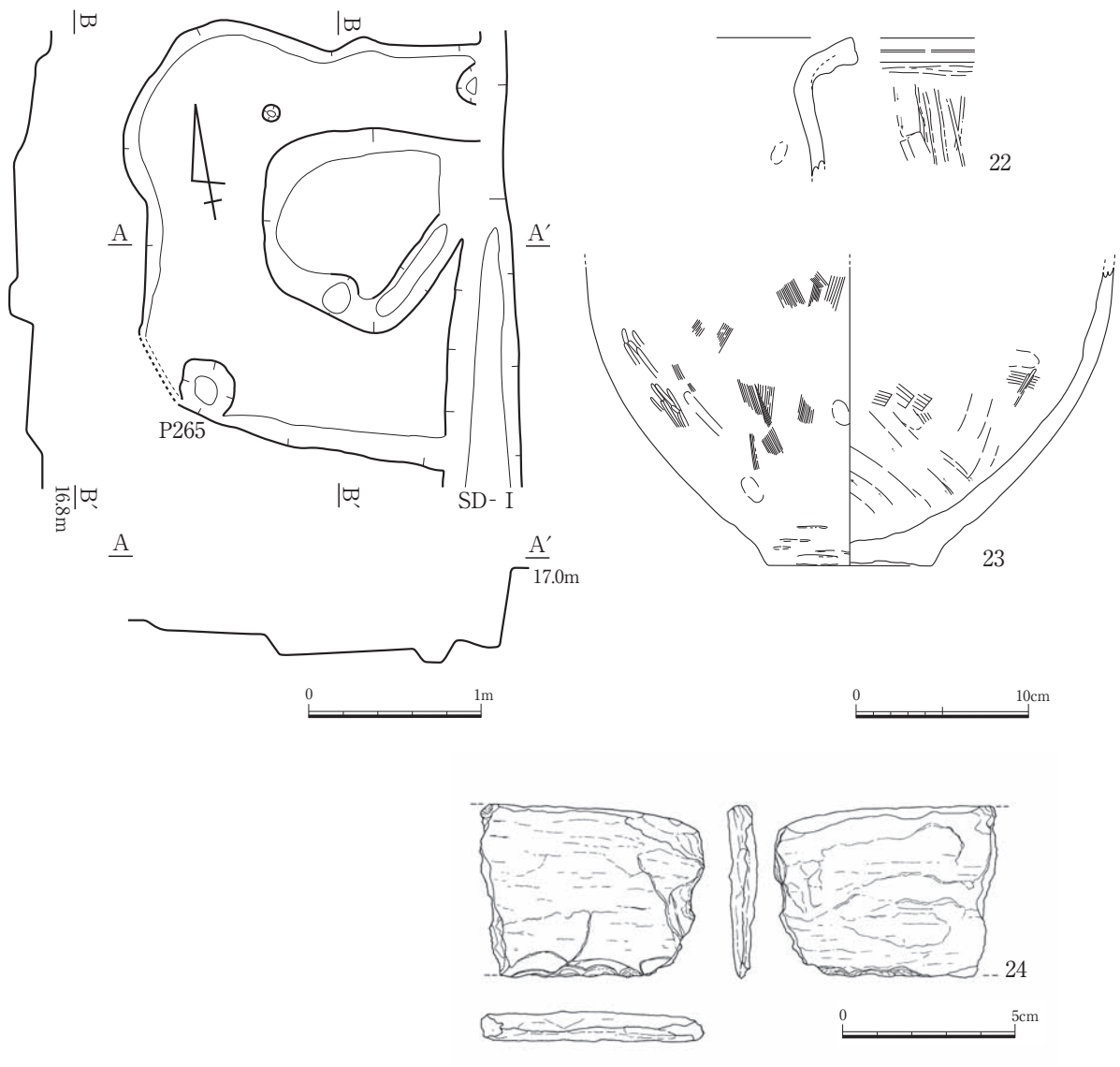


第20図 ST1 平面・セクション図 (S=1/40) 出土遺物 1 弥生土器 (S=1/4) 青銅鏡 (S=1/2)



第21図 ST1 出土遺物 2 弥生土器 (S=1/4) 石器類 (S=1/4・1/2)

出土遺物の中で図示した遺物は、22の鉢口縁と23の壺底部、24の石包丁である。22の口唇には凹線状の浅い沈線が巡っている。また、23は外面をヘラミガキにより丁寧に仕上げ、底面付近にはタタキ目がわずかに残る。24は緑色片岩製の打製石包丁で、直線的な刃部であり、片刃である。遺構の所属時期は弥生後期前半（後期Ⅱ期、V-2・3期）である。



第 22 図 ST2 平面・エレベーション図 (S=1/40) 出土遺物 弥生土器 (S=1/4) 石器類 (S=1/2)

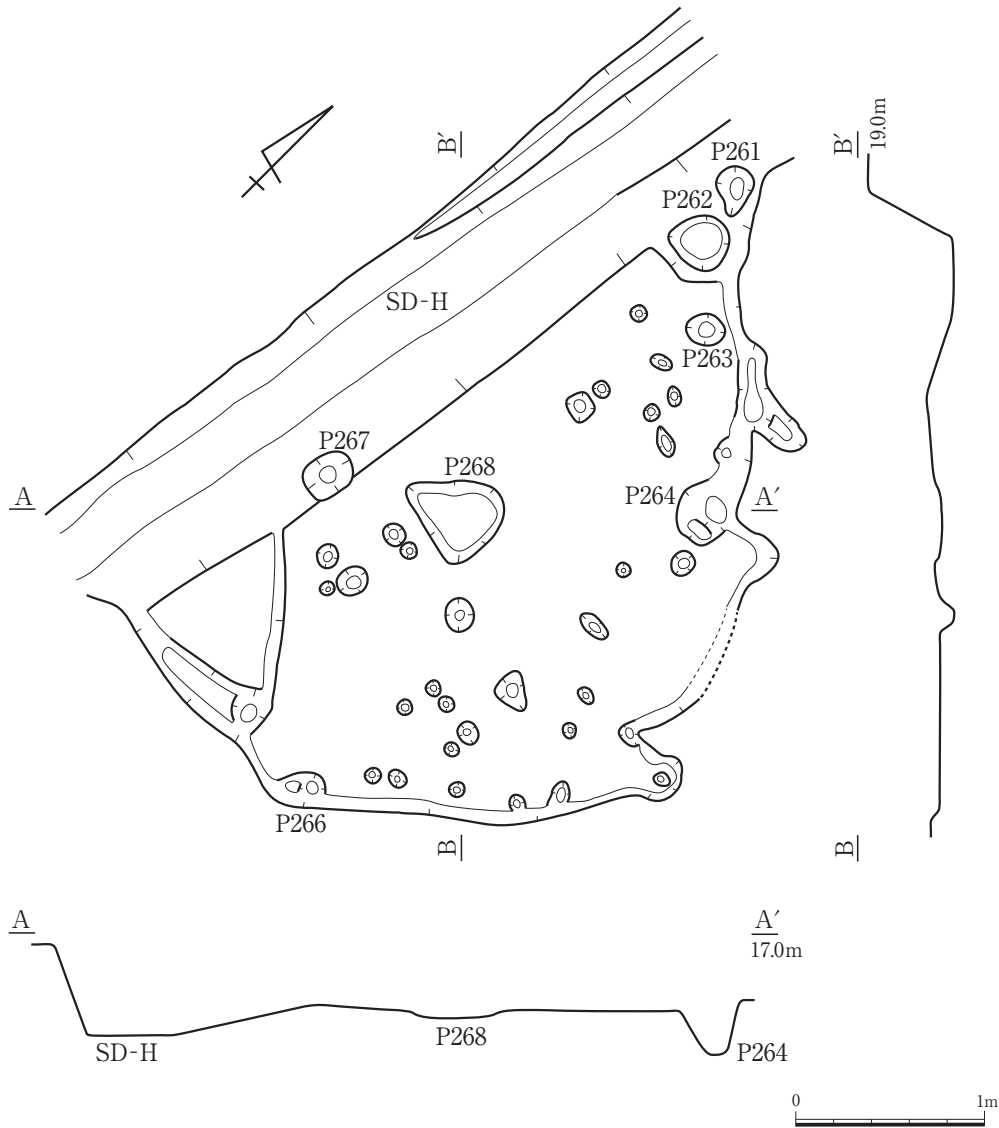
### ST3

調査区（C区）N16・17グリッドに位置する。西側は調査区外のため未検出である。西側をSD-Hに切られる。検出高は16.62mを測る。平面形態は不整長方形状を呈し、長径2.94m（検出長）、短径2.50m、深さ3cmを測る。床面から小規模なピットを検出しているが、本遺構との関係は不明である。

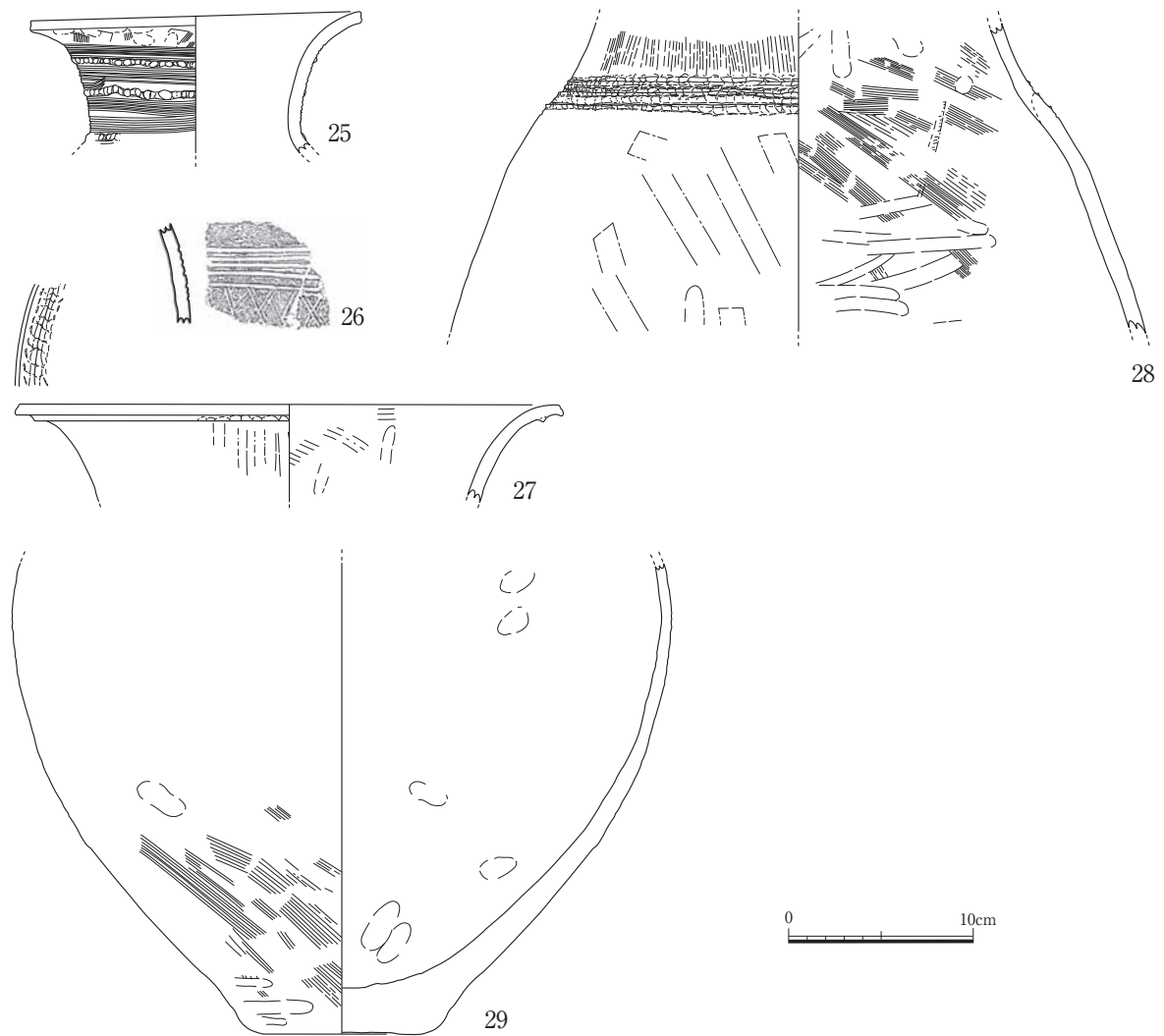
出土遺物は弥生土器21点と被熱赤変砂岩礫（S8）1点である。

図示できた遺物は、25～29の弥生土器5点である。25は扁平な断面四角形の刻目突帯で頸部を加飾、突帯間には5条1単位のクシ描沈線による直線文を施す。27は口縁部外面にミミズ腫れ状の微隆起帯を持つ口縁で、28は上胴部に27と同様の手法で3条のミミズ腫れ状の微隆起帯を持つ。

ST3の所属時期は、弥生中期初頭（中期Ⅰ-Ⅰ期・Ⅱ様式古段階）である。



第23図 ST3平面・エレベーション図（S=1/40）

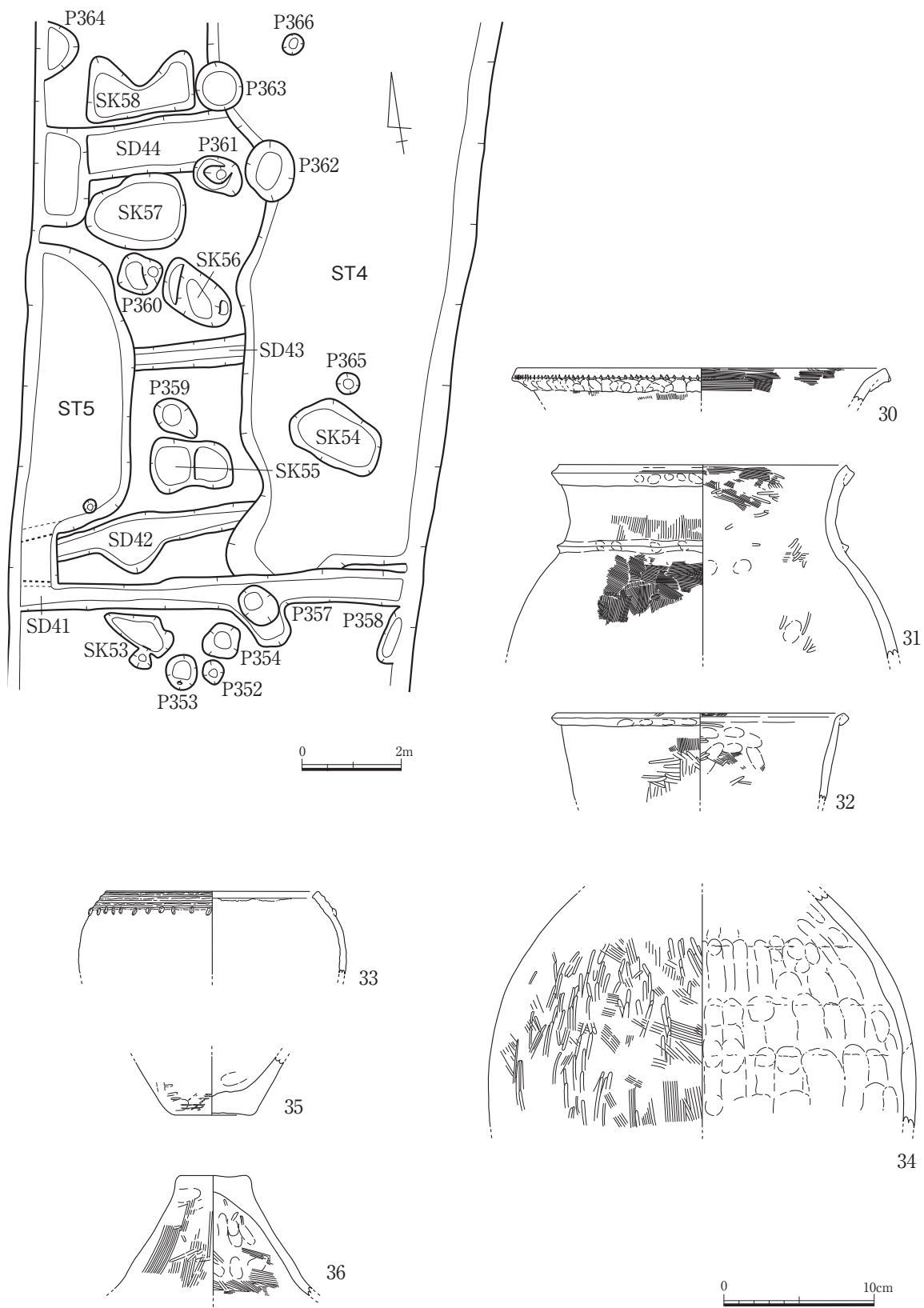


第24図 ST3出土遺物 弥生土器 (S=1/4)

#### ST4

調査区(C区)P33グリッド付近に位置する。平面形は周辺遺構との関係で明確に把握できない。南北方向3.6mの範囲に広がっている。東西方向は1.8mのみ検出され、東半は調査区外に延びている。壁の立ち上がりは確認できるが、周溝・柱穴は検出されておらず、竪穴住居ではなく、竪穴建物あるいは竪穴状遺構とした方が良いのかもしれない。検出面標高は16.45m、検出面から床面までの深さは20cm、床面から長径0.97cm、短径0.57cmの楕円形の土坑(SK54)が検出された以外に遺構は確認されていない。

出土遺物は、149点の弥生土器と7点の石器類で、図示した遺物は30～36(土器)と37～42(石器類)である。

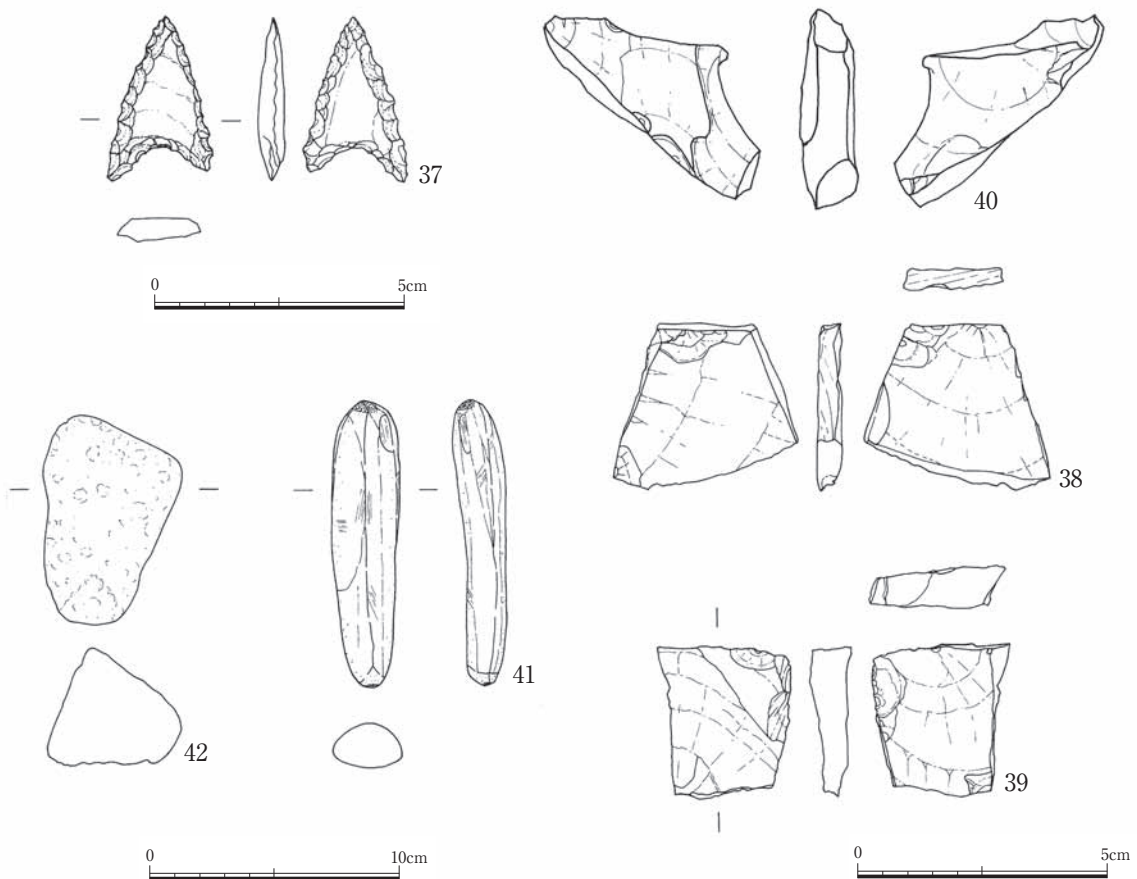


第 25 図 ST4 及び周辺遺構平面図 (S=1/60) 出土遺物 1 弥生土器 (S=1/4)

弥生土器の中には、頸部下に断面三角形の突帯を持つ形態（31）や貼付口縁の鉢（32）など、下分遠崎遺跡の中期中葉の資料に類似例が認められるものがある。33は口唇が内傾、口縁部に3条の微隆起帯を持ち、直下に円形浮文を貼付する無頸壺である。同じ形態の無頸壺類似例は高知平野にはほとんどなく、注目される。34の壺胴部は無文で、ヘラミガキにより丁寧に仕上げられている。36は、蓋の天井部周辺で、脚端部形状は不明である。

石器類としては、37の打製石鏃、38～40の剥片、41の小型棒状円礫、42の軽石が出土した。石鏃・剥片はいずれもサヌカイトで、剥片の背面と腹面の剥片剥離軸が異なっている。打面転移を繰り返しながら、剥片剥離行程が進行したことがわかる。石鏃製作を意図し、目的剥片の獲得を目指した結果生じた剥片だと考えられる。石器製作がこの遺構内で行われていた可能性が高い。

遺物の所属時期は、弥生中期中葉（中期Ⅱ－1期・Ⅲ様式古段階）である。



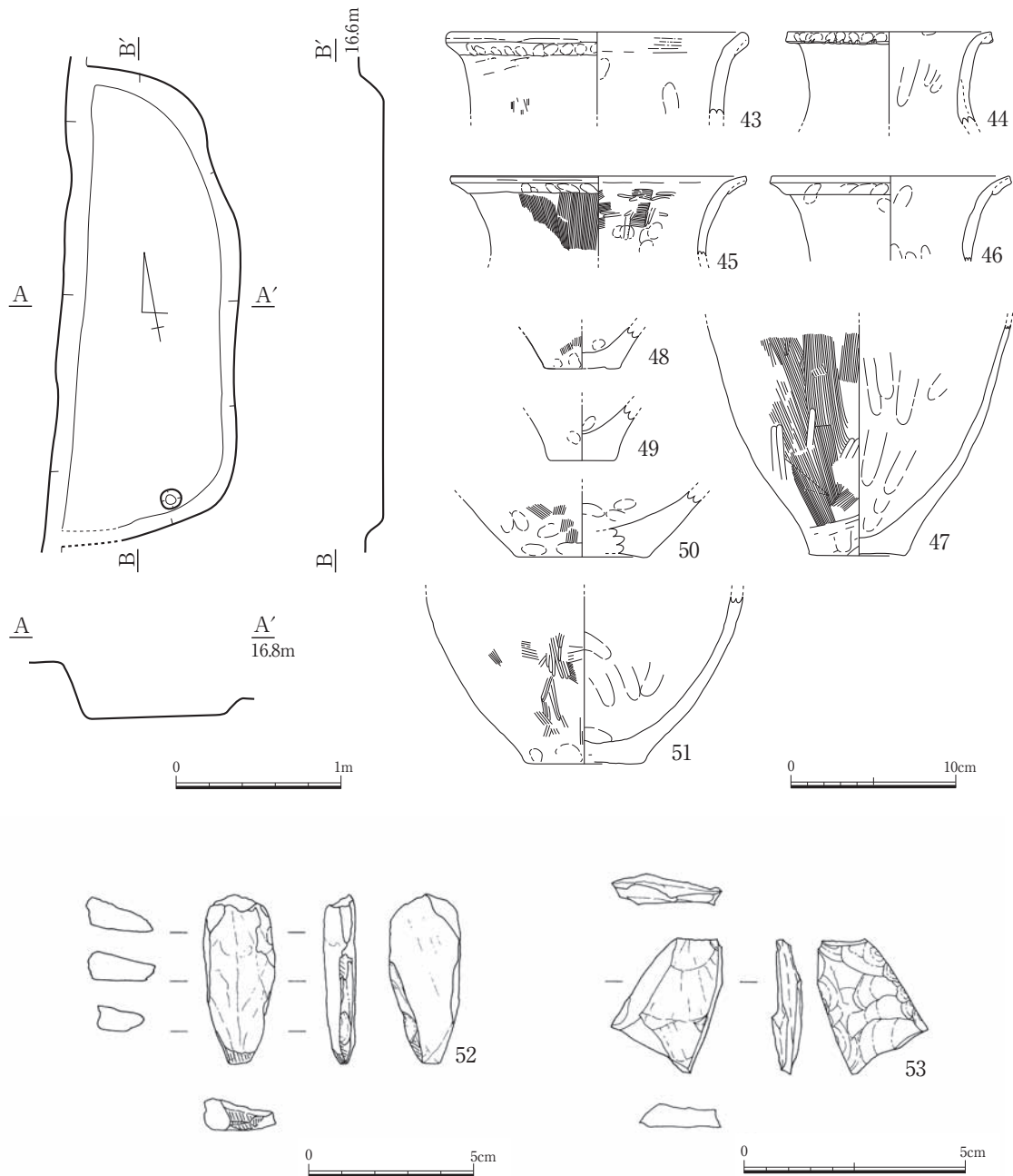
第26図 ST4出土遺物2 石器類 (S=1/3・2/3)

ST5

調査区（B区）O33・34/P33・34グリッドに位置する。西側は調査区外のため未検出である。SD43に切られる。検出高は16.44mを測る。平面形態は隅丸長形状を呈し、長径2.90m、短径0.93m（検出長）、深さ13cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。床面から小規模なピットを検出しているが、本遺構との関係は不明である。

出土遺物は115点の弥生土器と3点の石器類である。

図示した遺物は43～51（弥生土器）、52・53（石器類）である。43・50・51が壺、44～49が甕であり、口縁部が確認できる個体は全て貼付口縁で、文様が確認できる個体はない。



第27図 ST5平面・エレベーション図 (S=1/40) 出土遺物 弥生土器 (S=1/4) 石器類 (S=1/2・2/3)

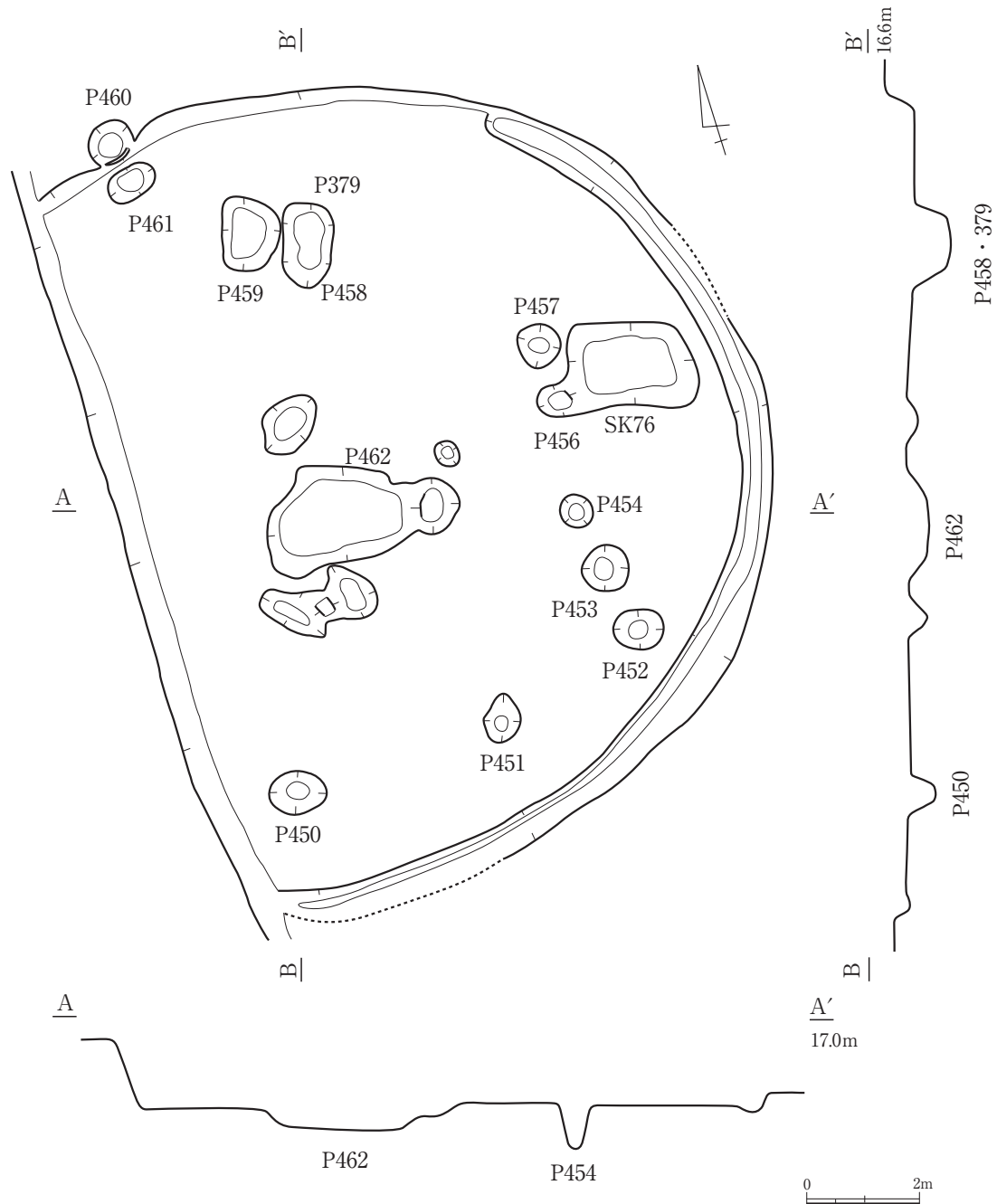


52は酸性凝灰質頁岩の磨製石斧で、小型の加工斧である。刃部周辺のみ研磨し、両刃の刃部を作り出している。53はサヌカイトの剥片である。

この遺構の所属時期は、弥生時代中期中葉（中期Ⅱ－1期、Ⅲ様式古段階）である。

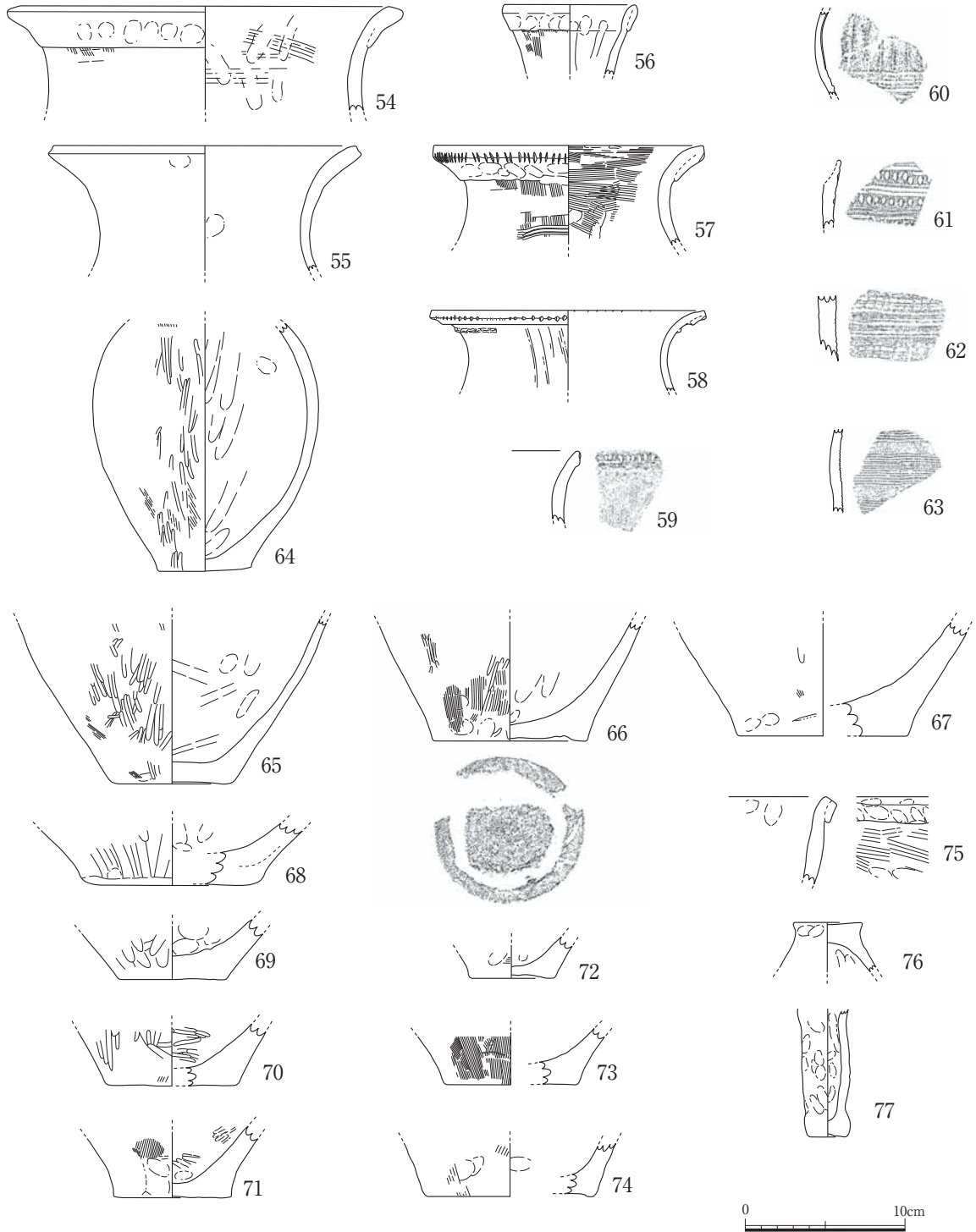
ST6

調査区（C区）O24～26/P24・25グリッドに位置する。西側は調査区外のため未検出である。SD-J・23・25に切られる。検出高は16.42mを測る。平面形態は楕円形状に近い円形状を呈し、長



第28図 ST6平面・エレベーション図 (S=1/60)

径 5.53 m (検出長)、短径 6.95 m、深さ 15cm を測る。埋土は茶灰色 (砂質) シルトである。多数のピットを検出しているが、支柱穴を構成するピットは P450・451・454 (453) ・457・458 と考えられ、径 30 ~ 50cm、深さ 19 ~ 47cm を測る。P462 は中央ピットの可能性が考えられる。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径 1.32 m、短径 0.87 m、深さ 19cm を測る。ピット状遺構と切り合い関係にある。



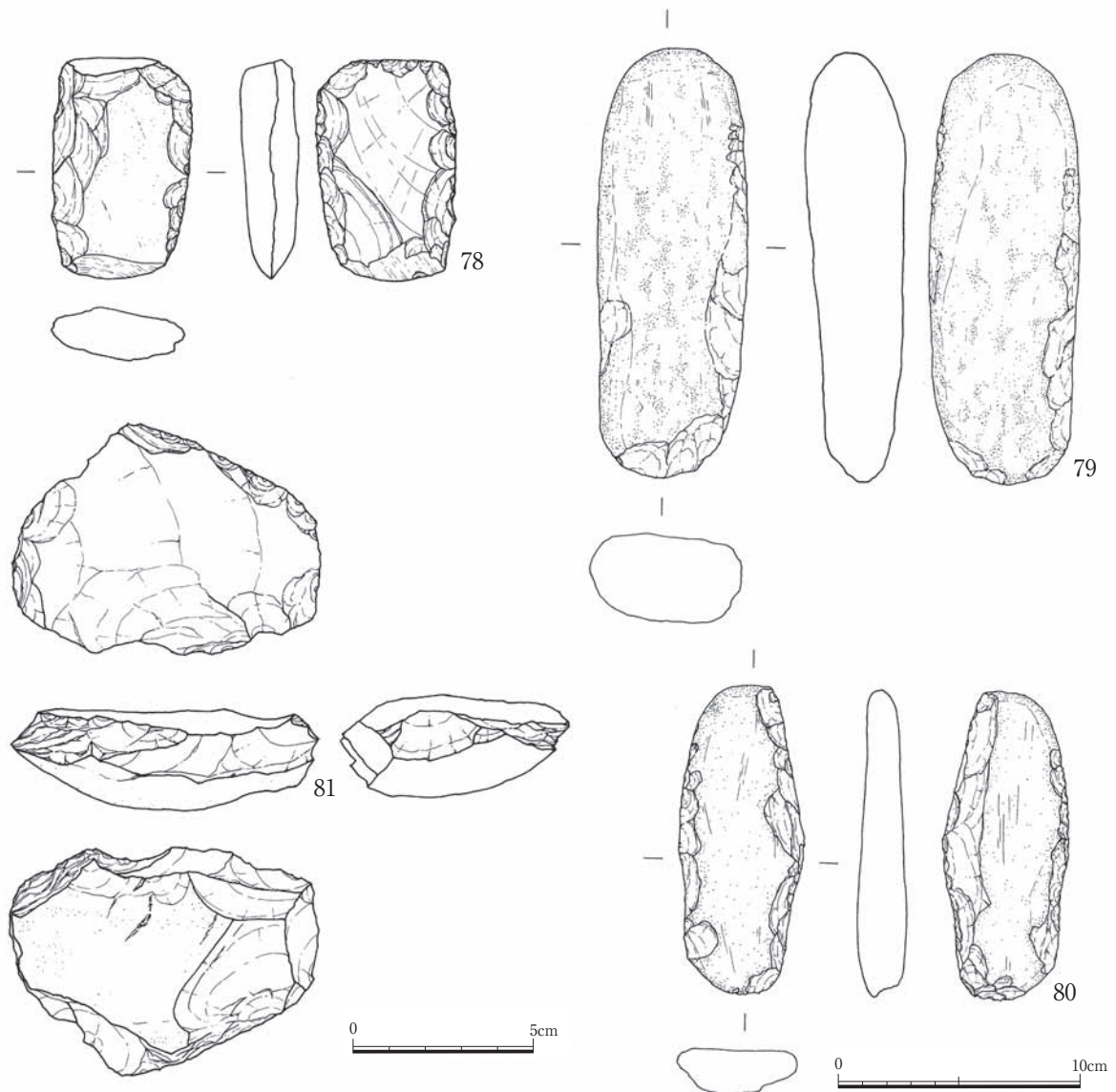
第 29 図 ST6 出土遺物 1 弥生土器 (S=1/4)

北側を除く壁際から幅 15～30cm、深さ 2～4cm を測る壁溝を 1 条検出している。床面から SK76 を検出しているが、本遺構との関係は不明である。

出土遺物は、弥生土器が細片も含めて 1150 点、石器類 14 点、炭化物（炭状）が合計 340g、須恵器 1 点であり、須恵器は混入だと考えられる。

出土遺物の中で図示した遺物は、54～77 の弥生土器と 78～81 の石器類 4 点である。弥生土器の中で、54～58・61～70 が壺、59・60・71～74 が甕、75 が鉢、76 が蓋、77 が筒状の土製品である。

壺の占める割合が高く、全体の 60% 以上が壺である。壺形土器の口縁部の中で、54・56・57 が貼付口縁、55 が素口縁、58 は貼付口縁で口縁部外面に微隆起帯のある器壁の薄い搬入土器である。62 は 5 条 1 単位のクシ描沈線による簾状文と直線文が交互に施文されている。63 は 13 条 1 単位のクシ描直線文の残る胴部片である。底部は斜め上方に直線的に立ち上がり、多くが平底であるが、



第 30 図 ST6 出土遺物 2 石器類 (S=1/2・1/3)

中には66・72・74のように底面中央が凹み高台状になるものもある。特に66は、底面が周状に凹む特徴を持っている。77は一端が閉じて袋状になった筒状の土製品だが、器種・用途は特定できない。

石器は、78が磨製石斧（超塩基性岩）で79・80が石斧未製品（ともに御荷鉾緑色岩）、81が石核（珪質頁岩）である。78は磨製石斧だが、研磨は刃部に限定されている。側縁は通常の剥離および平坦剥離によって形成され、刃部は両刃である。79・80はある程度の厚みを持つ扁平な棒状礫を素材とした御荷鉾緑色岩で、端部と側縁に直接打撃により成形加工を施した段階の磨製石斧の未製品である。81の石核は、扁平な分割礫の剥離面に打面を設定、打面調整を加えた後、打面側から（ハードハンマーによる間接打撃により）剥片を剥離した後の残核である。遺構内及び今回の調査区域内から、この石核から剥離された剥片は出土していないが、目的剥片は幅3～4cm前後の小型の横長剥片であると想定される。

遺構の所属時期は、弥生時代中期中葉（中期Ⅱ－1期、Ⅲ様式古段階）である。

## ST7

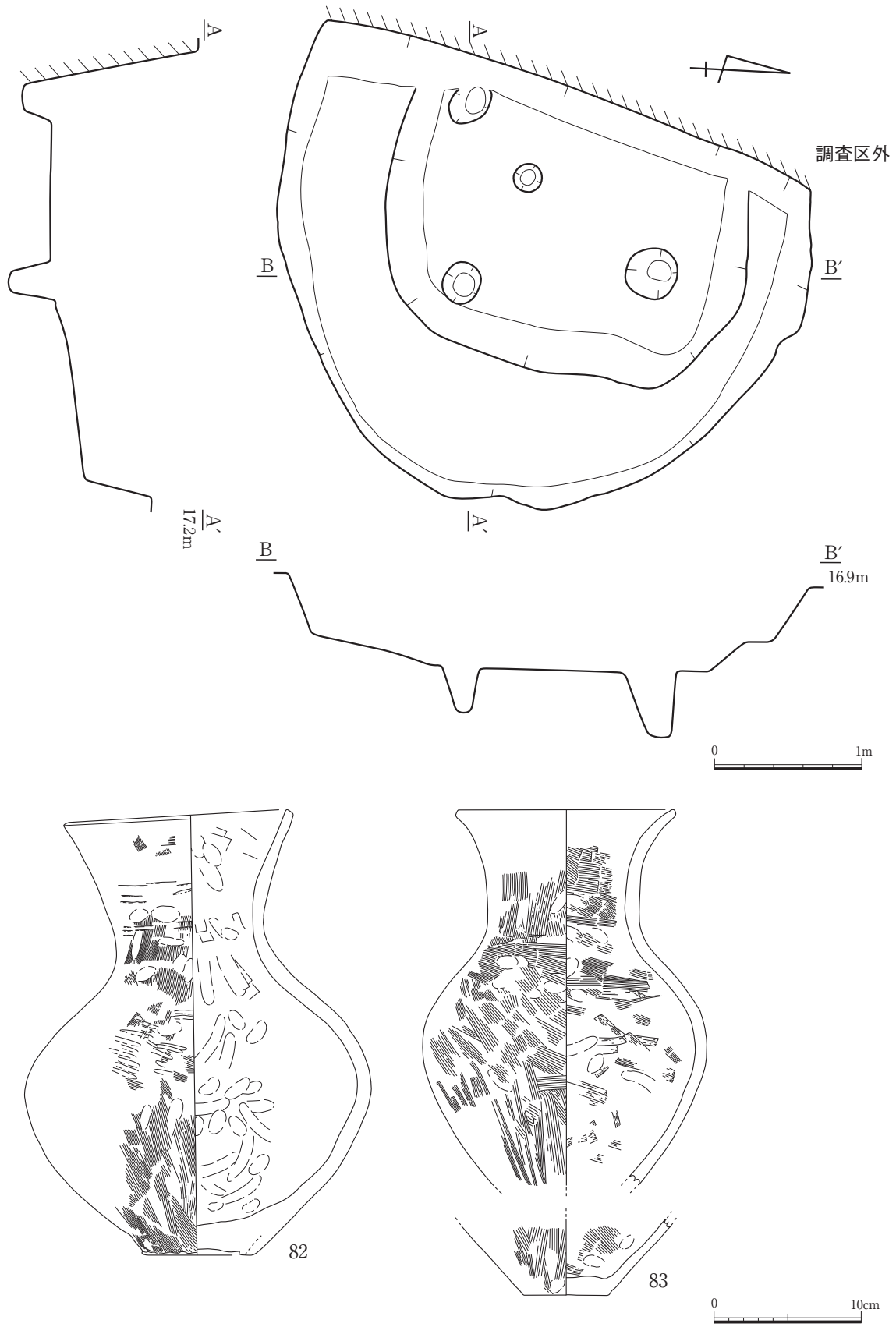
調査区（C区）M3・4グリッドに位置する。西側は調査区外のため、一部拡張して検出している。ST7はP1・2・3・5に切られている。（第17図参照）検出高は16.84mを測る。平面形態は楕円形状に近い円形状を呈し、長径7.40m、短径5.33m（検出長）、深さ54（高床部）～68（低床部）cmを測る。段部を有しており、高床部（ベッド状遺構）は壁際から約15～90cmの幅で検出している。低床部の平面形態は隅丸形状を呈し、床面から支柱穴を構成すると考えられるピットを検出しており、径28～35cm、深さ29～43cmを測る。この部分の上面で遺物の集中を確認している。

調査時点ではSK1として調査開始、部分的に調査範囲を拡張した後で、竪穴住居であることを確認、遺構名をST7に変更する。

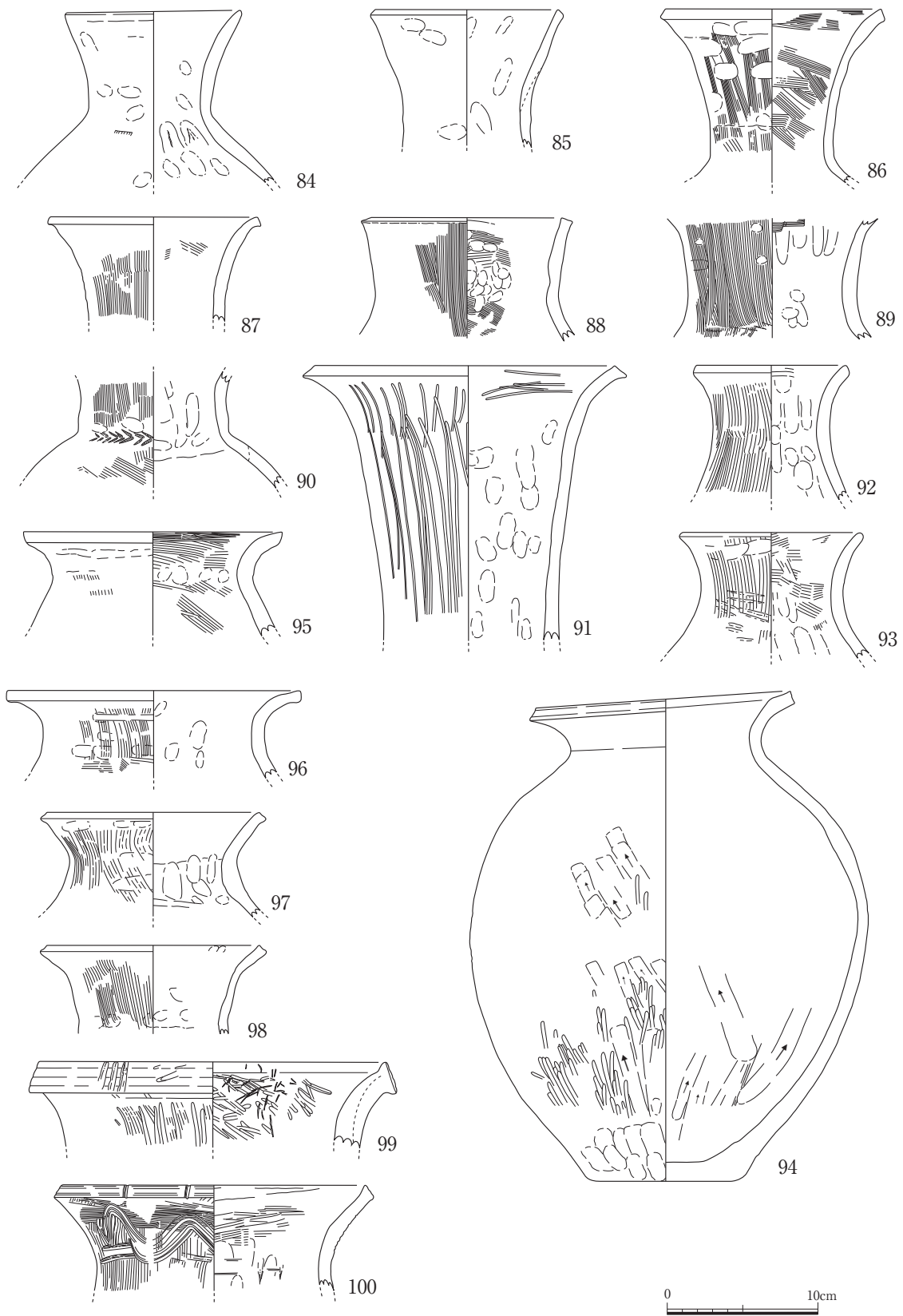
出土遺物は弥生土器1,544点（土器片点数）と土器量は多く、集中した出土状況を示す。その中で、弥生土器118点について図化した。これに対し石器は少なく合計3点の出土、図化したものは200の磨製石包丁、201の台石（敲打痕わずかに残る）の2点のみである。

弥生土器は口縁部が確認できる個体が145、底部が53と多いが、文様が認められる破片は3点のみと大半が無文の土器片で、後期前半（後期Ⅱ期・Ⅴ－2期）に属するものである。それ以外の時期の遺物としては、中期前半の混入資料が7点確認されている。

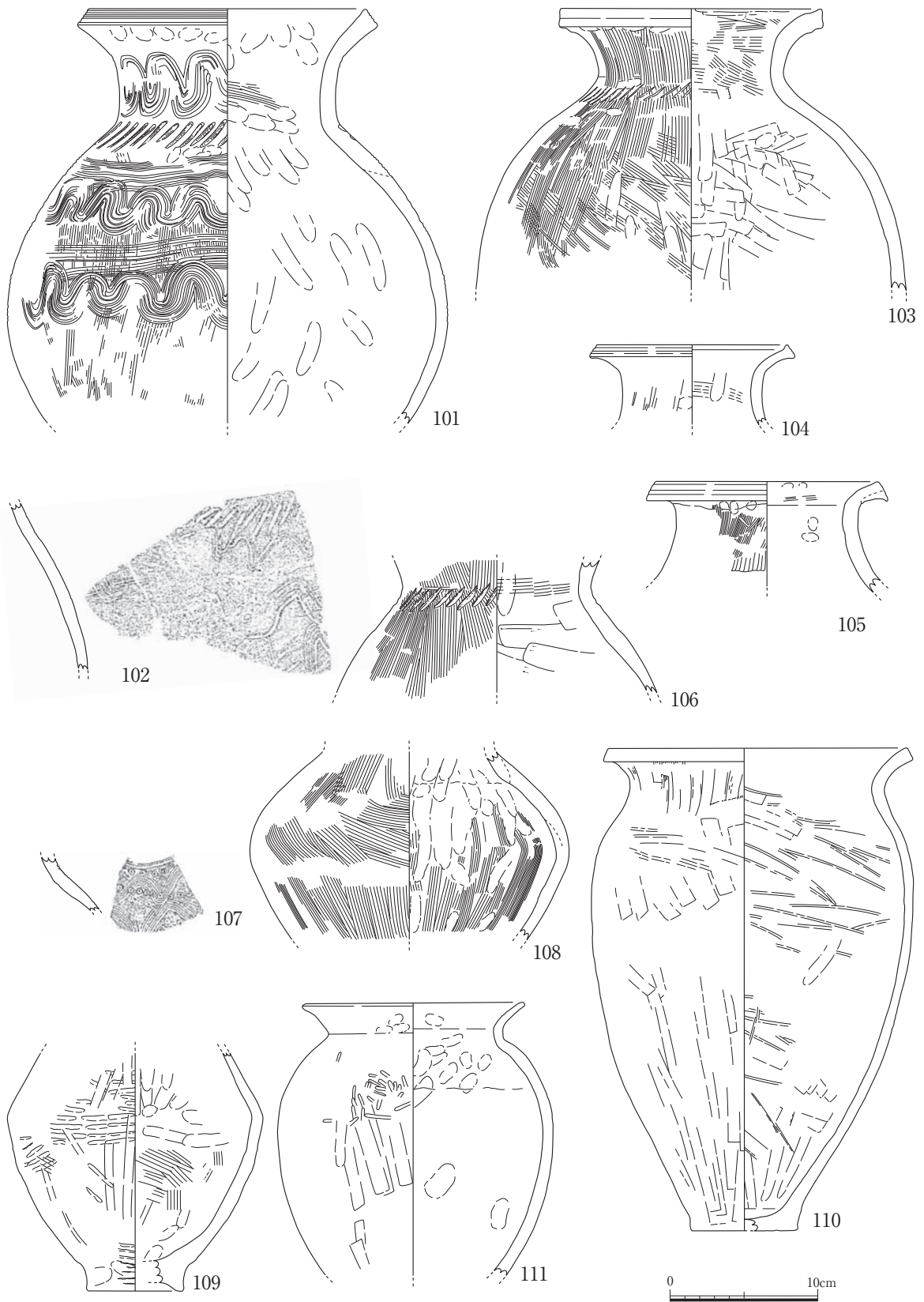
82～93が長頸壺で、94～98がラッパ状に大きく開く広口壺、99～105が口唇を拡張し凹線あるいは偽凹線を施す特徴を持つ壺である。口縁部には刻目はなく、口縁外面の粘土帯貼付が確認できるものも、1点（105）のみと例外的である。口縁が残る壺、あるいは頸部の形状で器形が確認できる壺23点中、長頸壺が12点と50%を超え、短頸の広口壺5点（22%）、凹線または退化した凹線を持つ壺6点（26%）の割合となっている。口縁に凹線を持つ土器以外は、無文の土器が圧倒的に多い。無文の中で、頸部に暗文状の多段縦方向のヘラミガキを施す壺（91）、頸胴界に列点文を施す101～103・106や、90のように羽状の文様を施文する物など、凹線文以外の文様を持つ土器もあるが、占める割合は2割以下である。その中で、101は特異である。口縁には3条の凹線文を持ち、頸部にクシ描波状文、頸胴界に列点文上胴部から胴部中位にかけて、クシ描による直線文と波状文を多段に施文する。類似した文様ではあるが、102の胴部片の文様は異なっている。



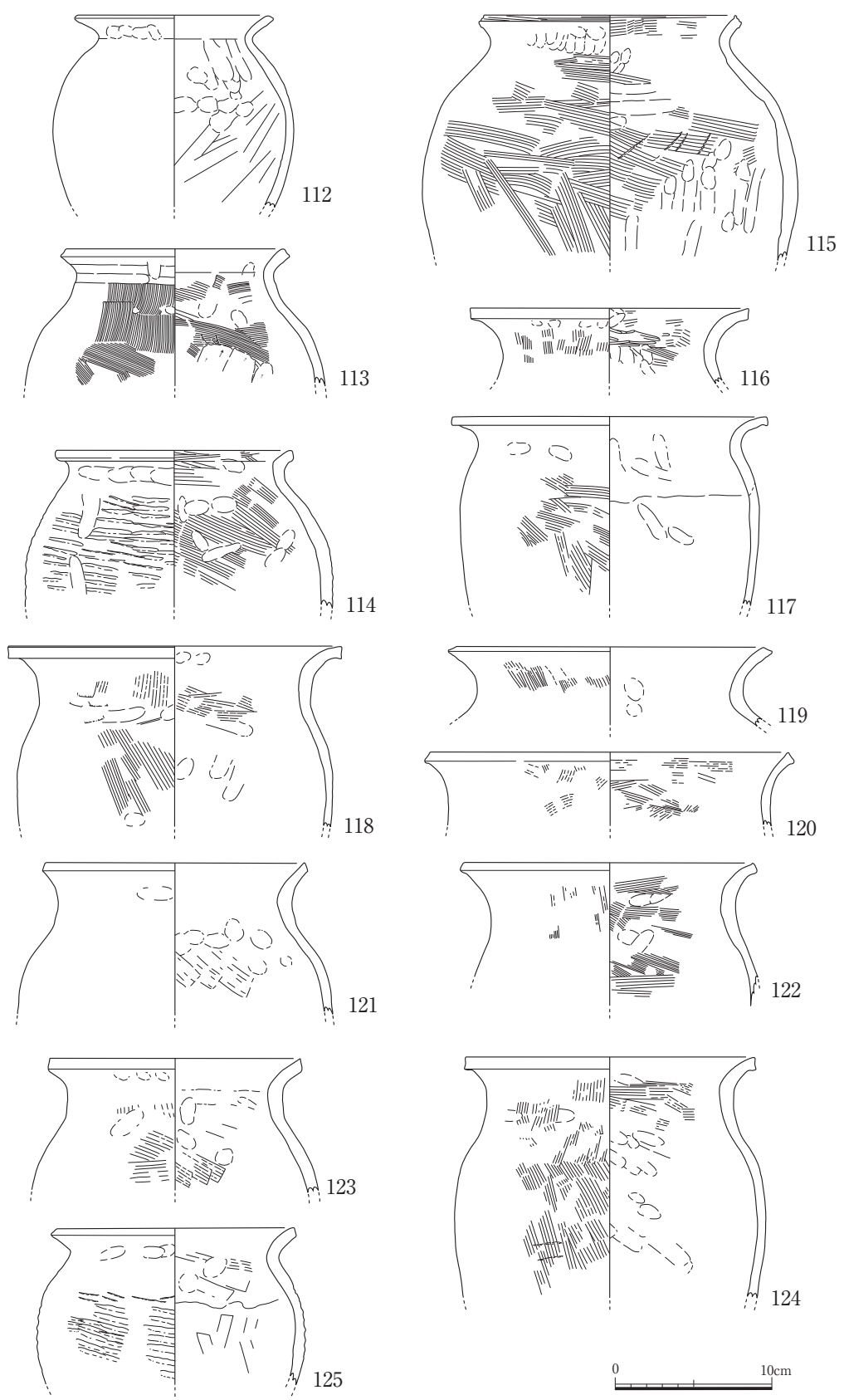
第31図 ST7平面・エレベーション図 (S=1/40) 出土遺物1 弥生土器 (S=1/4)



第 32 図 ST7 出土遺物 2 弥生土器 (S=1/4)



第33図 ST7 出土遺物3 弥生土器 (S=1/4)



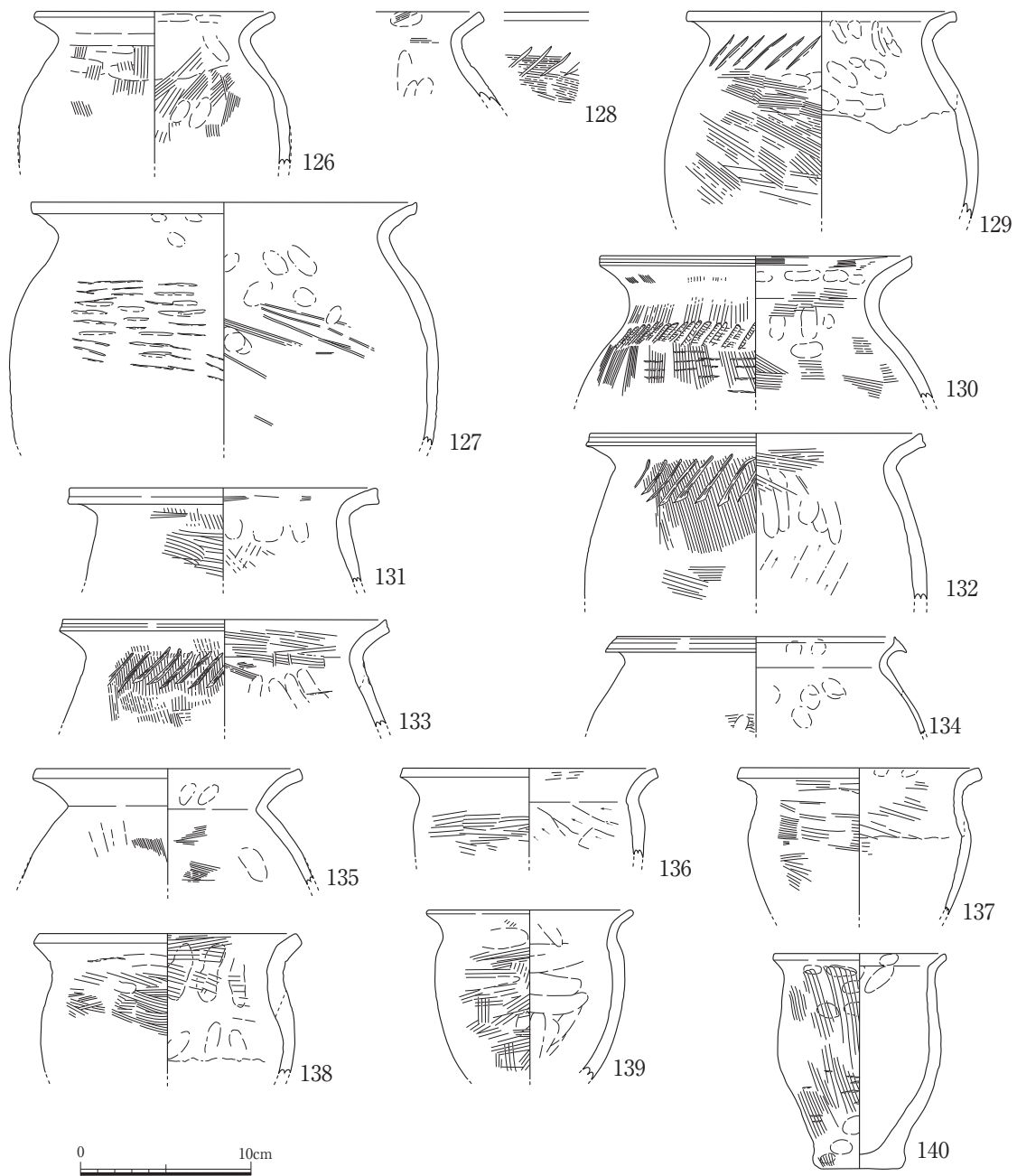
第34図 ST7 出土遺物 4 弥生土器 (S=1/4)



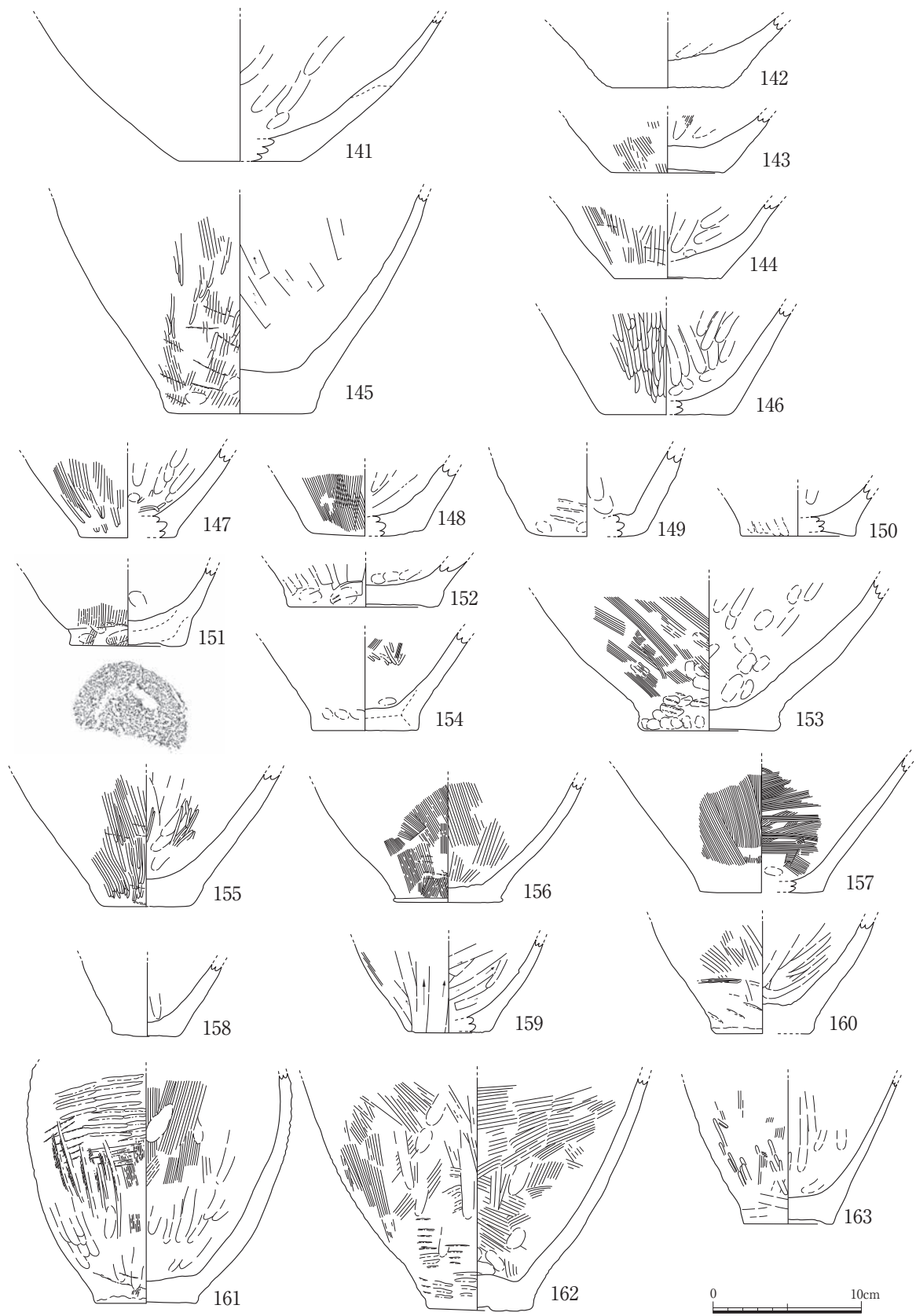
108・109の中・小型の壺は、胴部中位から上胴部にかけて、やや屈曲気味に張り出した部位に最大径がある。

外面はハケ調整やヘラミガキにより丁寧に仕上げられているものが多いが、82、93、109など成形調整痕であるタタキ目を観察できるものもある。

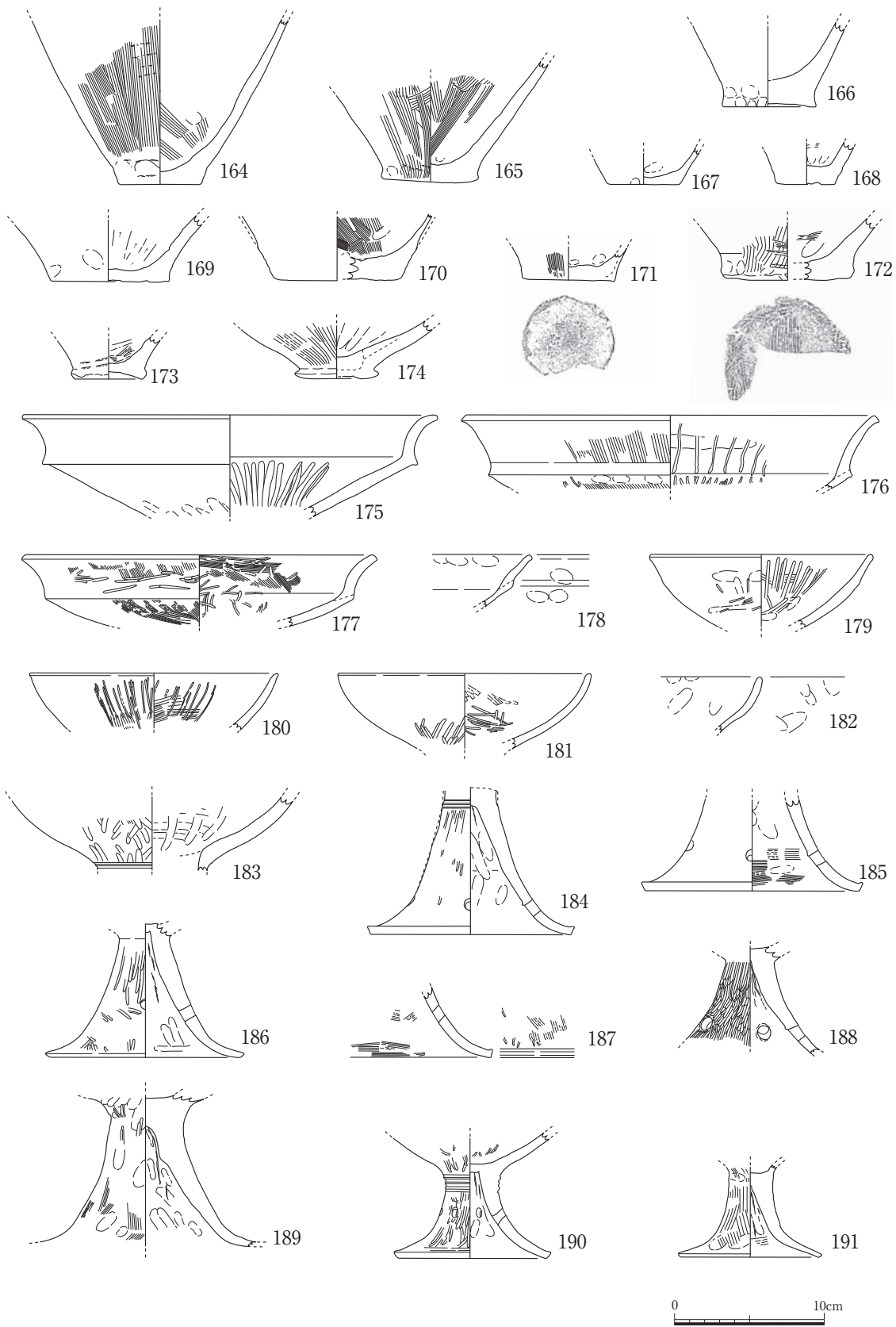
110～140が口縁部の残る甕形土器である。頸部の屈曲は緩やかであり、135のような、くの字状に稜をなして強く屈曲する甕は例外的である。口唇に凹線文を施文する甕は134のみである。器壁は3～5mmと薄く、口唇は上下に拡張する。また、口径15cm以下の小型の甕が、136～140で、中でも140は口径10cmと特に小さい。



第35図 ST7出土遺物5 弥生土器 (S=1/4)



第36図 ST7 出土遺物6 弥生土器 (S=1/4)



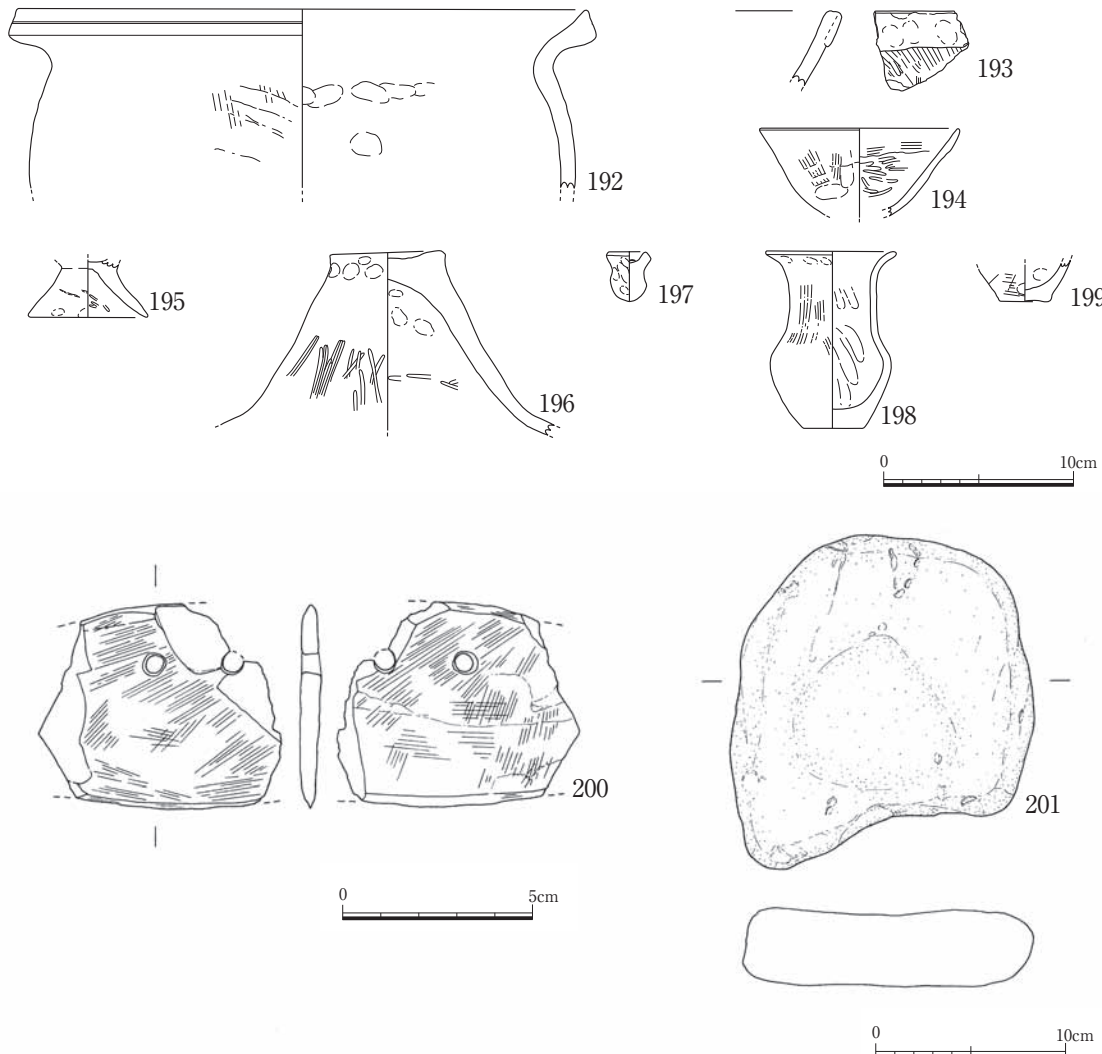
第37図 ST7 出土遺物 7 弥生土器 (S=1/4)

141～174が、壺あるいは甕の底部である。底径は、壺には底径が7～10cm程度、甕には4～6cm程度のものが多い。底面は、中央部が凹み上げ底状や高台状になったものもあるが、全体の10%足らずで、大半は平底と捉えられるものである。

175～183が高坏の坏部、184～191が高坏の脚部、192・193が鉢、194・195が台付鉢、196が蓋、197～199が小型土器（ミニチュア土器）である。

高坏の坏部は一旦屈曲した後で大きく外反するタイプ（175～178）と椀状のタイプ（179～183）があり、脚部は透孔があるもの（184～188・190）とないもの（189・191）がある。脚部の透孔の数は、4孔（184～186）、3孔（188）、6孔（190）の3タイプがある。脚端部は強いヨコナデにより面を成すものが多い。

192は口唇を上下に拡張、口唇面はわずかに凹状になる。193は貼付口縁の鉢、194が鉢坏部（台付鉢？）、195が台付鉢脚部である。196の蓋は内外面ともヘラミガキで仕上げる。197～199のミニチュア土器のうち、198は長頸壺を模したものである。



第38図 ST7出土遺物 8 弥生土器 (S=1/4) 石器 (S=1/2・1/4)

土器に比べ出土量の少ない石器だが、200 が磨製石包丁、201 が砂岩の敲石である。200 の石包丁の石材は頁岩で、左右両端が欠けている。紐孔は2孔、全面に研磨痕が残り、両刃で背面にも研磨により面が形成される。201 は、中央部に敲打痕が残ることから、何らかの作業に使われた台石だと考えている。

遺構の所属時期は、弥生時代後期前半（後期Ⅱ期、V-2・3期）である。



ST7 遺物出土状況

## ST8

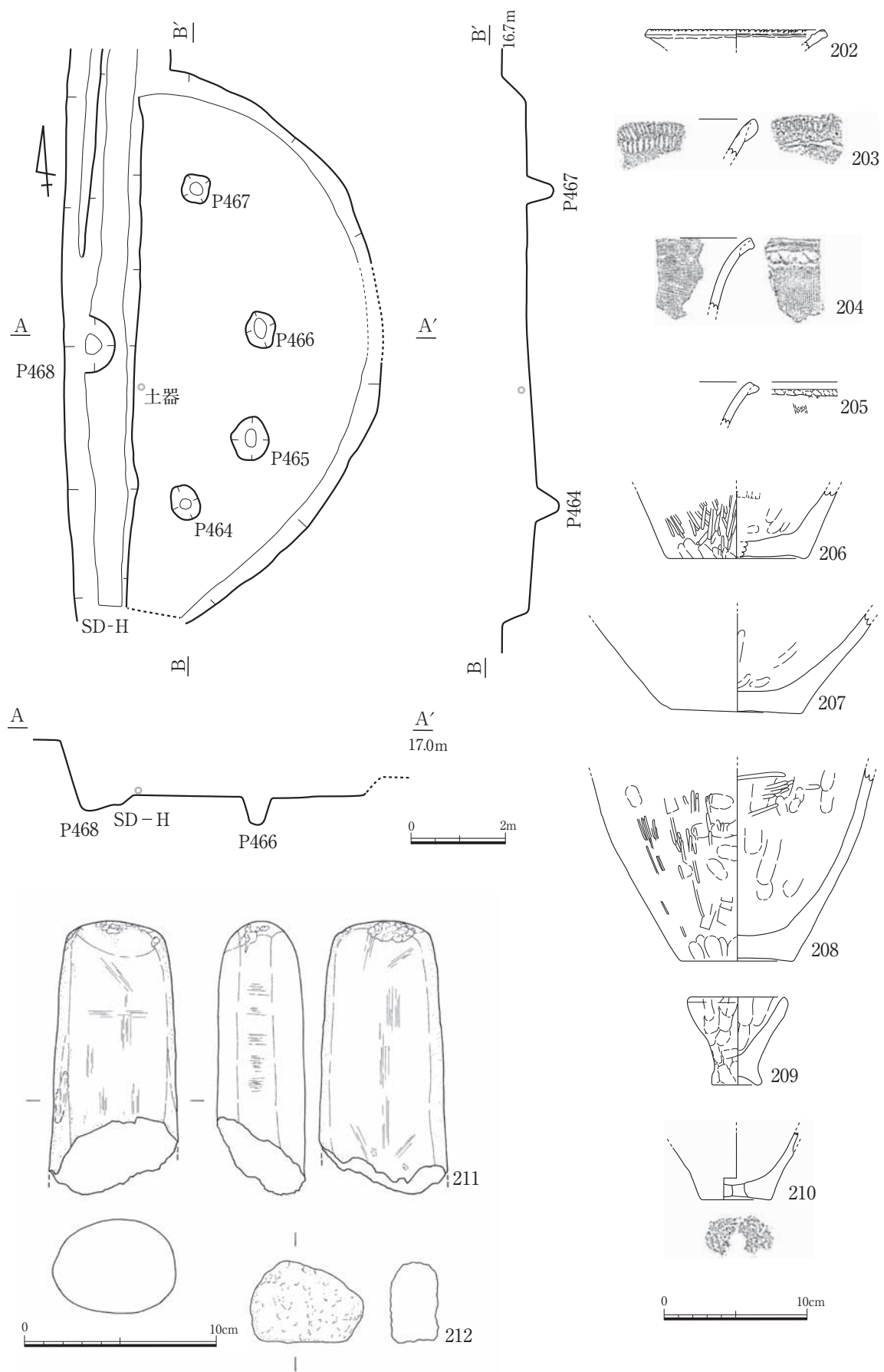
調査区（C区）N21・22/O21・22 グリッドに位置する。西側は調査区外のため未検出である。SD-H/SK77/P326（SB3）に切られる。検出高は16.54 mを測る。平面形態は円形状を呈し、長径5.77 m（検出長）、短径3.07 m（検出長）、深さ25cmを測る。埋土は茶灰色シルトである。支柱穴を構成するピットはP464～467と考えられ、径34～45cm、深さ25～29cmを測る。P468は中央ピットの可能性が考えられる。平面形態は円形状を呈し、長径60cm、短径30cm（検出長）、深さ16cmを測る。

出土した弥生土器は140点、石器類は3点（磨製石斧の基部、剥片、軽石）である。

図化した資料は、弥生土器（202～210）と御荷鉾緑色岩製磨製石斧（211）と軽石（212）の石器類2点である。202～205は壺の口縁部で、206～208は壺の底部、209は小型の鉢、210が底部に穿孔部を持つ甗である。202の内面には微隆起帯を貼付し、口唇上端に刻目を巡らせる。203～205は貼付口縁で、203は外面に刻目、内面にはヘラ状原体により羽状の文様を施文する。209は小型の鉢であり、底部は凹状で外縁が脚状に突出する。210の甗は、焼成前穿孔であり、底面の孔径は8mm大である。

出土遺物は微隆起帯を持つ破片や貼付口縁の小片、御荷鉾緑色岩製磨製石斧の基部など、弥生中期の資料が多いのだが、小型鉢（209）には後期前半の可能性も残り、遺構の時期は現時点で弥生中期か後期前半いずれか、決めかねている。最終的な判断は、遺構の形状や、詳細な土器の検討を経てから再度行いたい。

遺構の時期は、弥生中期（中期Ⅰ・Ⅱ）あるいは後期前半（後期Ⅱ期、V-3期）いずれかである。



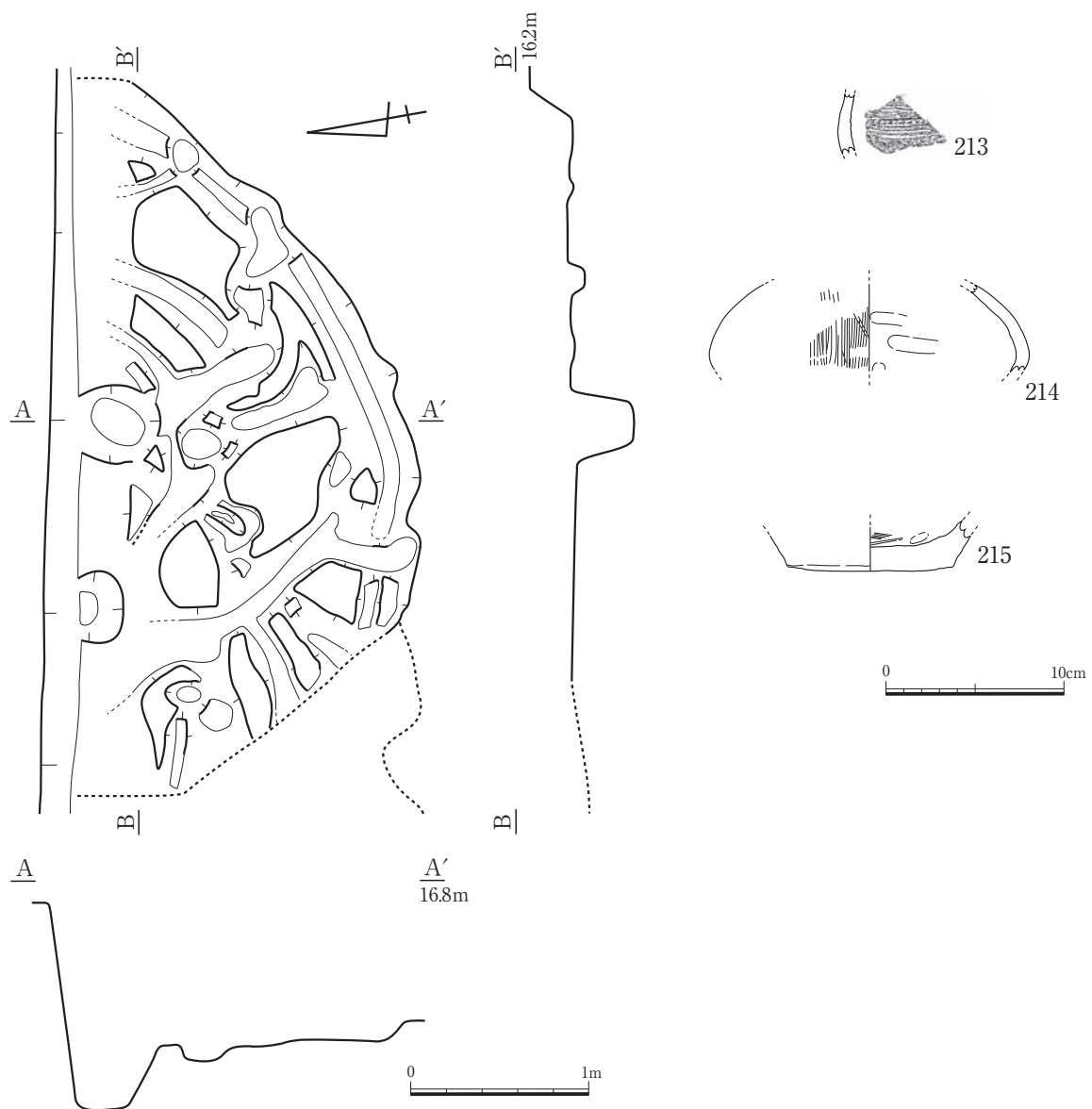
第39図 ST8平面・エレベーション図 (S=1/60) 出土遺物 弥生土器 (S=1/4) 石器類 (S=1/3)

ST9

調査区（A区）I36・37/J36 グリッドに位置する。西側は攪乱を受け、北側は調査区外のため未検出である。検出高は16.03 mを測る。平面形態は歪な円形状を呈し、長径4.00 m（検出長）、短径1.90 m（検出長）、深さ10～20cmを測る。埋土は茶灰色シルトである。壁際から幅20cm、深さ6cmを測る壁溝を1条検出しているが、床面は不整形状を呈し、支柱穴などの復元は困難である。出土遺物は弥生土器70点、石器類1点（砂岩の剥片・S38）で、うち図化したものは弥生土器3点（213～215）である。いずれも壺であり、213には竹管文と7条1単位のクシ描沈線が確認される。214は大きくソロバン状に張り出した胴部、215は平底の底部である。

出土した弥生土器片の大半が無文の資料である。213のクシ描沈線を有する弥生中期前半の資料は、混入資料だと考え、この遺構の所属時期は、214の時期・弥生後期前半（後期Ⅱ期、V-3期）だと捉えておきたい。

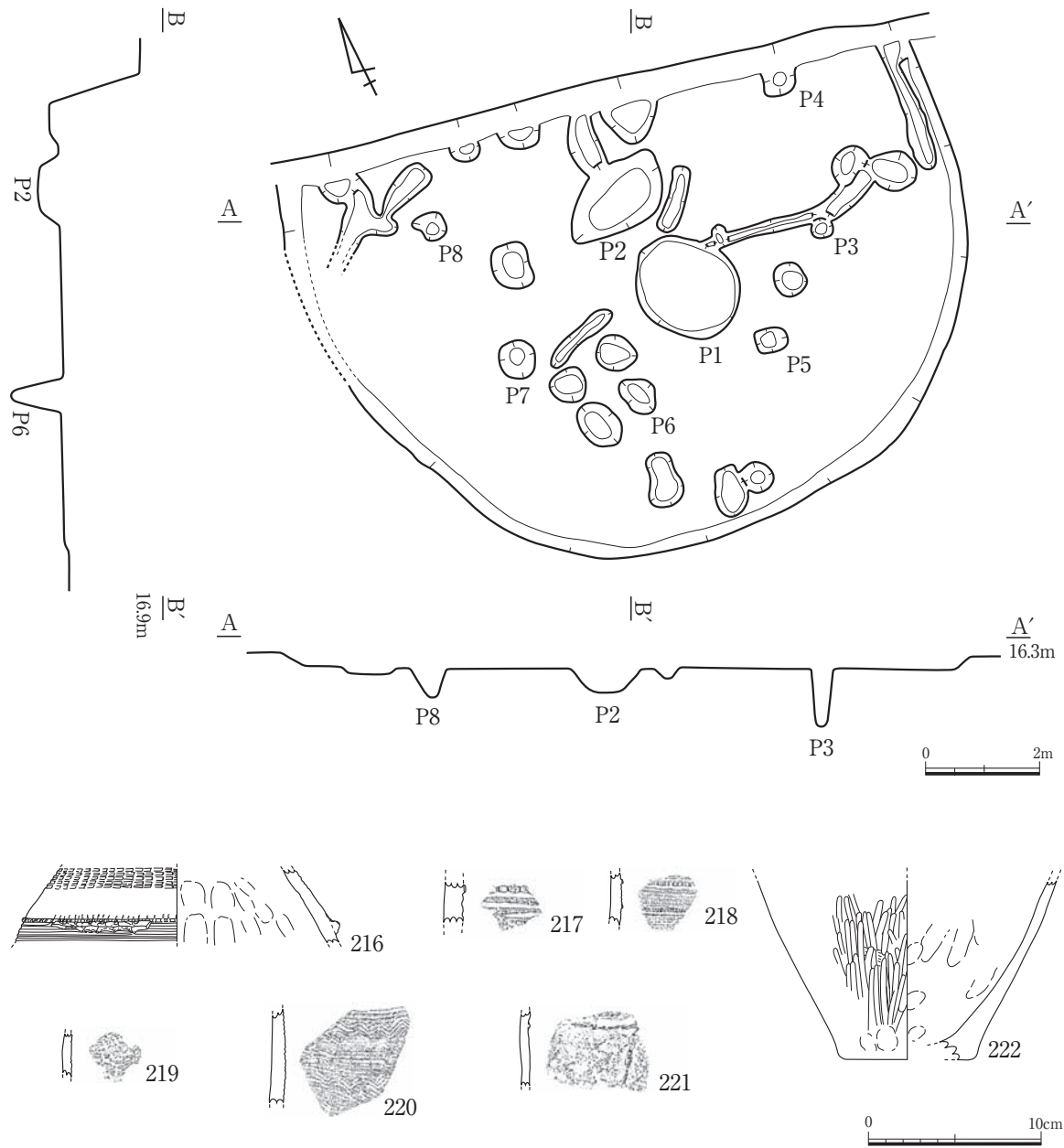
また、この遺構は近世以降の攪乱も受けており、陶器2点・磁器7点も出土している。



第40図 ST9平面・エレベーション図（S=1/40）出土遺物 弥生土器（S=1/4）

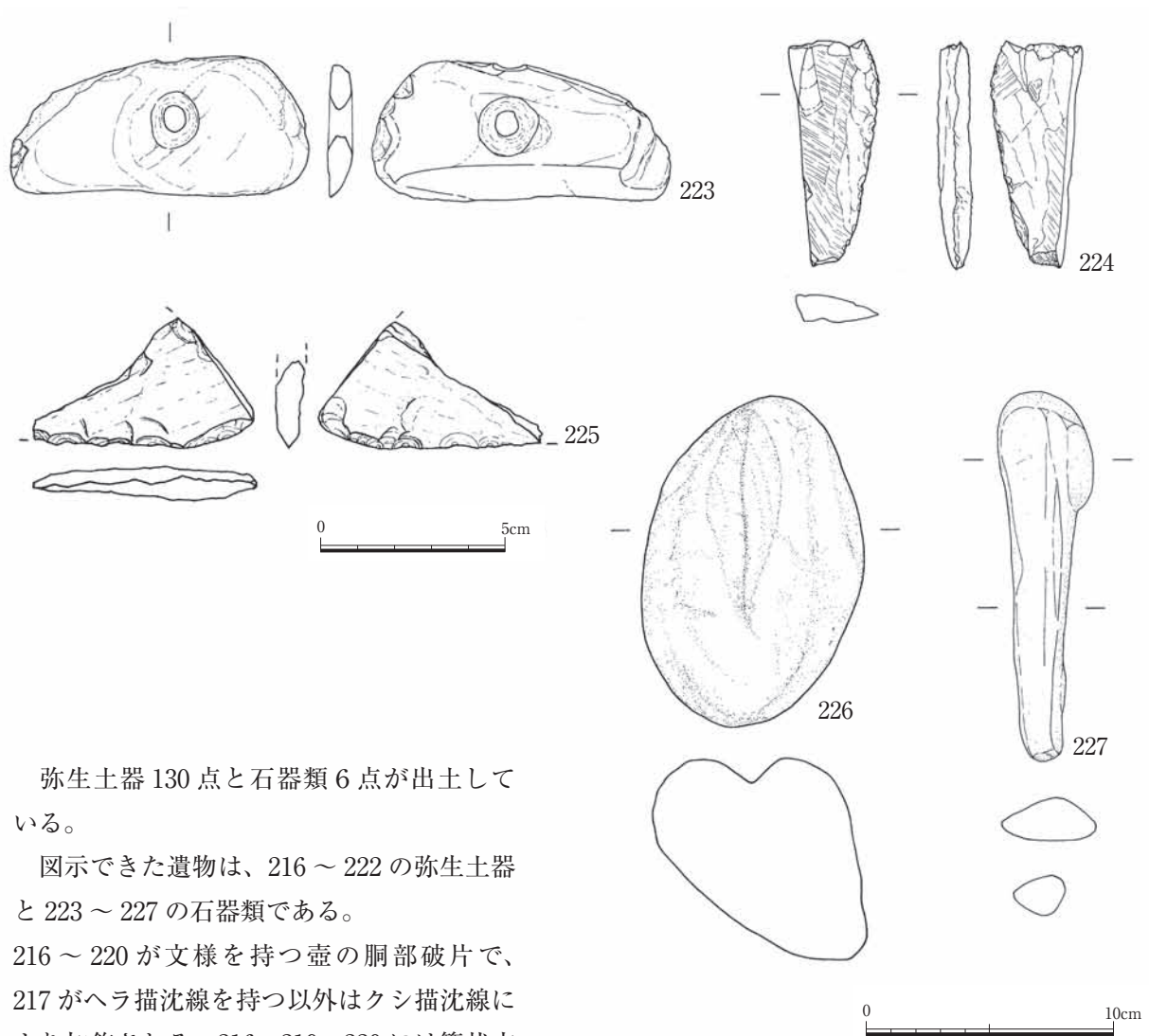
ST10

調査区（A区）M36・37/N36・37グリッドに位置する。北側は調査区外のため未検出である。SD-Qに切られる。検出高は16.11mを測る。平面形態は歪な円形状を呈し、長径5.70m、短径3.85m（検出長）、深さ8cmを測る。埋土は茶灰色シルトである。支柱穴を構成するピットはP3～8と考えられ、径20～37cm、深さ25～51cmを測る。P2は中央ピットの可能性が考えられる。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径1.05m、短径0.70m、深さ21cmを測る。溝状遺構と切り合い関係にある。東側の壁際から5cmほど離れて幅10～20cm、深さ3cmを測る壁溝を部分的に1条検出している。



第41図 ST10平面・エレベーション図 (S=1/60) 出土遺物 弥生土器 (S=1/4)





第42図 ST10 出土遺物 石器類 (S=1/2・1/3)

弥生土器 130 点と石器類 6 点が出土している。

図示できた遺物は、216～222 の弥生土器と 223～227 の石器類である。

216～220 が文様を持つ壺の胴部破片で、217 がヘラ描沈線を持つ以外はクシ描沈線により加飾される。216・219・220 には簾状文が認められ、216～218 には幅狭の扁平で断面四角形の刻目粘土帯が貼付される。221 は甕で縦位と横位の微隆起帯を組み合わせで施文、222 は壺底部で外面は丁寧なヘラミガキで仕上げられている。

石器類は、223 の磨製石包丁（片刃で、紐孔は 1 孔、緑色岩系の層理が発達した石材）、224 の磨製石斧、225 の打製石器、226 と 227 の陰陽石である。図化していない資料だが、床面遺構である P2 からは、砂岩の剥片が 1 点出土している。226 の陰石と 227 の陽石と各々想定される自然石には、加工痕あるいは使用痕は全く認められない。床面直上の埋土がわずかに残る遺構から出土したこと、調査資料の中に類似する自然石がないこと、さらに形態の特殊性から、断定はできないものの「選択的に持ち込まれ、祭祀行為等に使用されたのではないか」と考えている。

遺構の所属時期は、弥生時代中期前半（中期Ⅰ－Ⅱ期、Ⅱ様式新段階）である。

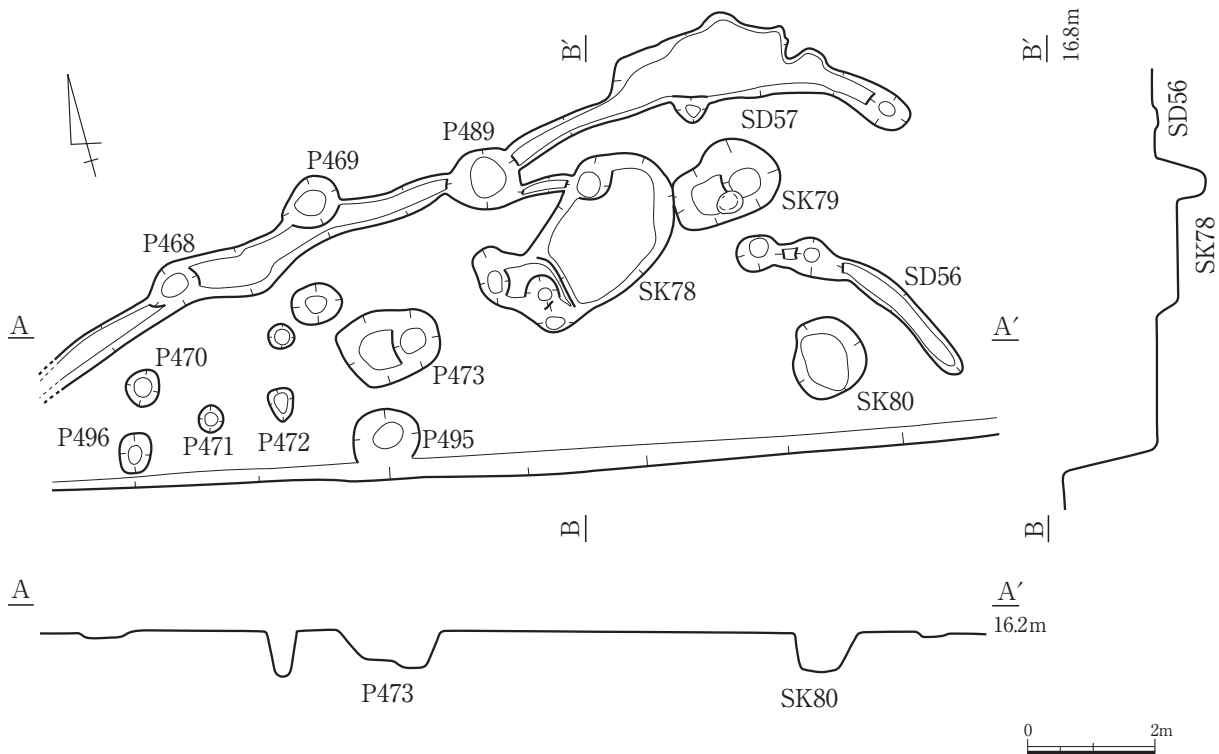
ST11

調査区（A区）I37/J37 グリッドに位置する。南側は調査区外のため未検出である。SK78/SB5と切り合い関係にある。検出高は16.00 mを測る。平面形態は歪な円形状を呈し、長径7.07 m（検出長）、短径2.20 m（検出幅）を測る。壁面の残存は確認できず、周溝状遺構（SD56）の検出をもって竪穴住居跡の可能性があるとされたと考えられる。周溝状遺構は、幅20～40cm、深さ5～7 cmを測る。床面から小規模なピットを検出しているが、支柱穴の復元は困難である。なお北側に位置するSD57は拡張または別遺構（竪穴住居跡）の周溝の可能性が考えられる。

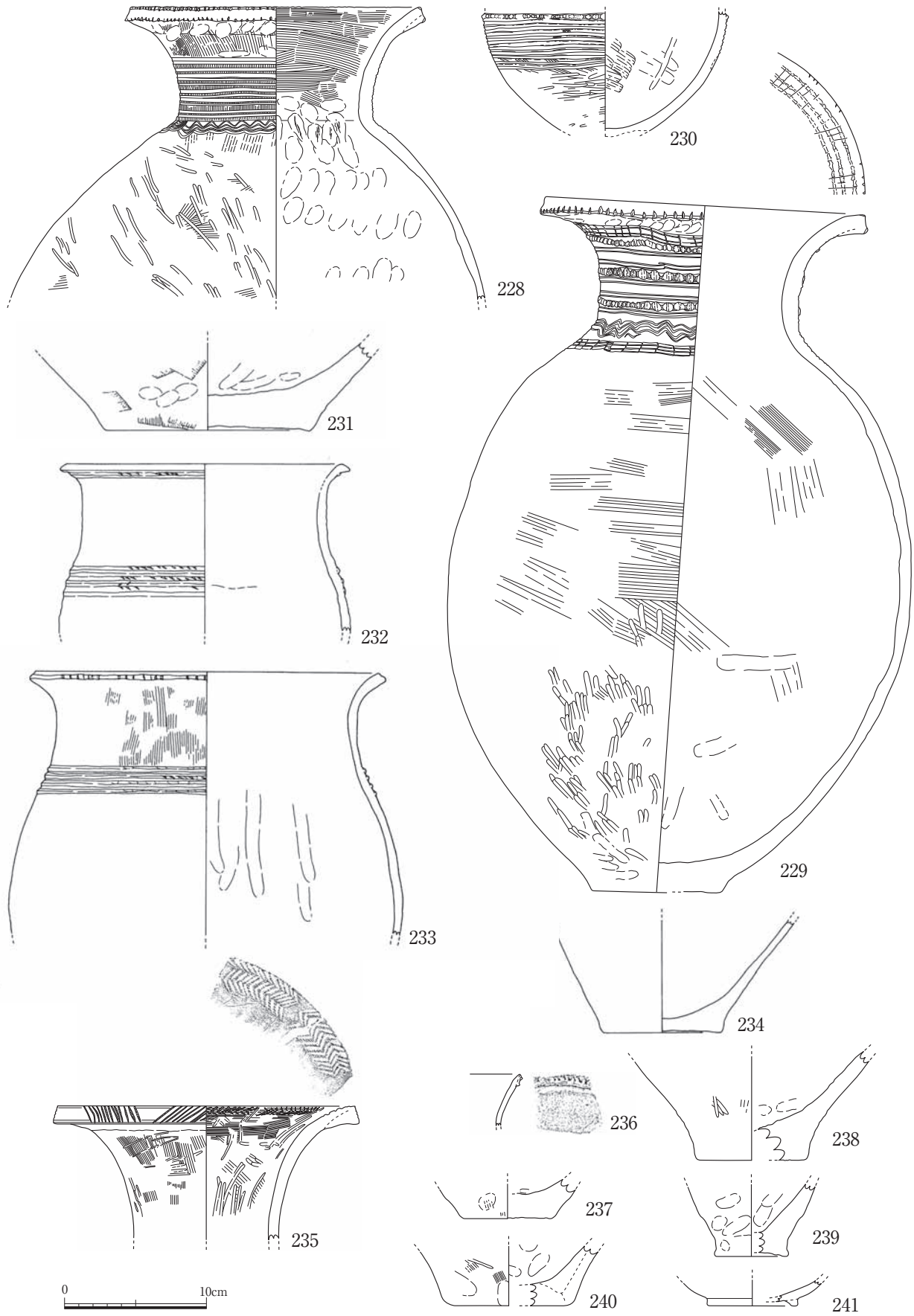
出土遺物は弥生土器196点、輪高台の土師器椀1点、炭化物（炭）5点、石器類2点が出土している。土師器椀は他時期の混入資料である。

図示した遺物は228～241の弥生土器と242のサヌカイト剥片である。

228は（土器1）で検出された土器で、クシ描沈線による直線文を頸部に波状文を頸胴界に施文、229は（土器4）頸部にクシ描簾状文・直線文を施文、クシ描沈線間に扁平な刻目粘土帯を貼付し、加飾する。また、口縁内面にも3条の扁平な粘土帯を貼付、刻目を施している。228と229ともにクシ描沈線の単位は2条であり、外面に粘土帯を貼付して成形した口唇には上下に刻目を持ち、胴部外面をヘラミガキで仕上げするなど共通点も多く、同時期（Ⅱ様式）の資料だと考えられる。これに対し、230の壺は球形に大きく張る胴部下半で中位が最大径、扁平な断面逆台形状の粘土帯を貼付し刻目を施す。粘土帯の下方に9条のヘラ描沈線による直線文を持つ。沈線下位には全体に横方向のヘラミガキが確認される。



第43図 ST11 平面・エレベーション図 (S=1/60)



第44図 ST11 出土遺物 弥生土器・土師器 (S=1/4)

232・233は微隆起帯を持つ甕で、232は口縁部外面に1条と上胴部に3条の微隆起帯を、233は上胴部に4条の微隆起帯を貼付する。236の甕は、器壁が薄く胎土も異なる薄手式土器で、搬入土器である。

また、235は壺で口縁がラッパ状に大きく開き、口唇面に斜行する刻目を施文する。236は薄手土器の甕口縁、237～239は壺、240は甕でいずれも平底の底部である。底部には時期特定の難しい資料もあるが、時期が明らかな遺物の中で235のみが後期前半の土器であり、それ以外は前期末～中期初頭の遺物である。

242はサヌカイトの剥片で、末端辺に不規則な微細剥離が連続する。この連続する微細剥離は使用痕だと考えられる。

なお、出土遺物の状況、周溝と想定される溝状遺構の配置等を検討する中で、ST11の遺構の範囲だと考えた領域に2時期の竪穴住居が併存している可能性が生じてきた。弥生中期前半と後期前半の竪穴住居がこの位置で重なり合っている。残された遺構が、床面付近に限定されるなど遺構残存状況が良くないため、遺構の範囲の確定は困難である。報告段階では混乱を避けるため、章中ではST11として報告する。

簾状文の登場をⅡ様式新段階のメルクマールとして時期の判定を行ってきたが、この遺構に関しては、2条1単位のクシ描沈線と簾状文の共存する229は、Ⅱ様式古段階に位置付けたい。明らかに前段階（田村編年前期Ⅱ-b期）の資料だといえる230の多条化したヘラ描沈線を持つ壺と、若干の時期差があるかもしれないが、228・229のクシ描沈線を持つ土器をⅡ様式古段階だと捉えることで、これらの遺物の共時性を合理的に説明することができる。

2つの竪穴住居が重なっている可能性があり、遺構の所属時期として、弥生時代中期初頭と後期前半の2つの時期を想定している。

弥生時代中期初頭（中期Ⅰ-1、Ⅱ様式古段階）・（228～234、236～240を含む段階、関連遺構はP495・土器1、SD56、遺構内の土器集中地点は土器2・3）

弥生時代後期前半（後期Ⅱ期、Ⅴ-2期）・（235の壺を含む時期、遺構SD57、周辺での関連する土器集中地点は土器5・6）である。



第45図 ST11出土遺物 石器類 (S=2/3)

## 2 土坑 (SK)

全体で 87 基の土坑が検出されている。遺物が確認されたのは、そのうちの 58 基である。遺物の出土状況・遺構形態等により、明らかに古代以降だと特定できる遺構については、第 3 節古代以降の遺構と遺物の項で報告する。弥生時代であると確認できる遺構だけではなく、「土坑」については、遺物が出土せず時期の特定できない遺構もここで取り扱うこととする。古代以降の土坑も含まれている可能性がある。

遺物が出土した土坑の数

- A区 5基
- B区 13基
- C区 33基
- D区 7基

### SK2

調査区 (C区) N5 グリッドに位置する。検出高は 16.86 ~ 16.88 m を測る。平面形態は不整楕円形状を呈し、長径 1.53 ~ 1.67 m、短径 0.93 ~ 1.42 m、深さ 13 ~ 15cm を測る。断面形態は皿状を呈する。全体の形状から土坑による切り合いと考えられる。

出土遺物は弥生土器 77 点と石器 2 点である。弥生土器はいずれも小片で、図示可能遺物はなかったが、櫛描直線文と微隆起帯の残る個体が出土しており、弥生中期前半に属する遺構だと考えられる。243 と 244 の磨製石包丁が出土している。

### SK3

調査区 (C区) M5・6/N5・6 グリッドに位置する。検出高は 16.90 m を測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径 1.54 m、短径 0.86 m、深さ 15cm を測る。断面形態は皿状を呈している。床面から長径 33cm、短径 22cm、深さ 1 cm を測るピット状の落ち込みを検出しているが、本遺構との関係は不明である。全体の形状から切り合いの可能性も考えられる。

出土遺物は土器片 6 点で土師器と弥生土器が混在し、糸切り底の土師器片も出土している。245 の扁平砂岩円礫を使用した敲石が出土している。弥生時代の遺構だと考えられる。

### SK4

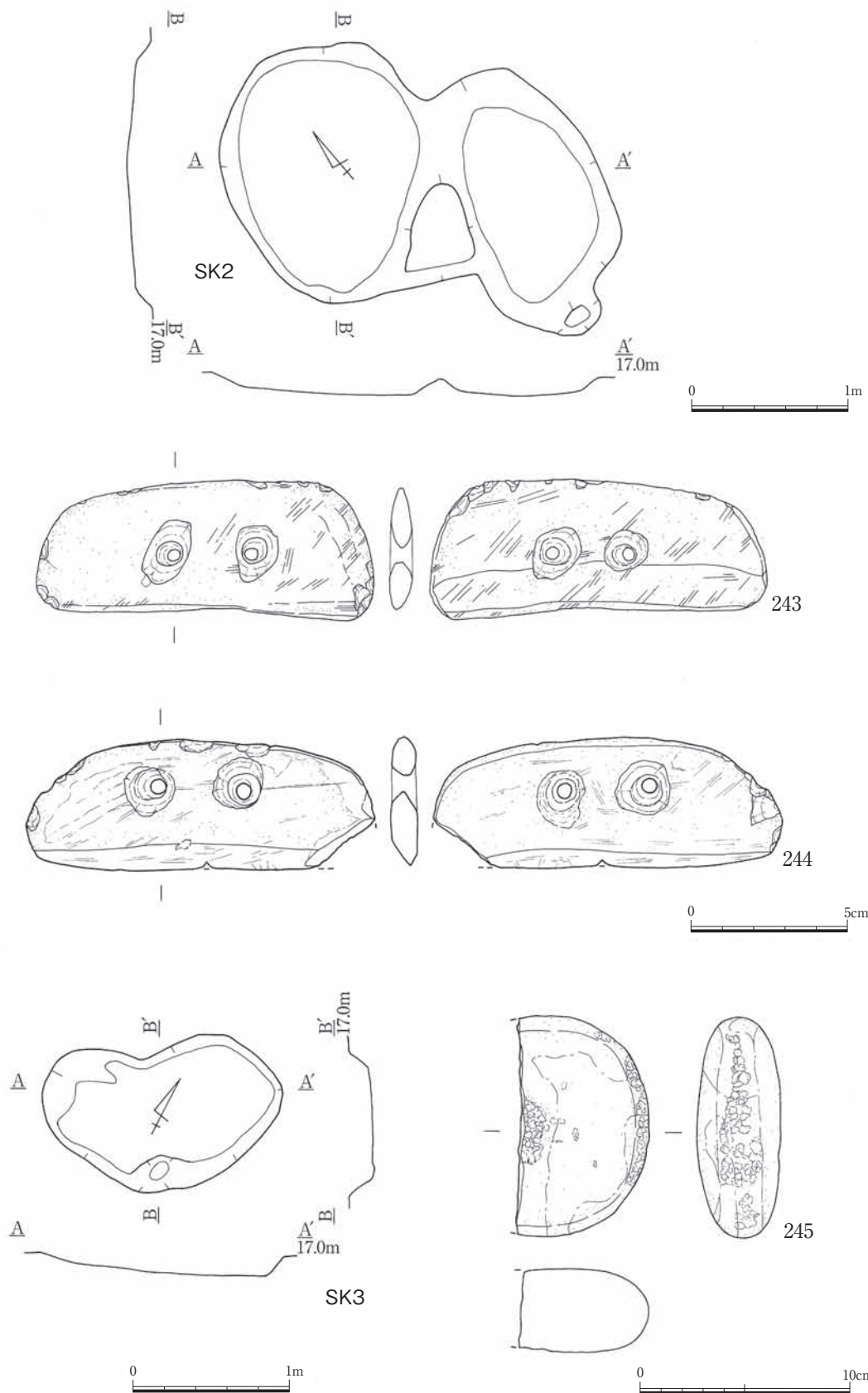
調査区 (C区) M5 グリッドに位置する。西側は調査区外のため未検出である。SX1 と切り合い関係にある。検出高は 16.89 m を測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径 1.85 m、短径 0.48 m (検出長)、深さ 6 cm を測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は黒褐色シルトである。

出土遺物は弥生土器 24 点で、図示し得た土器は 246・247 の 2 点である。246 は平底で外面全面にタタキ目を残す。遺構の時期は弥生後期前葉である。

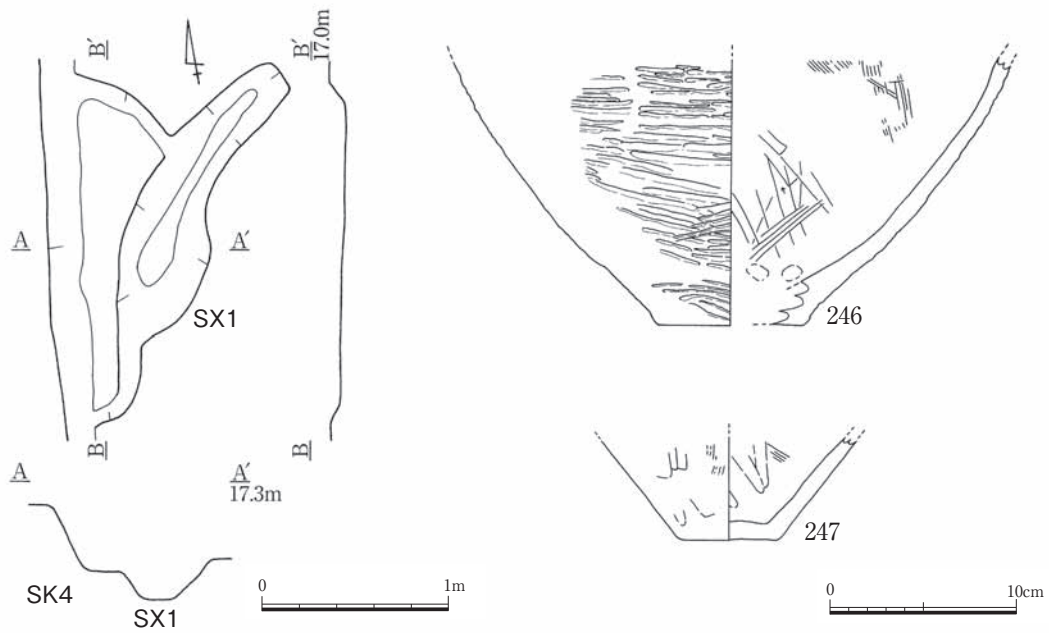
### SK5

調査区 (C区) M5 グリッドに位置する。検出高は 16.87 m を測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径 1.00 m、短径 0.62 ~ 0.48 m、深さ 5 cm を測る。断面形態は皿状を呈する。全体の形状から切り合いの可能性も考えられる。

出土遺物は細片のみで時期の特定はできない。



第46図 SK2・3平面・エレベーション図 (S=1/40) 出土遺物 石器類 (S=1/2・1/3)



第 47 図 SK4・SX1 平面・エレベーション図 (S=1/40) SK4 出土遺物 弥生土器 (S=1/4)

SK6

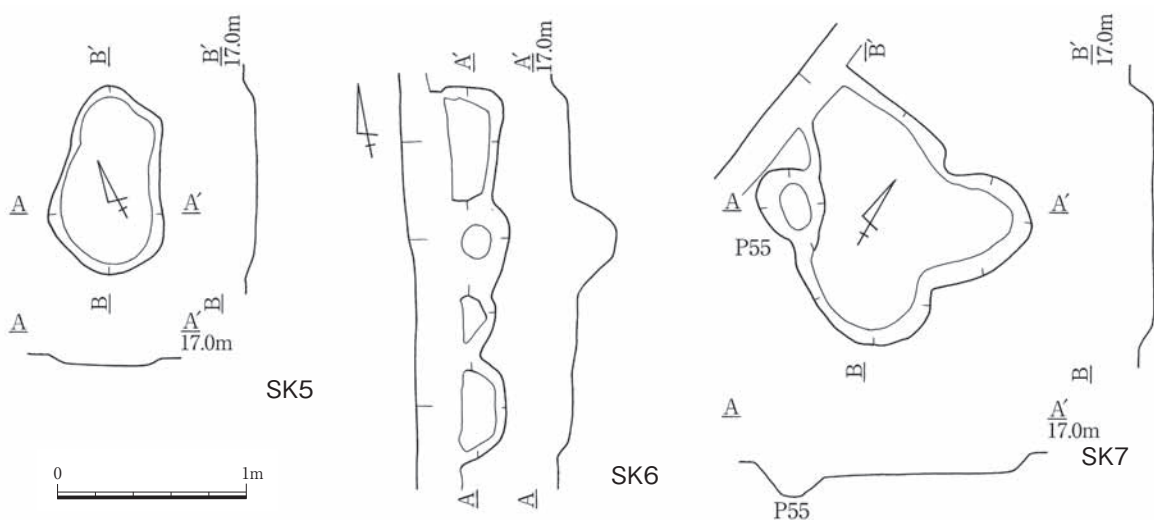
調査区 (C区) M5・6 グリッドに位置する。西側は調査区外のため未検出である。P40 と切り合い関係にある。検出高は 16.90 m を測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径 2.00 m、短径 0.32 m (検出長)、深さ 10cm を測る。断面形態は皿状を呈し、小規模な段部を有する。埋土は黒褐色シルトである。

弥生土器が 9 点出土、無文で内面へラ削りが認められる個体もある。弥生後期前葉の遺構である。

SK7

調査区 (C区) M3 グリッドに位置する。西側は調査区外のため未検出である。P55 と切り合い関係にある。検出高は 16.78 m を測る。平面形態は不整形形状を呈し、長径 1.50 m (検出長)、短径 1.28 m、深さ 9 cm を測る。断面形態は皿状を呈する。全体の形状から切り合いの可能性も考えられる。

弥生土器が 20 点、土師器が 5 点出土、糸切り底の個体も混じる。遺構の時期は特定できない。



第 48 図 SK5～7 平面・エレベーション図 (S=1/40)

SK8

調査区(C区)M3/N3グリッドに位置する。P56と切り合い関係にある。検出高は16.78mを測る。平面形態は円形状を呈し、長径1.40m、短径1.28m、深さ16cmを測る。断面形態は台形状を呈する。

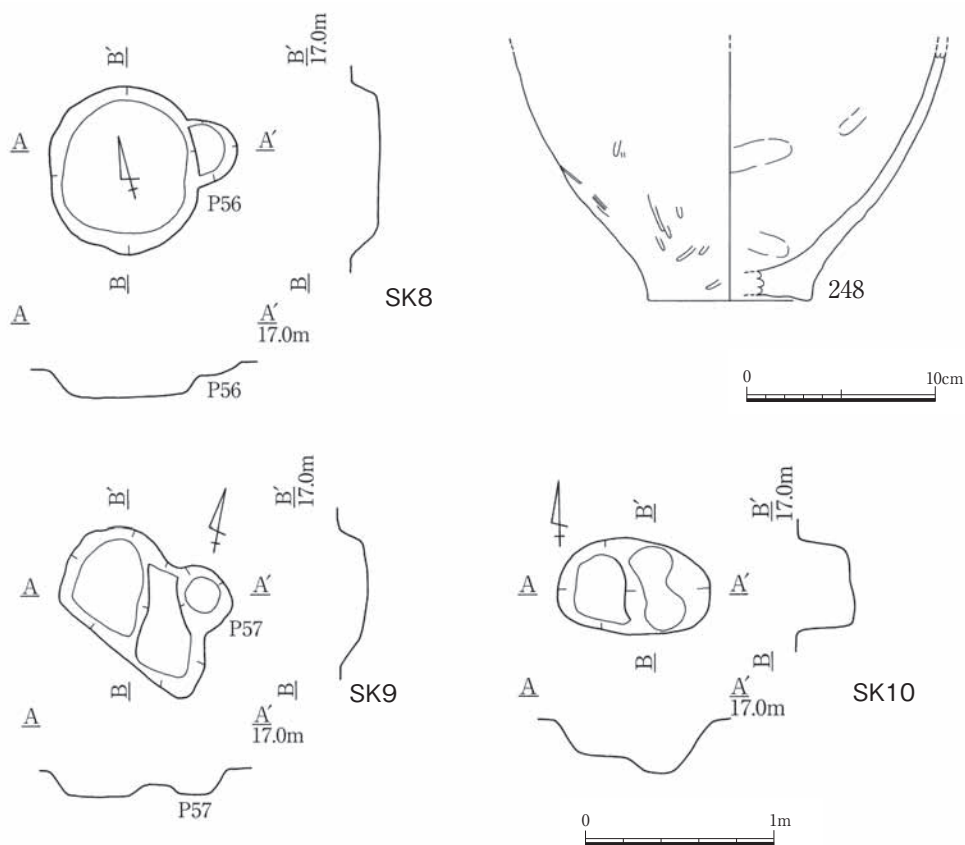
弥生土器が2点出土している。図示できた遺物は248の壺底部である。平底で無文、ヘラミガキで仕上げる点とチャート砂粒・小礫を多量に含む胎土の特徴から、遺構の所属時期は弥生時代後期前半である。

SK9

調査区(C区)N3グリッドに位置する。P57と切り合い関係にある。検出高は16.76mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径1.41m、短径1.06m、深さ14cmを測る。断面形態は台形状を呈し、東側に段部を有する。検出状態からSD3と切り合いの可能性も考えられる。出土遺物はない。

SK10

調査区(C区)N3グリッドに位置する。検出高は16.87mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径1.32m、短径1.00m、深さ30cmを測る。断面形態は台形状を呈し、西側に段部を有する。出土遺物はない。



第49図 SK8~10平面・エレベーション図 (S=1/40)

SK8出土遺物 弥生土器 (S=1/4)



SK11

調査区(D区)O2グリッドに位置する。SK12(SB1)に切られている。検出高は16.81mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径1.00m、短径0.90m(検出長)、深さ21cmを測る。断面形態は台形状を呈する。

249～251の弥生土器が出土している。249は器高43.8cmと大型の壺形土器で、卵型の胴部から頸部は直立、口縁はラッパ状に開く。口唇は凹状で上下に刻目を持つ。上胴部の文様は6条1単位のクシ描原体による簾状文と3段の波状文である。胴部外面中位以下と口縁部・頸部内面はヘラミガキにより丁寧に仕上げられている。250は器高23.1cmの甕形土器である。最大径は上胴部にある。頸胴界にはクサビ形の列点文を巡らせ、屈曲した後頸部は直立、口縁はラッパ状に開く。口唇は、ヨコナデにより面をなし、貼付口縁である。251は貼付した粘土帯に刻目を施し全周に巡らせる。器壁の厚さ5～6mmで、胎土は微細粒砂を大量に含む搬入品で、県西部のいわゆる薄手土器である。249・250はほぼ完形であり、251は口縁部のみが確認されている。

遺構の時期は、弥生時代中期前半(中期I-2期、II様式新段階)である。

SK15

調査区(D区)O2グリッドに位置する。P77(SB2)を切る。検出高は16.80mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径0.79m(検出長)、短径0.95m、深さ12cmを測る。断面形態は台形状を呈する。埋土は灰黒色シルトである。出土遺物はなく、時期の特定はできない。

SK16

調査区(D区)N1・2/O1・2グリッドに位置する。北及び西側は調査区外のため未検出である。検出高は16.84mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径1.13m(検出長)、短径0.60m(検出長)、深さ8cmを測る。断面形態は皿状を呈する。床面からP68・69を検出しているが、本遺構との関係は不明である。

弥生土器3点が出土しているが、詳細な時期は特定できない。

SK17

調査区(C区)M2・3/N2・3グリッドに位置する。P84～87と切り合い関係にある。検出高は16.83mを測る。平面形態は不整形形状を呈し、長径1.85m、短径0.75m、深さ18cmを測る。断面形態は台形状を呈する。出土遺物はなく、時期の特定はできない。

SK18(D・古代の遺構)

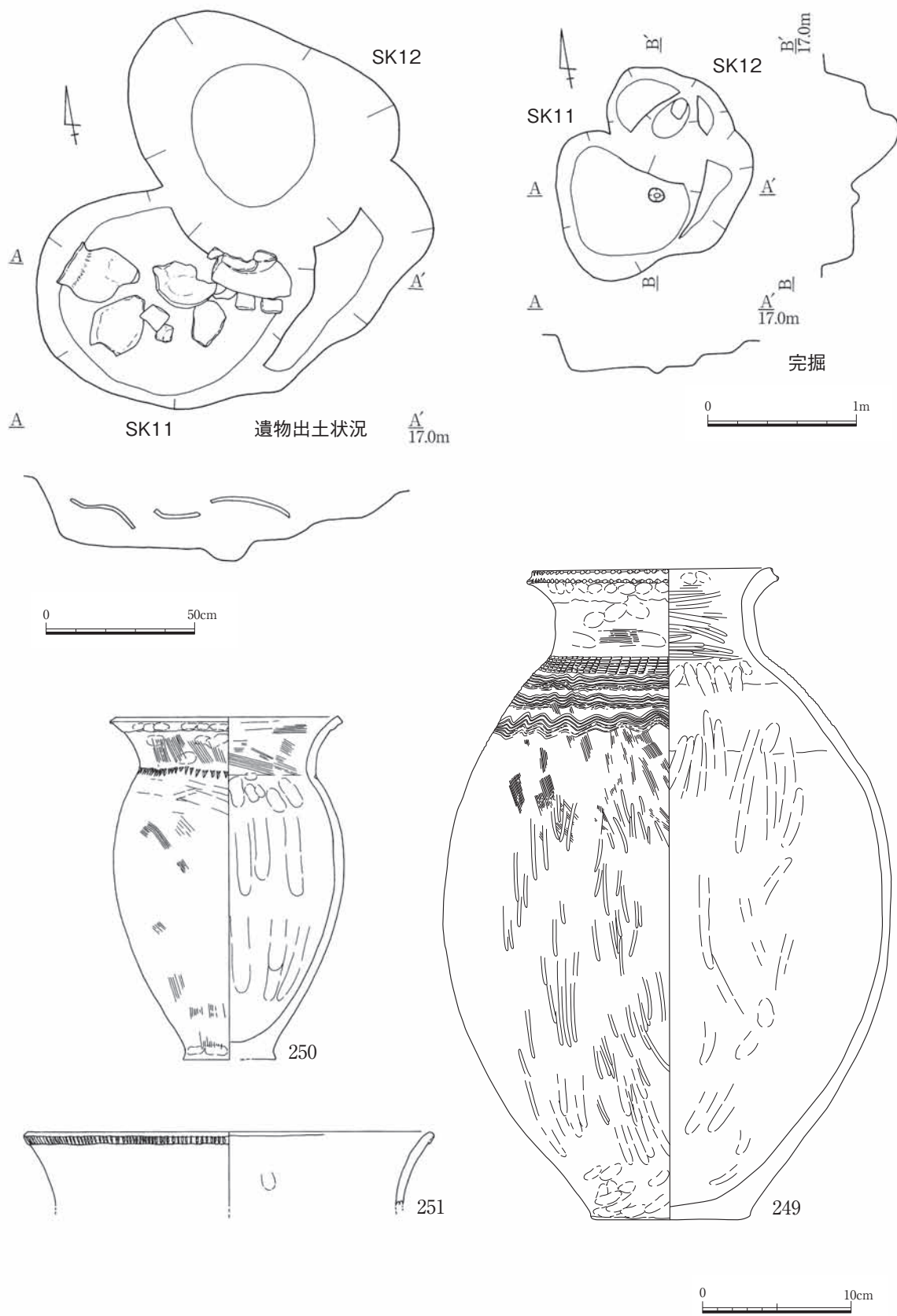
調査区(D区)T2グリッドに位置する。溝状遺構と切り合い関係にある。検出高は16.70mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径0.92m、短径0.72m、深さ7cmを測る。断面形態は皿状を呈する。

須恵器3点が出土している。坏蓋、坏身口縁部の小片で、古代の資料ではあるが、詳細な時期は特定できない。

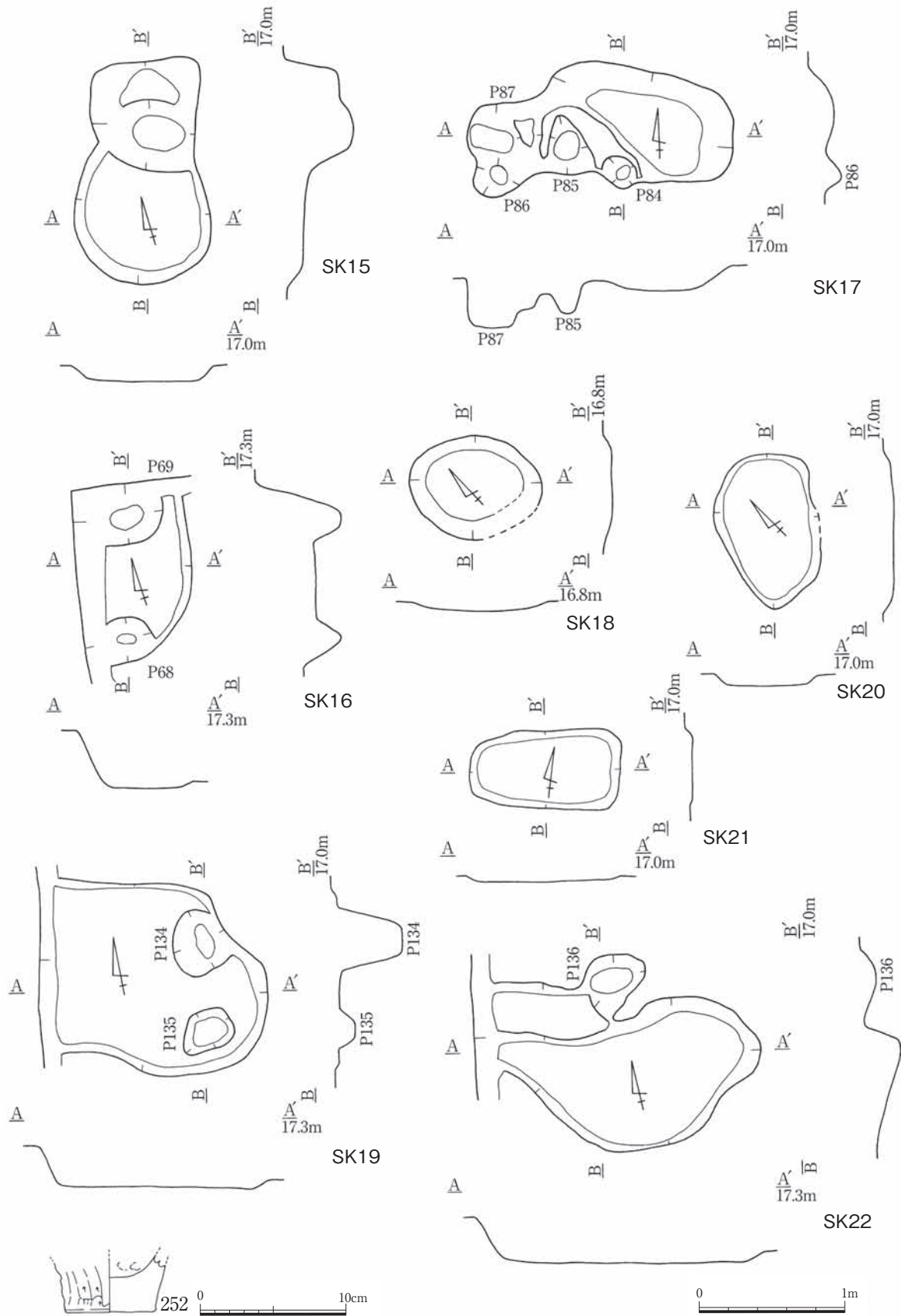
SK19

調査区(C区)M6・7/N6・7グリッドに位置する。西側は調査区外のため未検出である。検出高は16.88mを測る。平面形態は不整形形状を呈し、長径1.45m(検出長)、短径1.33m、深さ3cmを測る。断面形態は皿状を呈する。床面からP134・135を検出しているが、本遺構との関係は不明である。

弥生土器24点が出土している。ヘラ描沈線のある小片、無文の素口縁、貼付口縁の小片が確認



第50図 SK11 平面・エレベーション図 遺物出土状況 (S=1/20) 完掘 (S=1/40)  
 及び出土遺物 弥生土器 (S=1/4)



第51図 SK15～22平面・エレベーション図 (S=1/40) SK19出土遺物 弥生土器 (S=1/4)

されている。252は甕底部で、外縁部と底面に砂粒の移動が認められる。前期中期の資料が混在、遺構形成時期は弥生時代だが、詳細な時期特定はできない。

#### SK20

調査区（C区）N6グリッドに位置する。小規模な溝状遺構と切り合い関係にある。検出高は16.87 mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径1.07 m、短径0.70 m、深さ6 cmを測る。断面形態は皿状を呈する。出土遺物はなく、時期の特定はできない。

#### SK21

調査区（C区）N6グリッドに位置する。検出高は16.85 mを測る。平面形態は隅丸方形形状を呈し、長径1.04 m、短径0.54 m、深さ3 cmを測る。断面形態は皿状を呈する。出土遺物はなく、時期の特定はできない。

#### SK22

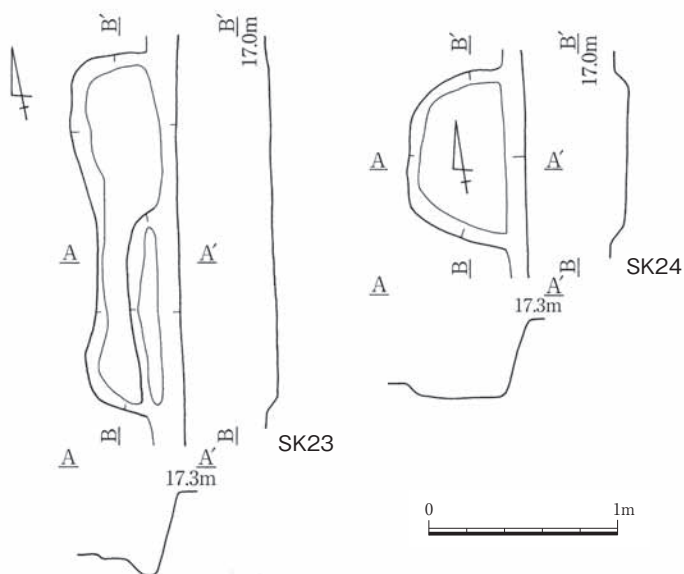
調査区（C区）M7/N7グリッドに位置する。西側は調査区外のため未検出である。北側は浅い溝状遺構と切り合い関係にある。検出高は16.86 mを測る。平面形態は不整形形状を呈し、長径1.72 m（検出長）、短径1.00 m、深さ8～27 cmを測る。断面形態は北側が落ち込む不整形形状を呈する。

弥生土器9点が出土している。詳細な時期は特定できない。

#### SK23

調査区（C区）N6・7/O6・7グリッドに位置する。東側は調査区外のため未検出である。検出高は16.84 mを測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径1.98 m、短径0.47 m（検出長）、深さ2 cmを測る。断面形態は皿状を呈する。床面から長径1.13 m、短径0.15 m（検出長）、深さ7 cmを測る土坑状（東側未検出）の落ち込みを検出しているが、本遺構との関係は不明である。

出土遺物はなく、時期の特定はできない。



第52図 SK23・24平面・エレベーション図（S=1/40）

#### SK24

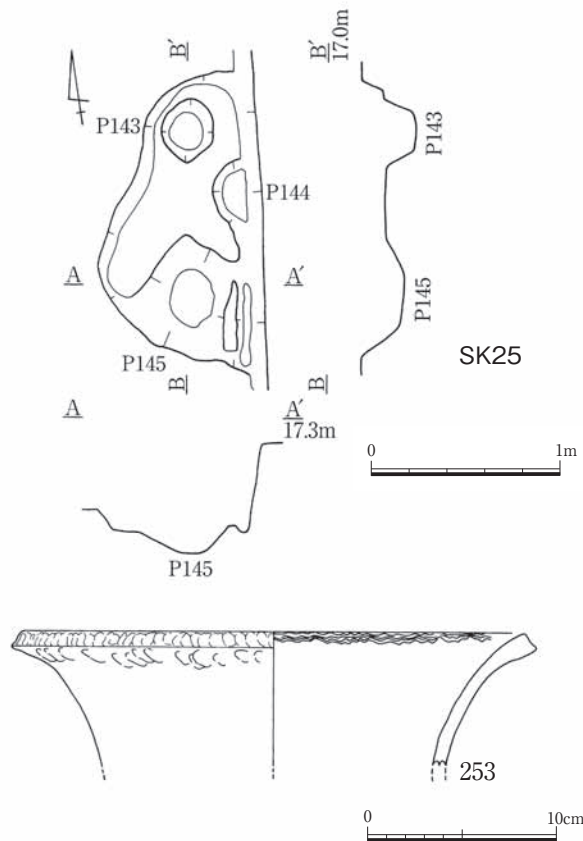
調査区（C区）N8/O8グリッドに位置する。東側は調査区外のため未検出である。検出高は16.82 mを測る。平面形態は方形形状を呈し、長径0.98 m、短径0.54 m（検出長）、深さ9 cmを測る。断面形態は皿状を呈する。

弥生土器2点が出土している。うち1点にクシ描沈線（波状文+直線文）が確認されている。弥生時代中期前半に属する可能性があるが、出土点数が僅少であり、断定はできない。

SK25

調査区（C区）N9/O8・9グリッドに位置する。東側は調査区外のため未検出である。検出高は16.83 mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径1.60 m、短径0.88 m（検出長）、深さ12cmを測る。断面形態は台形状を呈する。床面からP143～145及び長径0.60 m、短径0.08 m（検出長）、深さ5 cmを測る溝状（東側未検出）の落ち込みを検出しているが、本遺構との関係は不明である。

口縁部内面に4条のクシ描波状文を持つ壺（253）が出土している。遺構の所属時期は弥生時代中期である。



第53図 SK25平面・エレベーション図（S=1/40）  
出土遺物 弥生土器（S=1/4）

SK26

調査区（C区）N9/O8・9グリッドに位置する。東側は調査区外のため未検出である。検出高は16.83 mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径1.60 m、短径0.88 m（検出長）、深さ12cmを測る。断面形態は台形状を呈する。床面からP143～145及び長径0.60 m、短径0.08 m（検出長）、深さ5 cmを測る溝状（東側未検出）の落ち込みを検出しているが、本遺構との関係は不明である。

弥生土器1点が出土しているが、詳細な時期は特定できない。

SK27

調査区（C区）N9・10/O9・10グリッドに位置する。SK26と切り合い関係にある。検出高は16.77 mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径1.13 m、短径0.74 m、深さ2 cmを測る。断面形態は皿状を呈する。出土遺物はなく、時期の特定はできない。

SK28

調査区（C区）O10グリッドに位置する。東側は調査区外のため未検出である。検出高は16.80 mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径0.75 m（検出長）、短径0.40 m、深さ5 cmを測る。断面形態は皿状を呈する。床面から小規模なピットを検出しているが、本遺構との関係は不明である。弥生土器1点が出土しているが、詳細な時期は特定できない。

SK29

調査区（C区）N10グリッドに位置する。検出高は16.76 mを測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径0.77 m、短径0.59 m、深さ5 cmを測る。断面形態は皿状を呈する。

弥生土器12点が出土しているが、詳細な時期は特定できない。

SK30

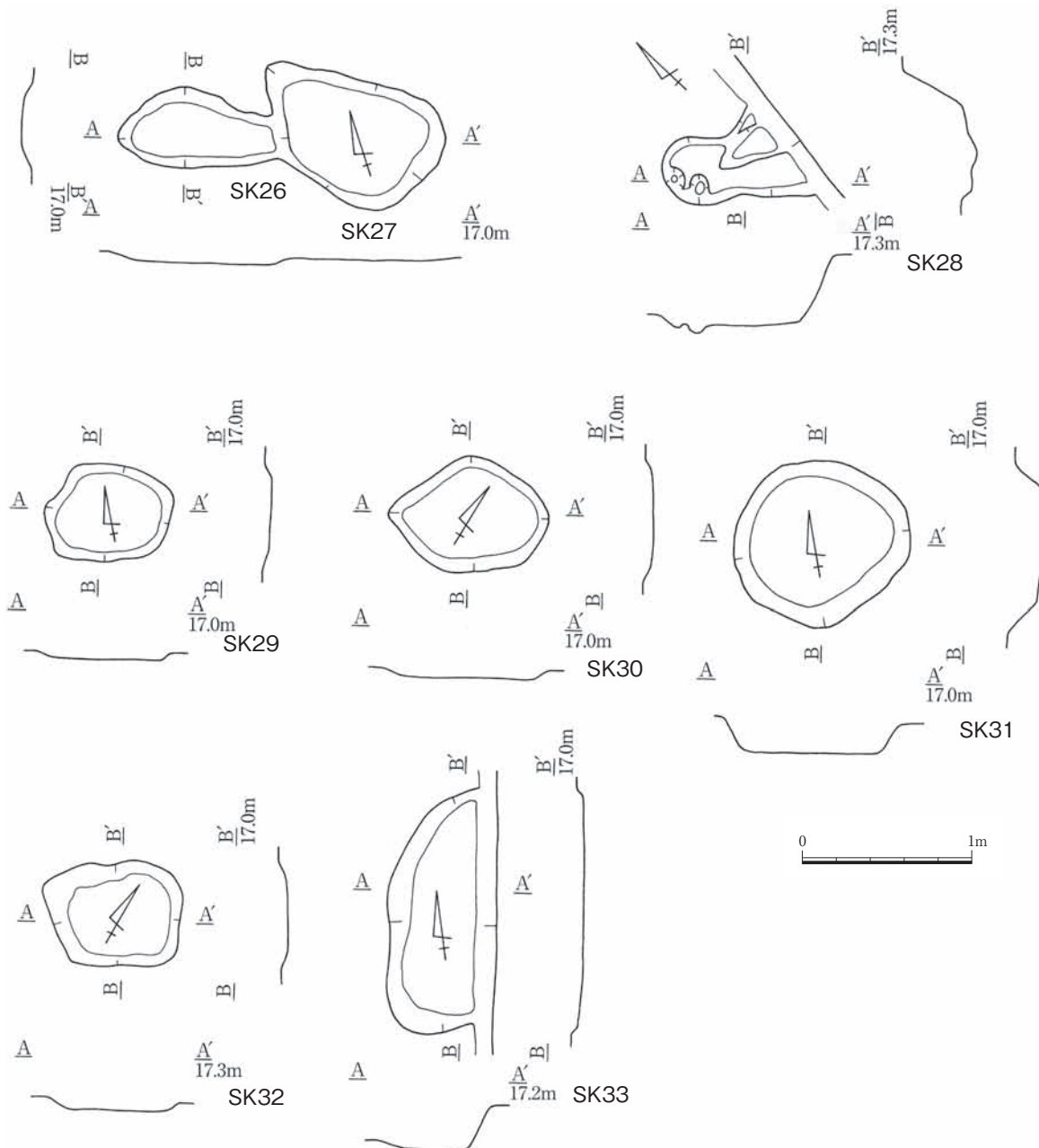
調査区（C区）N11・12グリッドに位置する。検出高は16.76 mを測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径0.97 m、短径0.70 m、深さ5 cmを測る。断面形態は皿状を呈する。

弥生土器8点が出土しているが、詳細な時期は特定できない。

SK31

調査区（C区）N11・12/O11・12グリッドに位置する。検出高は16.76 mを測る。平面形態は歪な円形状を呈し、長径1.05 m、短径1.00 m、深さ21 cmを測る。断面形態は台形状を呈する。

弥生土器6点が出土している。うち1点は口縁部であり、外面にミミズ腫れ状の微隆起帯の貼付が確認される。弥生時代中期前半の資料である。



第54図 SK26～33平面・エレベーション図 (S=1/40)

SK33

調査区（C区）O13グリッドに位置する。東側は調査区外のため未検出である。検出高は16.75 mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径1.50 m、短径0.53 m（検出長）、深さ5 cmを測る。断面形態は皿状を呈する。

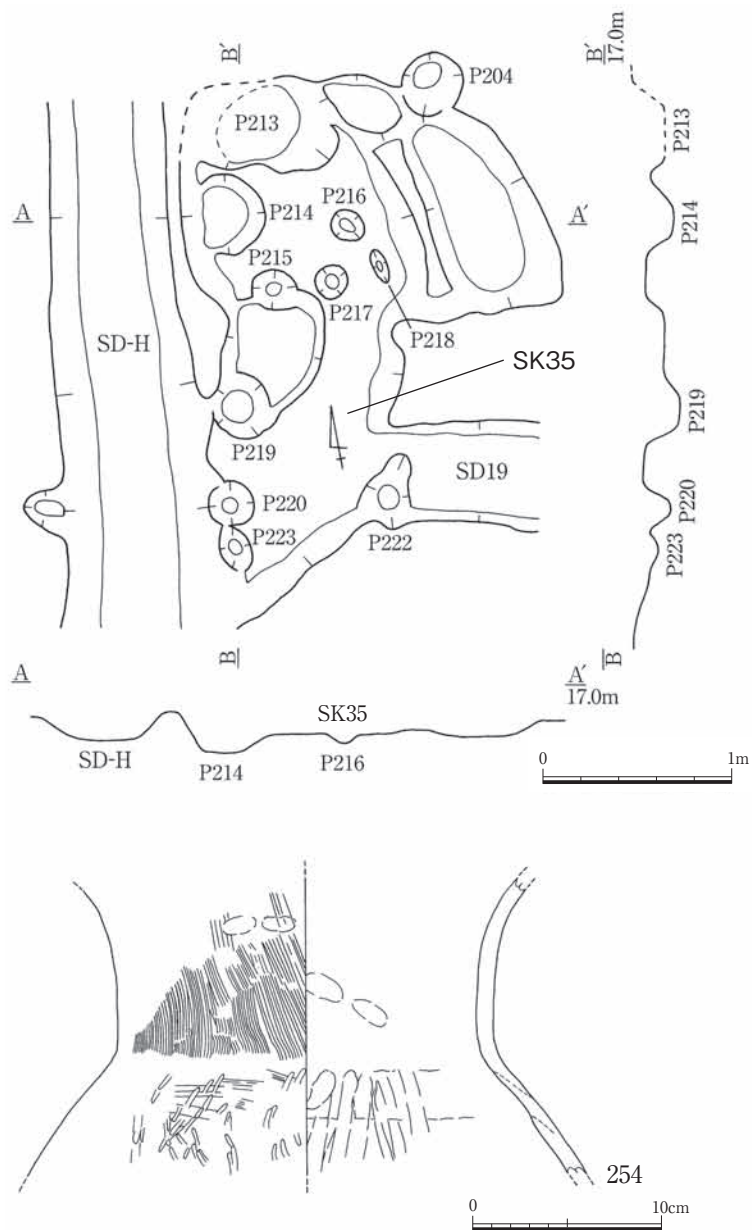
弥生土器5点が出土している。口縁部外面を拡張し刻目を施す小片、ヘラ描沈線による直線文と半裁竹管による双線による山形文を組み合わせた破片、ヘラミガキの残る平底の底部が出土している。弥生前期末～中期初頭の遺構である。

SK35

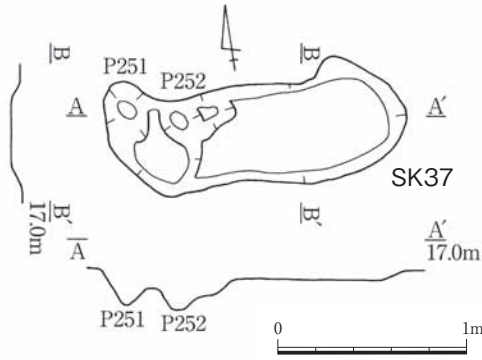
調査区（C区）N14グリッドに位置する。SD-H・19と切り合い関係にある。検出高は16.74 mを測る。平面形態は不整形形状を呈し、長径2.88 m（検出長）、短径1.13 m（検出長）、深さ7 cmを測る。断面形態は皿状を呈する。床面からP213～220・222・223及び長径0.65 m、短径0.53 m、深さ7 cmを測る土坑状の落ち込みを検出しているが、本遺構との関係は不明である。

弥生土器60点が出土している。口縁部4点、底部2点を含んでいる。図示できた資料が254である。口縁部はいずれも小片で、口唇に刻目を持ち外面に微隆起帯を貼付するもの、逆L字状の形態のもの、口唇を丸く仕上げる素口縁がある。底部には、細粒砂が多量に含まれる高知県西半の薄手式土器と考えられる資料もある。図示した土器（254）は、なで肩の上胴部から頸部が直立した後開く広口の形態を持つ壺だが、口縁部形状は不明である。

前期末～中期初頭の資料と後期前半の資料が混在するが、254の出土をもとに、後期前半の遺構だと捉えておきたい。



第55図 SK35及び周辺遺構平面・エレベーション図 (S=1/40)  
出土遺物 弥生土器 (S=1/4)



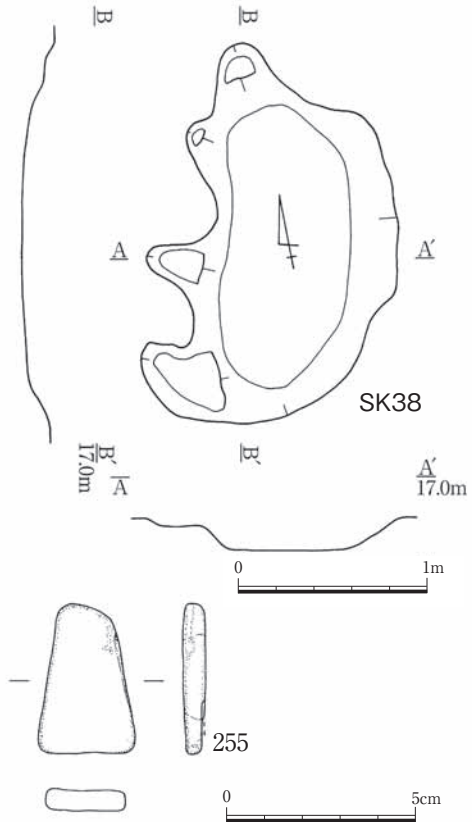
第56図 SK37平面・エレベーション図 (S=1/40)

SK37

調査区 (C区) N15/O15 グリッドに位置する。P251・252 と切り合い関係にある。検出高は 16.75 m を測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径 1.56 m、短径 0.52 m、深さ 4 cm を測る。断面形態は皿状を呈する。弥生土器 2 点が出土している。弥生前期末～中期前半の可能性のある微隆起帯を持つ破片がある。

SK38

調査区 (C区) N15/O15 グリッドに位置する。P251・252 と切り合い関係にある。検出高は 16.75 m を測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径 1.56 m、短径 0.52 m、深さ 4 cm を測る。断面形態は皿状を呈する。弥生土器 16 点と石器類 1 点が出土している。平底の底部が 1 点確認されている。詳細な時期を特定することはできない。図示した遺物は砂岩の平面形バチ状の扁平礫(255)で、何らかの工具として利用された可能性も考えられる。



第57図 SK38平面・エレベーション図 (S=1/40)

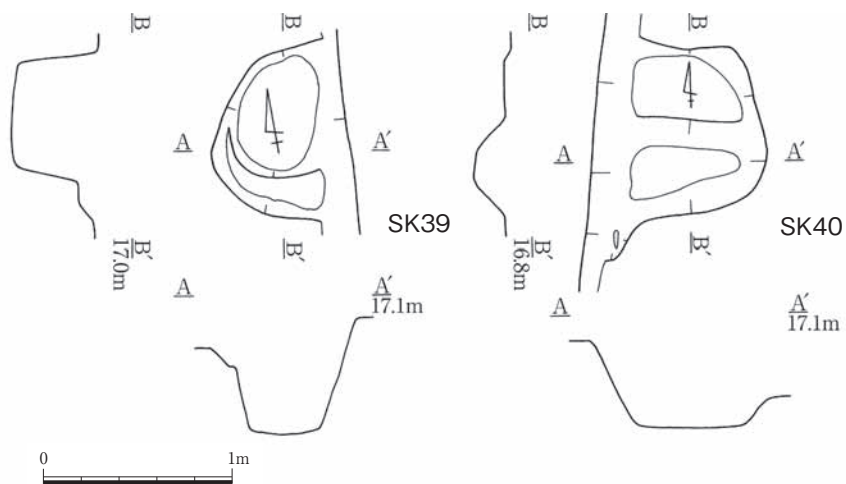
出土遺物 石器類 (S=1/2)

SK39

調査区 (C区) O15 グリッドに位置する。東側は調査区外のため未検出である。検出高は 16.72 m を測る。平面形態は歪な円形状を呈し、長径 0.98 m、短径 0.57 m、深さ 46cm を測る。断面形態は台形状を呈し、南側に段部を有する。弥生土器 6 点が出土しているが、詳細な時期は特定できない。

SK40

調査区 (C区) N11 グリッドに位置する。



第58図 SK39・40平面・エレベーション図 (S=1/40)



西側は調査区外のため未検出である。検出高は 16.67 m を測る。平面形態は歪な方形状を呈し、長径 0.88 m、短径 0.70 m（検出長）、深さ 17cm を測る。断面形態は台形状を呈し、北側に段部を有する。埋土は黒褐色シルトである。

弥生土器 14 点と石器類 1 点（砂岩礫）が出土している。詳細な時期は特定できない。

SK41

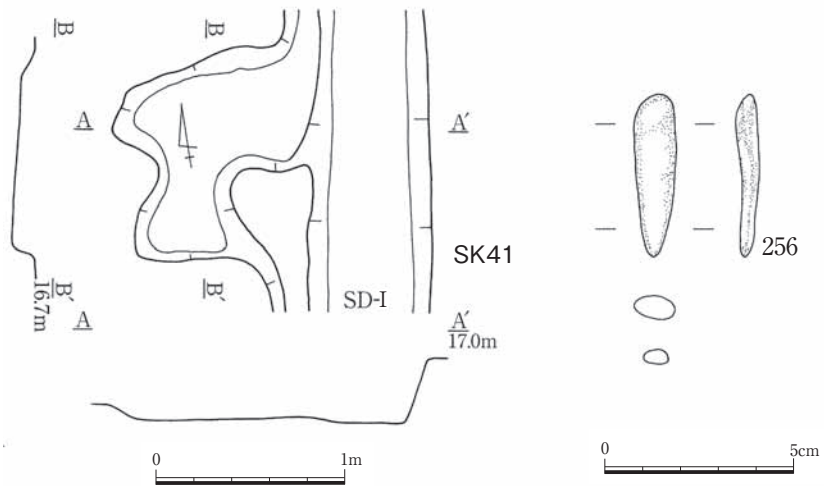
調査区（C区）O17 グリッドに位置する。SD-I と切り合い関係にある。検出高は 16.60 m を測る。平面形態は不整形状を呈し、長径 1.12 m、短径 1.03 m（検出長）、深さ 10cm を測る。断面形態は皿状を呈する。

弥生土器 90 点が出土している。図示した 256 は砂岩の小型棒状礫で、加工痕はないが何らかの

工具として利用された可能性がある。弥生時代の遺構だと考えられるものの、詳細な時期は特定できない。須恵器・坏蓋（宝珠あり）が 1 点混入している。

SK43

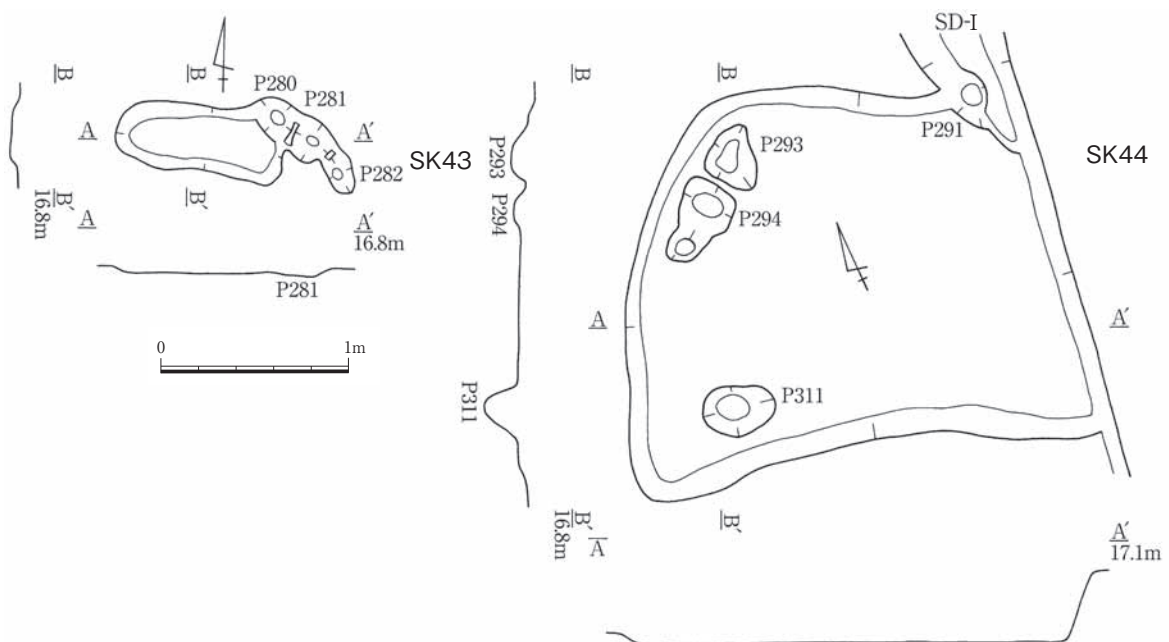
調査区（C区）N18/O18 グリッドに位置する。P280 と切り合い関係にある。検出高は 16.61 m を測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径 0.94 m、短径 0.54 m、深さ 4 cm を測る。断面形態は皿状を呈する。出土遺物はない。



第 59 図 SK41 平面・エレベーション図 (S=1/40)  
出土遺物 石器類 (S=1/2)

SK43

調査区（C区）N18/O18 グリッドに位置する。P280 と切り合い関係にある。検出高は 16.61 m を測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径 0.94 m、短径 0.54 m、深さ 4 cm を測る。断面形態は皿状を呈する。出土遺物はない。



第 60 図 SK43・44 及び周辺遺構平面・エレベーション図 (S=1/40)

#### SK44

調査区（C区）N19/O19グリッドに位置する。東側は調査区外のため未検出である。SD-I/P291と切り合い関係にある。検出高は16.58 mを測る。平面形態は歪な長方形を呈し、長径2.42 m（検出長）、短径2.12 m、深さ4 cmを測る。断面形態は皿状を呈する。床面からP293・294・311を検出しているが、本遺構との関係は不明である。

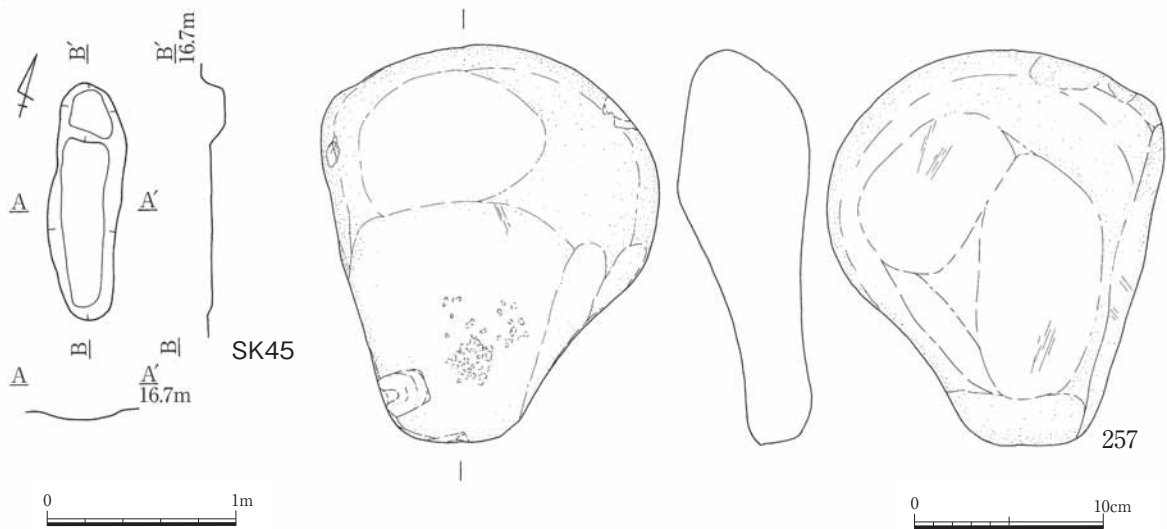
弥生土器34点が出土している。口縁部が3点出土、凹状の形態を持つ壺口縁、素口縁の鉢など、弥生時代後期前半の遺構だと考えられる。

#### SK45

調査区（C区）N19/O19グリッドに位置する。検出高は16.55 mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径1.26 m、短径0.38 m、深さ4 cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は黒褐色シルトである。北側に長径32 cm、短径32 cm、深さ11 cmを測るピット状の落ち込みを検出しているが、本遺構との関係は不明である。

弥生土器36点と砂岩被熱赤片礫、砥石が出土している。砥石（257）は、表裏面3ヶ所ずつ、側面に1ヶ所ずつ、合計8ヶ所に凹面を形成、砥石として使用されている。

出土した土器の特徴により弥生後期前半の遺構だと考えられる。



第61図 SK45平面・エレベーション図（S=1/40）出土遺物 石器類（S=1/4）

#### SK46

調査区（C区）O19グリッドに位置する。ピット状遺構と切り合い関係にある。検出高は16.57 mを測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径0.58 m（検出長）、短径0.63 m、深さ7 cmを測る。断面形態は台形状を呈する。

弥生土器10点と炭2点が出土、口縁部と底部の小片が1点ずつ出土している。口縁は貼付口縁で、弥生中期の資料である。

SK47

調査区（C区）O22グリッドに位置する。東側は調査区外のため未検出である。検出高は16.50 mを測る。平面形態は長楕円形状を呈し、長径2.06 m、短径0.28 m（検出長）、深さ6 cmを測る。断面形態は台形状を呈する。出土遺物はなく、時期の特定はできない。

SK48

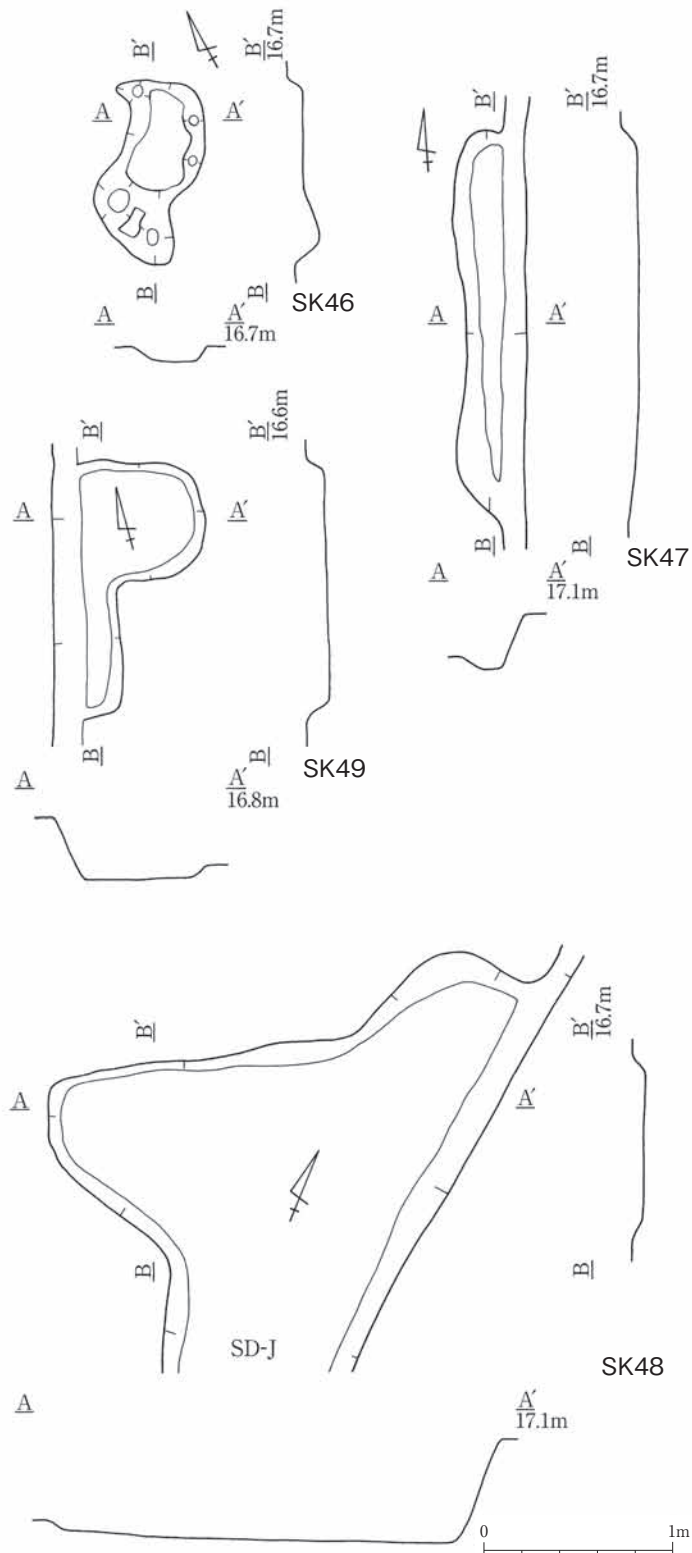
調査区（C区）O22グリッドに位置する。東側は調査区外のため未検出である。SD-Jと切り合い関係にある。検出高は16.49 mを測る。平面形態は不整形形状を呈し、長径2.19 m（検出長）、短径0.93 m、深さ6 cmを測る。断面形態は皿状を呈する。

弥生土器86点と炭2点が出土している。うち、口縁部小片が6点と底部の小片が4点あり、出土した口縁部は弥生時代中期前半の特徴を持っている。

SK49

調査区（B区）O35グリッドに位置する。西側は調査区外のため未検出である。検出高は16.41 mを測る。平面形態は不整形形状を呈し、長径1.35 m、短径0.65～0.18 m（検出長）、深さ11cmを測る。断面形態は台形状を呈する。全体の形状から土坑による切り合いと考えられる。

弥生土器7点が出土しているが、詳細な時期は特定できない。



第62図 SK46～49平面・エレベーション図 (S=1/40)

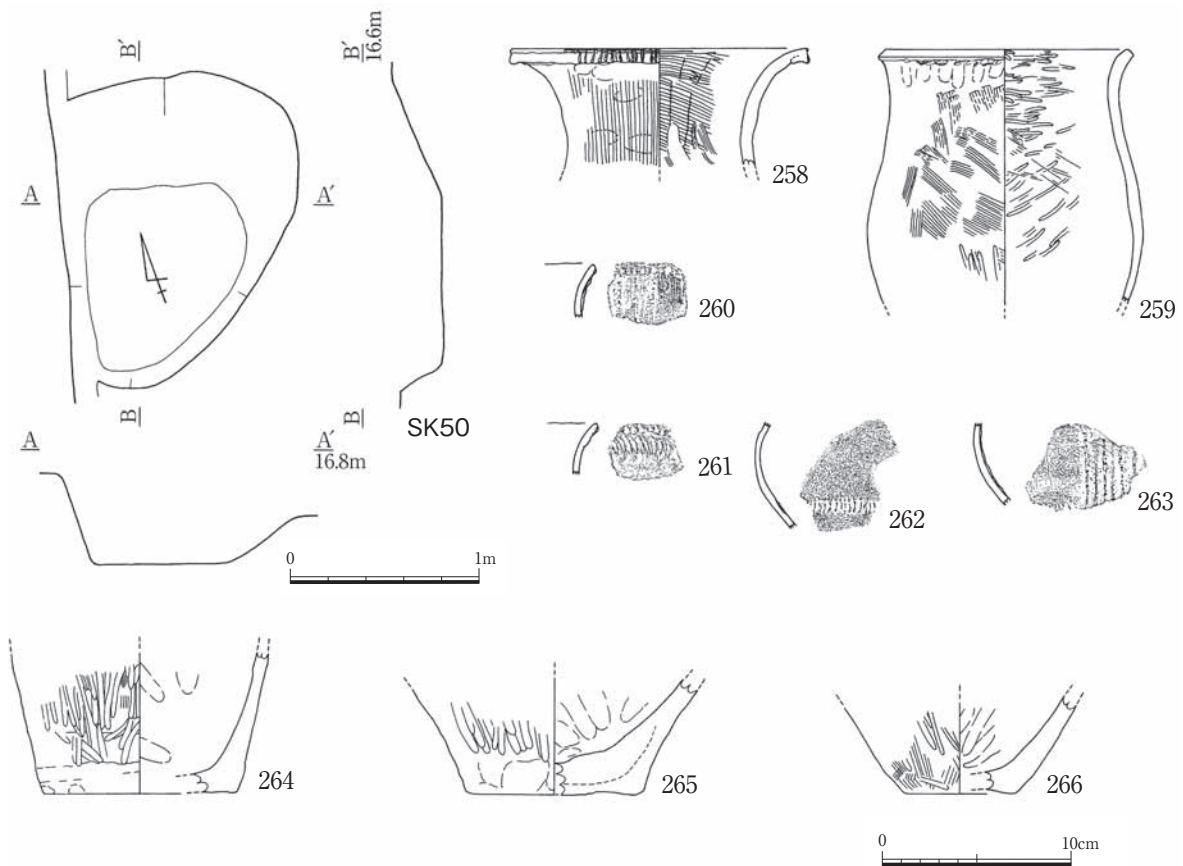
SK50

調査区（B区）O34・35/P34・35 グリッドに位置する。西側は調査区外のため未検出である。検出高は 16.42 m を測る。平面形態は不整形状を呈し、長径 1.73 m、短径 1.12 m（検出長）、深さ 24 cm を測る。断面形態は台形状を呈する。

弥生土器 57 点が出土している。258 は口縁がラッパ状に大きく開く広口壺で、口唇全面に刻目を施す。貼付口縁。259 は遺構底面から出土している。無文で内外面にヘラミガキが残る。土佐型甕である。260～263 は文様を持つ口縁部から頸部・上胴部にかけての小片で、同一個体だと考えられる。薄手式土器で、ミミズ腫れ状の微隆起帯や爪形の圧痕などで加飾されている。

また 264・265 は壺・底部だが、外面をヘラミガキで仕上げ、底面付近の外周をヘラナデにより、面取成形するという特徴がある。この時期の壺底部の中には、同様の特徴をもつものが一定量存在するようであり、他時期の資料と区別する基準の一つになる可能性がある。

遺構の時期は、弥生時代中期初頭～前半（中期Ⅰ-Ⅰ・Ⅱ期、Ⅱ様式）である。



第 63 図 SK50 平面・エレベーション図 (S=1/40) 出土遺物 弥生土器 (S=1/4)

## SK51

調査区（B区）P35グリッドに位置する。東側は調査区外のため未検出である。SK52と切り合い関係にある。検出高は16.37mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径1.76m（検出長）、短径0.42m（検出長）、深さ20cmを測る。断面形態は台形状を呈する。出土遺物はない。

## SK52

調査区（B区）P34グリッドに位置する。東側は調査区外のため未検出である。SK51と切り合い関係にある。検出高は16.35mを測る。平面形態は不整形形状を呈し、長径1.70m（検出長）、短径0.65m、深さ11～18cmを測る。断面形態は台形状を呈する。

弥生土器2点が出土しているが、詳細な時期の特定はできない。

## SK53

調査区（B区）P34グリッドに位置する。ピット状遺構と切り合い関係にある。検出高は16.41mを測る。平面形態は不整形形状を呈し、長径0.72m、短径0.36m、深さ11cmを測る。断面形態は台形状を呈する。出土遺物はない。

## SK54

調査区（B区）P33・34グリッドに位置する。検出高は16.25mを測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径0.97m、短径0.57m、深さ7cmを測る。断面形態は皿状を呈する。出土遺物はない。

## SK55

調査区（B区）P34グリッドに位置する。検出高は16.43mを測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径0.82m、短径0.56m、深さ16cmを測る。断面形態は台形状を呈し、東側に段部を有するが、全体の形状から切り合いの可能性も考えられる。出土遺物はない。

## SK56

調査区（B区）P33グリッドに位置する。検出高は16.45mを測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径0.75m、短径0.35m、深さ19cmを測る。断面形態は台形状を呈し、段部を有する。出土遺物はない。

## SK57

調査区（B区）P33グリッドに位置する。検出高は16.47mを測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径0.99m、短径0.75m、深さ19cmを測る。断面形態は台形状を呈する。出土遺物はない。

## SK58

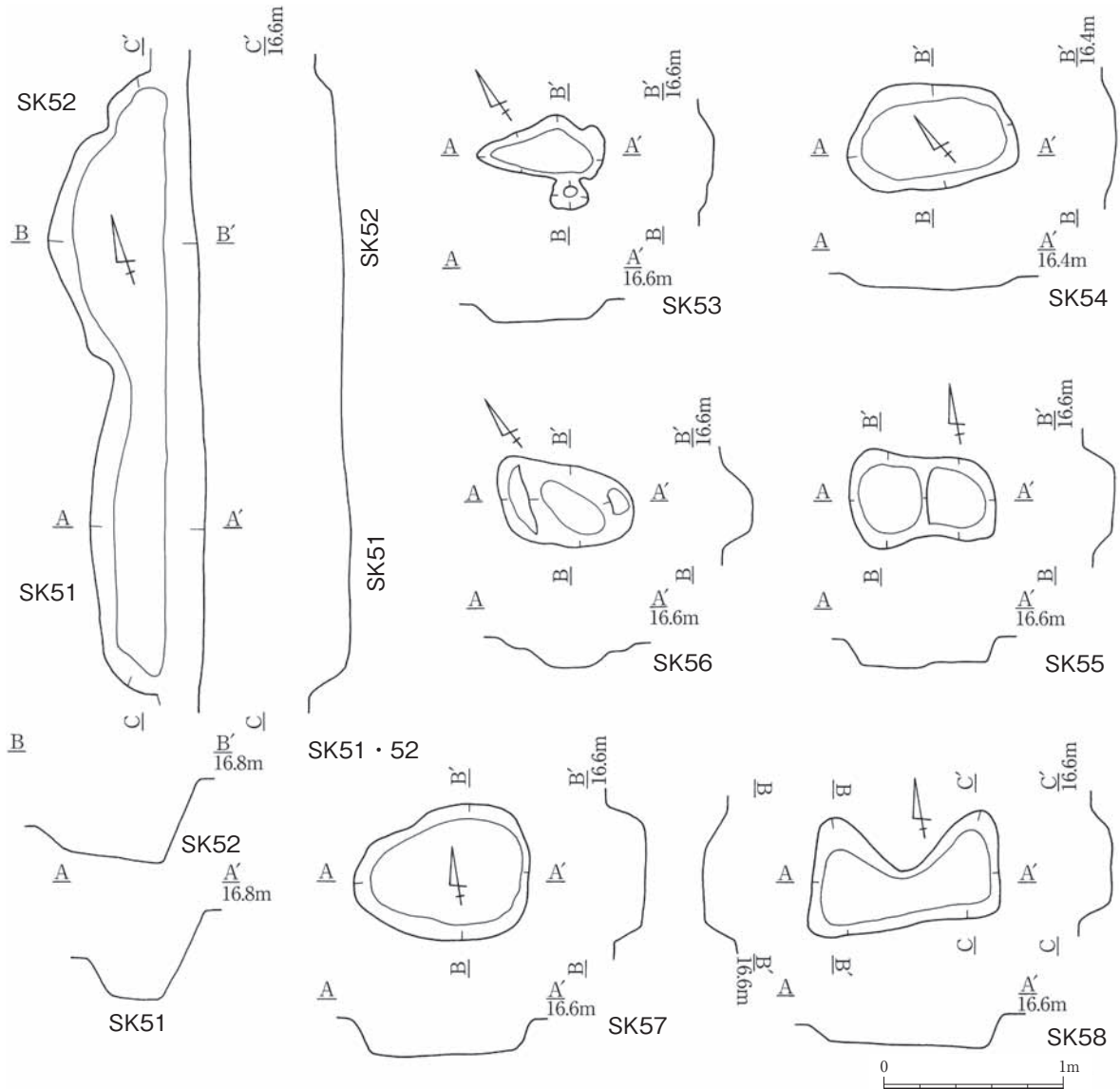
調査区（B区）P33グリッドに位置する。検出高は16.47mを測る。平面形態は不整形形状を呈し、長径1.06m、短径0.66m、深さ10～20cmを測る。断面形態は台形状を呈する。全体の形状から切り合いの可能性も考えられる。出土遺物はない。

## SK59

調査区（B区）P32グリッドに位置する。検出高は16.49mを測る。平面形態は不整形形状を呈し、長径1.01m、短径0.53m、深さ22cmを測る。断面形態は台形状を呈する。出土遺物はない。

## SK60

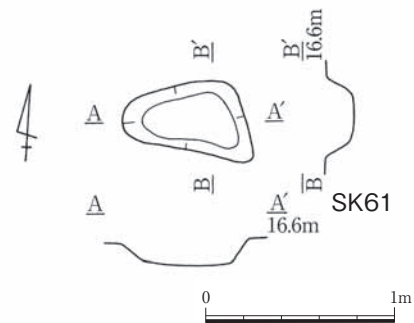
調査区（B区）P32グリッドに位置する。検出高は16.48mを測る。平面形態は不整形形状を呈し、長径0.68m、短径0.67m、深さ24cmを測る。断面形態は台形状を呈する。出土遺物なし。



第64図 SK51~58平面・エレベーション図 (S=1/40)

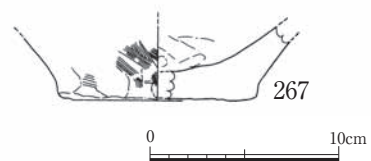
SK61

調査区 (B区) P32 グリッドに位置する。検出高は 16.46 m を測る。平面形態は不整形状を呈し、長径 1.21 m、短径 0.40 m、深さ 14cm を測る。断面形態は台形状を呈する。弥生土器 3 点が出土している。図示した 267 は壺底部で平底、外縁部をヘラナデにより仕上げる。弥生後期前半。



SK62

調査区 (B区) O26/P26 グリッドに位置する。SD25 と切り合い関係にある。検出高は 16.39 m を測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径 1.30 m、短径 0.65 m、深さ 6 cm を測る。断面形態は皿状を呈する。土器細片が 5 点出土しているが、時期の特定はできない。



第65図 SK61平面・エレベーション図 (S=1/40)

出土遺物 弥生土器 (S=1/4)

SK63

調査区（B区）O31/P31 グリッドに位置する。検出高は 16.47 mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径 1.28 m（検出長）、短径 0.77 m、深さ 15cmを測る。断面形態は台形状を呈する。

弥生土器 8 点が出土している。小片だが、ヘラ描沈線が 4 条確認できる個体がある。弥生時代前期末の遺物である。

SK64

調査区（B区）O31/P31 グリッドに位置する。西側は調査区外のため未検出である。検出高は 16.47 mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径 0.93 m、短径 0.59 m（検出長）、深さ 13cmを測る。断面形態は台形状を呈する。床面から径 22cm、深さ 15cmを測るピット状の落ち込みを検出しているが、本遺構との関係は不明である。出土遺物はない。

SK65

調査区（B区）P31 グリッドに位置する。東側は近現代の攪乱により切られている。P395 と切り合い関係にある。検出高は 16.47 mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径 1.05 m、短径 0.76 m、深さ 15cmを測る。断面形態は台形状を呈する。床面から長径 18cm、短径 13cm、深さ 11cmを測るピット状遺構を検出しているが、本遺構との関係は不明である。出土遺物なし。

SK66

調査区（B区）O29・30/P29・30 グリッドに位置する。西側は調査区外のため未検出である。SD49/P402 と切り合い関係にある。検出高は 16.41 mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径 2.87 m、短径 0.77 m（検出長）、深さ 44～76 cmを測る。断面形態は台形状を呈し、段部を有する。出土遺物は弥生土器 10 点、貼付口縁の素口縁と平底の底部であり、弥生時代中期の遺物である。

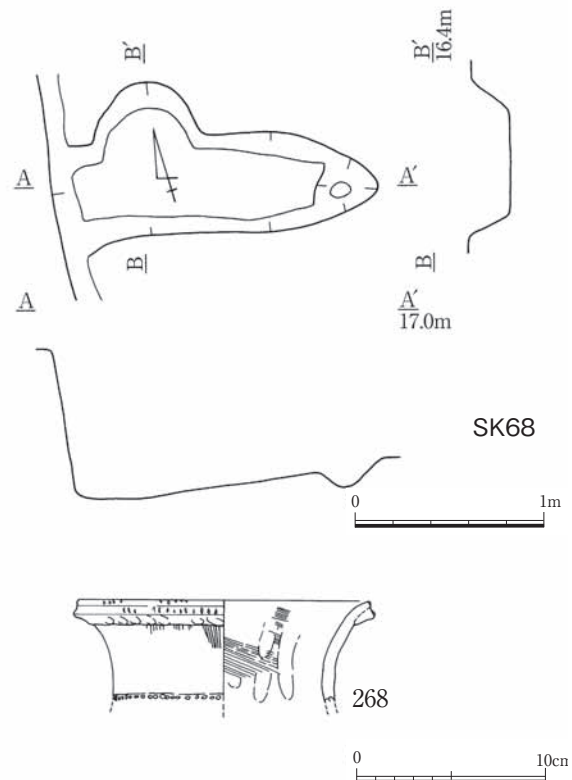
SK67

調査区（B区）O29/P29 グリッドに位置する。検出高は 16.25 mを測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径 0.78 m、短径 0.50 m、深さ 12～31cmを測る。断面形態は台形状を呈し、段部を有する。全体の形状から切り合いの可能性も考えられる。弥生土器 6 点と砂岩の被熱小円礫が出土している。うち、端部外面を拡張し刻目を施す口縁部小片が 2 点含まれている。

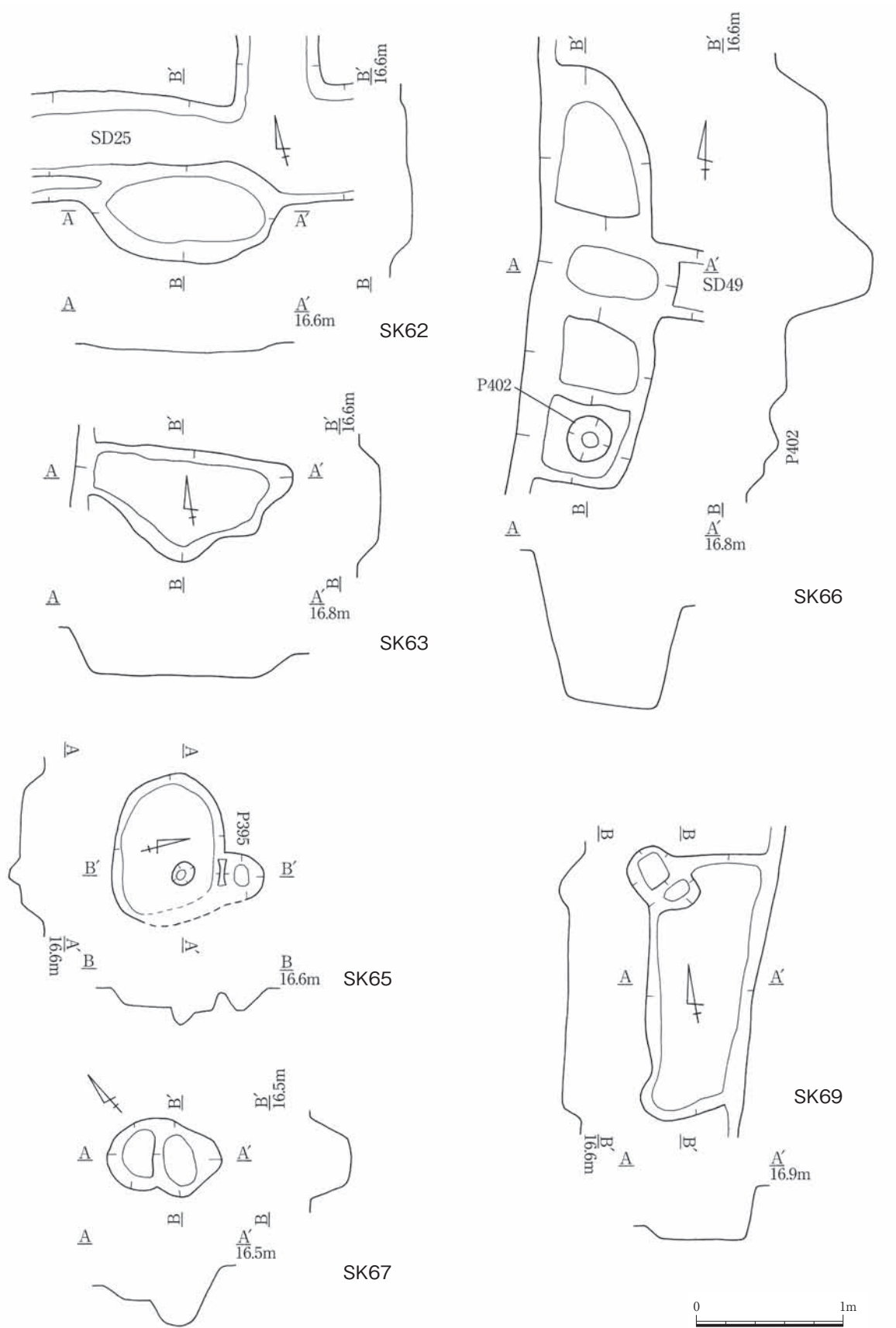
SK68

調査区（B区）O29/P29 グリッドに位置する。検出高は 16.21 mを測る。平面形態は溝状を呈し、長径 1.61 m（検出長）、短径 0.60 m、深さ 8～21cmを測る。断面形態は台形状を呈する。東端に小規模なピット状遺構を検出しているが、本遺構との関係は不明である。

出土遺物は弥生土器 20 点、弥生時代中期の貼付口縁の土器（268）が 1 点出土している。



第 66 図 SK68 平面・エレベーション図 (S=1/40)  
出土遺物 弥生土器 (S=1/4)



第 67 図 SK62・63・65・66・67・69 平面・エレベーション図 (S=1/40)



## SK69

調査区（B区）Q30グリッドに位置する。東側は調査区外のため未検出である。ピット状遺構と切り合い関係にある。検出高は16.51 mを測る。平面形態は歪な長方形を呈し、長径1.80 m、短径0.66 m（検出高）、深さ11cmを測る。断面形態は台形状を呈する。

出土遺物は弥生土器30点、すべて無文の土器であり、弥生後期前半の資料だと考えられる。

## SK70

調査区（B区）P28グリッドに位置する。SD51/P423・424と切り合い関係にある。検出高は16.23 mを測る。平面形態は隅丸方形を呈し、長径1.82 m、短径1.40 m、深さ31cmを測る。断面形態は台形状を呈し、北側を除いて段部を有する。

出土遺物は弥生土器262点と石器類3点で、図示できた遺物は（269～280）の弥生土器と（281）の敲石、（282）の軽石である。

269・270・277が壺、271～276・278～280が甕である。269・270はラッパ状に開く口縁で、貼付口縁である。269は上下に刻み目が残し、270は口唇がわずかに凹状となる。271は貼付口縁端部外面に刻目、上胴部に列点文を施す。273は内面ヘラミガキで丁寧に仕上げる。無文の甕頸部～上胴部で、外面にタタキ目の痕跡を認めることができる。この時期（中期中葉か）のタタキ目とすれば、高知平野では古い例となる。

272は器壁5mmと薄く、胎土の特徴からも薄手土器だと考えられる。上胴部にミミズ腫れ状の微隆起帯と豆粒状の浮文、頸部に扁平な刻み目を持つ粘土帯を貼付する。頸部の縦位微隆起帯は13条に達する。274と275は同一個体で、外面に煤状炭化物が付着する甕だが、細かいハケ調整で丁寧に仕上げられている。胎土は精選されており1～2mm大の砂粒を若干量含む以外は微細粒砂が観察されるのみで、胎土の特徴からも搬入品だと考えられる。275の底面は板ケズリにより砂粒が移動する。

遺構の所属時期は弥生時代中期中葉（中期Ⅱ－1期、Ⅲ様式古段階）である。

## SK71

調査区（B区）Q28グリッドに位置する。検出高は16.24 mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径0.93 m、短径0.73 m、深さ22cmを測る。断面形態は台形状を呈する。出土遺物はない。

## SK72

調査区（B区）Q27グリッドに位置する。東側は調査区外のため未検出である。検出高は16.30 mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径1.00 m、短径0.73 m、深さ21cmを測る。断面形態は台形状を呈する。

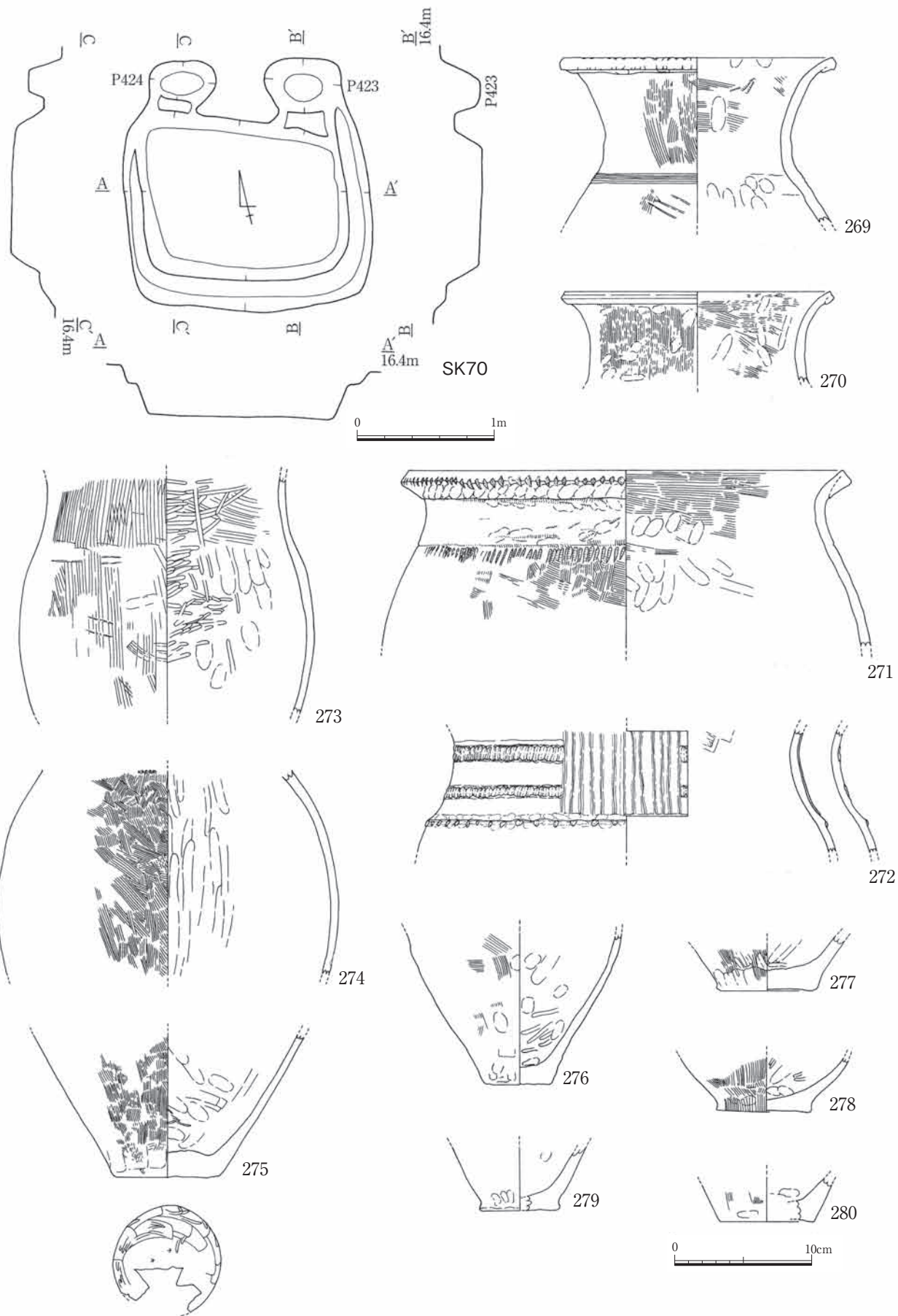
弥生土器8点が出土しているが、詳細な時期の特定はできない。

## SK73-A

調査区（B区）Q27・28グリッドに位置する。検出高は16.20 mを測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径1.03 m、短径0.65 m、深さ9 cmを測る。断面形態は皿状を呈する。出土遺物なし。

## SK73-B

調査区（B区）O28グリッドに位置する。西側は調査区外のため未検出である。検出高は16.36 mを測る。平面形態は円形状を呈し、長径0.66 m、短径0.40 m、深さ9 cmを測る。断面形態は皿状を呈する。出土遺物はない。

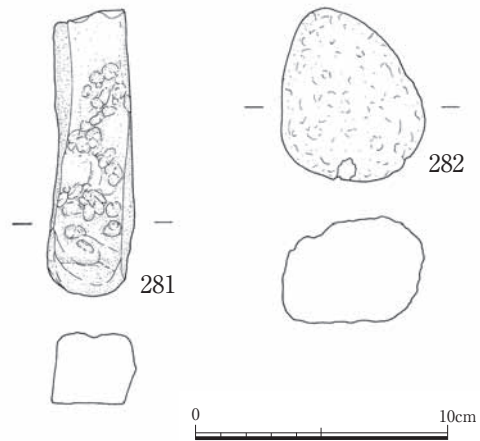


第68図 SK70 平面・エレベーション図 (S=1/40) 出土遺物 1 弥生土器 (S=1/4)

SK74

調査区（B区）P7グリッドに位置する。SD54と切り合い関係にある。検出高は16.32 mを測る。平面形態は歪な方形を呈し、長径0.82 m、短径0.63 m（検出長）、深さ9cmを測る。断面形態は皿状を呈する。

弥生土器 35点が出土している。うち1点は、貼付口縁で端部外面に刻目がある。

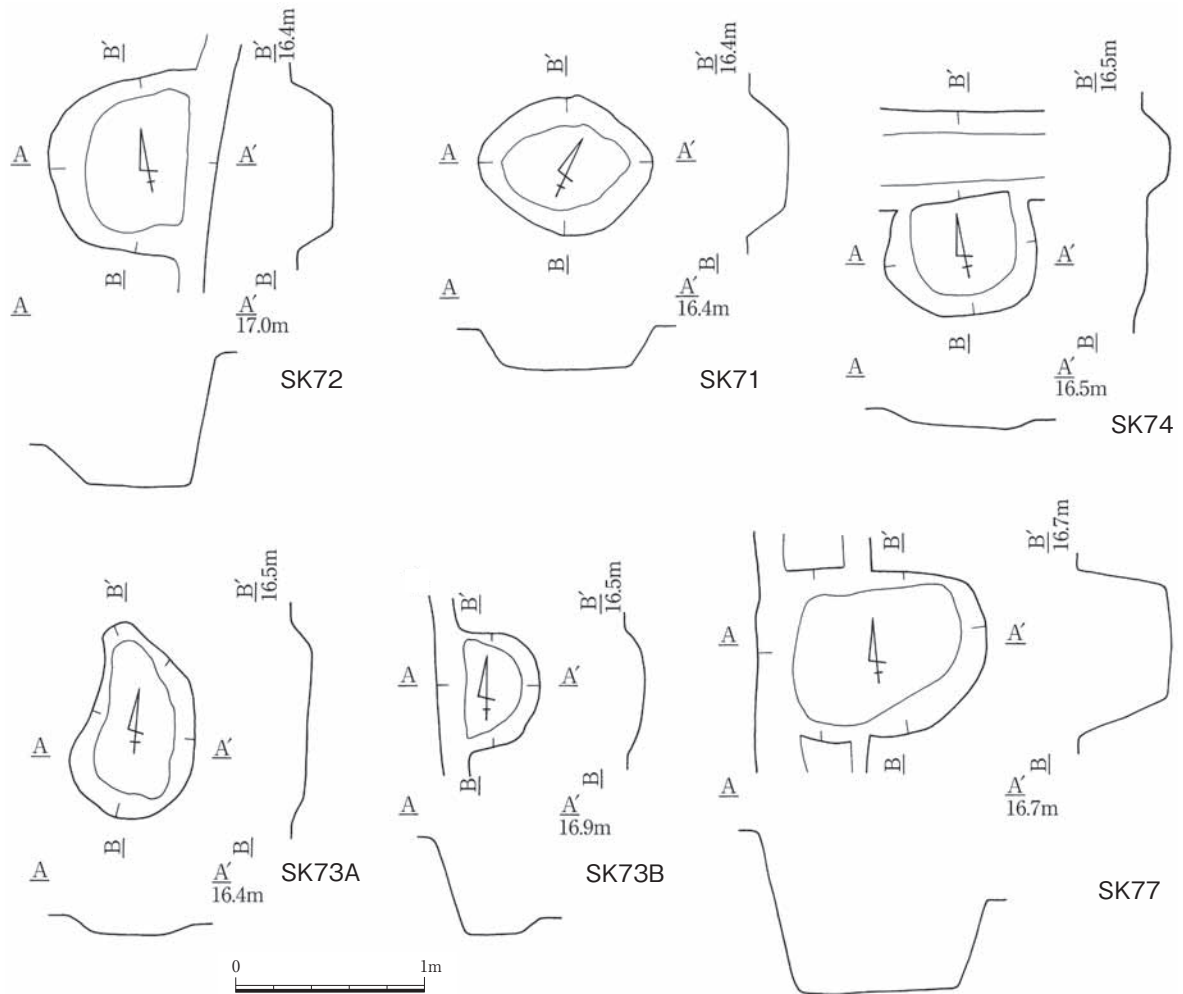


SK75

調査区（B区）O27/P27グリッドに位置する。SD54と切り合い関係にある。検出高は16.35 mを測る。西側は未検出であるが、平面形態は隅丸長方形を呈し、長径1.69 m（検出長）、短径0.50 m（検出長）、深さ4 cmを測る。断面形態は皿状を呈する。

第69図 SK70出土遺物 2 石器類 (S=1/3)

弥生土器3点と石器類1点（283）が出土している。283は、長さ4.7cmの小型で細長い棒状の自然礫である。詳細な時期の特定はできない。



第70図 SK71・72・73A・73B・74・77 平面・エレベーション図 (S=1/40)

SK77 (ST8の南端・切り合いあり)

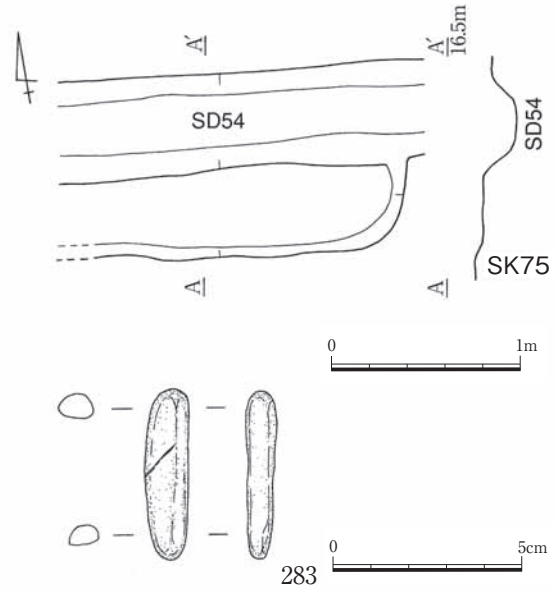
調査区(C区) N23グリッドに位置する。西側は調査区外のため未検出である。ST8を切り、SD-Hに切られる。検出高は16.66mを測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径1.02m(検出長)、短径0.87m、深さ48cmを測る。断面形態は台形状を呈する。埋土は黒灰色シルトである。

弥生土器が6点出土しているが、時期の特定はできない。

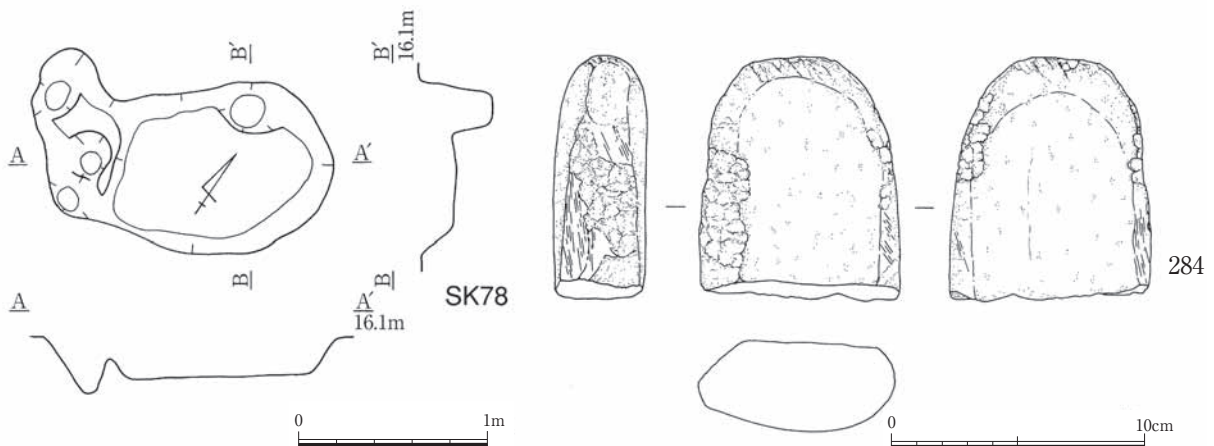
SK78

調査区(A区) J37グリッドに位置する。ST11(SD56)/ピット状遺構と切り合い関係にある。検出高は15.96mを測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径1.22m、短径0.93m、深さ21cmを測る。断面形態は台形状を呈する。床面から長径47cm、短径27cm、深さ20cmを測るピットを検出しているが、本遺構との関係は不明である。

弥生土器44点が出土している。口唇が凹状で上下端に刻目を持つ貼付口縁と無文の素口縁の口縁部小片が2点と平底の底部小片が2点出土している。284は、御荷銓緑色岩の磨製石斧(伐採斧)基部である。側縁は研磨により面をつくり出す。時期が確認できる出土遺物は、弥生中期前半である。



第71図 SK75平面・エレベーション図(S=1/40)  
出土遺物 石器類(S=1/2)

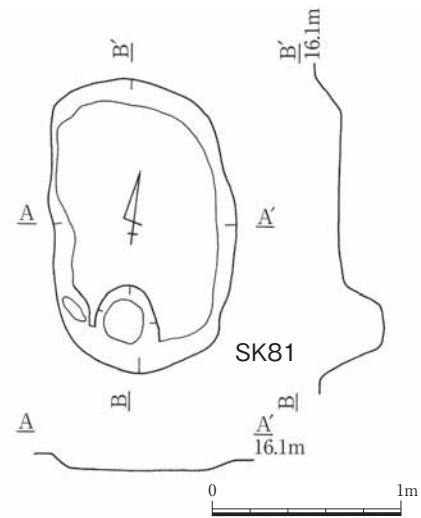


第72図 SK78平面・エレベーション図(S=1/40) 出土遺物 石器類(S=1/3)

SK81

調査区（A区）J37グリッドに位置する。SD57と切り合い関係にある。検出高は15.98mを測る。平面形態は隅丸長方形を呈し、長径1.60m、短径1.00m、深さ12cmを測る。断面形態は台形状を呈する。床面から長径46cm、短径33cm、深さ22cmを測るピット状遺構を検出しているが、本遺構との関係は不明である。

弥生土器22点が出土している。文様があるものを2点（上胴部にミミズ腫れ状の微隆起帯を持つ個体とクシ描直線文と扁平な刻目粘土帯を貼付する個体）確認した。弥生中期初頭の遺構である。



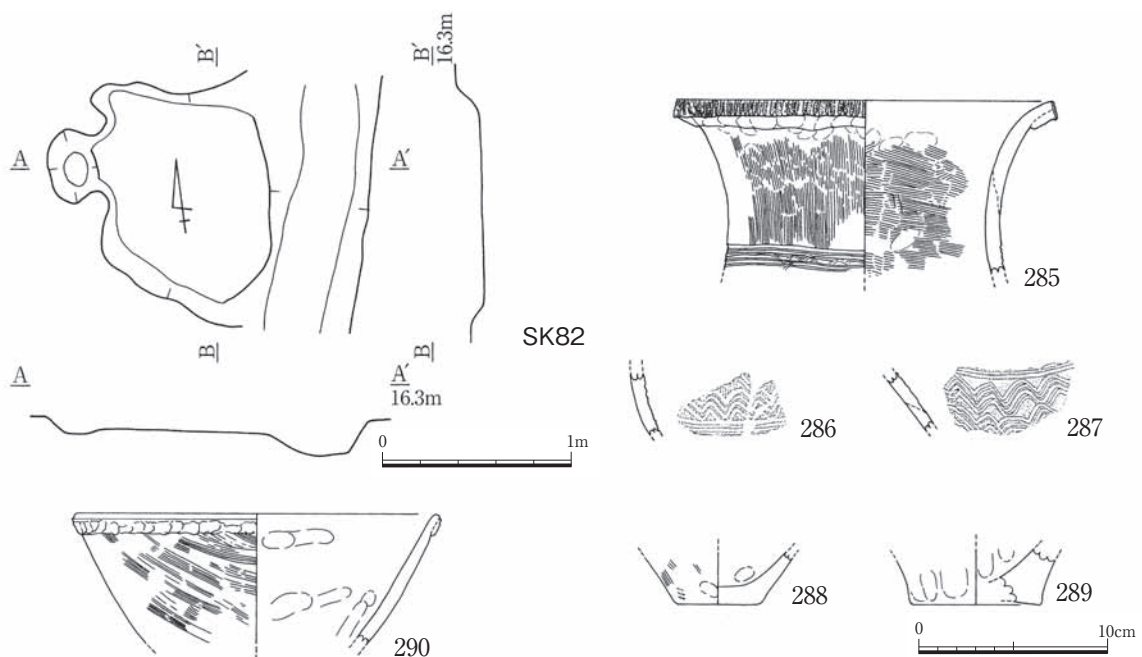
第73図 SK81 平面・エレベーション図 (S=1/40)

SK82

調査区（A区）L36グリッドに位置する。SD-P/ピット状遺構と切り合い関係にある。検出高は16.13mを測る。平面形態は歪な方形を呈し、長径1.27m、短径0.92m（検出長）、深さ8cmを測る。断面形態は皿状を呈する。

弥生土器62点が出土、図示できたものは、285～290の6点である。285～287が壺、288・289が甕（底部）、290が鉢である。壺（285）、鉢（290）ともに貼付口縁で、285の頸部には5条のクシ描沈線が確認される。

遺構の時期は、弥生時代中期前半（中期I-2期、II様式新段階）である。



第74図 SK82 平面・エレベーション図 (S=1/40) 出土遺物 弥生土器 (S=1/4)

#### SK83

調査区（A区）L36・37グリッドに位置する。ピット状遺構と切り合い関係にある。検出高は16.17 mを測る。平面形態は歪な長方形を呈し、長径1.61 m、短径0.90 m、深さ11cmを測る。断面形態は台形状を呈する。床面から長径50cm、短径42cm、深さ32cmを測るピットを検出しているが、本遺構との関係は不明である。弥生土器20点が出土している。貼付口縁が2点あり、弥生中期の遺構だと考えられる。291・292の弥生土器壺底部を図示した。

#### SK84

調査区（A区）M37グリッドに位置する。南側は調査区外のため未検出である。溝状遺構と切り合い関係にある。検出高は16.13 mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径1.07 m、短径0.35 m（検出長）、深さ20cmを測る。断面形態は台形状を呈する。遺物は出土していない。

#### SK85

調査区（A区）M35/N37グリッドに位置する。南側は調査区外のため未検出である。ピット状遺構と切り合い関係にある。検出高は16.10 mを測る。平面形態は円形状を呈し、長径2.68 m（検出長）、短径0.75 m（検出長）、深さ16cmを測る。断面形態は台形状を呈する。弥生土器56点と土師器1点、炭1点が出土している。貼付口縁や微隆起帯を持つ土器片の存在から、弥生時代中期の遺構の可能性はあるが詳細は不明。土師器は11～12世紀代の供膳具だが、破片であり混入資料だと考えている。293・294の弥生土器壺底部を図示した。

#### SK86

調査区（A区）N37グリッドに位置する。ピット・溝状遺構と切り合い関係にある。検出高は16.10 mを測る。平面形態は方形を呈し、長径0.88 m、短径0.57 m、深さ13cmを測る。断面形態は台形状を呈する。弥生土器2点が出土している。うち1点は、口縁部小片で素口縁である。

#### SK87

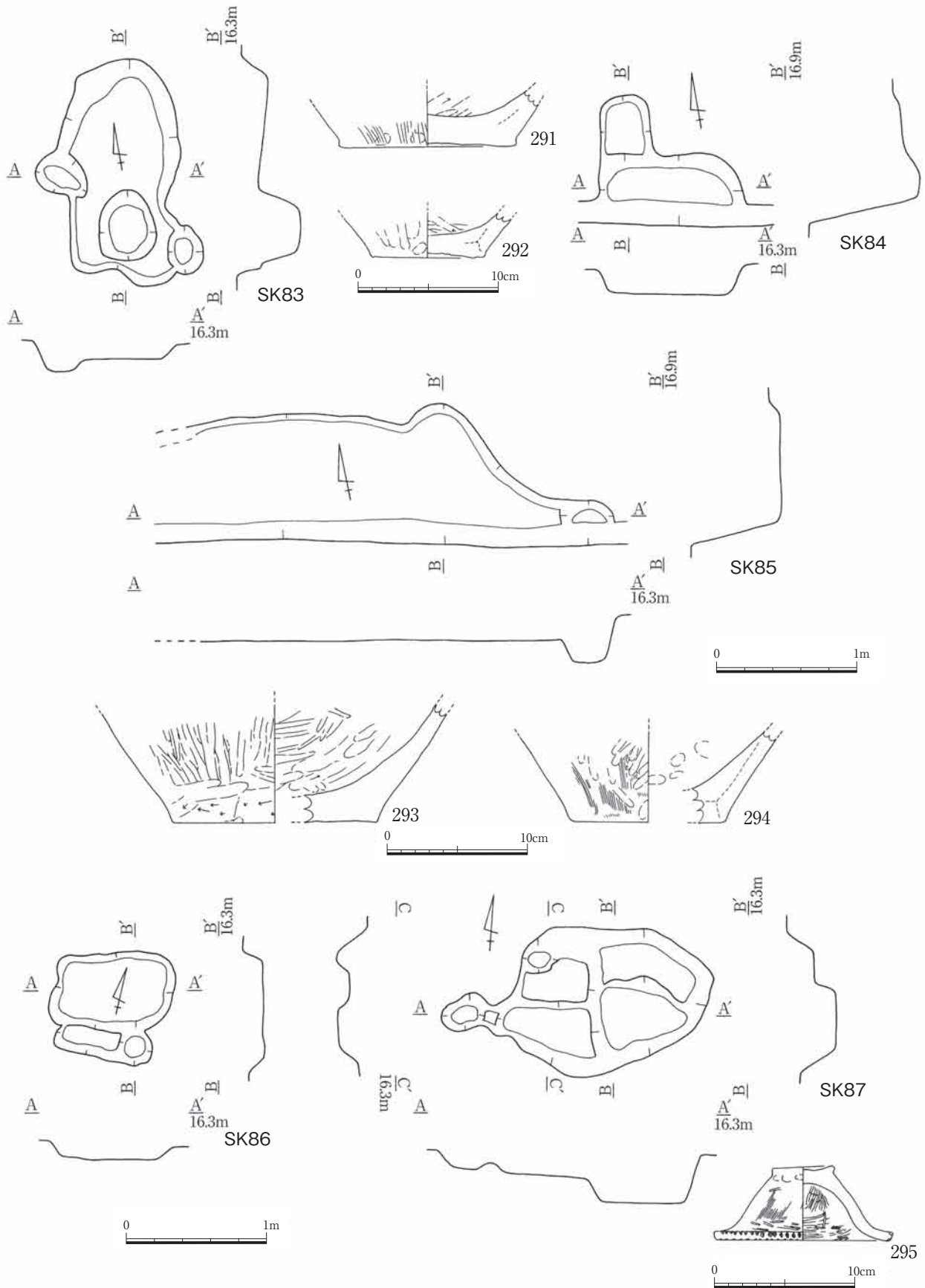
調査区（A区）K35グリッドに位置する。ピット状遺構と切り合い関係にある。検出高は16.05 mを測る。平面形態は不整形を呈し、長径1.58 m、短径1.07 m、深さ37cmを測る。断面形態は台形状を呈し、段部を有する。形状から切り合いの可能性も考えられる。

弥生土器9点が出土している。295は、高さ5.2cmの蓋である。脚端部には上下に刻目を施し、内外面には環状の黒斑が残る。

遺構の時期は弥生時代中期である。

#### SK88

調査区（B区）P27グリッドに位置する。検出高は16.35 mを測る。平面形態は歪な台形状を呈し、長径1.00 m、短径0.95 m、深さ30cmを測る。断面形態は台形状を呈し、浅い段部を有する。全体の形状から切り合いの可能性も考えられる。遺物は出土していない。



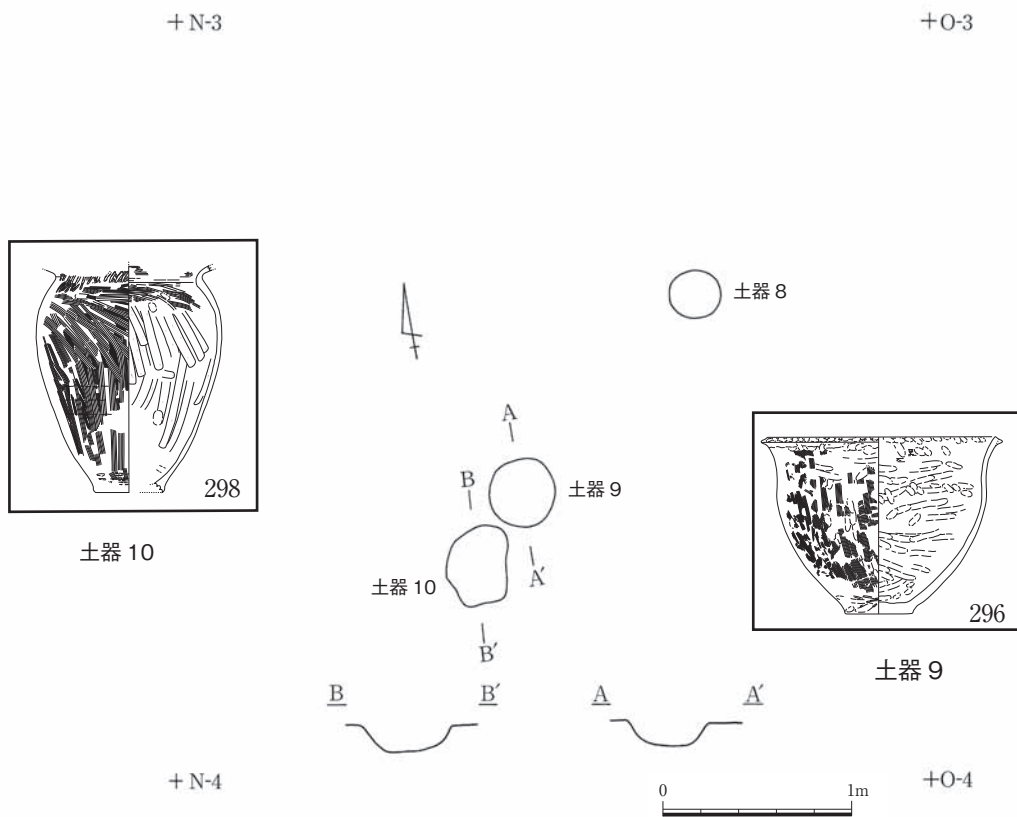
第75図 SK83～87平面・エレベーション図 (S=1/40) 出土遺物 弥生土器 (S=1/4)

### 3. 土器棺（土器9・10 C区）

試掘調査時に「土器棺」として報告された資料がある。出土状況等について十分把握できていない点もあるが、遺物出土地点・エレベーション図（第76図）と出土遺物の実測図を提示する。調査時点では「土器1・2・3」として確認され、調査後の呼称変更により「土器8・9・10」となった資料のうち、「土器9・10」が土器棺である。調査時に一緒に取り上げられた土器片も併せて図化し報告する。

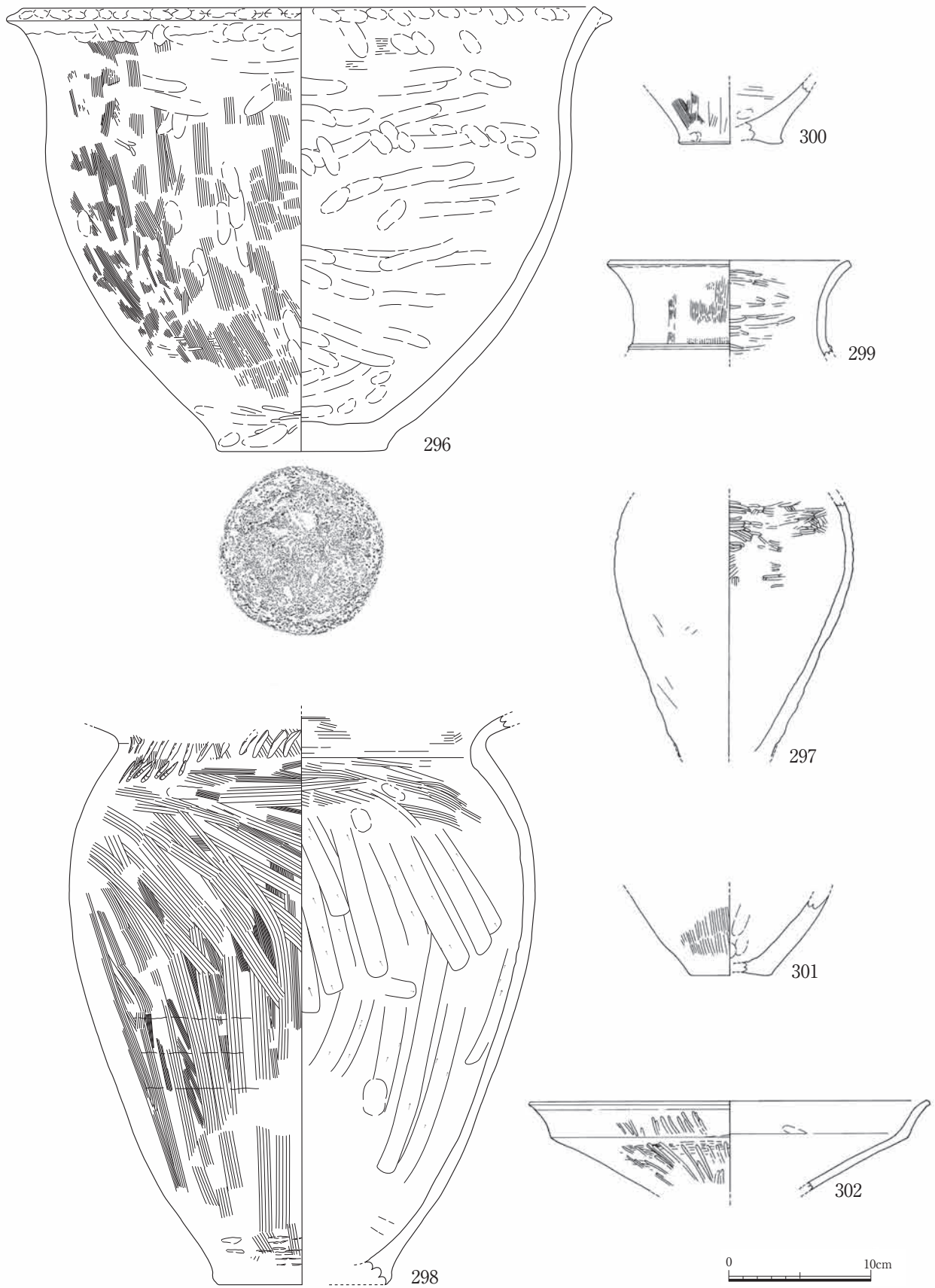
出土遺物は弥生土器95点、図示できた遺物は296～302の7点である。296は土器9として取りあげられた遺物で、口径40cm、器高31cmを超える大型の鉢である。口縁外面に粘土紐を貼付、口唇は凹状になる。外面はハケ、ナデ調整で丁寧に仕上げられており、底面付近はヘラミガキで仕上げられている。297は土器9・10として取り上げられている。無文の甕で、胴部最大径は上胴部にあり、内面はヘラミガキで仕上げられる。298～301は土器10として取り上げられている。298は口縁部形状不明、頸部に列点文を施文する壺である。内面上胴部以下ヘラケズリ（下→上方向）、外面は粗いハケ調整で仕上げられ、底面付近と胴部外面にわずかにタタキ目の痕跡を残す。302は、「土器10内」として取りあげられた資料である。坏部が一旦屈曲した後外反する高坏であり、口縁外面にヨコナデによる弱い段が形成されている。

土器棺の時期は、弥生時代後期前半（後期Ⅱ期、V-2・3期）である。



第76図 グリッドN-3土器8～10出土地点平面・エレベーション図（S=1/40）





第 77 図 土器棺墓 (土器 9・10) 出土遺物 弥生土器 (S=1/4)

#### 4. 溝状遺構（SD）

弥生時代の溝だと考えられる遺構は、C区のSD3とそれに並行して検出された石列SD3-2、SD8とA区のSD56・57・58・59である。A区のSD56とSD57はST11に付属した周溝状遺構だと捉え、ST11の項で報告した。これらの溝については、溝の走る方向と出土遺物のまとまりから弥生時代だと判断したもので、これ以外にも弥生時代の溝が存在する可能性はある。

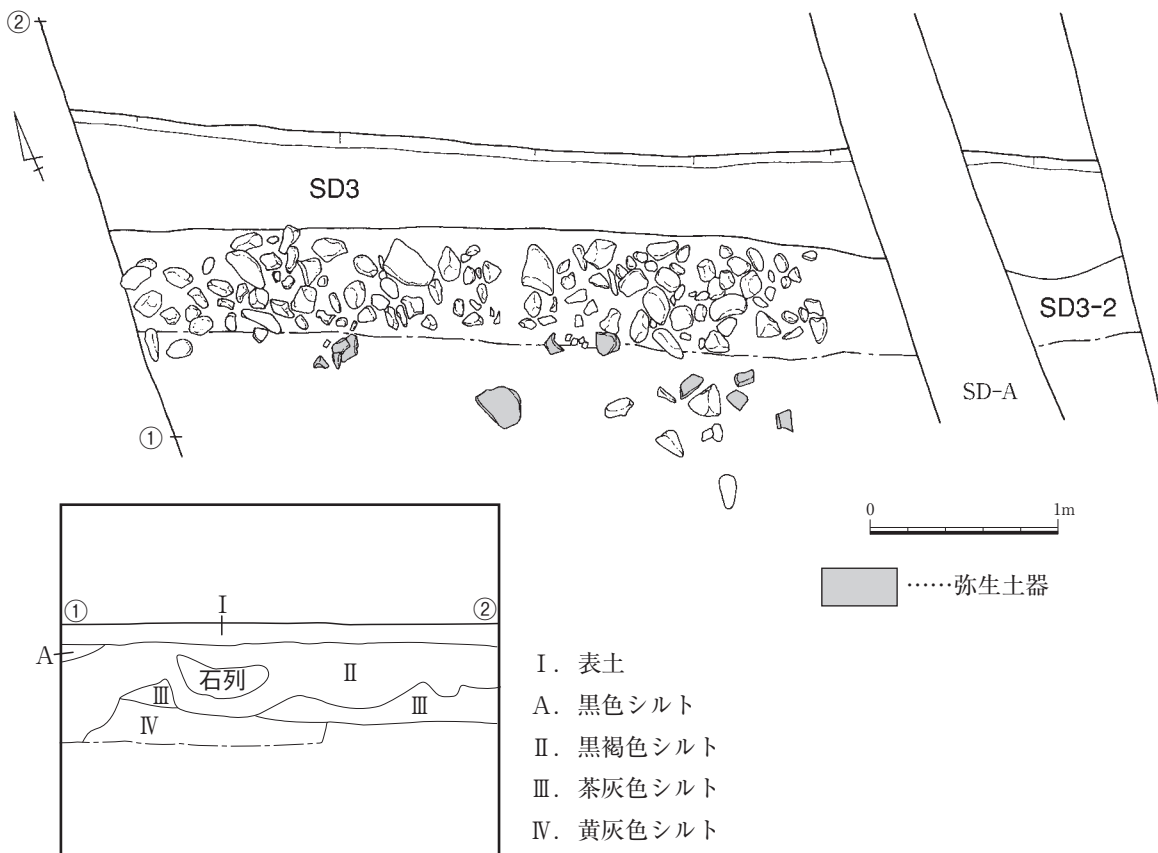
調査範囲内には規格性を持って一定の方向に走る溝が多い。これらの溝については、出土遺物以外に、方向と規格性を根拠にして古代の遺構として取り扱う。溝の中からも弥生土器が一定量出土しているが、明らかに古代の溝だと判断できる遺構から出土した弥生土器については、包含層出土弥生土器の前にまとめて提示することとする。

#### SD3

調査区（C区）M3/N3・4グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。SD-Aと切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-64°-Wで、ほぼ直線状に検出している。検出高は16.75mを測る。検出規模は5.38×0.43～0.53m、床面高は東端で16.73m、西端で16.70mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは4cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。

石列状遺構と並行して検出している。

出土遺物は弥生土器33点、古代の資料も混在している。



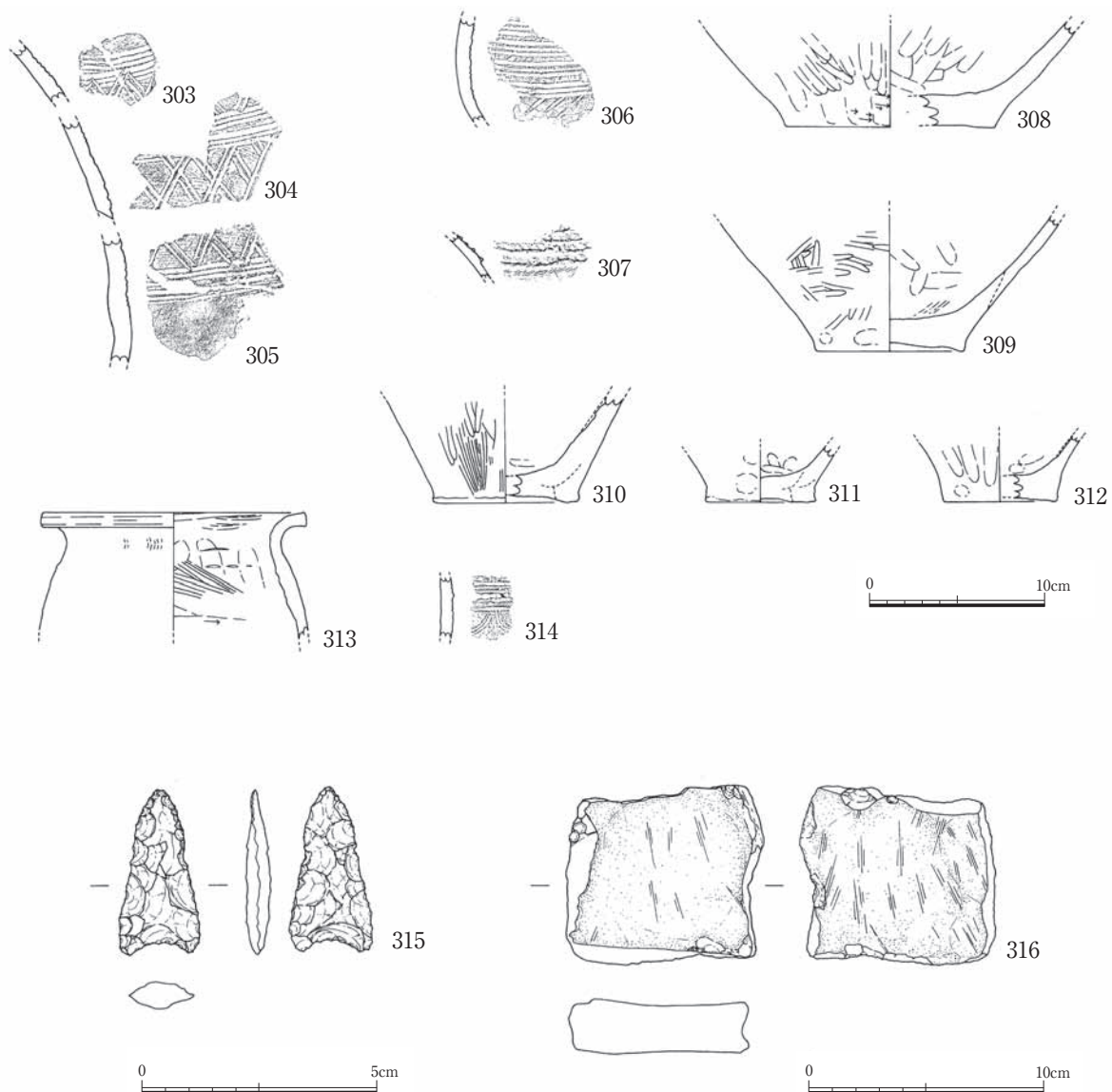
第78図 SD3・SD3-2（石列）平面・セクション図（S=1/40）

SD3-2（石列状遺構として検出された遺構）

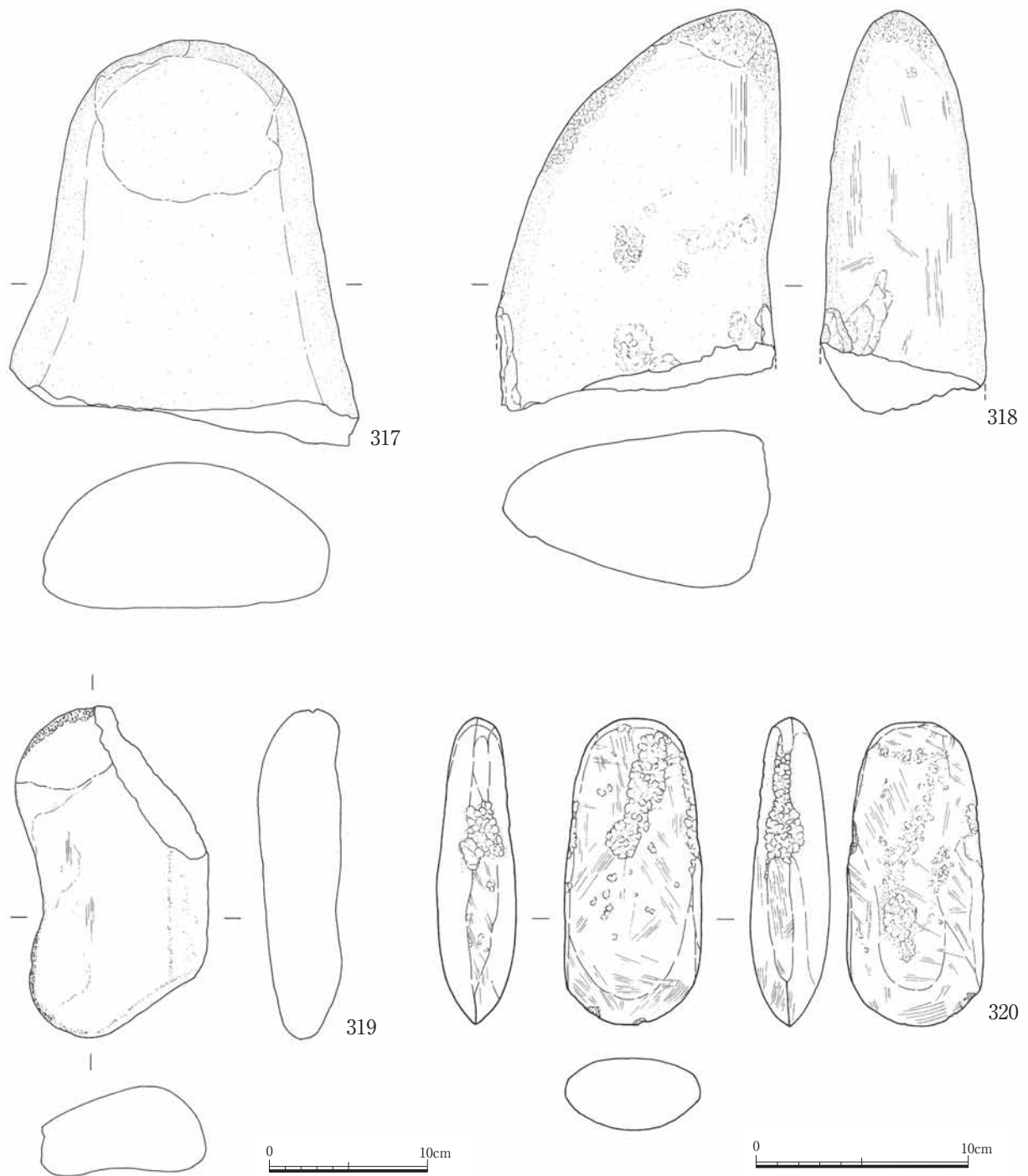
弥生時代前期末の石列状遺構として検出された遺構である。SD3に沿って石列が検出されている。東西方向の溝であり、溝の方向はSD3と同じく主軸方向はN-64°-W、堆積状況からSD3と一連の溝であり、遺構廃絶の段階で礫の投棄によって埋められたものだと判断した。

出土遺物は弥生土器 102 点、須恵器 2 点、土師器 2 点で、弥生土器のうち口縁部が 6 点、文様等時期の判断できる資料が 22 点含まれている。石列上層として確認された資料もここで取り扱っている。

石列の上面からは、赤彩土師器が 2 点確認されている。



第 79 図 SD3-2（石列）及び上層包含層出土遺物 1 弥生土器（S=1/4）石器類（S= 2/3・1/3）



第 80 図 SD3-2 (石列) 及び上層包含層出土遺物 2 石器類 (S=1/4・1/3)

出土遺物は、303～314の弥生土器と315～320の石器類である。石列上層からは、先述の古代の赤彩土師器片や313の後期前半の甕などが混在しているが、石列（SD3-2）中から出土する遺物は、クシ描沈線と双線による格子目文などⅡ様式古段階を特徴づける文様に限られている。307のようなミミズ腫れ状の微隆起帯もあり、これらの出土遺物より、SD3及びSD3-2の時期は、弥生時代中期初頭（中期Ⅰ-1期、Ⅱ様式古段階併行期）だと考えられる。

石列として検出した礫は砂岩礫であり、全体の細かい検討はできていないが、317～319の敲石類と類似した砂岩円礫であったようである。端部及び表裏面に敲打痕が残るだけでなく、被熱赤変が認められるもの、擦痕の残る面が多く確認されるものなど、重要な情報が含まれている。これらの敲石類は、作業台として、あるいは磨製石器製作時の砥石として、多角的に利用されたたものである。316は石列中出土の砥石である。

315はサヌカイトの打製石鏃、320は石列横の包含層中出土の緑色岩製の太型蛤刃石斧である。完形品で全面に擦痕がのこり、側面・基部ともに丁寧に仕上げられている。素材は断面がやや扁平な礫を使用しており、田村遺跡群での分類に照らすと、B1類ということになる。前期まで主に使われた古い様相だと捉えられており、それを考慮すれば、この溝の時期の遺物として大過ないものと思われる。

遺構の所属時期は、弥生時代中期初頭（Ⅱ-1期）である。

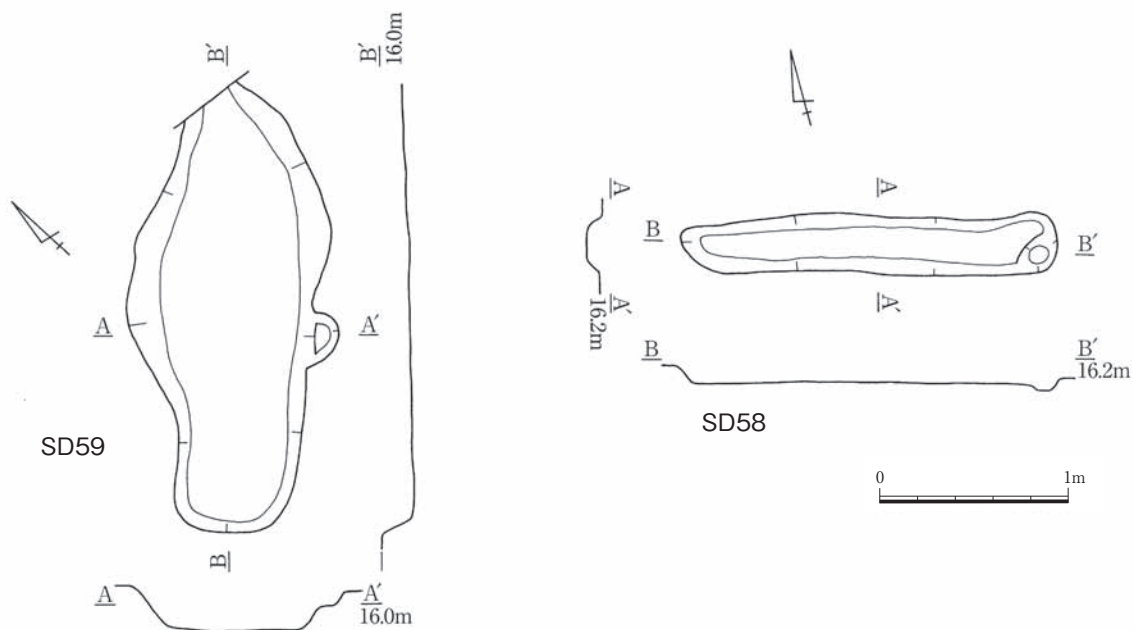


SD3とSD3-2（検出された石列）

## SD8

調査区（C区）N7/O7グリッドに位置する。西側は試掘TRにより未検出である。SD7/P137と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-62°-Wである。検出高は16.83mを測る。検出規模は2.50×0.63m、床面高は東端で16.61m、西端で16.71mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは12～21cmを測る。東端はピット状に落ち込んでいる。

出土遺物はないが、溝の方向が他の古代の溝と異なるため、弥生時代の可能性がある溝とした。他時期の可能性もある。



第 81 図 SD58・59 平面・エレベーション図 (S=1/40)

#### SD56 (A区)

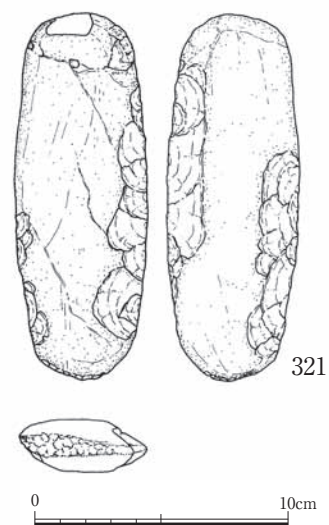
ST11の周溝だと考えている。この場合、この周溝の時期は弥生時代中期初頭になる可能性がある。

#### SD57 (A区)

ST11の周溝だと考えている。後期前半だと考えている。本来ST11の範囲の外側につながるが、ST11の範囲で、2時期の住居が重なっており、遺物の混在も認められる。

#### SD58 (A区)

ST11の東側に位置する溝状の遺構で、主軸方向はN-75°-Wである。検出高は16.18m、規模は0.32×2.00m、床面高は東端で16.09m、西端で16.08mである。弥生土器が1点出土しているが、詳細な時期の特定はできない。



第 82 図 SD59 出土遺物  
磨製石斧未製品 (S=1/3)

#### SD59 (A区)

ST11の北東に位置する溝状の遺構で、主軸方向はN-47°-Eである。検出高は16.06m、規模は0.7~1.0×2.44m、床面高は北東端で15.88m、南西端で15.84mである。321の御荷鉾緑色岩製の磨製石斧未製品が出土している。弥生時代の遺構だと考えられるが、詳細な時期の特定はできない。

## 5. ピット

全域から合計 424 基のピットが確認されている。各ピットの検出面標高、規模、深さについては、巻末の遺構計測表（ピット）にまとめた。計測表中では弥生時代以外のピット、また、竪穴住居の底面遺構等も含めて、全てのピットの検出面標高および規模をまとめている。直径 10cm ほどのものから、1 辺 1 m 前後の古代の方形ピットまで、ピットとした遺構は規模や性格も様々である。なお、古代以降だと断定できる掘立柱建物を構成するピットについては、「古代以降の遺構と遺物」の項でも取り上げている。

検出したピットのうち 156 基から遺物が出土している。ピットから出土した遺物については、表にまとめて示す。出土遺物には細片も多く、遺物の時期が遺構の形成時期と断定することは難しい。その中で、322～363 の弥生土器と 364～366 の石器類については図化して報告することができた。

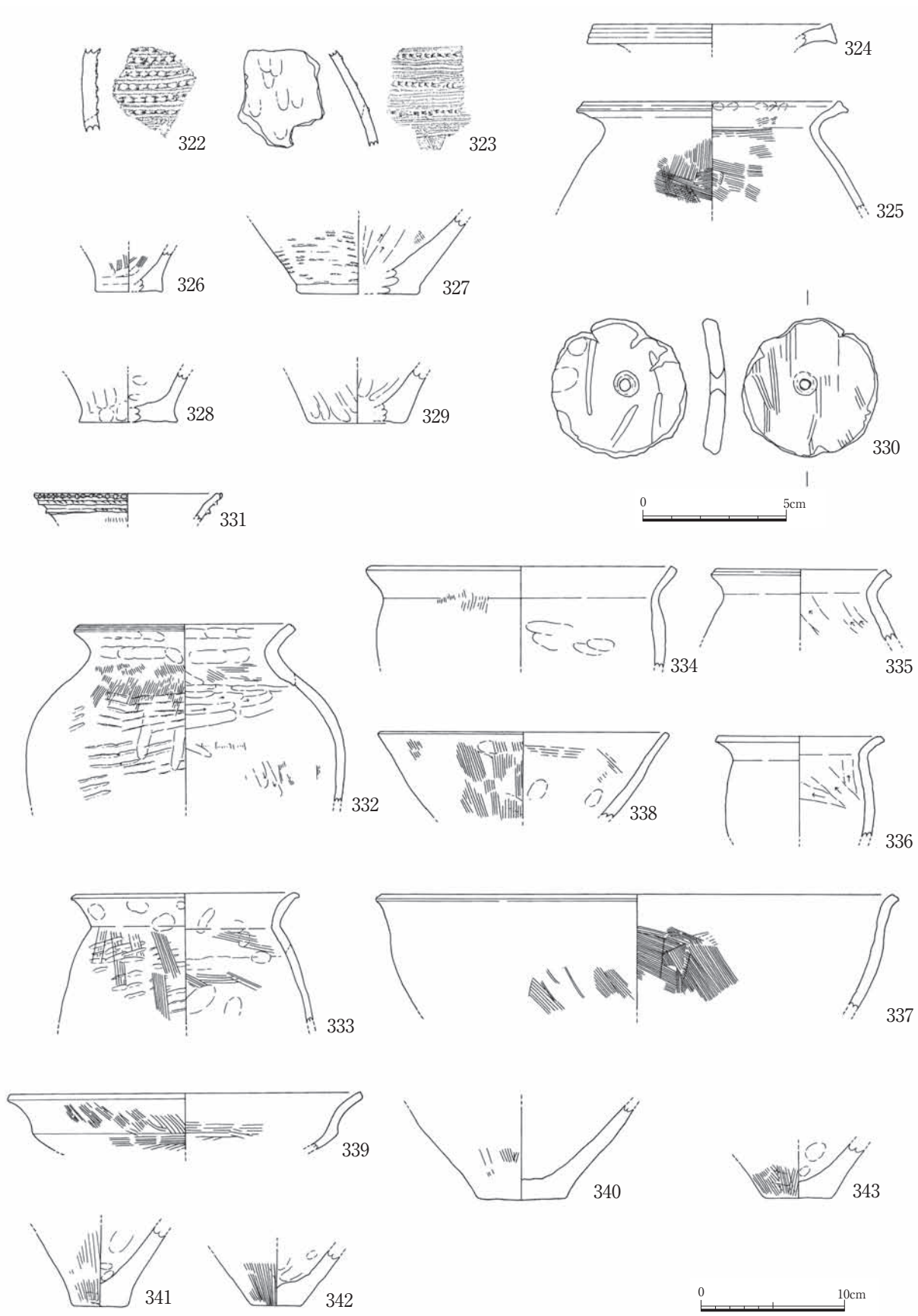
図示した遺物が出土した遺構は、322 (P134)、323 (P145)、324～327 (P149)、328・329 (P173)、330 (P174)、331～343 (P176) - 以上第 83 図 -、344・345 (P254)、346・347 (P305)、348 (P369)、349 (P377)、350～352 (P402)、353 (P421)、354・355 (P452)、356 (P442)、357 (P453)、358・359 (P459)、360 (P460)、361 (P492)、362 (P494) - 以上第 84 図 -、363 (P429) - 第 85 図 - の計 42 点である。また石器類で図示した資料は第 86 図に示した 364 (P132)、365 (P217)、366 (P462) の 3 点である。

322・323 はクシ描沈線と扁平な刻目粘土帯で施文する壺胴部片（中期初頭）、324・325 は口縁に凹線文が残るが、やや退化しており、後期前半（後期Ⅱ期・V-2 期）と考えられる資料である。326・327 の底部にはタタキ目が残る。328・329 の底部外周は弥生時代中期前半の土器にみられる特徴を持っている。330 は土器片転用の紡錘車であり、外面にヘラミガキが残る弥生時代のものだが詳細な時期特定は難しい。

P176 からは、弥生土器が 55 点とまとまった量が出土している。うち 13 点を図化した。凹線が退化し、タタキ目が顕在化しはじめる段階であり、弥生時代後期前半（後期Ⅱ期・V-3 期）の資料である。331 弥生時代中期の資料で、混入資料だと考えられる。

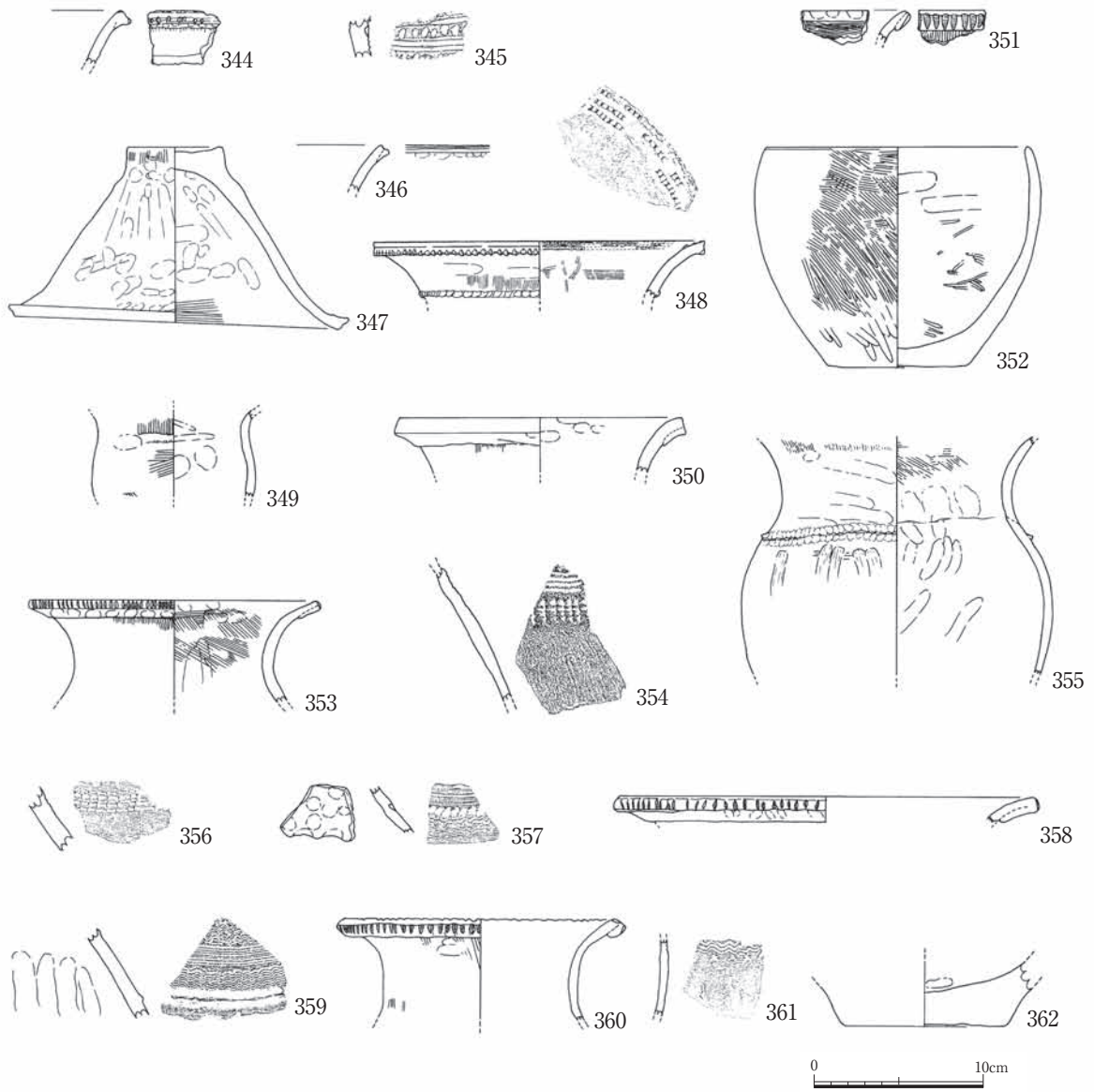
第 84 図の 344・345 はクシ描沈線を持ち、中期初頭のⅡ様式、347 の蓋も中期の資料で、断定はできないがⅡ様式併行期ではないかと考えられる。348 は幅狭の刻目粘土帯を 3 条口縁内面に貼付する中期初頭の資料である。349 は甕だが、時期は断定できない。350・351 は貼付口縁で、352 のボウル状になった鉢は中期前半の特徴を持つ。354～357 の簾状文は中期Ⅰ-2 期の特徴を持ち、358～361 は中期Ⅱ-1 期のクシ描沈線や貼付口縁の特徴を持っている。

第 85 図の 363 は、P429 に横位で埋納されたもので、口縁部は北から約 12° 東へ振っており、口縁が上方へ約 10° 上がった形で埋められていた。ほぼ完形で出土している。363 は精選された胎土でガラス質鉱物を多く含みチョコレート色に発色するという特徴を持つ。外面も細かいハケ調整とヘラミガキで丁寧に仕上げられている。内面はナデで仕上げられ、ヘラケズリは確認できない。後期でもⅠ期に近い古相の資料である。他地域から持ち込まれた搬入遺物であり、胎土からは讃岐の可能性が高いが、地域の確定は今後の課題としておきたい。青銅鏡（破鏡）との関連も十分考え得る重要な資料である。

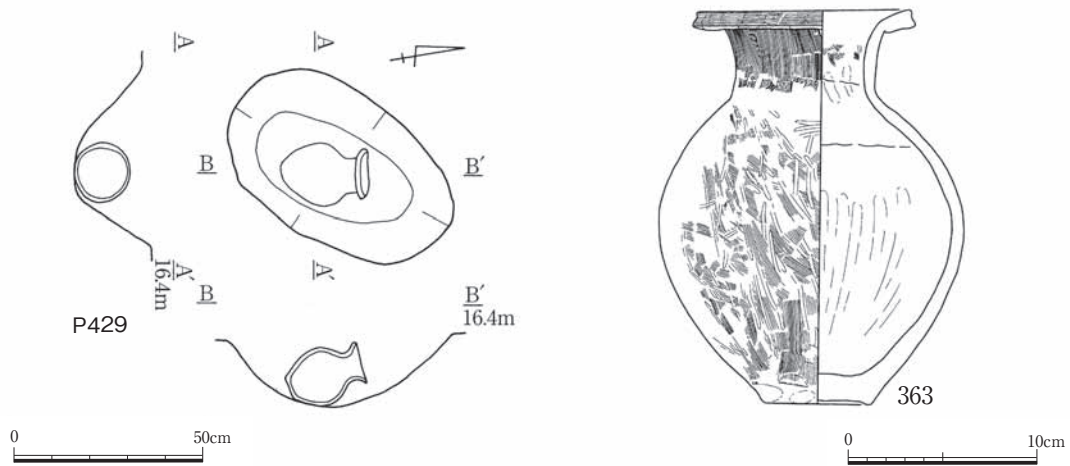


第83図 ピット出土遺物1 弥生土器 (S=1/4・1/2) ※330のみ S=1/2



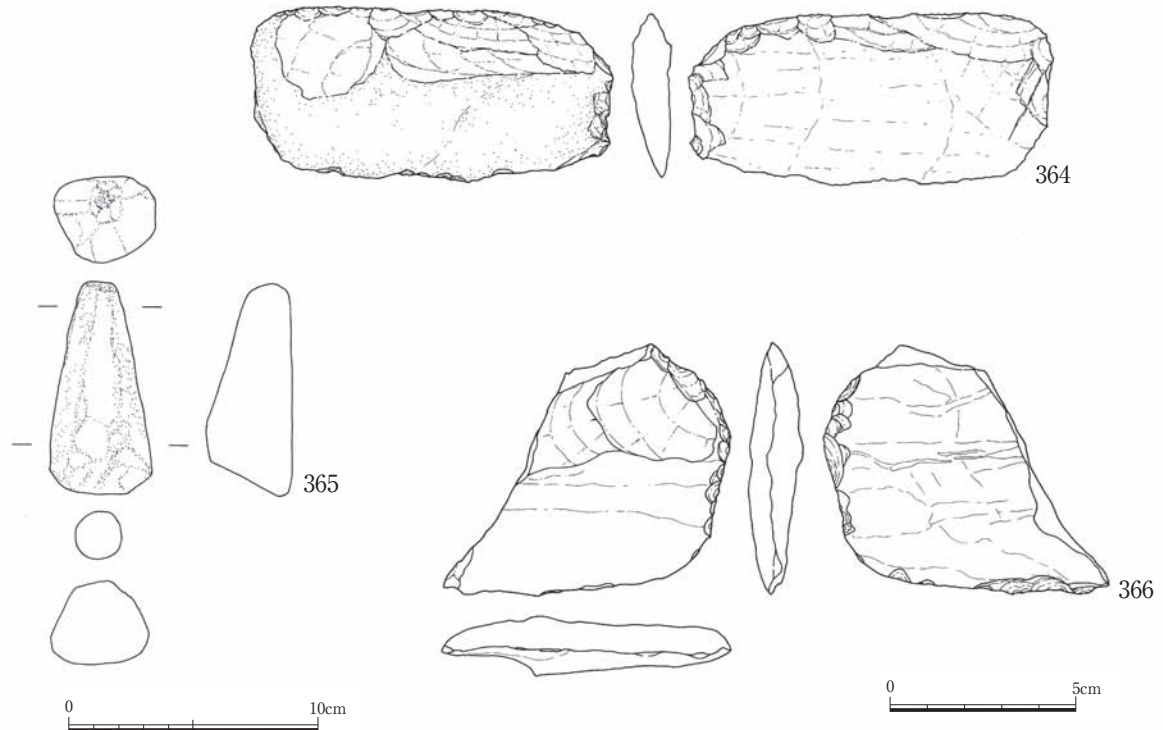


第 84 図 ピット出土遺物 2 弥生土器 (S=1/4)



第 85 図 P429 遺物出土状況平面・エレベーション図 (S=1/20) 出土遺物 弥生土器 (S=1/4)

ピット出土石器類は、364 が打製石包丁、365 が砂岩の敲石、366 は黒い岩脈（ベイン）の入った泥質砂岩を使った打製石器で打製石包丁である可能性もある。図示していない資料を含めても、ピットから出土した石器は少ない。P44 の敲石、P149 の緑色岩の石片があるていどだが、P462 からは 362 の打製石器以外にも敲石や剥片類が出土している。



第 86 図 ピット出土遺物 3 石器類 (S=1/3・1/2)

表2 ピット計測表(1)

遺構	区	グリッド	遺物	長軸 (cm)	短軸 (cm)	検出面 標高 (m)	底面標高 (m)	段部など (m)	深さ (cm)
P1	C	M-4	○	25	24	16.774	16.673		10
P2	C	M-4	○	50	34	16.716	16.616		10
P3	C	M-4	○	44	30	16.736	16.621	16.706	12
P4	C	M-4		60	32	16.778	16.685		9
P5	C	M-4	○	45	37	16.770	16.545	16.598	22
P6	C	N-4		22	22	16.794	16.714		8
P7	C	N-4		32	30	16.791	16.705	16.759	9
P8	C	N-4	○	22	22	16.750	16.500		25
P9	C	N-4		28	24	16.766	16.688		8
P10	C	N-4		24	24	16.798	16.640		16
P11	C	N-4		40	30	16.818	16.685	16.790	13
P12	C	N-4		44	44	16.846	16.733		11
P13	C	N-4		46	44	16.845	16.708		14
P14	C	N-4	○	24	24	16.850	16.779		7
P15	C	N-4	○	30	30	16.852	16.778		7
P16	C	N-4		25	23	16.869	16.798		7
P17	C	M-4		38	24	16.878	16.791		9
P18	C	M-4		22	19	16.872	16.828		4
P19	C	N-4		40	38	16.875	16.786	16.742	9
P20	C	M-4		50	28	16.867	16.828		4
P21	C	M-5		38	25	16.877	16.843	16.720	3
P22	C	N-5		34	30	16.879	16.809		7
P23	C	N-5		44	30	16.879	16.838		4
P24	C	N-5		41	40	16.877	16.783		9
P25	C	N-4		44	40	16.888	16.833		6
P26	C	N-5	○	36	30	16.885	—	—	—
P27	C	N-4		84	34	16.880	16.838		4
P28	C	N-4		30	19	16.880	16.833		5
P29	C	N-5		36	36	16.876	16.820		6
P30	C	N-4	○	70	30	16.866	16.715		15
P31	C	N-4		50	32	16.834	16.723		11
P32	C	N-5		40	32	16.883	16.805		8
P33	C	N-5		44	38	16.878	16.837		4
P34	C	N-5		24	18	16.883	16.845		4
P35	C	N-5		28	25	16.898	16.837		6
P36	C	N-5	○	34	30	16.841	16.430		41
P37	C	N-5		23	15	16.743	16.628		11
P39	C	N-4		74	60	16.685	16.543		14
P40	C	M-6		40	40	16.784	16.558		23
P41	C	M-6		30	24	16.890	16.746	16.796	14
P42	C	N-6	○	40	35	16.814	16.661	16.796	15
P43	C	N-6	○	32	30	16.866	16.791		7
P44	C	N-6	○	30	26	16.875	16.509		37
P45	C	N-6	○	34	26	16.882	16.635		25
P46	C	N-6	○	26	25	16.836	16.368		47
P47	C	N-6	○	60	42	16.870	16.465		41
P48	C	N-6	○	50	36	16.848	16.520		33
P49	C	N-6	○	30	24	16.666	16.431		23
P50	C	N-6	○	42	40	16.856	16.643		21
P51	C	N-6	○	50	42	16.857	16.405		45
P53	C	M-3		30	16	16.840	16.592		25
P54	C	M-3	○	25	20	16.790	16.470		32
P55	C	M-3		40	38	16.688	16.584		10

遺構	区	グリッド	遺物	長軸 (cm)	短軸 (cm)	検出面 標高 (m)	底面標高 (m)	段部など (m)	深さ (cm)
P56	C	N-3		36	22	16.786	16.760		3
P57	C	N-3		34	32	16.770	16.631		14
P58	C	N-3		27	16	16.763	16.720		4
P59	C	N-3		74	32	16.779	16.720		6
P60	C	N-3		24	24	16.861	16.721		14
P61	C	N-3		26	23	16.860	16.712		15
P62	C	M-3		36	26	16.722	16.526		20
P63	C	N-3		26	26	16.701	16.563		14
P64	D	N-20	○	56	54	16.849	16.481	16.762	37
P67	D	O-2		40	40	16.812	16.748		6
P68	D	N-20		34	34	16.856	16.598		26
P69	D	N-1		44	44	16.772	16.598		17
P70	D	O-2		30	22	16.830	16.742		9
P71	D	O-2		32	30	16.798	16.660		14
P72	D	O-2		40	26	16.802	16.667		13
P73	D	O-2		34	34	16.781	16.706		7
P74	D	O-2	○	44	30	16.768	16.601		17
P75	D	P-2		30	25	16.774	16.688		9
P76	D	P-2	○	76	72	16.761	16.486	16.548 16.529	27
P77	D	P-2		86	86	16.788	16.338	16.434	45
P78	D	P-2	○※	72	64	16.773	16.434		34
P79	D	P-2	○※	86	64	16.770	16.311		46
P80	D	P-2	○	96	84	16.786	16.345		44
P81	D	P-1	○	72	46	16.805	16.461		34
P82	D	N-2		54	42	16.843	16.296		55
P83	C	N-2		80	50	16.858	16.656		20
P84	C	M-3		26	26	16.703	16.585		12
P85	C	M-3		34	32	16.748	16.493		26
P86	C	M-3		30	30	16.722	16.510		21
P87	C	M-3		32	15	16.807	16.374		43
P88	D	P-2		32	28	16.754	16.701		5
P89	D	P-2		16	16	16.720	16.710		1
P90	D	P-2		26	24	16.754	16.695		6
P91	D	Q-2	○	38	38	16.760	16.643		12
P92	D	R-2	○	30	20	16.746	16.709		4
P93	D	S-2		34	28	16.745	16.656		9
P94	D	S-2	○	70	66	16.714	16.527		19
P95	D	T-2		17	17	16.718	16.670		5
P96	D	T-2	○	34	34	16.675	16.517		16
P97	D	T-2		29	30	16.676	16.617		6
P98	D	T-2		42	30	16.688	16.596		9
P99	D	T-2	○	43	30	16.678	16.563		12
P100	D	T-2		50	32	16.712	16.529		18
P101	D	T-2		18	18	16.647	16.585		6
P102	D	T-2		28	27	16.663	16.619		4
P103	D	T-2		54	34	16.664	16.543		12
P104	D	T-2	○	50	36	16.663	16.580		8
P105	D	U-2		34	28	16.702	16.653		5
P106	D	U-2		48	44	16.674	16.587		9
P107	D	U-2		40	40	16.653	16.609		4
P108	D	U-2	○	15	14	16.678	16.525		15
P109	D	U-2		50	32	16.701	16.539		16
P110	D	U-2		22	22	16.709	16.657		5

表2 ピット計測表(2)

遺構	区	グリッド	遺物	長軸 (cm)	短軸 (cm)	検出面 標高 (m)	底面標高 (m)	段部など (m)	深さ (cm)
P111	D	U-2		56	24	16.707	16.594	16.632	11
P112	D	U-2		32	28	16.707	16.573		13
P113	D	U-2		28	28	16.702	16.610		9
P114	D	V-2	○	46	34	16.707	16.665		4
P115	D	V-2		40	32	16.674	16.509		16
P116	D	V-2	○	40	40	16.705	16.463		24
P117	D	V-2	○	48	32	16.585	16.465		12
P118	D	V-2	○	44	44	16.657	16.556	16.597	10
P119	D	V-2	○	45	34	16.697	16.411		29
P120	D	V-2		38	37	16.674	16.475		20
P121	D	V-2	○	44	44	16.685	16.478		21
P122	D	V-2	○	36	32	16.672	16.593		8
P123	D	W-2		28	28	16.672	16.557		12
P124	D	V-2		32	21	16.680	16.546		13
P125	D	V-2		30	26	16.646	16.615		3
P126	D	V-2		16	16	16.617	16.585		3
P127	D	V-2		13	13	16.675	16.540		14
P128	D	W-2	○	50	25	16.653	16.551	16.591	10
P129	D	W-2		44	42	16.637	16.439		20
P130	D	W-2		40	25	16.645	16.563		8
P131	D	W-2	○	42	40	16.648	16.502		15
P132	C	N-7	○	62	60	16.827	16.334		49
P133	C	N-6	○	30	28	16.842	16.459		38
P134	C	N-6	○※	45	40	16.829	16.393		44
P135	C	N-6		38	30	16.843	16.727		12
P136	C	N-7		45	36	16.872	16.705		17
P137	C	N-7	○	54	50	16.653	16.432	16.604	22
P138	C	N-6		60	40	16.838	16.663		18
P139	C	N-6	○	40	30	16.842	16.462		38
P140	C	O-8		52	44	16.701	16.569		13
P141	C	O-8	○	46	44	16.805	16.671		13
P142	C	N-8		41	34	16.809	16.488		32
P143	C	O-8		30	30	16.704	16.530		17
P144	C	O-9		40	30	16.620	16.304		32
P145	C	O-9	○※	56	44	16.822	16.587		23
P146	C	N-9		70	34	16.826	16.777		5
P147	C	N-9		64	58	16.765	16.277	16.564	49
P148	C	N-8	○	70	64	16.841	16.612		23
P149	C	N-8	○※	50	42	16.854	16.419		43
P150	C	N-8	○	50	34	16.857	16.455		40
P151	C	N-9		50	39	16.831	16.617		21
P152	C	O-9		40	30	16.805	16.751		5
P153	C	N-9	○	26	26	16.795	16.697		10
P154	C	M-9		34	34	16.817	16.754		6
P155	C	N-9		23	20	16.718	16.662		6
P156	C	N-9		26	24	16.823	16.717		11
P157	C	N-9		46	32	16.792	16.669		12
P158	C	N-10	○	38	32	16.791	16.746		5
P159	C	N-9		30	15	16.794	16.710		8
P160	C	N-9		28	20	16.813	16.722		9
P161	C	O-9	○	24	18	16.798	16.705		9
P162	C	N-10		43	30	16.677	16.576		10
P163	C	M-10		20	20	16.682	—		—

遺構	区	グリッド	遺物	長軸 (cm)	短軸 (cm)	検出面 標高 (m)	底面標高 (m)	段部など (m)	深さ (cm)
P164	C	N-10	○	28	24	16.787	16.641		15
P165	C	N-10		22	21	16.785	16.743		4
P166	C	N-10		30	20	16.766	16.713		5
P167	C	N-10		40	28	16.781	16.647	16.725	13
P168	C	N-10	○	23	17	16.796	16.507		29
P169	C	N-10		20	20	16.753	16.664		9
P170	C	N-11	○	42	39	16.749	16.669		8
P171	C	N-11		46	32	16.749	16.684		6
P172	C	N-11		30	24	16.763	16.243		52
P173	C	N-11	○※	50	42	16.747	16.640		11
P174	C	O-11	○※	54	43	16.793	16.547		25
P175	C	O-11	○	30	23	16.749	16.435	16.704	31
P176	C	N-11	○※	36	30	16.693	16.377		32
P177	C	N-11		30	30	16.716	16.694		2
P178	C	N-11		32	26	16.748	16.415		33
P179	C	N-11	○	44	40	16.750	16.658		9
P180	C	N-11		50	38	16.759	16.713		5
P181	C	N-11	○	70	64	16.769	16.714	16.463	5
P182	C	O-12		40	30	16.748	16.401	16.706	35
P184	C	N-12		40	26	16.727	16.662		7
P185	C	N-12		36	23	16.727	16.545	16.604	18
P186	C	N-12		44	20	16.732	16.635		10
P187	C	N-12	○	40	30	16.735	16.328		41
P188	C	N-12	○	30	24	16.749	16.472		28
P189	C	N-12		32	30	16.759	16.666		9
P190	C	N-12		26	24	16.754	16.696		6
P191	C	N-12		34	26	16.750	16.588		16
P192	C	N-12		35	30	16.745	16.608		14
P193	C	N-13	○	50	42	16.738	16.581	16.670	16
P194	C	N-13		22	19	16.743	16.470		27
P195	C	N-13		32	24	16.742	—		—
P196	C	N-13		42	34	16.758	16.450		31
P197	C	N-13		38	22	16.730	16.620		11
P198	C	N-13		20	15	16.763	—		—
P199	C	N-13		34	24	16.762	16.666		10
P200	C	N-13		42	40	17.203	17.029		17
P201	C	N-13		28	25	17.171	17.065		11
P202	C	N-13		44	16	17.173	17.062		11
P203	C	N-13		34	24	17.170	17.028		14
P204	C	N-13	○	36	30	17.170	16.959		21
P205	C	N-14		64	50	17.177	17.070	17.049	11
P206	C	O-14		50	44	17.172	17.163		1
P207	C	O-14		40	29	17.160	17.107		5
P208	C	O-14	○	36	30	17.149	17.092		6
P209	C	N-14		46	30	17.156	—		—
P210	C	O-14	○	50	30	17.089	16.886		20
P211	C	O-14		26	26	17.150	—		—
P212	C	N-14	○	30	20	17.118	17.010		11
P213	C	N-14		34	16	17.154	16.971		18
P214	C	N-14	○	44	34	17.055	16.928	16.990	13
P215	C	N-14		24	24	17.082	16.985		10
P216	C	N-14		20	15	17.033	16.980		5
P217	C	N-14	○	17	17	17.061	17.014		5

表2 ピット計測表(3)

遺構	区	グリッド	遺物	長軸 (cm)	短軸 (cm)	検出面 標高 (m)	底面標高 (m)	段部など (m)	深さ (cm)
P218	C	N-14		18	8	17.033	—		—
P219	C	N-14		32	30	17.077	16.898		18
P220	C	N-14	○	28	24	17.080	16.931		15
P221	C	N-14		25	18	17.062	16.795		27
P222	C	N-14		40	26	17.116	—		—
P223	C	N-14		30	26	17.140	16.936		20
P224	C	N-14	○	36	30	17.139	17.054		9
P225	C	N-14		40	32	17.140	16.949		19
P226	C	N-14		20	20	17.146	17.080		7
P227	C	N-13?		32	26	17.155	17.073		8
P229	C	N-13		34	32	17.185	16.935		25
P230	C	O-14		24	20	17.140	17.053		9
P231	C	O-14		26	24	17.150	17.120		3
P232	C	O-15		20	14	17.107	17.044		6
P233	C	O-15		26	18	17.107	17.050		6
P234	C	O-15		26	24	17.110	16.948		16
P245	C	N-14		16	16	17.145	17.086		6
P246	C	N-14		32	20	17.125	17.037		9
P247	C	N-14		26	20	17.125	16.975		15
P248	C	N-15		40	24	17.110	—		—
P249	C	N-15		22	20	17.090	17.000		9
P250	C	O-15		22	20	17.160	17.046		11
P251	C	N-15		36	22	17.154	16.955		20
P252	C	N-15		38	22	17.161	16.935	17.010	23
P253	C	N-15		26	22	17.083	16.866		22
P254	C	N-15	○※	30	28	17.147	16.855		29
P255	C	N-16		46	36	17.156	17.060		10
P256	C	N-16		28	28	17.100	17.007		9
P261	C	N-16		26	20	16.674	16.389		29
P262	C	N-16		34	28	16.565	16.517		5
P263	C	N-16		20	16	16.585	16.580		1
P264	C	N-16		32	30	16.649	16.362	16.466	29
P265	C	O-16		36	36	16.583	—		—
P266	C	N-17	○	30	22	16.564	16.436		13
P267	C	N-17		28	20	16.626	—		—
P268	C	N-16		34	30	16.592	16.552		4
P269	C	N-17		18	14	16.653	16.484		17
P270	C	N-17		26	18	16.659	16.383		28
P271	C	O-17		44	32	16.597	16.443		15
P272	C	N-17		42	24	16.610	16.413	16.440	20
P273	C	N-17		40	22	16.434	16.291		14
P274	C	N-17	○	26	26	16.604	16.314		29
P275	C	O-17		22	20	16.604	16.421		18
P276	C	N-18		38	26	16.592	16.366		23
P277	C	N-18		36	14	16.601	16.146		45
P278	C	N-18		22	16	16.602	16.545		6
P279	C	O-18		36	24	16.423	16.189		23
P280	C	O-18		24	20	16.608	16.529		8
P281	C	O-18		24	22	16.608	16.557		5
P282	C	O-18		22	14	16.611	16.560		5
P283	C	O-18		38	32	16.589	16.412		18
P284	C	O-18		52	36	16.620	—		—
P285	C	O-18		38	30	16.602	16.412	16.482	19

遺構	区	グリッド	遺物	長軸 (cm)	短軸 (cm)	検出面 標高 (m)	底面標高 (m)	段部など (m)	深さ (cm)
P286	C	N-18		36	32	16.590	16.549		4
P287	C	N-18		34	30	16.600	16.519		8
P288	C	N-19		50	40	16.580	16.322	16.379	26
P289	C	O-18		42	28	16.619	16.509	16.558	11
P290	C	O-18		40	24	16.469	16.329		14
P291	C	O-19		26	22	16.458	—		—
P292	C	N-19		82	40	16.583	16.484	16.494	10
P293	C	O-19		34	26	16.554	16.457		10
P294	C	O-19		46	18	16.602	16.467	16.507	14
P295	C	N-13		26	22	16.704	16.621		8
P296	C	N-13		28	26	16.711	16.614		10
P297	C	N-13	○	32	30	16.711	16.603		11
P299	C	N-14		28	26	16.708	16.656		5
P300	C	N-14		32	24	16.712	16.609		10
P301	C	N-14	○	34	26	16.682	16.483		20
P302	C	N-14		28	22	16.720	16.617	16.660	10
P303	C	O-14		48	32	16.723	16.406	16.648 16.663	32
P304	C	O-14		30	24	16.708	16.562		15
P305	C	N-15	○※	50	32	16.722	16.468		25
P306	C	N-15		24	20	16.722	16.632		9
P307	C	N-15	○	26	24	16.727	16.591		14
P308	C	N-15		26	24	16.727	16.543		18
P309	C	O-15		14	12	16.703	16.593		11
P311	C	D-19		40	28	16.497	16.317		18
P312	C	D-20		52	40	16.531	16.214		32
P313	C	N-20		48	30	16.554	16.444		11
P314	C	D-20	○	70	44	16.546	16.477		7
P315	C	D-20		40	26	16.537	16.263		27
P316	C	D-20		32	28	16.529	16.136		39
P317	C	D-21		46	30	16.538	16.477		6
P318	C	D-21		80	24	16.535	16.219	16.397	32
P319	C	D-21	○	30	20	16.538	16.435		10
P320	C	D-21		80	66	16.525	16.462		6
P321	C	D-21		46	40	16.533	16.419		11
P323	C	O-21	○	46	40	16.526	16.330		20
P324	C	O-21・22		48	28	16.518	16.381	16.476	14
P325	C	O・N-22	○	80	72	16.513	16.442		7
P326	C	O-22	○※	130	22	16.488	15.477	16.354	101
P327	C	O-22	○	124	116	16.521	15.827	16.317	69
P328	C	O-23	○※	140	96	16.503	15.569	16.205	93
P329	C	O-23	○※	166	54	16.461	15.666	16.210	79
P330	C	O-24		38	34	16.481	16.355		13
P331	C	P-25		28	22	16.282	16.126		16
P332	B	P-35		50	40	16.366	16.349		2
P333	B	P-35		32	26	16.373	16.243		13
P334	B	P-35		40	36	16.377	16.285		9
P335	B	P-35	○	28	26	16.380	16.333		5
P336	B	P-35		36	30	16.413	16.353		6
P337	B	P-35		70	40	16.381	16.349		3
P338	B	O-35		30	30	16.378	16.148	16.208	23
P339	B	P-35		28	28	16.397	16.322		7
P340	B	P-35		34	30	16.401	16.217		18
P341	B	P-35		34	28	16.368	16.257		11

表2 ピット計測表(4)

遺構	区	グリッド	遺物	長軸 (cm)	短軸 (cm)	検出面 標高 (m)	底面標高 (m)	段部など (m)	深さ (cm)
P342	B	P-35		62	40	16.372	16.196		18
P343	B	P-35		70	32	16.383	16.217		17
P344	B	P-35		58	52	16.388	16.167		22
P345	B	P-35		34	24	16.377	16.298		8
P346	B	P-35	○	54	48	16.394	16.152	16.178	24
P347	B	P-35		74	40	16.427	16.178		25
P348	B	P-34・35		56	48	16.376	16.167		21
P349	B	P-34		44	42	16.403	16.248		15
P350	B	P-34		50	34	16.405	16.278		13
P351	B	P-34		56	46	16.400	16.205		20
P352	B	P-34		24	22	16.368	16.304		6
P353	B	P-34		36	36	16.416	16.210	16.229	21
P354	B	P-34		36	34	16.400	16.249		15
P355	B	O-34		52	44	16.403	16.240		16
P356	B	O-34		32	30	16.391	16.277		11
P357	B	P-34		44	34	16.283	16.005		28
P358	B	P-34		60	30	16.324	16.188		14
P359	B	P-33		50	34	16.404	16.277		13
P360	B	P-33		44	36	16.448	16.197	16.262	25
P361	B	P-33	○	54	48	16.439	16.119	16.359	32
P362	B	P-33		60	48	16.437	16.122		32
P363	B	P-33		48	46	16.479	16.310		17
P364	B	O-33		46	40	16.419	16.325		9
P365	B	P-33		24	22	16.277	16.153		12
P366	B	P-33		22	22	16.320	16.172		15
P367	B	P-32		32	30	16.438	16.285		15
P368	B	P-32		60	24	16.502	16.437		6
P369	B	P-32	○※	32	30	16.356	16.212		14
P370	B	P-32		34	30	16.477	16.290		19
P371	B	P-32	○	70	52	16.491	16.190	16.260	30
P372	B	P-32		52	32	16.477	16.310		17
P373	B	P-32		62	42	16.492	16.237		26
P374	B	P-31	○	32	22	16.480	16.251		23
P375	B	O・P-32		22	16	16.478	16.448		3
P376	B	O・P-32		54	52	16.478	16.434		4
P377	B	P-32	○※	40	28	16.482	16.282		20
P378	B	P-31・32	○	56	26	16.488	16.300		19
P379	B	O-31		48	30	16.477	16.328		15
P380	B	O-31	○	32	30	16.418	16.155		26
P381	B	P-31	○	30	16	16.486	16.434		5
P382	B	P-31		46	30	16.476	16.279		20
P383	B	P-31	○	48	40	16.469	16.142	16.341	33
P384	B	O-31		56	40	16.467	16.275		19
P385	B	P-31		32	18	16.471			
P386	B	P-31		22	14	16.294	16.172		12
P387	B	P-31		24	26	16.338	16.330		1
P388	B	P-31		22	20	16.325	16.190		13
P389	B	P-31		52	32	16.350	16.096	16.185	25
P390	B	P-31		42	16	16.345	16.260		8
P391	B	Q-31		32	28	16.317	16.246		7
P392	B	P-31		34	28	16.350	16.176		17
P393	B	P-31		28	28	16.443	16.202		24
P394	B	P-31	○	48	44	16.445	16.202	16.358	24

遺構	区	グリッド	遺物	長軸 (cm)	短軸 (cm)	検出面 標高 (m)	底面標高 (m)	段部など (m)	深さ (cm)
P395	B	P-30		26	26	16.476	16.320		16
P396	B	P-30		34	26	16.476	16.409		7
P397	B	P-30	○	52	42	16.484	16.103		38
P398	B	P-30		36	26	16.438	16.237		20
P399	B	P・O-30		58	42	16.438	16.442		0
P400	B	P-30	○	56	26	16.452	16.132		32
P401	B	Q-30		30	20	16.490	16.390		10
P402	B	P-30	○※	32	28	16.448	16.323		13
P403	B	P-30		24	24	16.474	16.276		20
P404	B	P-30		20	20	16.471	16.363		11
P405	B	P-30	○	24	24	16.601	16.230		37
P406	B	P-30		66	36	16.270	16.100		17
P407	B	P-30		40	20	16.347	16.251		10
P408	B	P-30		20	20	16.373	16.286		9
P409	B	P-30		36	34	16.147	16.035		11
P410	B	P-30		28	26	16.132	16.033		10
P411	B	P-29	○	40	30	16.203	16.025		18
P412	B	P-29		36	36	16.335	15.896		44
P413	B	P-29	○	30	26	16.309	16.013		30
P414	B	P-29		46	42	16.351	15.992		36
P415	B	P-29		52	48	16.341	16.100		24
P416	B	O-29		34	32	16.220	15.907		31
P417	B	P-29	○	36	26	16.540	16.241		30
P418	B	Q-29		30	20	16.186	15.961		23
P419	B	P-29		64	40	16.225	16.143		8
P420	B	P-29		66	54	16.225	16.095		13
P421	B	P-28	○※	60	54	16.298	16.077		22
P422	B	O-28	○	46	44	16.258	15.753		50
P423	B	P-28	○	98	42	16.375	16.009	16.241	37
P424	B	P-28	○	50	30	16.266	16.014		25
P425	B	O・P-28	○※	64	54	16.288	16.105		18
P426	B	P-28	○	44	32	16.298	16.175		12
P427	B	O-28		36	32	16.299	16.208		9
P428	B	P-28		32	30	16.293	16.232		6
P429	C	P-28	○※	62	40	16.339	16.285		5
P430	C	P-25		32	30	16.361	16.206		16
P431	C	P-26	○	34	28	16.491	16.374		12
P432	B	P-26	○	46	38	16.491	16.395		10
P433	B	P-27	○	68	56	16.311	16.019	16.283 16.311	29
P434	B	O・P-27		36	14	16.327	16.270		6
P435	B	O-27		34	32	16.309	16.194		12
P436	B	O-27		38	32	16.327	16.282		5
P437	B	P-28		30	24	16.214	16.101		11
P438	B	Q-28		52	46	16.154			
P439	B	Q-27		30	24	16.233	16.117		12
P440	B	Q-27		40	40	16.230	16.104		13
P441	B	Q-27		60	52	16.230	16.083	16.133	15
P442	B	Q-27	○※	32	26	16.268	16.069		20
P443	B	P-27		42	26	16.330	16.108		22
P444	B	P-27		40	24	16.351	16.249		10
P445	B	P-27	○	48	24	16.348	16.293		5
P446	B	P-27		56	28	16.868	16.270		60
P447	B	P-26	○	30	24	16.418	16.296		12

表2 ピット計測表(5)

遺構	区	グリッド	遺物	長軸 (cm)	短軸 (cm)	検出面 標高 (m)	底面標高 (m)	段部など (m)	深さ (cm)
P448	B	P-26		34	32	16.419	16.326		9
P449	B	P-26		26	26	16.423	16.350		7
P450	C	O-26		26	20	16.246	16.023		22
P451	C	O-25	○	22	16	16.305	16.106		20
P452	C	P-25	○	24	18	16.287	15.952		33
P453	C	P-25	○※	22	20	16.301	15.834		47
P454	C	P-25		14	14	16.300	15.899		40
P456	C	P-25		72	56	16.285	16.089	16.270	20
P457	C	P-25		20	18	16.312	16.099		21
P458	C	O-25	○	38	20	16.239	15.887		35
P459	C	O-24	○※	32	26	16.278	16.039		24
P460	C	O-24	○※	20	18	16.471	16.222		25
P461	C	O-24	○	22	14	16.226	16.155		7
P462	C	O-25	○	86	42	16.259	—	16.213	—
P463	C	N-23	○	40	36	16.479	16.234		24
P464	C	N-22		38	30	16.207	15.933		27
P465	C	O-22		46	40	16.269	16.024		24
P466	C	O-22		40	30	16.294	16.002		29
P467	C	N-21		32	32	16.306	16.024		28
P468	C	N-22	○	60	40	16.291	16.129		16
P469	A	I-37	○	50	38	15.923	15.746		18
P470	A	I-37		30	26	16.003	15.905		10
P471	A	I-37		22	18	15.989	15.923		7
P472	A	I-37	○	26	20	15.989	15.823		17
P473	A	I-37	○	78	56	15.986	15.704	15.768	28
P474	A	J-37		36	26	15.979	15.718		26
P475	A	K-37	○	42	26	15.993	15.669		32
P476	A	K-37		—	—	15.982	15.905		8
P477	A	K-37	○	34	30	16.000	15.727		27
P478	A	K-37	○	34	32	16.003	15.893		11
P479	A	K-37		38	34	15.984	15.906		8
P480	A	K-37		34	30	—	—		—
P481	A	K-37		36	24	16.023	15.837	15.923	19
P482	A	K-37		46	32	16.047	15.868	15.902	18
P483	A	K-37	○	48	34	16.104	15.887	15.937	22
P484	A	L-37	○	40	30	16.103	15.934		17
P485	A	L-37	○	50	40	16.079	15.898	15.945	18
P486	A	L-37	○	34	26	16.119	15.849		27
P487	A	L-37		52	40	16.089	15.729		36
P489	A	I-37	○	58	48	15.912	15.701		21
P492	A	J-36	○※	44	36	16.109	—		—
P494	A	L-37	○※	56	26	16.114	15.803	15.993	31
P495	A	I-38	○	52	40	—	—		—
P496	A	I-38	○	30	26	15.987	15.653		33
P377-C	C	O-24		30	26	16.398	16.291		11
P378-C	C	O-24		26	24	16.446	16.382		6
P380-C	C	O-25		48	38	16.401	16.141		26
P381-C	C	O-25		58	40	16.410	16.286		12
P468-A	A	I-37		44	36	15.961	15.783		18
P495-A	A	L-37		68	40	16.089	15.871	15.935 16.063	22

○印…遺物が出土したピット

※印…図版掲載遺物あり

●各遺構から出土した遺物の内容については  
104ページに示す。

表3 ピット出土遺物

ピット名	遺物点数	出土遺物(特徴)
P1	2	弥生。
P2	10	後期的な貼付なしの素口縁と貼付口縁(幅狭・厚)。
P3	3	内一点からはタタキ目が確認されている。弥生時代後期前半。
P3	8	微隆起帯2条を持つ個体あり。
P5	7	口縁は小片で貼付口縁。弥生中期。
P8	1	弥生。
P14・15	1	弥生。
P26	3	弥生。
P30	1	古代?須恵器1
P36	6	貼付口縁。タタキ目のある小片もあり。後期前半。
P42	1	弥生。
P43	5	弥生。
P44	5	弥生中期前半と後期前半の資料混在。タタキ石
P45	2	微隆起帯2条。弥生中期。
P46	12	弥生中期。貼付口縁で口唇が面をなす。底部は平底。
P47	2	古代?
P48	2	弥生。
P49	2	弥生。
P50	30	古代の遺構か。土師器供膳具
P51	12	弥生後期前半か?
P54	6	弥生中期前半か? 上胴部に微隆起帯2条を持つ。
P64	6	特記事項なし。
P74	1	特記事項なし。時期不明。
P76	12	土師器口縁小片。古代?
P78	23	古代。土器細片は土師器。須恵器1。
P79	25	律令期の長胴の甕。9世紀。
P80	19	土師器、弥生土器混在。須恵器2。
P81	3	特記事項なし。
P83	5	古代。須恵器1、土師器2。
P91	1	素口縁。
P92	1	特記事項なし。弥生土器。
P94	3	弥生中期初頭。
P96	6	特記事項なし。
P99	3	弥生土器。円形浮文のある破片。
P108	2	特記事項なし。
P114	3	特記事項なし。弥生?
P116	2	細片。
P117	1	櫛描沈線。
P118	1	細片。
P119	4	特記事項なし。弥生?
P121	1	特記事項なし。
P122	4	特記事項なし。
P128	3	古代。
P131	2	古代。赤彩土師器1。
P132	11	
P133	9	
P134	10	
P137	1	古代?
P139	8	
P141	4	
P145	9	口縁は貼付口縁、胴部文様に櫛(直)+山形双線+扁平突帯あり。弥生中期前半。
P148	2	特記事項なし。弥生。
P149	37	緑色岩。凹線が退化し、タタキ目が登場する段階。後期前半。内面ヘラケズリ。凹線は3条。
P149	2	古代。須恵器高台あり。
P150	18	素口縁で直立する口縁。上胴部微隆起帯3条。弥生中期前半か。

ピット名	遺物点数	出土遺物(特徴)
P153	1	特記事項なし。
P158	6	櫛描沈線(直)+扁平突帯、弥生時代中期初頭。
P161	6	弥生だと考えられる。詳細不明。
P164	26	一個体か。褐色で無文。弥生後期だと考えられるもの、詳細は不明。
P168	4	古代。土器片は土師器。輪高台の底部。
P170	2	弥生だと考えられる。詳細不明。
P173	3	弥生土器。底部2点は平底。
P174	6	弥生前期末～中期前半の可能性。紡錘車実測。
P175	2	弥生。詳細不明。
P176	71	弥生時代後期前半。タタキ目のある資料で内面ヘラケズリが確認される。
P179	2	弥生。詳細不明。
P181	20	弥生時代。詳細不明。
P183	4	口縁に凹線のある。弥生時代後期前半。
P187	5	小片。
P188	5	弥生中期初頭。
P193	6	小片。
P204	2	特記事項なし。詳細不明。
P208	4	特記事項なし。詳細不明。
P210	5	弥生中期。
P212	1	
P214	6	特記事項なし。弥生。
P217	15	文様は微隆起帯2条。底部はわずかに上げ底(少し高台状に近い)。中期前半?
P220	2	特記事項なし。弥生。
P224	6	特記事項なし。詳細不明。
P254	3	弥生時代中期初頭。櫛描直線と刺突文。口縁は逆L字状。
P257	4	弥生。
P258	1	弥生。
P259	3	弥生。
P266	8	弥生中期前半。櫛(直)。
P274	4	弥生。
P297	2	弥生。
P301	9	無文。
P305	10	口縁は素口縁2点と外面に2条の微隆起帯がある資料。
P307	6	特記事項なし。詳細不明。
P314	1	弥生。(ハケ・ナデ)
P319	5	弥生。
P323	8	弥生中期。櫛描沈線。
P325	10	特記事項なし。詳細不明。
P326	29	弥生土器は貼付口縁、櫛描波状文があり、中期前半だが、須恵器の皿から、古代の遺構だと考えられる。
P327	10	特記事項なし。詳細不明。
P328	21	籬状文、須恵器(ヘラ切)混在
P329	11	
P335	3	特記事項なし。
P346	3	特記事項なし。弥生土器。
P361	4	特記事項なし。
P369	2	弥生前期末～中期初頭。
P371	11	特記事項なし。
P374	8	口縁は小片だが、貼付口縁で口唇面全体に刻み目。
P377	6	弥生中期、甕頸胴部。
P378	2	土器片にハケ調整。弥生土器。
P380	7	磨耗しているが、櫛(波+籬)と平底の底部。弥生時代中期前半。
P381	6	弥生時代。詳細不明。

ピット名	遺物点数	出土遺物(特徴)
P383	8	特記事項なし。
P394	6	特記事項なし。
P397	20	貼付口縁。文様は櫛(籬+波)で「様式新段階か?」
P400	6	三角形の微隆起突帯を持つ
P402	13	弥生中期。口縁と底部については実測。貼付口縁で、素口縁と外面全体に刻み目のあるタイプ。
P405	4	特記事項なし。弥生。
P411	2	特記事項なし。
P413	2	特記事項なし。弥生。
P417	2	特記事項なし。
P421	3	甕口縁2点と頸胴部1点。
P422	7	特記事項なし。弥生。
P423	6	磁器1
P424	5	弥生ではない。
P425	3	中期前半。櫛(直+籬)、ハケ・ミガキ。
P426	1	特記事項なし。弥生。
P429	16	口唇強い凹状の貼付口縁。外面下端刻み目。上胴部微隆起帯2条。
P431	1	弥生後期。
P432	2	弥生時代だと考えられる。
P433	6	特記事項なし。
P442	3	弥生壺櫛描籬状文と赤彩土師器(盤)の高台部分か混在。いずれかか混入か?
P445	84	櫛描(直+波)。貼付口縁(素口縁、上下に刻み目、口唇前面面に刻み目)と外面に2条の微隆起帯を持つものがある。
P447	3	特記事項なし。
P451	2	弥生。
P452	1	特記事項なし。弥生。
P453	2	特記事項なし。
P458	7	特記事項なし。
P459	22	胴部文様に三角形の突帯と細めの櫛描(直+波)。貼付口縁。弥生中期中葉か。
P460	51	弥生中期前半～中葉。同一個体の胴部片。貼付口縁、口縁上下刻み目。
P461	2	詳細不明。
P462	62	櫛描直線文。口縁部小片、口唇面全面に刻み目外面下端に刻み目なし。刻み目扁平突帯を貼付。
P463	2	古代末(12世紀頃か?)土師器甕1。
P468	2	弥生。
P469	4	弥生。
P472	1	弥生。
P473	13	弥生。
P475	2	弥生。
P477	3	弥生小片。
P478	5	弥生。
P483	3	弥生。
P484	3	弥生。
P485	3	弥生。
P486	3	弥生。
P488	1	古代。土師器供膳具。
P489	9	微隆起帯2条貼付確認可能。
P490	1	弥生。
P491	1	弥生 口縁外面に微隆起帯1条貼付。
P492	10	弥生。
P493	2	弥生。
P494	8	弥生。
P495	2	弥生。
P496	1	弥生。
P497	4	弥生。 微隆起帯2～3条。



表4 溝及び溝状遺構 (SD) 出土遺物

区	遺 構	弥生土器・土師器	須恵器	その他 点数	その他	特 徴 ・ 時 期 ・ 備 考
C	SD1	7				弥生後期前半の遺物出土。
C	SD2	53	1	1	白磁1	大半は弥生だが、数点古代もある。いずれもローリングを受け、摩滅顕著。
C	SD3	36	1			弥生。古代の資料混在。底部ヘラ切り。
C	SD3-2	104	2			弥生中期前半。微隆起帯4条の個体もある。櫛描(直)3条1単位の小片、豆粒上の粘土粒貼付資料あり。
C	石列上(SD3-2上)	30			赤彩土師器2	石列(SD3-2)の上面。弥生中期と後期、古代が混在している。太目の櫛描直線文と双線の組み合わせだった資料が10点出土している。
C	SD4	24	2		輪高台	古代。輪高台の資料あり。
C	SD9	15	2			摩滅したものが多い。弥生と古代混在。土師器供膳具と羽釜の破片。古代の溝?
C	SD10	33				弥生中期の遺物出土。
C	SD13	20				詳細不明。弥生時代。
C	SD14・13	86				弥生前期(ヘラ)中期前半(櫛)、後期混在。
C	SD15	50				櫛描沈線。中期初頭。
C	SD15・SD-Hバンク	17	1			須恵器底部高台。
C	SD17	8				詳細不明。弥生時代。
C	SD18	4				特記事項なし。
C	SD19	34				弥生。貼付口縁、底部。
C	SD20	8				弥生。詳細不明。
C	SD21	7				口縁は小片。上下に刻みがある個体と素口縁の個体。
C	SD22	23				弥生。詳細不明。
C	SD23	128				弥生、古代の資料混在。
C	SD25	38				貼付口縁。弥生。詳細不明。
B	SD40	2				詳細不明。
B	SD41	10			石片	櫛描沈線。弥生中期中葉?
B	SD44	11				詳細不明。
B	SD45	8				詳細不明。
B	SD47	15				詳細不明。
B	SD48	15				弥生土器。
B	SD50	10				詳細不明。
B	SD51	18				詳細不明。
B	SD52	6				詳細不明。
B	SD55	42				弥生・古代混在。墨書須恵器出土。
A	SD58	1				弥生土器のみ。
C	SD-A	45	5	1		弥生中期、微隆起帯3条甕。弥生時代中期初頭。櫛(直)+双線。
D	SD-E	6	1		須恵器1	古代以降。
D	SD-F	6	2		須恵器2	古代?
D	SD-G	9	1		須恵器1	古代、8世紀前葉以降。
C	SD-H	521	12	4		弥生中期・後期・古代混在。摂津羽釜・大和型瓦質土器・土器転用紡錘車・不明小型土製品など。
C	SD-J	123		10	炭10	弥生時代中期中葉。櫛描波状文が3段にわたって施文される破片。
B	SD-K	74				詳細不明。
B	SD-M	3				詳細不明。
A	SD-O	20				弥生土器。
A	SD-P	49	1		須恵器1	詳細不明。
A	SD-Q	28				詳細不明。

## 6. 性格不明遺構 (SX)

掘り込みや形状のはっきり捉えられる竪穴状遺構・土坑・溝・柱穴等ピット以外のプランのはっきりしない落ち込みや浅い遺構などを性格不明遺構として一括した。SX1～11まで11箇所確認されている。SX1がC区の北端、SX2～9がD区の東半、SX10・11がC区の中央付近に位置している。

### SX1

C区北端に位置する。

弥生土器8点が出土、図示できた遺物は直立する367の壺口縁部である。他に、タタキ目を持つ胴部破片が出土している。弥生時代後期前半の遺構である。

### SX3

D区中央に位置する。

弥生土器40点が出土している。図示した遺物は322～325、いずれも壺で、322～324が頸～胴部の文様のある破片、325が底部である。322～324はクシ描直線文あるいはクシ描簾状文で施文されている。

遺構の時期は、弥生時代中期前半（中期Ⅰ－Ⅱ期、Ⅱ様式新段階）である。

### SX4

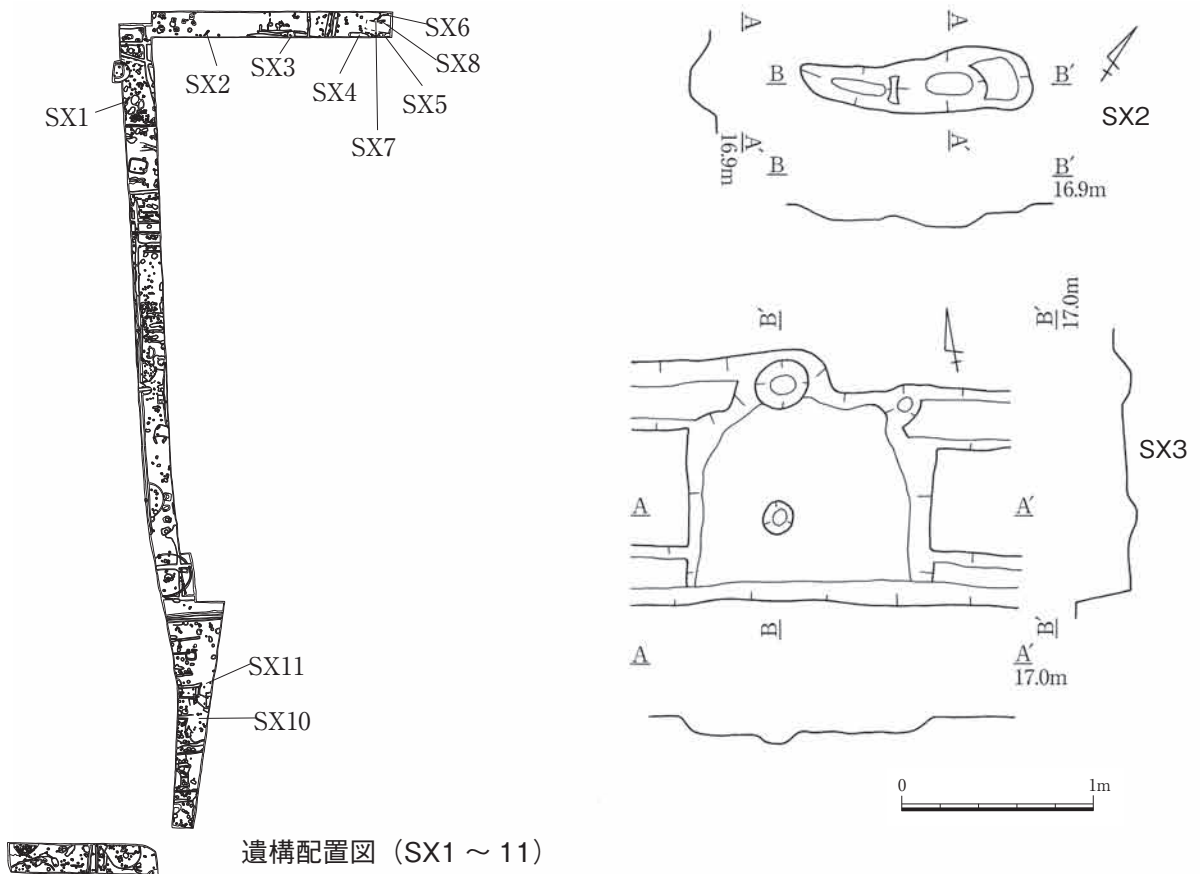
D区東に位置する。

弥生土器40点が出土している。図化した遺物はないが、壺口縁部片（貼付口縁で、口縁部内面に2条の扁平な刻目粘土帯を貼付）が含まれており、弥生中期初頭の遺構だと考えられる。

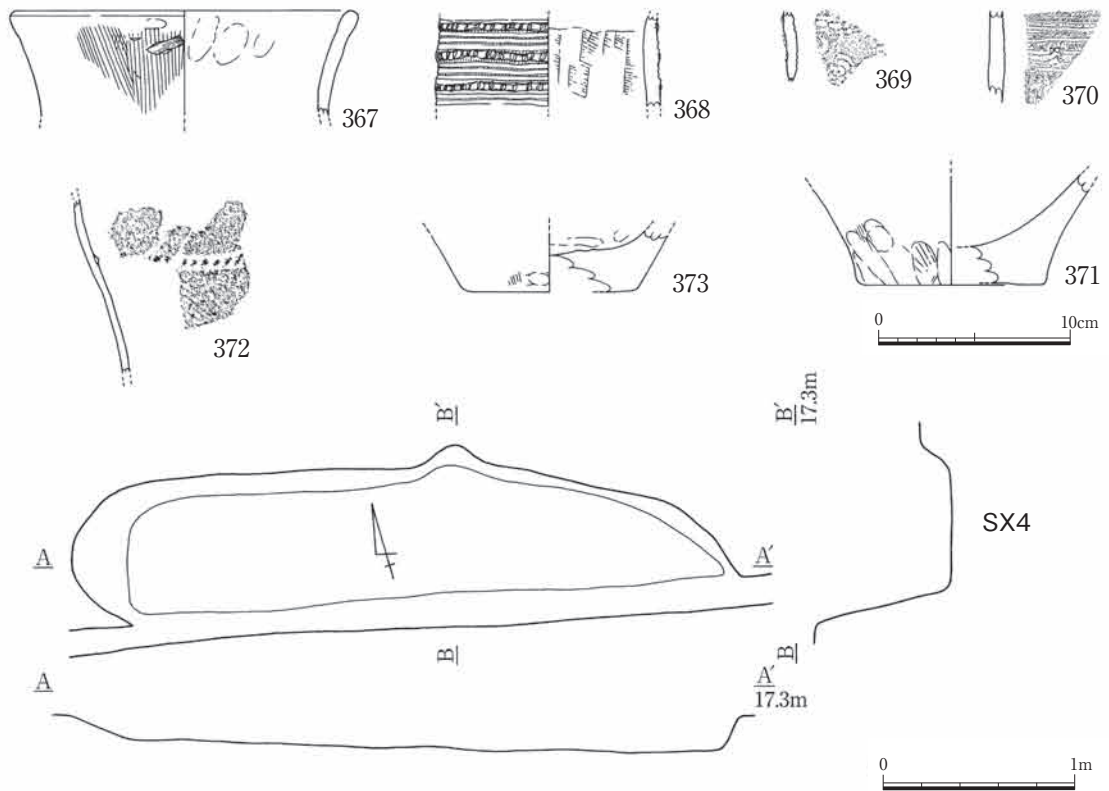
### SX10

B区中央に位置する。

弥生土器65点が出土している。図示できた遺物は372の円形浮文を持つ上胴部と373の平底の甕底部の2点である。弥生時代中期の遺構だと考えられる。



遺構配置図 (SX1 ~ 11)



第 87 図 遺構配置図 (SX1 ~ 11) 及び SX2 ~ 4 平面・エレベーション図 (S=1/40)  
出土遺物 弥生土器 (S=1/4)

## 7. 遺物集中出土地点出土遺物（土器 5・6・7）

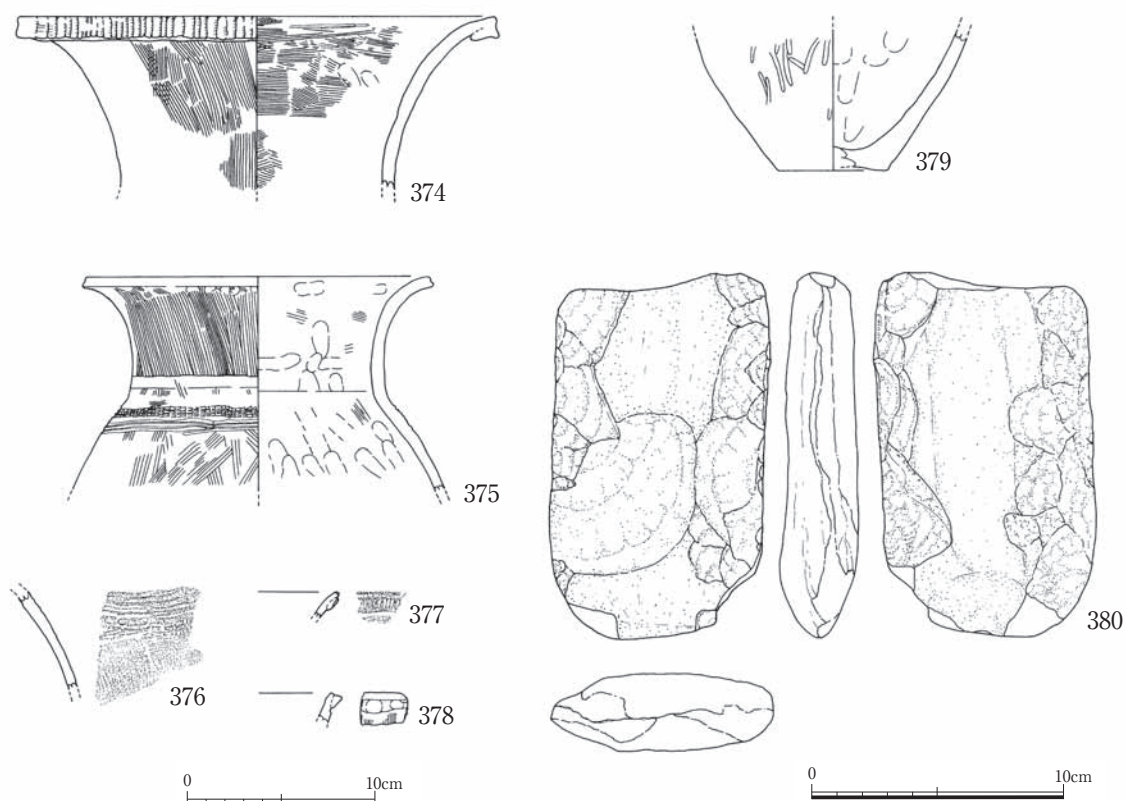
遺物が集中した地点や、土器のまとまりが捉えられるポイントから出土した土器については、土器 1～10 として位置を確認し、まとめて取り上げている。

A区の土器 1～6、B区北端の土器 7、C区北端の土器 8～10、合計 10 箇所である。このうち土器 1 は P495 からの出土であり、土器 2・3 とあわせて ST11 の遺構内から出土した遺物だと捉えている。また、土器 8～10 は ST7 の北東 4～5 m 付近に位置し、土器 9・10 は土器棺だと考えられる資料である。これらの土器については、ST11・土器棺墓の項で報告する。

土器 5・6 は A区 ST11 の北東側に位置する。SD57・SK81 と SD59・SK87 の間から検出された土器である。また、土器 7 は SK70 の北東約 1 m に近接した場所から出土している。

### 土器 5

8 点の弥生土器が出土、図示した遺物は 374 の壺口縁である。大きくラップ状に開く口縁で、貼付口縁、口唇はわずかに凹状で面全体にハケ状原体による刻目を施し、全周に巡らせる。外面は縦方向のハケ調整の後、ナデで仕上げる。内面は横方向のハケ調整で、部分的に横方向のヘラミガキが残る。弥生後期前半。



第 88 図 土器集中地点（土器 5～7）出土遺物 弥生土器（S=1/4）石器類（S=1/3）

## 土器 6

32点の弥生土器が出土している。図示したものは375～378で、いずれも壺形土器である。376は上胴部（クシ描簾状文＋直線文）、377・378は貼付口縁の口縁部小片である。375はなで肩の上胴部から、頸部は直立、口縁はラッパ状に開く壺で、素口縁で口唇は面をなし、上胴部に3条1単位のクシ描簾状文と直線文を施文する。

弥生中期前半、Ⅱ様式新段階の資料である。

## 土器 7

60点の弥生土器が出土している。無文の胴部破片が大半で、胎土・文様から弥生後期前半の資料だと考えている。

図示した379は、壺あるいは甕底部で、底面には砂粒の移動が認められる。外面はハケ・ナデの後、ヘラミガキで仕上げている。弥生時代後期前半の資料である。

## 8. 古代の溝から出土した弥生土器

出土遺物、あるいは方向や遺構の切り合いから判断して、古代以降の溝だと判断できる遺構から、弥生時代の遺物が一定量出土している。ここでは図示できた資料について、その特徴を確認しておきたい。

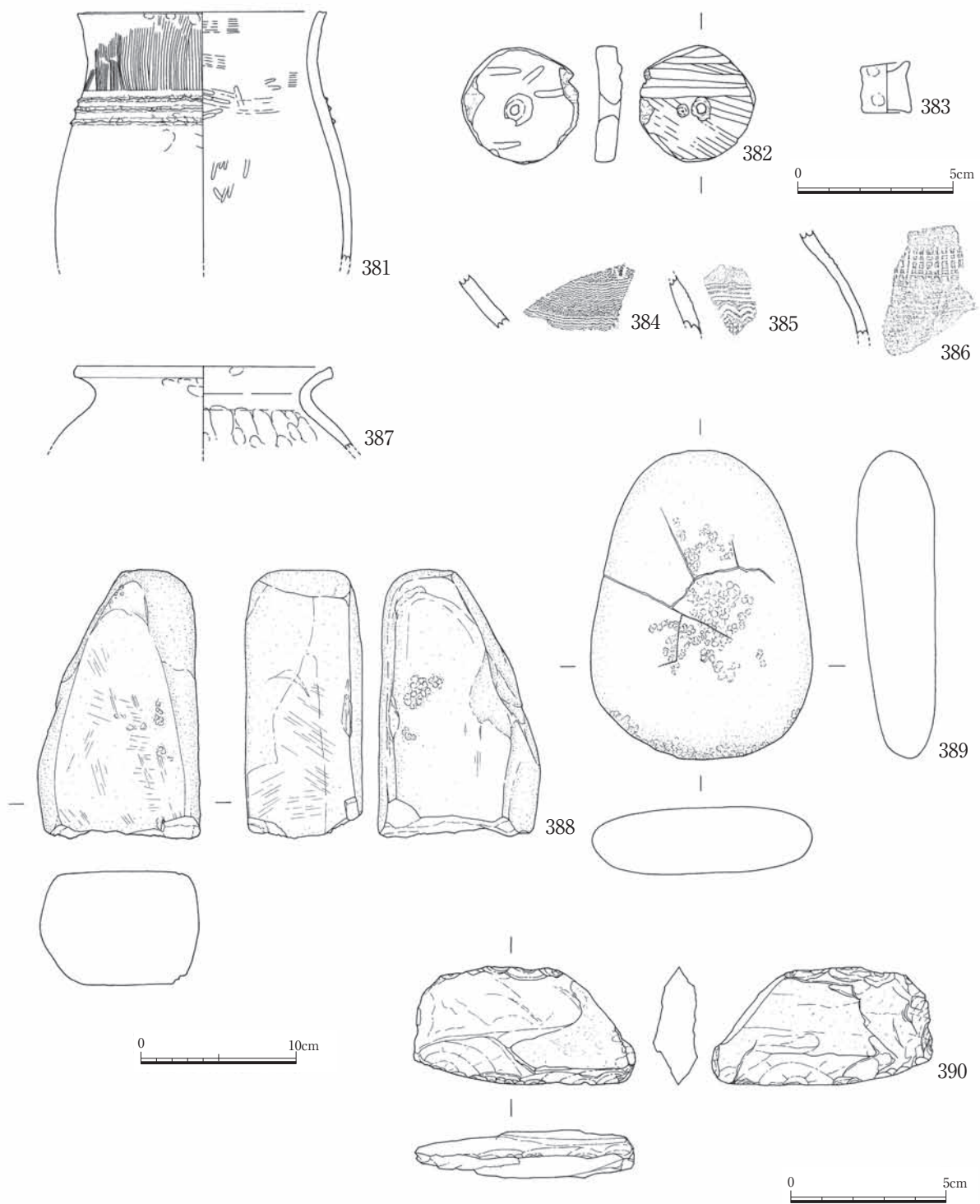
出土した遺構は、SD-A (381)、SD-H (382・383)、SD-J (384)、SD-K (385・386)、SD-14・15 (387) (以上弥生土器)、SD2 (388)、SD13 (389)、SD23 (390) (以上石器) である。

381は甕、382は土器片転用紡錘車、383は小型器台（ミニチュア土器）、384・385・は壺、386・387は甕、388は砂岩製の砥石、389は扁平な砂岩楕円礫の敲石、390は泥質砂岩の打製石器である。381は上胴部に3条の微隆起帯を持つ甕で前期末～中期初頭の資料、382の土器片転用紡錘車は、3条のヘラ描沈線が確認される前期末の資料である。383は例は少ないが、小型の器台でミニチュア土器だと考えている。クシ描沈線の特徴から、384はⅢ様式、385・386はⅡ様式の特徴を持った土器片で、386は初源的な簾状文を意識した文様である。387は後期前半の甕。溝出土の石器類は、388が砥石、389が敲石、390が頁岩の打製石包丁である。

## 9. 包含層出土資料（弥生時代の遺物）

表土（Ⅰ層）の下、Ⅱ・Ⅲ層が遺物包含層である。試掘調査時の包含層出土遺物も併せて、約5,000点の遺物が出土している。うち、弥生土器が4,800点、土師器90点、須恵器60点、石器類30点、磁器・陶器等その他の遺物20点（概数）であり、全体の96%が弥生土器である。（弥生土器の中には若干量土師器が混じっており、実際の割合はもう少し低い。）

包含層出土資料の中で図化した弥生土器は、391～404がA区、405がB区、406～411がC区からの出土で、D区包含層出土弥生土器の中に図化した遺物はない。また、包含層出土の石器類は412～428である。包含層出土石器類については器種ごとにまとめて提示する。



第 89 図 古代以降の溝から出土した弥生時代の遺物

弥生土器 (S=1/4・1/2) 石器類 (S=1/2・1/4)

※382・383・390 が S=1/2



第90図 包含層出土遺物—弥生時代—1 弥生土器 (S=1/4)

## ①弥生土器

391は壺だと考えているが、類例のほとんどない形状の口縁部で、外面に刻目突帯を貼付し、クシ描簾状文、直線文、波状文を連続して施文している。Ⅱ様式新段階である。394は頸胴界に断面三角形の突帯を貼付する。その下にクシ描簾状文を施文する。391～394が壺、395が甕、396・397が鉢だが、397は小型土器（ミニチュア土器）か。398が後期前半の高坏、399～404が壺及び甕の底部で、以上がA区出土の土器だが、底部には前期末～中期前半の特徴を持つ土器が多い。

B区包含層出土土器は405のみ図化した。底面に特徴があり、溝状（周状に）底面が凹み、少しだけ高台状になっている。

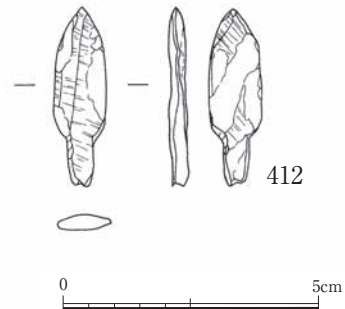
406～411がC区包含層出土弥生土器で、408以外は壺、408のみ甕である。408は無文の土佐型甕で、内面横方向のヘラミガキ、頸部外面縦方向のハケ調整という同じ調整をする例はSK50・70出土資料にある。中期前半～中葉の資料である。

## ②石器類

石器類については、器種ごとにまとめて提示する。Sで始まる番号は石器計測表用の整理番号で、今回図示しなかった資料も通し番号で整理しておく。矢印で示した番号が図版番号である。

### 磨製石鏃（S84）→412

C区から1点だけ出土している。田村遺跡群で大量に出土、大陸系の磨製石器として注目された。田村分類に当てはめると、前期中葉から後半に多い有茎式Ⅰ群B類にあたる。古い特徴を持つ有茎式磨製石鏃として、注意しておく必要がある。



第91図 包含層出土遺物  
—弥生時代—2 磨製石鏃 (S=2/3)

### 磨製石包丁（S85～89）→413～417

形態の特徴から時期の特定を行うことは難しい。田村遺跡の例でも、前期にも後期にも同様の丁寧な全面研磨した形態のものも、打製で粗雑な作りのもも存在する。石材は頁岩や泥質砂岩、極細粒砂岩など近在で入手可能で最適な石材を利用しているものと思われる。414は酸性凝灰岩である。417は極微細粒砂岩（頁岩に近い）だが、擦痕は残るものの、刃部は仕上げず成形加工の剥離をそのまま残している。

### 磨製石斧・基部（S90～94 図版掲載 S90・91・94）→418～420

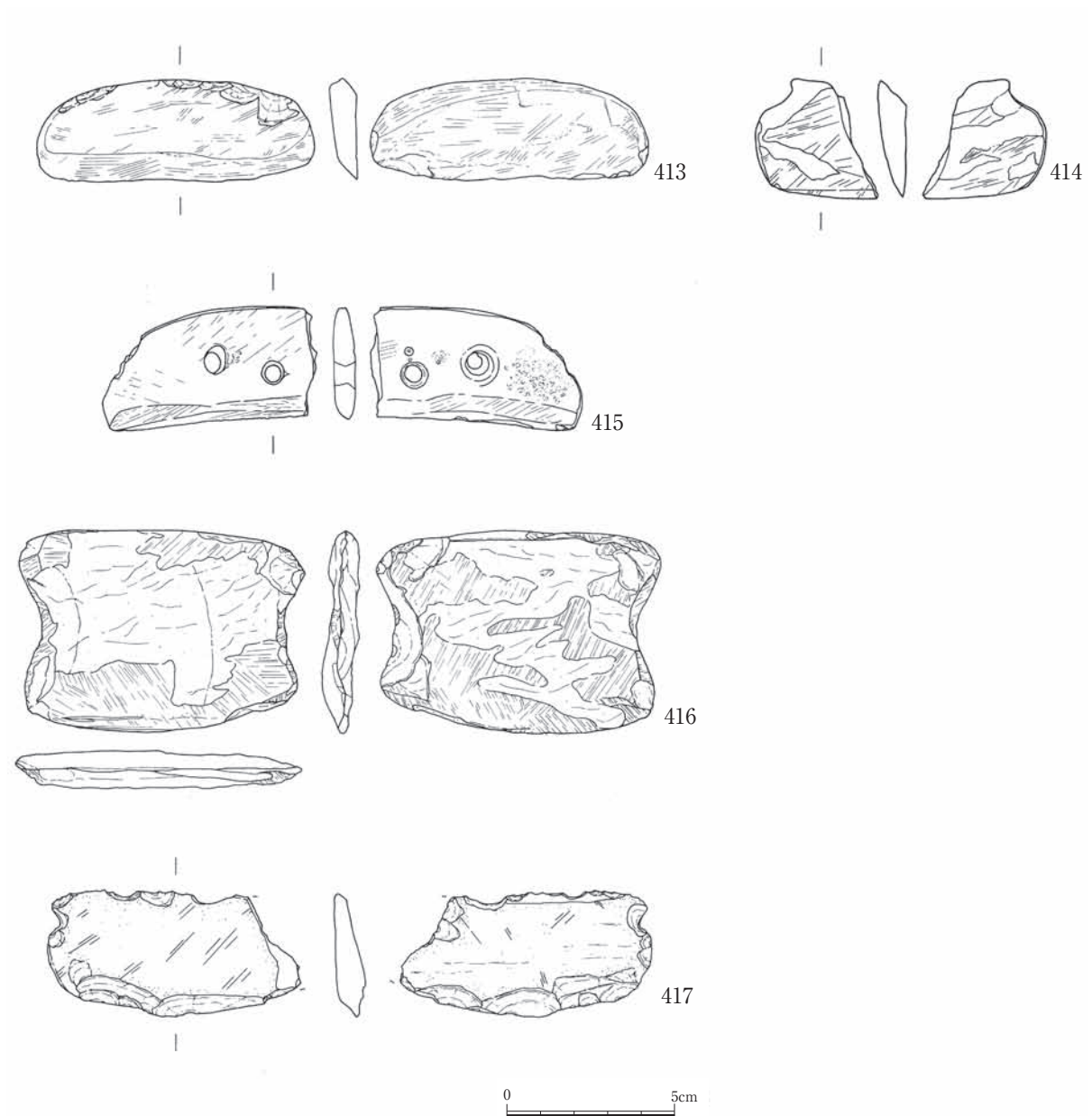
5点出土した。C区以外の調査区の包含層中から出土している点は興味深い。大半が御荷鉾緑色岩で緑色岩系の石材に限定される。破損品だが、419のように再利用の意図の見えるものもある。



選択した石材は、断面がやや扁平な礫を選んでおり、田村遺跡群の太型蛤刃分類に当てはめると、やや古相、前期に近い時期の様相を示している。

スクレイパー（削器）（S95～97）→421～423

サヌカイトが選択されている。421と422は片方の端部を側縁の両方向から加撃、抉入部を形成している。この抉入部分を上部にして石器の実測方向を決定した。421は横長剥片素材のスクレイパー（削器）である。



第92図 包含層出土遺物—弥生時代—3 石包丁（S=1/2）

打製石器 (S98 ~ 101 図版掲載 S99) → 424

土掘り具の可能性のある打製石器、あるいはその用途だと考えられる剥片類が何点か確認された。図示した 424 は片理の発達した泥質片岩で、A区から出土したものである。他の土掘り具と想定できる石器類もすべてA区からの出土である。

使用痕のある剥片 (S102) → 図化せず。計測値のみ提示。

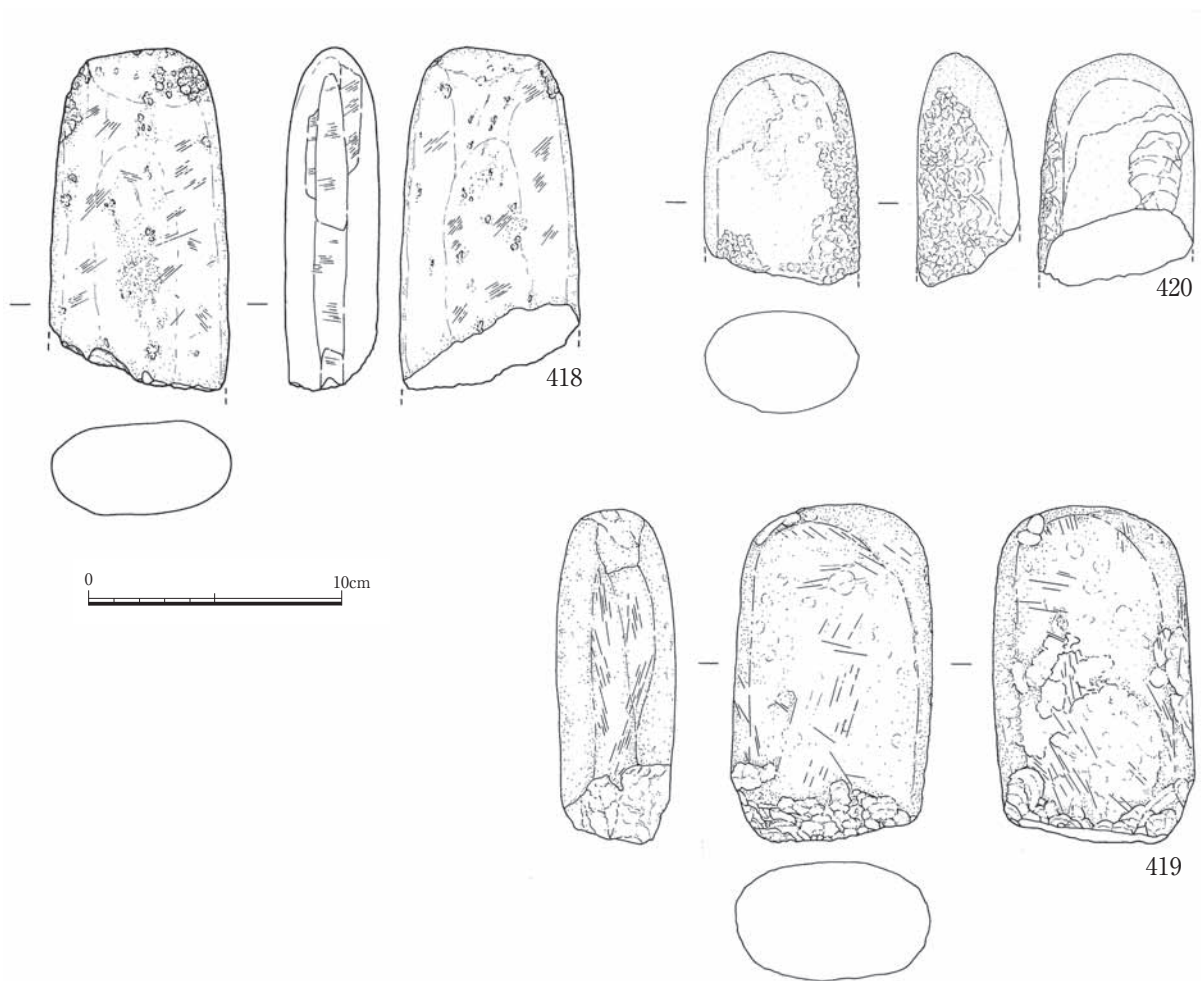
周縁に使用痕と考えられる微細剥離が連続して認められた。今回は図化していない。

敲石 (S103) → 425

棒状の砂岩で、割れており、元来の形状はよくわからない。

両極打法の確認される石器あるいは磨製石斧の未製品 (S104) → 426

実測段階で両極打法による対向剥離が認められたため、パンチの可能性を検討したが、緑色岩系



第 93 図 包含層出土遺物—弥生時代—4 磨製石斧基部 (S=1/3)

の石材は、当遺跡において全て伐採斧である太型蛤刃石斧と結びついているため、このやや扁平な棒状礫も磨製石斧の未製品という位置づけが妥当である、と考えている。

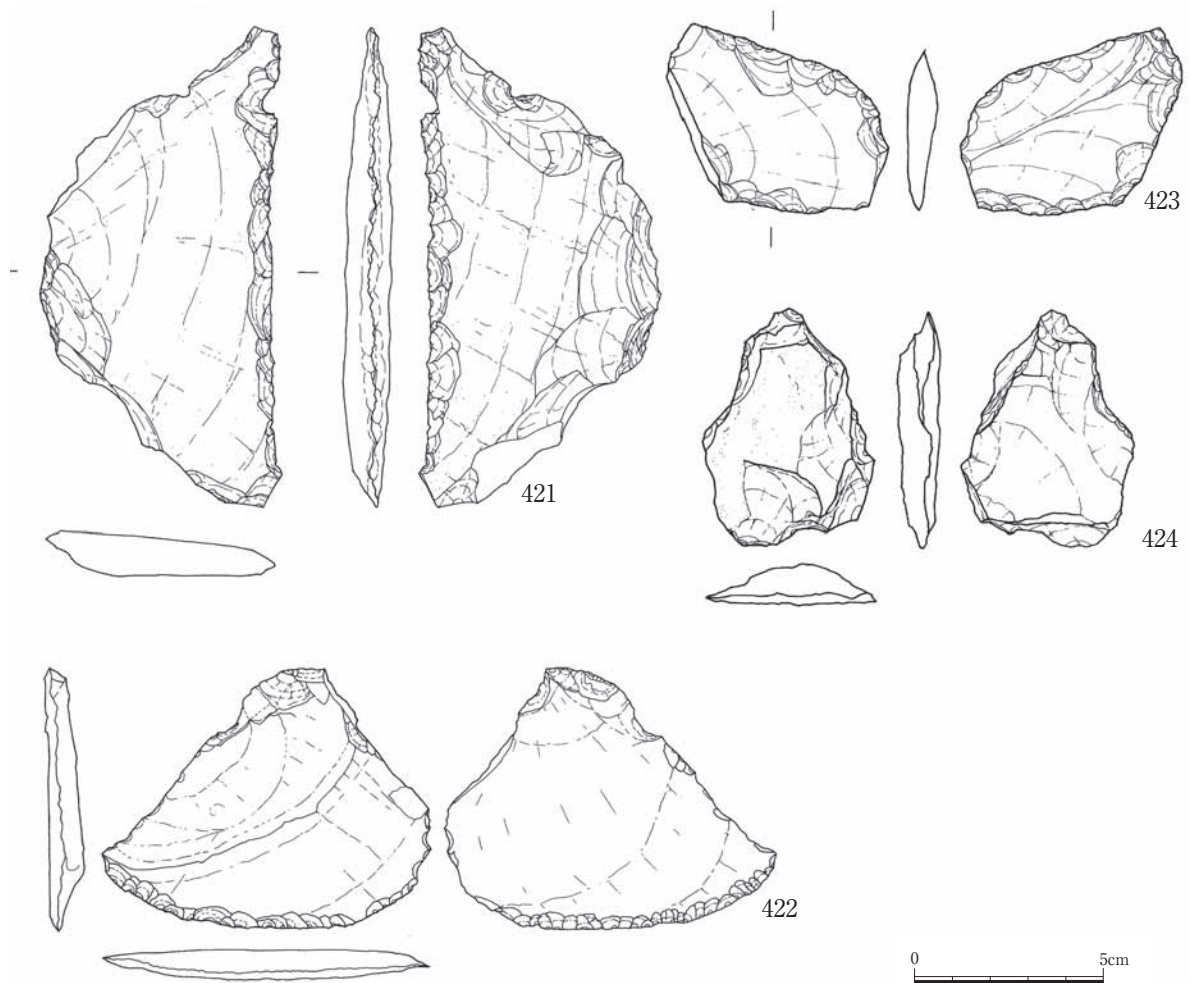
敲石類 (S105・106) → 427

扁平な円礫を利用、表裏面にしっかりした敲打痕が残り、凹状となる。堅果類など植物食のため使用された敲石である可能性がある。

剥片 (S107～116) → 図化せず

サヌカイトが3点、頁岩が1点、砂岩が3点、泥質片岩が1点、緑色岩が2点出土している。包含層出土の剥片類はすべてA区から出土したものである。

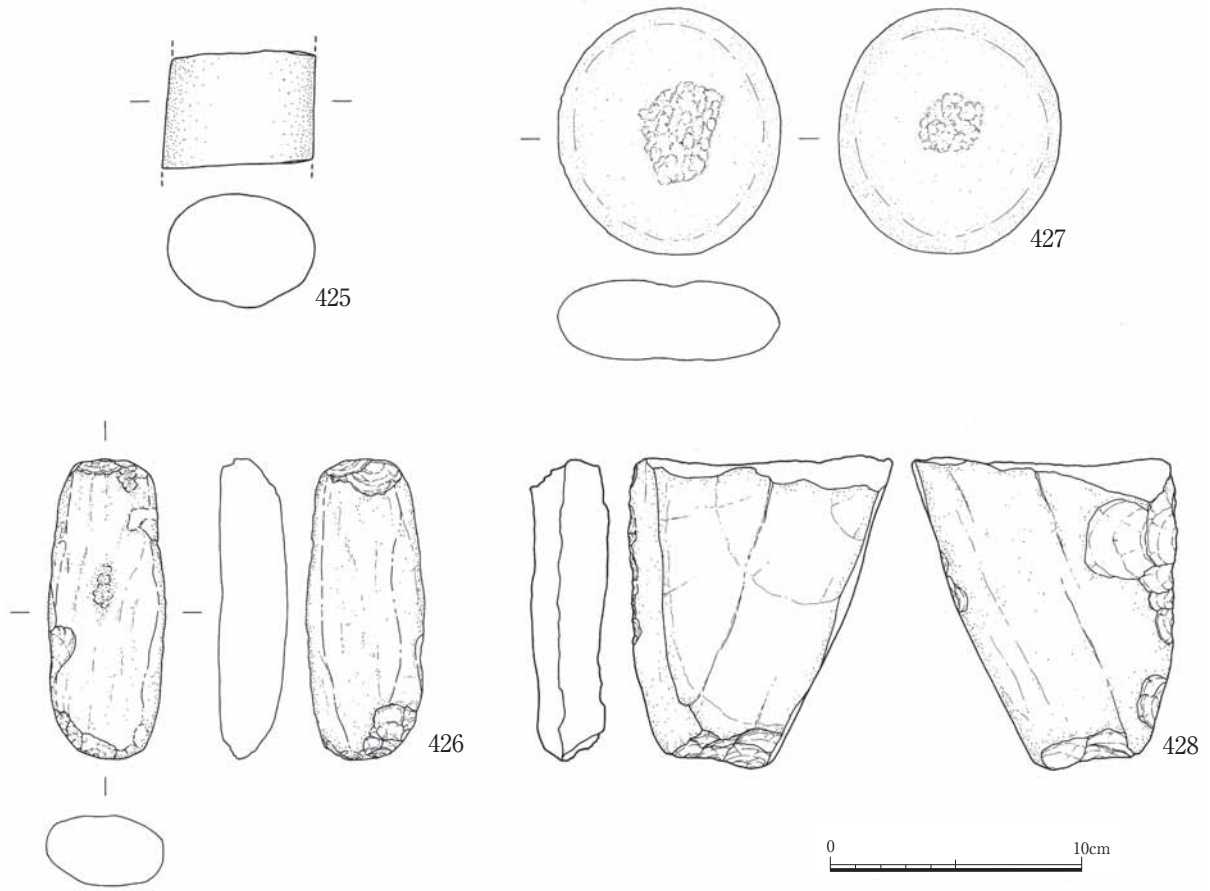
被熱赤変円礫 (S117)・円礫 (S118) も出土したが、図化していない。



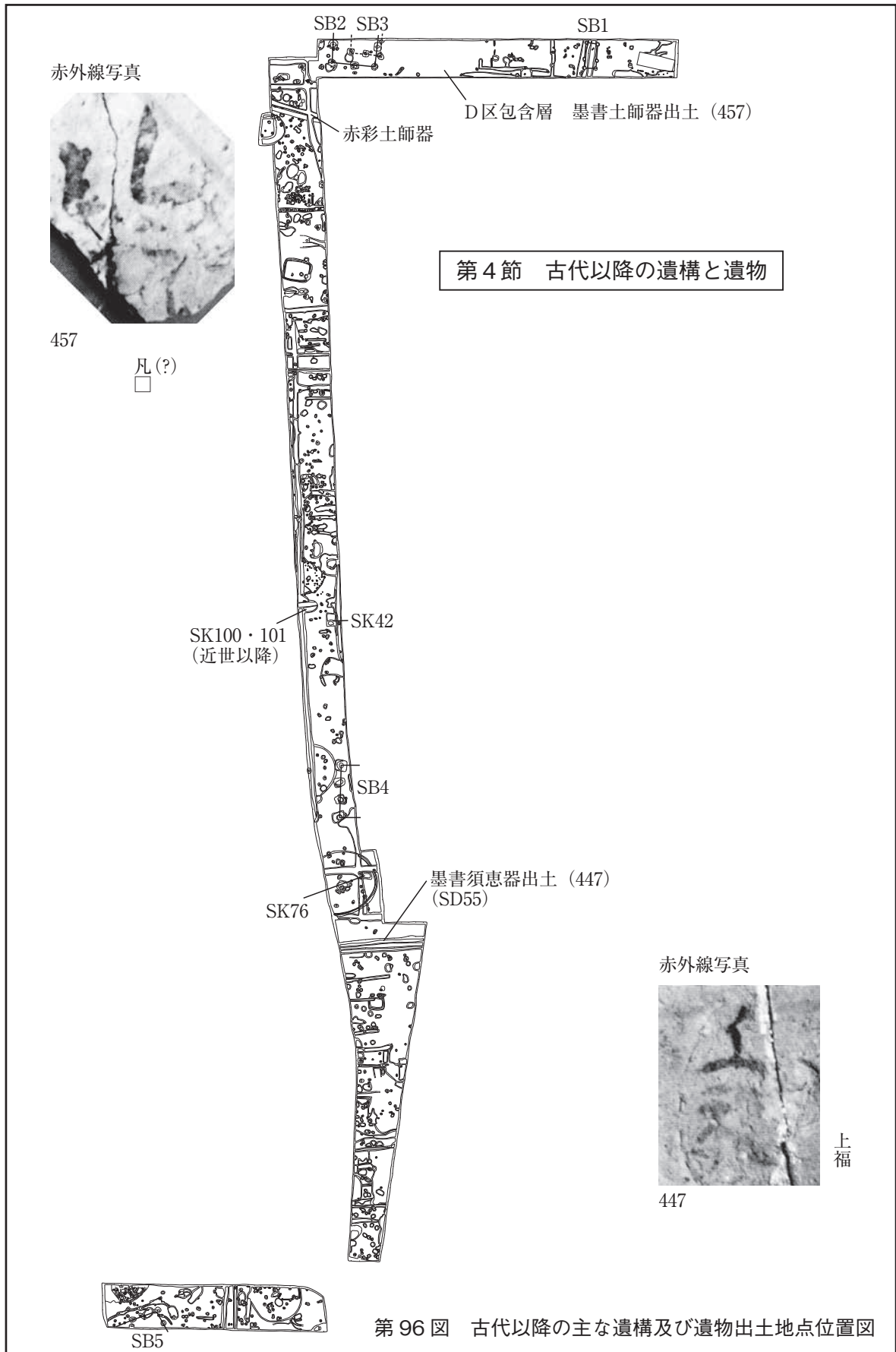
第94図 包含層出土遺物—弥生時代—5 スクレイパー類 (S=1/2)

石器素材 (S119・120) → 428

緑色片岩の板状の素材に加撃が加えられている。石斧の素材に成形する途上の可能性もあるが、断定はできない。



第 95 図 包含層出土遺物—弥生時代—6 敲石・磨製石斧未製品 (S=1/3)



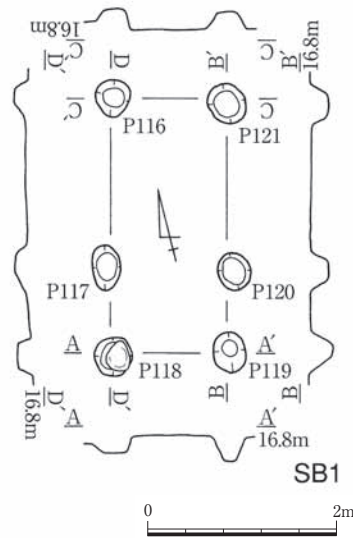
第96図 古代以降の主な遺構及び遺物出土地点位置図

# 1 掘立柱建物 (SB)

## SB1

調査区 (D区) V1・2 グリッドに位置する。北側は調査区端に接し、延伸の有無は不明である。軸方向は N-16°-E である。検出高は 16.69 m を測る。検出規模は梁間 1 × 桁行 2、梁間 1.3 m、桁行 2.7 ~ 2.8 m を測る。柱間寸法は梁間 1.3 m、桁行 0.9 ~ 1.8 m を測る。柱穴の規模は径 43cm、深さ 18 ~ 28cm を測る。

掘立柱建物を構成する柱穴 (P116 ~ 121) からそれぞれ数点の土器片が出土しているが、いずれも時期決定の決め手にはならない。



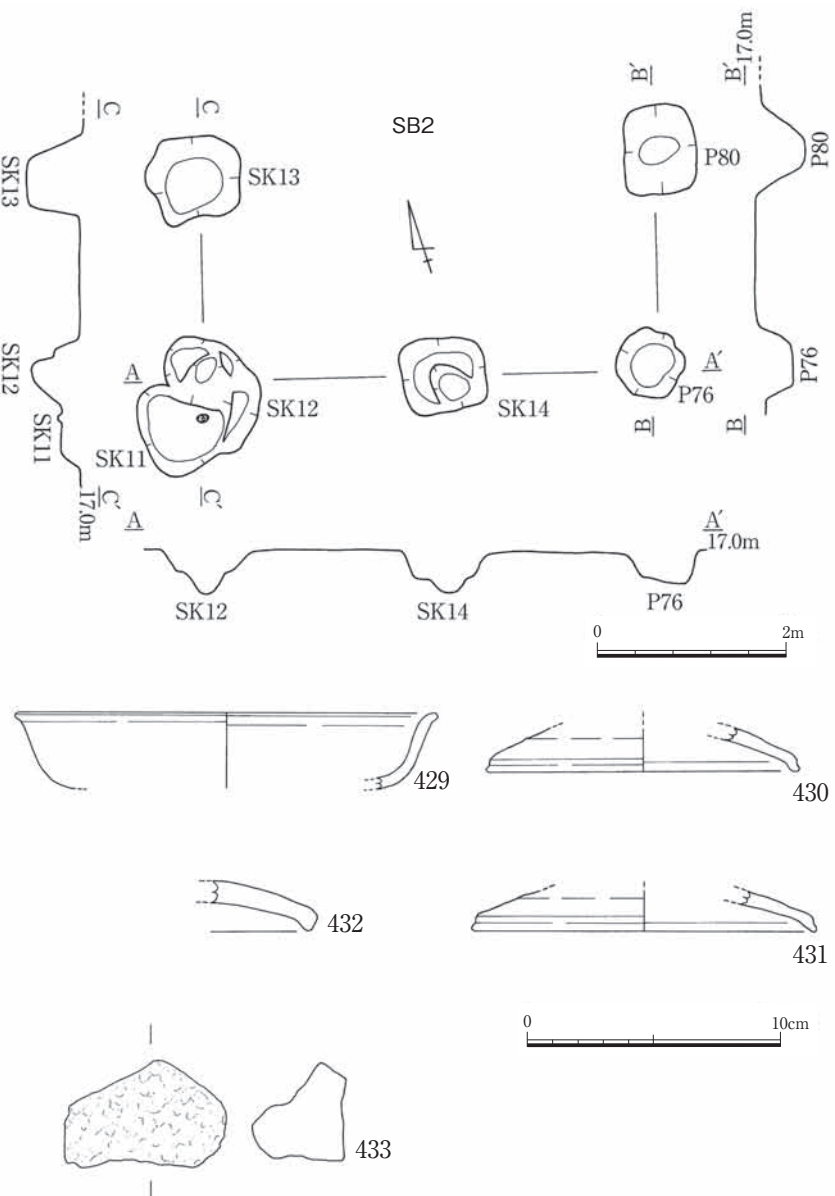
第 97 図 SB1 平面・エレベーション図 (S=1/80)

## SB2

調査区 (D区) O1・2/ P2 グリッドに位置する。北側は調査区外のため未検出であり、全体の規模は不明である。検出状態での軸方向は N-17°-E である。検出高は 16.80 m を測る。検出規模は梁間 2 × 桁行 1、梁間 4.8 m × 桁行 2.0 m を測る。柱間寸法は梁間 2.7 m、桁行 2.0 m を測る。南東隅の柱穴は未検出と考えられる。柱穴の規模は径約 1.0 m、深さ 45 ~ 58cm を測る。

構成する柱穴は SK13・SK12・14、P76・80 である。

SK13 からは土師器片が 14 点、赤彩土師器片が 3 点、須恵器が 3 点、軽石が 1 点出土し、SK12 からは遺構底面から円礫が確認されている。SK14 からは土器片が 16 点、P76 からは土師器口縁を含む破

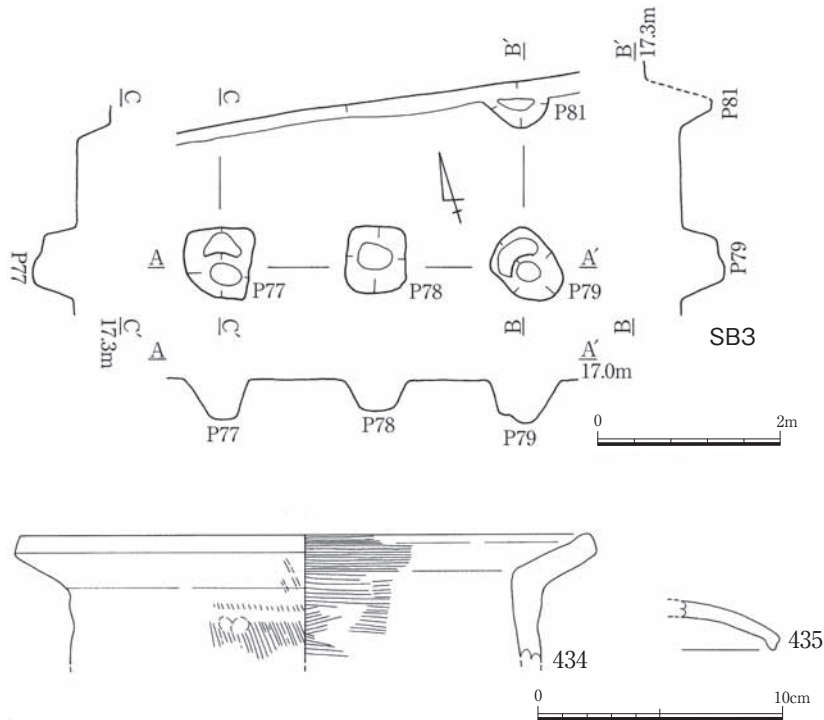


第 98 図 SB2 平面・エレベーション図 (S=1/80)

出土遺物 土師器・須恵器・軽石 (S=1/3)

片 12 点と須恵器 1 点が、P80 からは土器片 12 点（土師器・弥生土器混在）と須恵器 2 点が出土している。

これらの遺物の中で図示できたものは、429 の土師器坏と 430 ～ 432 の須恵器蓋、そして軽石であり、いずれも SK13 から出土している。429 は口縁内面に沈線が残り、内面に口縁方向に上がる斜め方向のナデが観察される。畿内産の土師器で搬入遺物であり、8 世紀中葉の遺物である。



第 99 図 SB3 平面・エレベーション図 (S=1/80)  
出土遺物 土師器・須恵器 (S=1/3)

### SB3

調査区 (D 区) O2/P1・2 グリッドに位置する。北側は調査区外のため未検出であり、全体の規模は不明である。検出状態での軸方向は N-18°-E である。検出高は 16.79 m を測る。検出規模は梁間 2 × 桁行 1、梁間 3.3 m × 桁行 1.8 m を測る。柱間寸法は梁間 1.7 m、桁行 1.8 m を測る。柱穴の規模は径 0.76 m、深さ 34 ～ 47cm を測る。

構成する柱穴は P77・78・79・81 である。P77 からは遺物は出土していない。P78 からは土師器 22 点と須恵器 1 点 (435)、P79 からは土師器 25 点で、うち 1 点は律令期の長胴の甕 (434) が出土、P81 からは土師器 3 点が出土している。435 は 8 世紀中葉から後半にかけての時期であり、SB3 は SB2 に後続する時期だと考えられる。

SB4

調査区（C区）O21・22・23グリッドに位置する。東（西）側は調査区外のため未検出であり、全体の規模は不明である。検出状態での軸方向はN-12°-Eである。検出高は16.50 mを測る。検出規模は桁行（梁間）3、桁行（梁間）5.8 mを測る。柱間寸法は桁行（梁間）1.8～2.0 mを測る。P326の平面形態は隅丸形状を呈し、長径1.24 m、短径1.22 m、深さ1.03 mを測る。断面形態は台形状を呈し、西側に段部を有する。

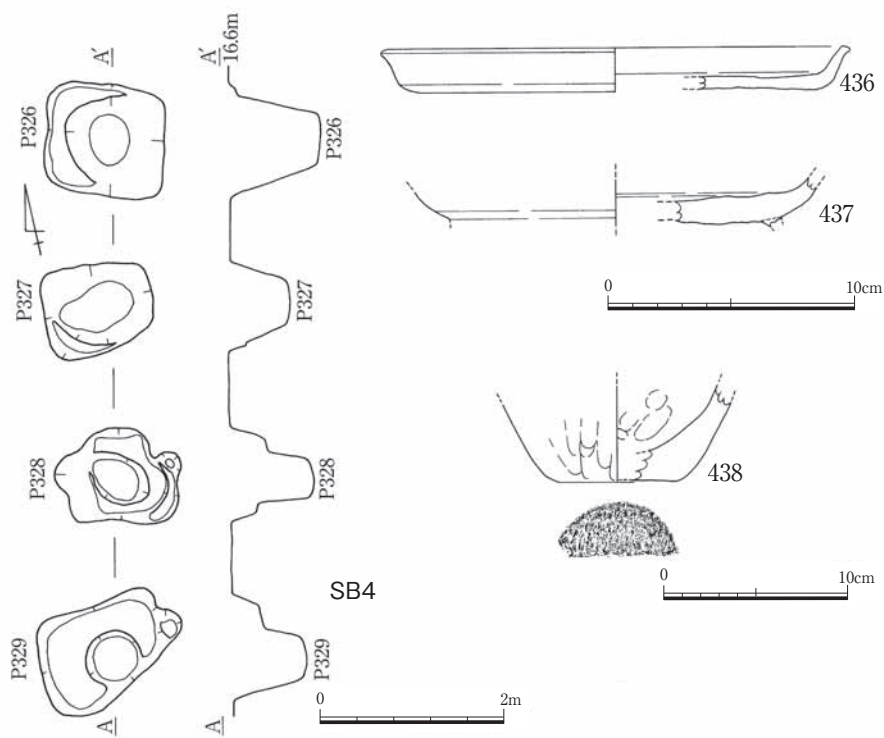
P327の平面形態は隅丸長方形形状を呈し、長径1.23 m、短径1.02 m、深さ0.66 mを測る。断面形態は台形状を呈し、南西側に小規模な段部を有する。

P328の平面形態は不整形形状を呈し、長径1.42 m、短径1.03 m、深さ0.91 mを測る。ピット状遺構と切り合い関係にある。断面形態は台形状を呈し、周囲に段部を有する。

P329の平面形態は歪な隅丸長方形形状を呈し、長径1.50 m、短径0.97 m、深さ0.78 mを測る。断面形態は台形状を呈し、周囲に段部を有する。

P326からは土器片26点が出土したが、弥生中期と土師器が混在する。須恵器皿（436）が出土している。P327からは土器細片10点、P328からは土器片20点、底部ヘラ切の須恵器が1点、P329からは土器片10点が出土している。

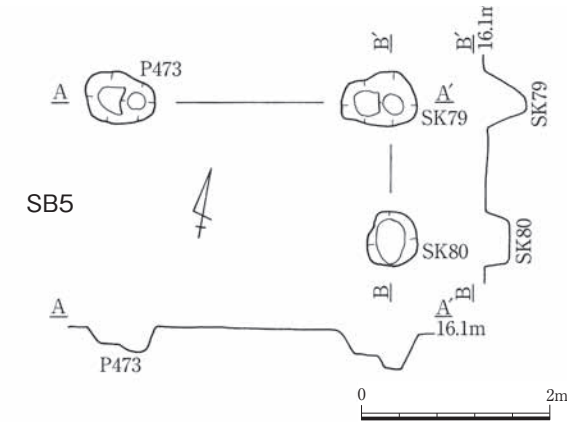
時期が判断できる資料は、436の須恵器皿で9世紀のはじめの資料である。



第100図 SB4平面・エレベーション図 (S=1/80)

出土遺物 須恵器 (S=1/3) 弥生土器 (S=1/4)





第 101 図 SB5 平面・エレベーション図 (S=1/80)

も考えられる。SK80の平面形態は歪な円形状を呈し、長径 0.63 m、短径 0.59 m、深さ 30cmを測る。断面形態は台形状を呈する。

P473の平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径 0.79 m、短径 0.58 m、深さ 21cmを測る。断面形態は台形状を呈し、西側に段部を有する。

SK79からは 10 点、SK80からは 12 点、P473からは 13 点の土器片が出土しているものの、時期決定できる資料がなく、古代の遺構の可能性が高いといえるのみである。

## 2 土坑 (SK)

### SK42

調査区 (C区) O17・18 グリッドに位置する。検出高は 16.61 mを測る。平面形態は方形を呈し、長径 1.44 m、短径 1.09 m、深さ 29cmを測る。断面形態は台形状を呈し、北側に段部を有する。

弥生土器 14 点と須恵器 3 点、白磁碗Ⅳ類の底部 (439) が出土している。

遺構の平面形態 (方形) からも、古代の遺構である可能性が高く、11 世紀後半～12 世紀の遺構だと捉えておきたい。

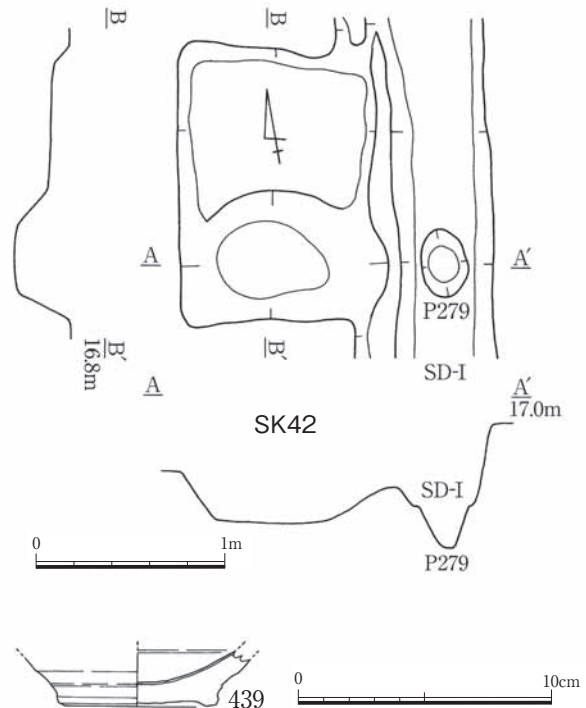
### SK76 (ST6 の上面遺構)

調査区 (C区) P25 グリッドに位置する。P456 と切り合い関係にある。検出高は 16.29 mを測る。平面形態は隅丸長方形を呈し、長径 1.17 m、短径 0.73 m、深さ 20cmを測る。断面形態は台形状を呈する。ST6の床面から検出しているが、竪穴住居跡との関係は不明である。

### SB5

調査区 (A区) I37/J37 グリッドに位置する。南側は調査区外のため未検出であり、全体の規模は不明である。検出状態での軸方向は N-11°-W である。検出高は 15.95 mを測る。検出規模は梁間 1 × 桁行 1、梁間 2.9 m、桁行 1.5 mを測り、柱間寸法も同寸である。

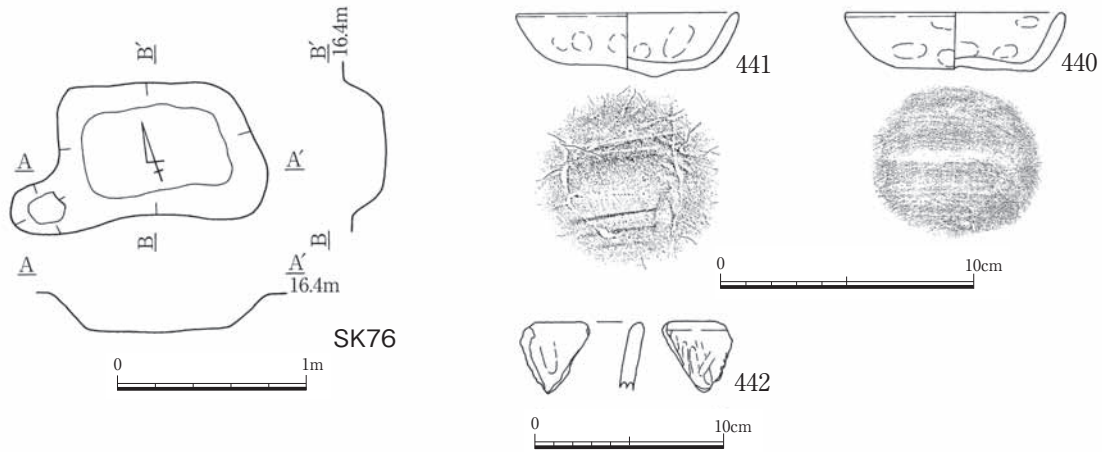
SK79の平面形態は不整形な楕円形状を呈し、長径 0.87 m、短径 0.60 m、深さ 45cmを測る。断面形態は台形状を呈し、西側に段部を有する。全体の形状から切り合いの可能性



第 102 図 SK42 平面・エレベーション図 (S=1/40)  
出土遺物 白磁 (S=1/3)

土師器の小皿が2点(440・441)出土している。いずれも、口径9cm、器高2.5cm前後であり、底面に平行圧痕が残る。手づくねの皿で、中世前期の資料である。

442は弥生土器の可能性のある口縁部である。



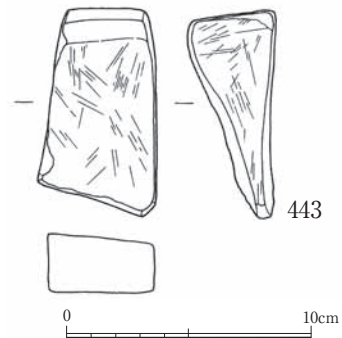
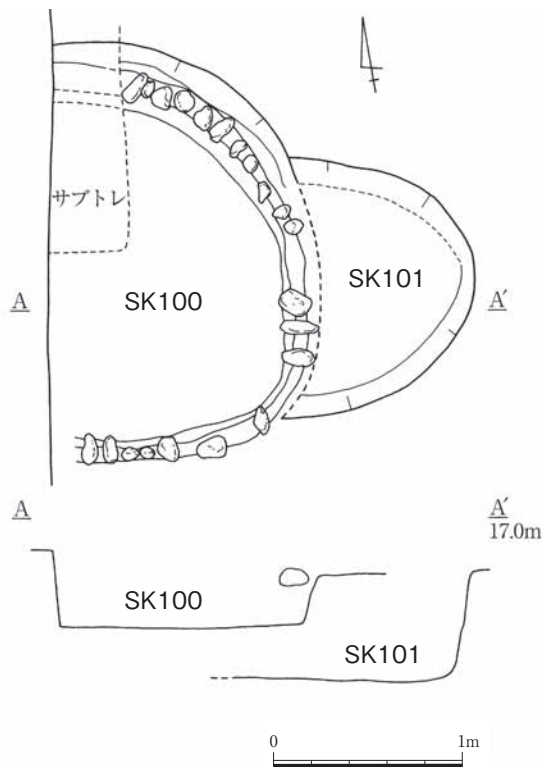
第103図 SK76平面・エレベーション図 (S=1/40) 出土遺物 土師器 (S=1/3) 弥生土器 (S=1/4)

### SK100・101

調査区(C区)N17グリッドに位置する。SK101をSK100が切っている。SK100は直径2.2mの円形で、遺構の西側1m弱が調査区外となる。外側をハンダ状の赤土で固められ、内側に円礫が詰め込まれた形で検出されている。検出面からの深さは30cm。SK101は幅1.4mの楕円形の土坑だが、SK100に切られているため、長さは不明。

検出面からの深さは60cmである。

出土遺物は、陶磁器5点、磁器3点、陶器1点、備前播り鉢1点、瓦6点、砥石1点(443)。遺物の時期は近世～近代で、砥石が遺構中から確認されたことから、近代以降の便所だった可能性が高い。



第105図 SK100出土遺物 砥石 (S=1/3)

第104図 SK100・101平面・エレベーション図 (S=1/40)

### 3 溝 (SD)

古代以降で図示可能な遺物が出土した溝は、SD2・23・55・H と少ないが、出土遺物が確認できない溝でも、流路の方向や他遺構との切り合い関係から同時期だと考えられる溝がある。

#### SD1

調査区 (C区) M2/N2 グリッドに位置する。西端は調査区外へ続いている。北端はSD-A と接続するが、本遺構との関係は不明である。検出状態での主軸方向は N-80°-W で、ほぼ直線状に検出している。検出高は 16.85 m を測る。検出規模は 3.87 × 0.62 m、床面高は東端で 16.67 m、西端で 16.65 m を測る。断面形態は台形状を呈し、深さは 19cm を測る。埋土は黒褐色シルトである。

本遺構の 2.8 m ほど南側に SD2 をほぼ並行して検出している。

#### SD2

調査区 (C区) M3/N3 グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。SD-A と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向は N-80°-W で、ほぼ直線状に検出している。検出高は 16.83 m を測る。検出規模は 5.05 × 0.65 m、床面高は東端で 16.79 m、西端で 16.69 m を測る。断面形態は台形状を呈し、深さは 13cm を測る。埋土は黒褐色シルトである。

本遺構の 2.8 m ほど北側に SD1 をほぼ並行して検出している。

#### SD4

調査区 (C区) M6/N6/O6 グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。検出状態での主軸方向は N-81°-W で、ほぼ直線状に検出している。検出高は 16.88 m を測る。検出規模は 5.06 × 0.38 ~ 0.46 m、床面高は東端で 16.74 m、西端で 16.78 m を測る。断面形態は皿状を呈し、深さは 9 cm を測る。埋土は黒褐色シルトである。床面から掘削痕を検出している。

#### SD5

調査区 (A区) S2/T2/U2 グリッドに位置する。西端はSD-B と接続するが、本遺構との関係は不明である。SD-C/P102・105/SX3 と切り合い関係にある。主軸方向は N-78°-W で、ほぼ直線状に検出している。検出高は 16.72 m を測る。検出規模は 7.85 × 0.36 ~ 0.51 m、床面高は東端で 16.69 m、西端で 16.71 m を測る。断面形態は皿状を呈し、深さは 4 cm を測る。

#### SD6

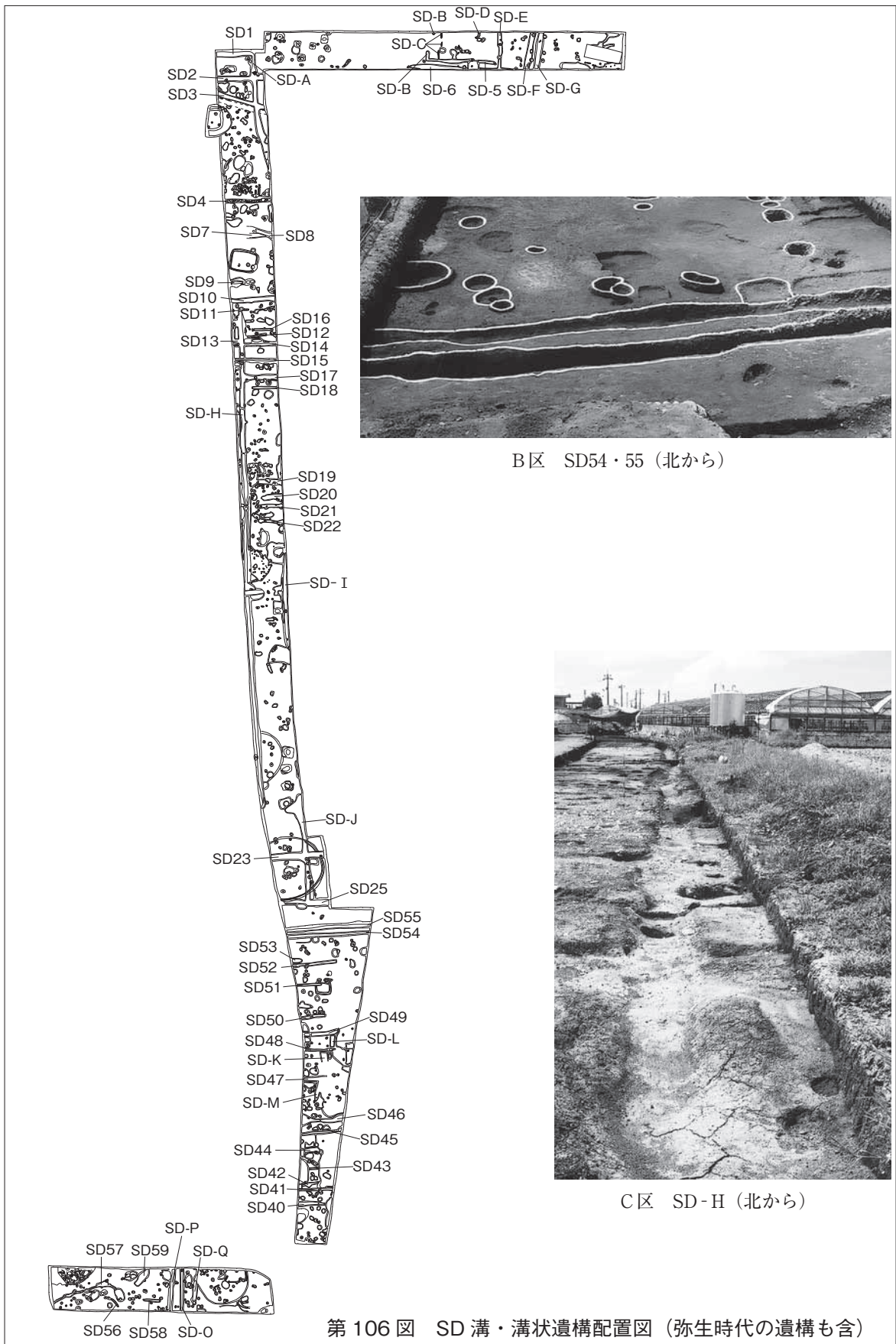
調査区 (A区) R2/S2/T2/U2 グリッドに位置する。南側は調査区外へ続いている。SD-E/P100・107/SX3 と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向は N-79°-W で、ほぼ直線状に検出している。検出高は 16.72 m を測る。検出規模は 11.53 × 0.12 ~ 0.53 m、床面高は東端で 16.68 m、西端で 16.71 m を測る。断面形態は皿状を呈し、深さは 6 cm を測る。

#### SD7

調査区 (C区) N7 グリッドに位置する。東側は調査区外へ続いている。西側は試掘 TR により未検出である。SD8 と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向は N-85°-W である。検出高は 16.82 m を測る。検出規模は 1.65 × 0.55 m、床面高は東端で 16.78 m、西端で 16.75 m を測る。断面形態は皿状を呈し、深さは 5 cm を測る。

#### SD9

調査区 (C区) M8・9/N8・9 グリッドに位置する。西側は調査区外へ続いている。P148 と切り合



い関係にある。検出状態での主軸方向はN-81°-Wである。検出高は16.83 mを測る。検出規模は2.77 × 0.60 ~ 1.05 m、床面高は東端で16.70 m、西端で16.54 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは14 ~ 28cmを測る。

#### SD10

調査区（C区）M9/N9/O9グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。検出状態での主軸方向はN-82°-Wである。検出高は16.83 mを測る。検出規模は4.92 × 0.57 m、床面高は東端で16.75 m、西端で16.78 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは5 cmを測る。

#### SD11

調査区（C区）N9/O9グリッドに位置する。部分的に検出し、西端はSD-Hと接続するが、本遺構との関係は不明である。検出状態での主軸方向はN-81°-Wである。検出規模は4.07 × 0.18 ~ 0.47 m、床面高は東端で16.78 m、西端で16.71 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは8 cmを測る。

#### SD12

調査区（C区）N10グリッドに位置する。西端はSD-Hと切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-88°-Wである。検出高は16.78 mを測る。検出規模は2.30 × 0.29 m、床面高は16.74 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは4 cmを測る。

#### SD13

調査区（C区）N10グリッドに位置する。部分的に検出し、西端は調査区外へ続いている。SD-H・14と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-80°-Wである。検出高は16.75 mを測る。検出規模は3.41 × 0.51 m、床面高は東端で16.62 m、西端で16.69 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは11cmを測る。

#### SD14

調査区（C区）N10/O10グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。SD-H・13と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-82°-Wである。検出高は16.77 mを測る。検出規模は4.73 × 0.22 ~ 0.47 m、床面高は東端で16.66 m、西端で16.71 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは11cmを測る。

#### SD15

調査区（C区）N11/O11グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。SD-Hと切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-79°-Wである。検出高は16.75 mを測る。検出規模は4.73 × 0.29 ~ 0.59 m、床面高は東端で16.52 m、西端で16.57 mを測る。断面形態は台形状を呈し、深さは18cmを測る。

#### SD16

調査区（C区）N10/O10グリッドに位置する。主軸方向はN-80°-Wである。検出高は16.79 mを測る。規模は2.15 × 0.28 m、床面高は東端で16.77 m、西端で16.76 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは3 cmを測る。

#### SD17

調査区（C区）N11/O11グリッドに位置する。東端は調査区外へ続いている。SD-H/P176 ~ 178・180・181と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-81°-Wである。検出高は16.76

mを測る。検出規模は3.61 × 0.58 m、床面高は東端で16.69 m、西端で16.70 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは7 cmを測る。

#### SD18

調査区（C区）N11/O11 グリッドに位置する。東端は調査区外へ続いている。検出状態での主軸方向はN-81°-Wである。検出高は16.77 mを測る。検出規模は2.85 × 0.30 m、床面高は東端で16.70 m、西端で16.69 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは7 cmを測る。

#### SD19

調査区（C区）N14/O14 グリッドに位置する。東端は調査区外へ続いている。SK35/P210・222と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-79°-Wである。検出高は16.75 mを測る。検出規模は2.77 × 0.50 ~ 0.70 m、床面高は東端で16.68 m、西端で16.72 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは5 cmを測る。

#### SD20

調査区（C区）N14・15/O14・15 グリッドに位置する。東端は調査区外へ続いている。P231 ~ 234と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-80°-Wである。検出高は16.75 mを測る。検出規模は2.40 × 0.53 ~ 1.06 m、床面高は東端で16.70 m、西端で16.72 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは5 cmを測る。

#### SD21

調査区（C区）N15/O15 グリッドに位置する。東端は調査区外へ続いている。P248 ~ 250と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-80°-Wである。検出高は16.76 mを測る。検出規模は3.10 × 0.41 m、床面高は東端で16.71 m、西端で16.74 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは5 cmを測る。

#### SD22

調査区（C区）N15/O15 グリッドに位置する。東端は調査区外へ続いている。土坑状遺構と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-74°-Wである。検出高は16.73 mを測る。検出規模は2.15 × 0.33 m、床面高は東端で16.70 m、西端で16.68 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは4 cmを測る。

#### SD23

調査区（C区）O24・25/P24・25 グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。ST6を切り、SD-Jと切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-84°-Wである。検出高は16.41 mを測る。検出規模は5.90 × 0.82 m、床面高は東端で16.36 m、西端で16.28 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは10cmを測る。

#### SD25

調査区（C区）O26/P26 グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。ST6を切り、SK62/SD-Jと切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-79°-Wである。検出高は16.40 mを測る。検出規模は5.15 × 0.74 ~ 1.00 m、床面高は東端で16.30 m、西端で16.32 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは10cmを測る。

#### SD40

調査区（B区）O34/P34 グリッドに位置する。西端は調査区外へ続いている。検出状態での主

軸方向はN-80°-Wである。検出高は16.40 mを測る。検出規模は2.94 × 0.62 m、床面高は東端で16.35 m、西端で16.34 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは6 cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。

#### SD41

調査区（B区）O34/P34 グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。P357 と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-82°-Wである。検出高は16.39 mを測る。検出規模は3.75 × 0.33 m、床面高は東端で16.28 m、西端で16.32 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは11cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。

#### SD42

調査区（B区）O34/P34 グリッドに位置する。ST4 を切っている。検出状態での主軸方向はN-90°-Wである。検出高は16.40 mを測る。検出規模は1.80 × 0.28 m、床面高は東端で16.31 m、西端で16.27 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは7 cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。

#### SD43

調査区（B区）P 33 グリッドに位置する。ST 4・5 を切っている。検出状態での主軸方向はN-83°-Wである。検出高は16.44 mを測る。検出規模は1.03 × 0.27 m、床面高は東端で16.31 m、西端で16.26 mを測る。断面形態は台形状を呈し、深さは15cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。

#### SD44

調査区（B区）O33/P33 グリッドに位置する。ST4 を切っている。検出状態での主軸方向はN-86°-Wである。検出高は16.49 mを測る。検出規模は1.42 × 0.57 m、床面高は東端で16.43 m、西端で16.42 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは6 cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。

#### SD45

調査区（B区）O32/P32 グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。検出状態での主軸方向はN-85°-Wである。検出高は16.48 mを測る。検出規模は4.44 × 0.40 m、床面高は東端で16.40 m、西端で16.37 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは11cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。

#### SD46

調査区（B区）O32/P32/Q32 グリッドに位置する。不整形な溝状を呈し、両端は調査区外へ続いている。P369 と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-83°-Wである。検出高は16.48 mを測る。検出規模は4.51 × 0.33 ~ 1.47 m、床面高は東端で16.35 m、西端で16.37 mを測る。断面形態は台形状を呈し、深さは14cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。

#### SD47

調査区（B区）O31/P31 グリッドに位置する。SD-M/SX10 と切り合い関係にあり、東端は未検出である。検出状態での主軸方向はN-85°-Wである。検出高は16.47 mを測る。検出規模は2.33 × 0.40 ~ 0.60 m、床面高は東端で16.28 m、西端で16.36 mを測る。断面形態は台形状を呈し、深さは15cmを測る。

#### SD48

調査区（B区）P30 グリッドに位置する。西端は調査区外へ続いている。SD-K・L と切り合い関係にある。検出規模は3.45 × 0.30 m、床面高は東端で16.42 m、西端で16.45 mを測る。断面形

態は皿状を呈し、深さは6 cmを測る。

#### SD49

調査区（B区）P29・30 グリッドに位置する。西端は調査区外へ続いている。SK66 と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-83°-Wである。検出高は16.54 mを測る。検出規模は3.91 × 0.48 m、床面高は東端で16.34 m、西端で16.31 mを測る。断面形態は台形状を呈し、深さは27 cmを測る。

#### SD50

調査区（B区）O29/P29 グリッドに位置する。西端は調査区外へ続いている。P411 と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-87°-Wである。検出高は16.34 mを測る。検出規模は2.80 × 0.42 m、床面高は東端で16.25 m、西端で16.28 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは8 cmを測る。

#### SD51

調査区（B区）O28/P28 グリッドに位置する。西端は調査区外へ続いている。SK70 を切っている。検出状態での主軸方向はN-83°-Wである。検出高は16.36 mを測る。検出規模は2.82 × 0.27 m、床面高は東端で16.21 m、西端で16.27 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは11cmを測る。

#### SD52

調査区（B区）O28/P27・28 グリッドに位置する。西端は調査区外へ続いている。P429 と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-86°-Wである。検出高は16.35 mを測る。検出規模は4.88 × 0.38 m、床面高は東端で16.26 m、西端で16.32 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは6 cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。

#### SD53

調査区（B区）O27・28 グリッドに位置する。西端は調査区外へ続いている。検出状態での主軸方向はN-82°-Wである。検出高は16.36 mを測る。検出規模は1.13 × 0.52 m、床面高は東端で16.30 m、西端で16.29 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは6 cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。

#### SD54

調査区（B区）O27/P27/Q27 グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。SK74・75 と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-83°-Wである。検出高は16.29 mを測る。検出規模は9.13 × 0.42 ~ 0.54 m、床面高は東端で16.19 m、西端で16.17 mを測る。断面形態は台形状を呈し、深さは13cmを測る。埋土は濃い黒色シルトである。

#### SD55

調査区（B区）O27/P26・27/Q26・27 グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。検出状態での主軸方向はN-84°-Wである。検出高は16.31 mを測る。検出規模は9.48 × 0.50 ~ 0.72 m、床面高は東端で16.02 m、西端で16.05 mを測る。断面形態は台形状を呈し、深さは31cmを測る。埋土は濃い黒色シルトである。

#### SD-A

調査区（C区）N2 ~ 5 グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。SD1 ~ 3/P37・39・51・83 と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-5°-Eである。検出高は16.83



mを測る。検出規模は $13.40 \times 0.47 \sim 0.88$  m、床面高は南端で16.77 m、北端で16.54 mを測る。断面形態は台形状を呈し、深さは6～30cmを測る。

#### SD-B

調査区（D区）S2グリッドに位置する。南端はSD5と接続するが、本遺構との関係は不明である。主軸方向はN-12°-Eである。検出高は16.72 mを測る。検出規模は $1.15 \times 0.39$  m、床面高は16.69 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは3 cmを測る。

#### SD-C

調査区（D区）S2グリッドに位置する。北端は調査区外へ続いている。部分的に検出し、南端はSD5と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-16°-Eである。検出高は16.72 mを測る。検出規模は $3.00 \times 0.18$  m、床面高は南端で16.70 m、北端で16.69 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは3 cmを測る。

#### SD-D

調査区（D区）T1・2グリッドに位置する。北端は調査区外へ続いている。検出状態での主軸方向はN-11°-Wである。検出高は16.69 mを測る。検出規模は $1.32 \times 0.22$  m、床面高は16.65 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは5 cmを測る。

#### SD-E

調査区（D区）U1・2グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。P106・114・115と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-10°-Wである。検出高は16.71 mを測る。検出規模は $3.98 \times 0.42$  m、床面高は南端で16.68 m、北端で16.63 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは4 cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。

#### SD-F

調査区（D区）V1・2グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。SB4（P116～118）と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-21°-Wである。検出高は16.68 mを測る。検出規模は $4.20 \times 0.62$  m、床面高は南端で16.60 m、北端で16.62 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは8 cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。

#### SD-G

調査区（D区）V1・2グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。SB4（P119～121）と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-18°-Wである。検出高は16.68 mを測る。検出規模は $4.13 \times 0.62 \sim 0.85$  m、床面高は南端で16.57 m、北端で16.64 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは8 cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。

#### SD-H

調査区（C区）N9～23グリッドに位置する。西側は調査区外へかかる。SK100・101（近代土坑）に切られ、ST3・8を切っている。SD12～15・17/SK35・40・45と切り合い関係にある。主軸方向はN-7°-Eである。検出高は南端で16.56 m、北端で16.83 mを測る。検出規模は $55.9 \times 0.52 \sim 0.91$  m、床面高は南端で16.19 m、北端で16.72 mを測る。断面形態は台形状を呈し、深さは11～37cmを測る。

東側に位置するSD-Iとほぼ並行して検出し、現況地割りに沿った道路状遺構の可能性が考えられる。

#### SD-I

調査区（C区）O16～19グリッドに位置する。東側は調査区外へかかる。ST2を切り、SK41・42・44/P279・290・291と切り合い関係にある。主軸方向はN-8°-Eである。検出高は16.59 mを測る。検出規模は11.0 × 0.47 m、床面高は南端で16.35 m、北端で16.48 mを測る。断面形態は台形状を呈し、深さは16cmを測る。

西側に位置するSD-Hとはほぼ並行して検出し、現況地割りに沿った道路状遺構の可能性が考えられ、南側に位置するSD-J（SK47）と同一遺構の可能性が検討される。

#### SD-J

調査区（C区）O23～25/P24～26グリッドに位置する。北端東側は調査区外へかかる。ST6を切り、SK48/SD23・25/P331・457・454・453と切り合い関係にある。主軸方向はN-4°-Eである。検出高は南端で16.36 m、北端で16.48 mを測る。検出規模は11.93 × 0.72 m、床面高は南端で16.30 m、北端で16.44 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは5 cmを測る。

現況地割りに沿った道路状遺構の可能性が考えられ、北側に位置するSD-Iと同一遺構の可能性が検討される。

#### SD-K

調査区（B区）P30グリッドに位置する。南側は近現代の攪乱により切られている。検出状態での主軸方向はN-2°-Eである。検出高は16.43 mを測る。検出規模は0.97 × 1.35 m、床面高は南端で16.24 m、北端で16.34 mを測る。断面形態は台形状を呈し、深さは14cmを測る。

#### SD-L

調査区（B区）P30グリッドに位置する。検出状態からSD48・49と切り合い関係にあると考えられる。検出状態での主軸方向はN-13°-Eである。検出高は16.55 mを測る。検出規模は1.34 × 0.54 m、床面高は南端で16.47 m、北端で16.46 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは5 cmを測る。

#### SD-O

調査区（A区）L36・37グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。検出状態での主軸方向はN-11°-Eである。検出高は南端で16.10 m、北端で16.16 mを測る。検出規模は4.80 × 0.50 m、床面高は南端で15.94 m、北端で16.01 mを測る。断面形態は台形状を呈し、深さは15cmを測る。埋土は黒褐色シルトで、下層は黄灰色シルトである。

#### SD-P

調査区（A区）L36・37グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。SK82と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-14°-Eである。検出高は16.11 mを測る。検出規模は4.70 × 0.58 m、床面高は南端で15.89 m、北端で15.91 mを測る。断面形態は台形状を呈し、深さは22 cmを測る。

#### SD-Q

調査区（A区）L36・37/M37グリッドに位置する。北端は調査区外へ続いている。ST10を切り、P487と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-15°-Eである。検出高は南端で16.12 m、北端で16.18 mを測る。検出規模は2.70 × 0.58 m、床面高は南端で16.09 m、北端で16.02 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは9 cmを測る。埋土は茶灰シルトである。

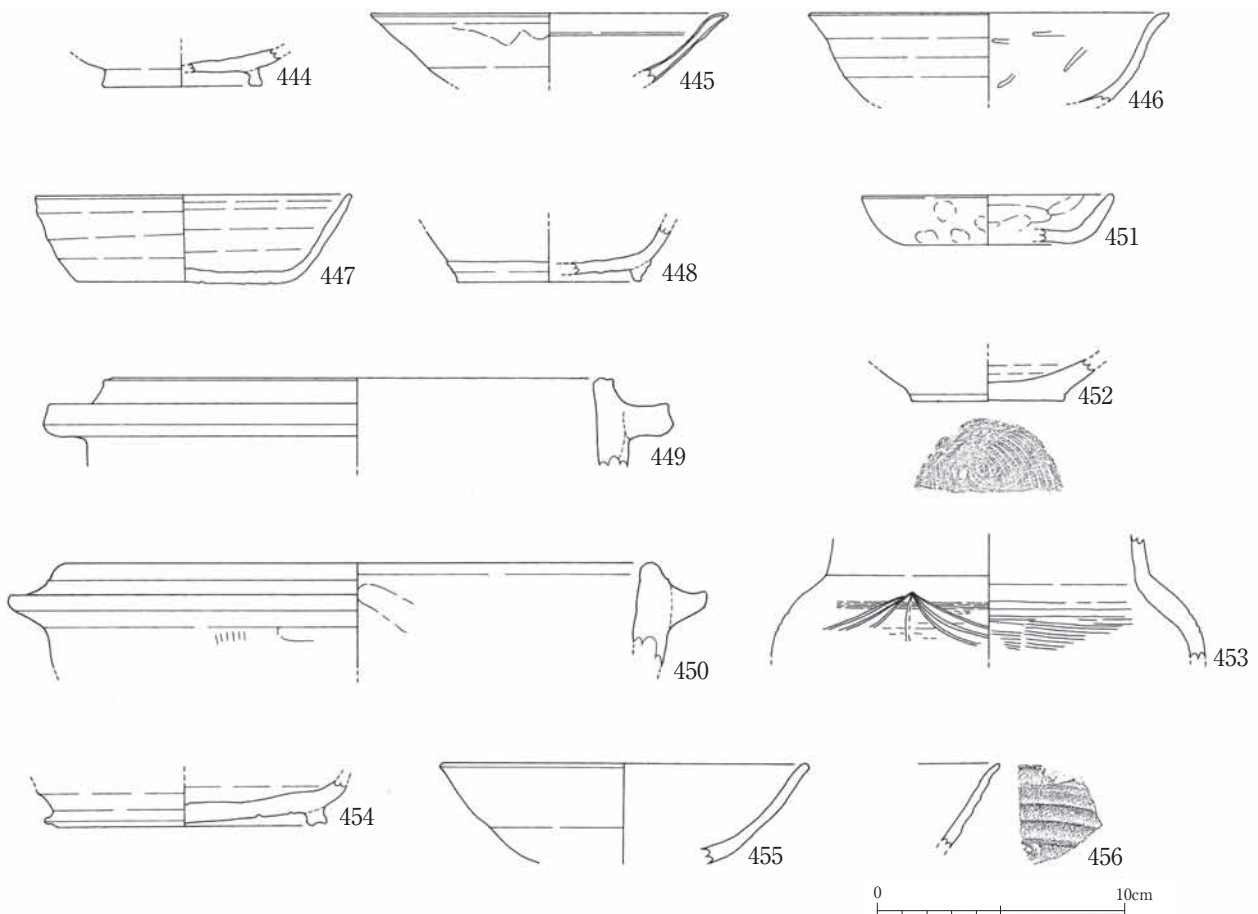
4 溝、ピットから出土した古代以降の遺物 (第 107 図)

溝出土遺物

SD2 から 444 の土師器椀と 445 の白磁皿が出土している。444 は輪高台の土師器、445 は白磁皿 IV 類で、いずれも 11 世紀後半～12 世紀の遺物である。SD23 から出土した土師器椀もほぼ同じ時期の資料である。SD55 から出土した須恵器杯 (447) は、底面に墨書がある墨書土器で、文字は「上福」と読み取れる吉祥句である。8 世紀後半で下ノ坪遺跡 SK30 とほぼ同時期の資料である。南北に 56 m の長さを持つ SD-H からは、448 の須恵器杯 (9 世紀)、449・450 の摂津羽釜、451 の土師器皿、452 の須恵器椀、453 の瓦質土器・風炉 (火舎) など古代から中世前期にかけての遺物が出土している。中でも、453 の大和型瓦質土器は、香南市内でははじめて確認された遺物である。

ピット出土遺物

図示できた遺物は 3 点のみ、P149 出土の土師器杯 (454)、P463 出土の土師器椀 (455)、P488 出土の土師器杯 (456) である。454 は 8 世紀、455 は 12 世紀、456 は中世前期の資料である。



第 107 図 遺構 (SD・P) 出土遺物—古代以降— 土師器・須恵器・白磁・瓦質土器 (S=1/3)

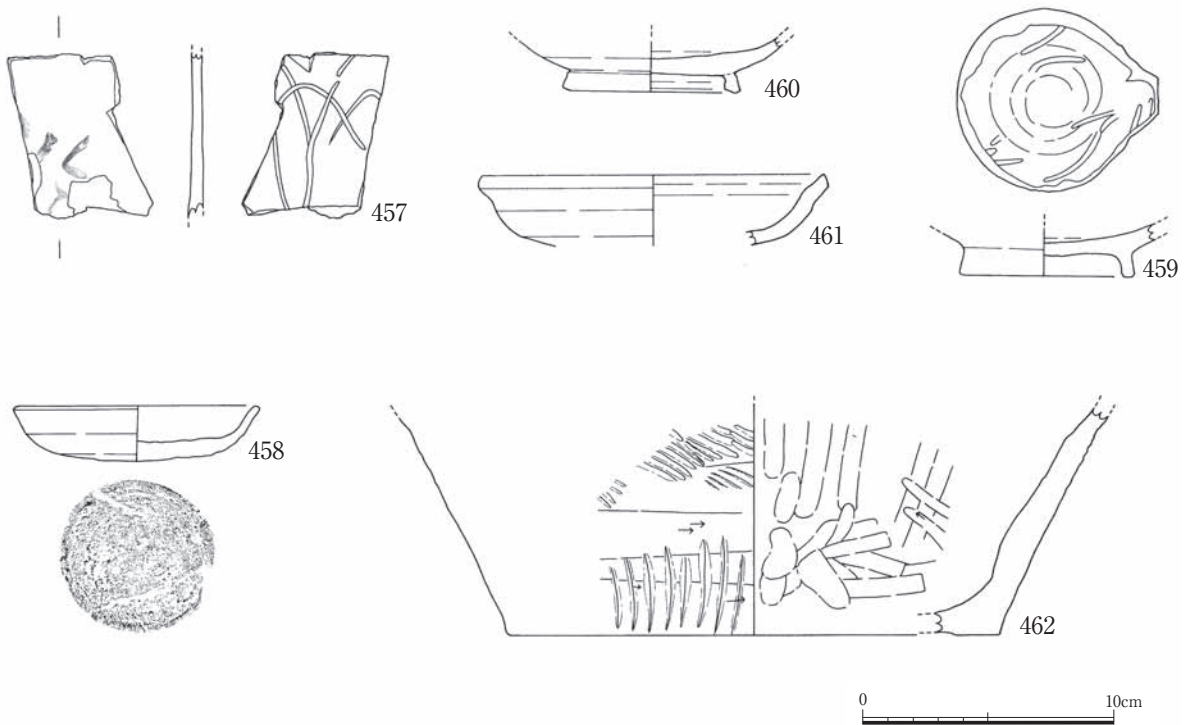
## 5 包含層出土遺物（弥生時代以外・第108図）

包含層出土遺物の中で、弥生時代以外の遺物だと断定できるものは、合計150点足らずと、遺物全体の3パーセント程度である。調査区全域から、古代以降の遺物が確認されているものの、A区、B区など南側には遺物が少なく、C区の北端からD区にかけて古代の遺物が集中している。

462がA区から出土した以外は、全てD区からの出土である。

457は土師器皿で内面に暗文、底面に墨書が確認される。墨書の文字は2文字残っている。一文字目は「凡(オホシ)」と読むことができるものの、断定できるものではない。文字は「凡?□」とし、今後の課題としたい。

458は10世紀中葉の土師器皿、459は10世紀後半～末の土師器椀、460は10世紀の土師器椀、461は須恵器供膳具、462は須恵器貯蔵具で古代の資料なのだが、所属時期など詳細は不明である。



第108図 包含層出土遺物—古代以降— 土師器・須恵器 (S=1/3)

# 遺物觀察表



表5 遺物観察表（土器）1

図版 番号	区	遺構 層位	器種	器形	部位	法量 (cm)				胎土	色調		調整		特徴 文様・形態・製作技法他	備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		
2	C	ST1 バンク	弥生 土器	壺(長 頸壺)	口縁～ 頸部	13.7	(11.0)	-	-	胎土は精選さ れており、1mm 大の砂粒を少 量含むのみ。	5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	ユビナデ、ユ ビオサエ、ナ デ	ハケ、ナデ	口唇は丸みを帯びる。頸部が直立する長 頸壺で、口縁は開き気味。	
3	C	ST1	弥生 土器	壺	口縁～ 上胴部	10.4	(12.7)	-	-	1mm前後の砂 粒をやや多く 含む。	2.5Y 3/2 黒褐色	7.5YR 6/6 橙色	ハケ、ユビナ デ、ユビオサ エ	タタキ、ハケ、 ナデ	ハケとナデによりタタキ目の痕跡を丁寧 に消している。口唇はわずかに凹状の面を なす。	
4	C	ST1 ①バンク	弥生 土器	壺	頸部	-	(11.7)	-	-	1～2mm前後の チャート砂粒を 多く含む。	7.5YR 5/4 にぶい褐色	7.5YR 6/6 橙色	ユビナデ、ユ ビオサエ、ナ デ、ヘラミガ キ	ハケ、ユビナ デ、ナデ	口縁部形状不明。頸部は大きく外方へ開 く。	
5	C	ST1 上層	弥生 土器	壺	口縁～ 上胴部	14.0	(6.4)	-	-	1～2mm前後の チャート砂粒を 多量に含む。	10YR 4/2 灰黄褐色	10YR 4/2 褐灰色	ハケ、ナデ	ナデ	口縁は大きくラップ状に開き、口唇は凹状の 面をなす。上胴部に列点文。	
6	C	ST1 ②	弥生 土器	壺	口縁部	-	(2.0)	-	-	1～2mm大の砂 粒を多く含む。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ナデ	ナデ	口唇は凹状の面をなし、下端を拡張する。	残存率1/12 以下。
7	C	ST1 ②	弥生 土器	甕	口縁～ 上胴部	(17.4)	(6.0)	-	-	1～3mm大の砂 粒をやや多く 含む。	7.5YR 5/3 にぶい褐色	7.5YR 5/3 にぶい褐色	ナデ、ユビナ デ、ユビオサ エ	ハケ、ナデ	口唇はわずかに凹状の面をなす。頸部はく の字状に強く屈曲する。	外面に煤状 炭化物付着。
8	C	ST1	弥生 土器	甕	口縁部	(22.8)	(2.2)	-	-	1mm前後の砂 粒をやや多く 含む。	10YR 5/3 にぶい黄褐色	10YR 5/3 にぶい黄褐色	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	口唇は面をなし、口縁端部下端が肥厚す る。	外面に煤状 炭化物付着。
9	C	ST1	弥生 土器	甕	口縁～ 頸部	(18.2)	(3.0)	-	-	1～2mm大の砂 粒を多く含む。	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/6 橙色	不明	ハケ	摩耗顕著で調整不明。口唇は面をなす。	
10	C	ST1 ②上層 バンク	弥生 土器	壺	胴部	-	(19.4)	30.4	-	1～2mm大の砂 粒をやや多く 含む。	10YR 6/3 にぶい黄褐色	7.5YR 5/4 にぶい褐色	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	胴部は大きく球状に張り出し、最大径は上 胴部にある。頸胴界に列点文。	
11	C	ST1 ②上層	弥生 土器	壺	下胴部 ～底部	-	(12.2)	-	8.4	1～2mm大のチャ ート砂粒を多 く含む。	10YR 5/2 灰黄褐色	10YR 5/3 にぶい黄褐色	ハケ、ユビナ デ、ユビオサ エ	タタキ、ハケ、 ナデ	平底。胴部は外方へ大きく開いて立ち上 がる。	
12	C	ST1 ②上層 バンク	弥生 土器	壺	下胴部 ～底部	-	(6.9)	-	6.6	1～2mm大の砂 粒を多く含む。	10YR 7/3 にぶい黄褐色	7.5YR 6/4 にぶい褐色	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	平底。胴部は外方へ大きく開いて立ち上 がる。	
13	C	ST1 ②上層	弥生 土器	甕	下胴部 ～底部	-	(4.7)	-	6.0	1～2mm大の砂 粒をやや多く 含む。	10YR 4/1 褐灰色	10YR 4/2 灰黄褐色	ハケ、ナデ、 ヘラミガキ	タタキ、ナデ	平底。	
14	C	ST1	弥生 土器	甕	下胴部 ～底部	-	(7.9)	-	3.5	1mm前後の砂 粒、2～5mm大 の粗粒砂を多 く含む。	10YR 6/3 にぶい黄褐色	10YR 6/4 にぶい黄褐色	ヘラケズリ、 ユビオサエ、 ナデ	ハケ、ユビオ サエ	上げ底で、一旦ぐびれた後、外上方へたち あがる。	
15	C	ST1	弥生 土器	甕	底部	-	(6.7)	-	5.4	1mm前後の砂 粒、微細粒砂 を多く含む。	10YR 4/1 褐灰色	7.5YR 6/4 にぶい褐色	ナデ	ハケ、ヘラミ ガキ	内底は剥落のため器表面が残っていない。	
16	C	ST1 バンク	弥生 土器	甕	底部	-	(3.8)	-	8.6	1～2mm大の砂 粒をやや多く 含む。	10YR 3/2 黒褐色	10YR 6/4 にぶい黄褐色	ユビナデ、ユ ビオサエ	ユビナデ、ユ ビオサエ	平底。底部外周は外方へ拡張。	
17	C	ST1 ②上層 ・④・⑧	弥生 土器	台付 鉢	脚部	-	(4.8)	-	8.5	1～2mm大の砂 粒をやや多く 含む。	7.5YR 7/6 褐色	7.5YR 7/6 褐色	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	ユビオサエ、 ナデ、ヘラミ ガキ	脚端部は丸く仕上げる。外面は強いナデに より砂粒が移動する。(上→下)	
18	C	ST1 ①	弥生 土器	壺	胴部	-	(1.9)	-	-	砂粒の含有量 は少ない。	7.5YR 5/3 にぶい褐色	10YR 5/3 にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	刺突を連続させる。	
22	C	ST2 床面	弥生 土器	鉢	口縁～ 上胴部	-	(8.0)	-	-	2～3mm大の砂 粒をやや多く 含む。	10YR 6/4 にぶい黄褐色	10YR 6/4 にぶい黄褐色	ユビオサエ、 ナデ	ハケ、板ナデ	貼付口縁。口縁下端肥厚。口唇は面を成 し、凹線状に浅い沈線を巡らせる。外面は 板ナデにより砂粒が移動する。(上→下)	
23	C	ST2 床面	弥生 土器	壺	下胴部 ～底部	-	(12.3)	(30.8)	9.5	1～2mm大前後 のチャート砂粒 をやや多く含 む。	10YR 3/1 黒褐色	7.5YR 6/6 褐色	ハケ、ユビナ デ、ユビオサ エ、板ナデ	ハケ、ナデ、 ヘラミガキ	わずかに上げ底気味。底面付近にタタキ目 が残る。胴部外面はヘラミガキで仕上げる。	
25	C	ST3 床面	弥生 土器	壺(広 口壺)	口縁～ 頸部	17.8	(7.7)	-	-	1～2mm大のチャ ート砂粒をや や多く含む。	7.5YR 6/6 褐色	7.5YR 6/6 褐色	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ、 ユビオサエ	口縁は大きくラップ状に開き、口唇は面をな す。頸部外面に5条1単位のクシ描直線文 を重ねて施文、扁平な粘土帯を3条貼付し、 粘土帯上に刻目を施す。	
26	C	ST3 床面	弥生 土器	壺	胴部	-	(5.4)	-	-	1～3mm大のチャ ート砂粒をや や多く含む。	7.5YR 6/6 褐色	7.5YR 6/6 褐色	ナデ、ユビオ サエ	ハケ、ナデ	ヘラ描沈線による直線文と半裁竹管による 格子目文。	
27	C	ST3 床面	弥生 土器	壺	口縁部	(29.3)	(5.3)	-	-	1～2mm大の砂 粒を少量含む。	7.5YR 6/4 にぶい褐色	7.5YR 6/6 褐色	ハケ、ユビナ デ、ナデ	板ナデ、ユビ オサエ	口唇はわずかに凹状の面をなし、下端を拡 張する。口縁部外面に断面三角形の微隆 起帯を貼付する。微隆起帯貼付の際につ いたと考えられる爪形の圧痕が残る。	28と同一個 体。

表5 遺物観察表(土器) 2

図版 番号	区	遺構 層位	器種	器形	部位	法量 (cm)				胎土	色調		調整		特徴 文様・形態・製作技法他	備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		
28	C	ST3 床面	弥生 土器	壺	頸部～ 胴部	-	(16.7)	-	-	2～4mm大の粗 粒砂をやや多 く含む。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	7.5YR 6/6 橙色	ハケ、ユビオ サエ、ユビナ デ	板ナデ、ユビ オサエ、ユビ ナデ	上胴部に3条の微隆起帯を貼付する。微 隆起帯の上下に爪の圧痕が連続してのこ されており、ユビオサエによる押圧で圧着し たと考えられる。胴部外面は板ナデにより粗 く仕上げられている。	27と同一個 体。
29	C	ST3 床面	弥生 土器	壺	胴部～ 底部	-	(25.5)	35.6	9.6	1～5mm前後の 砂粒を多量に 含む。特に内 底面に2～3mm 大の砂粒が集 中。	7.5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	ユビオサエ、 ナデ	ハケ、ナデ、 ユビオサエ	平底。胴部は大きく張り出す。胴部中位以 下は無文である。	
30	B	ST4	弥生 土器	壺	口縁部	(24.4)	(2.2)	-	-	精選された胎 土。1mm前後の 砂粒を少量含 む。	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ、 ユビオサエ	貼付口縁。口唇は面をなし、下端に刻目。	
31	B	ST4	弥生 土器	甕	口縁～ 上胴部	19.1	(12.8)	-	-	1～2mm大の砂 粒をやや多く 含む。	5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	ハケ、ユビオ サエ、ナデ、 ヘラミガキ	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	貼付口縁。口唇は凹状の面をなし、頸胴界 に断面三角形の突帯を貼付する。中期中 葉。	
32	B	ST4	弥生 土器	鉢	口縁～ 胴部	19.1	(5.8)	-	-	0.5～1mm大の 砂粒をやや多 く含む。	10YR 7/4 にぶい黄橙 色	5YR 6/6 橙色	ハケ、ユビオ サエ、ナデ、 ユビナデ、ヘ ラミガキ	ハケ、ナデ、 ユビオサエ、 ヘラミガキ	貼付口縁。粘土紐を折り曲げ、玉縁状の口 縁を形成する。鮮やかな橙色に発色。	
33	B	ST4	弥生 土器	無頸 壺ある いは鉢	口縁～ 胴部	14.0	(5.5)	17.8	-	1mm大以下の 細粒砂、微細 粒砂を多量に 含む。	7.5YR 5/3 にぶい褐色	7.5YR 5/3 にぶい褐色	ナデ	ナデ	口唇は内傾する面をなす。口縁部外面に3 条の微隆起帯、その下に豆粒状の浮文を 貼付する。摩耗顕著で調整不明瞭。類例 は少ないが無頸壺だと考えている。	
34	B	ST4	弥生 土器	壺	上胴部	-	(15.5)	(28.4)	-	胎土は精選さ れており、砂粒 をほとんど含ま ない。	5Y 4/1 灰色	7.5YR 7/6 橙色	ユビナデ、ユ ビオサエ、ナ デ	ハケ、ナデ、 ヘラミガキ	卵形に大きく張り出した壺の上胴部。ヘラミ ガキで丁寧に仕上げられており、無文である。	
35	B	ST4	弥生 土器	甕	底部	-	(3.9)	-	5.3	0.5～1mm大の チャート細粒 砂を多量に含 む。	2.5Y 3/1 黒褐色	2.5Y 6/3 にぶい黄色	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	タタキ、ハケ、 ユビオサエ、 ナデ	上げ底。	
36	B	ST4	弥生 土器	蓋	天井部 ～体部	4.6	(8.0)	-	-	1mm大の砂粒 を多く含む。	10YR 6/3 にぶい黄橙 色	10YR 6/3 にぶい黄橙 色	ハケ、ユビオ サエ、ナデ、 ユビナデ、ヘ ラミガキ	ハケ、ナデ、 ユビオサエ、 ヘラミガキ	端部形状不明。	
43	B	ST5	弥生 土器	壺	口縁～ 頸部	17.8	(5.0)	-	-	1～2mm大の砂 粒をやや多く 含む。	2.5Y 7/3 浅黄色	2.5Y 7/3 浅黄色	ハケ、ユビナ デ、ユビオサ エ、ナデ	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	貼付口縁で、口唇は丸みを帯びた面をな す。外面にハケ状原体による圧痕あり。	
44	B	ST5	弥生 土器	甕	口縁～ 頸部	12.3	(5.6)	-	-	精選された胎 土。1mm前後の 砂粒を少量含 む。	10YR 3/2 黒褐色	10YR 3/2 黒褐色	ユビナデ、ユ ビオサエ、ナ デ	ユビオサエ、 ナデ	貼付口縁。口唇は面をなし、下端に刻目。	
45	B	ST5	弥生 土器	甕	口縁～ 頸部	17.9	(4.8)	-	-	0.5mm前後の 微細粒砂を多 く含む。	7.5YR 7/4 にぶい橙色	10YR 6/3 にぶい黄橙 色	ハケ、ユビオ サエ、ナデ、 ヘラミガキ	ハケ、ナデ、 ユビオサエ	貼付口縁。	頸部に煤状 炭化物付着。
46	B	ST5	弥生 土器	壺	口縁～ 頸部	14.4	(5.1)	-	-	1～2mm大の砂 粒を多く含む。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	5YR 6/6 橙色	ユビナデ、ユ ビオサエ、ナ デ	ユビオサエ、 ナデ	貼付口縁。口唇は面をなし、上端は稜をな し下端は若干拡張する。	
47	B	ST5	弥生 土器	壺	底部	-	(2.3)	-	(4.6)	1～2mm大の砂 粒を多く含む。	10YR 8/3 浅黄褐色	7.5YR 6/3 にぶい橙色	ユビオサエ	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	わずかに高台状になる。	
48	B	ST5	弥生 土器	甕	胴部～ 底部	-	(14.9)	-	5.9	1～2mm大の砂 粒をやや多く 含む。	7.5YR 7/3 にぶい橙色	10YR 3/3 暗褐色	ユビナデ、ユ ビオサエ	ハケ、ナデ、 ヘラミガキ	わずかに上げ底気味。底面に強いユビナ デによる砂粒の移動が確認される。	
49	B	ST5	弥生 土器	甕	底部	-	(3.4)	-	4.0	1mm大の砂粒 を少し含む。	10YR 4/1 褐灰色	10YR 5/3 にぶい黄褐 色	ユビオサエ	ナデ、ユビオ サエ	平底。	
50	B	ST5	弥生 土器	壺	底部	-	(4.0)	-	8.0	1mm大の砂粒 を含むが、量は 少ない。	2.5Y 4/1 黄灰色	10YR 7/3 にぶい黄橙 色	ユビナデ、ユ ビオサエ	ハケ、ナデ、 ユビオサエ	わずかに上げ底気味。	
51	B	ST5	弥生 土器	壺	下胴部 ～底部	-	(10.1)	(19.4)	(7.2)	1～3mm大前後 のチャート砂粒 を多く含む。5 mm大の小礫あ り。	10YR 6/1 褐灰色	5YR 7/6 橙色	ユビナデ、ユ ビオサエ	ハケ、ナデ、 ユビオサエ、 ヘラミガキ	平底。	
54	C	ST6	弥生 土器	壺	口縁部	22.8	(6.5)	-	-	0.5～1mm大の 砂粒、微細粒 砂を多く含む。	2.5Y 7/3 浅黄色	10YR 7/4 にぶい黄橙 色	ハケ、ユビナ デ、ナデ	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	貼付口縁。口唇は面をなす。摩耗顕著。	
55	C	ST6	弥生 土器	壺	口縁～ 頸部	19.0	(7.8)	-	-	1～2mm大の砂 粒を多く含む。	2.5Y 5/2 暗灰黄色	7.5YR 7/6 橙色	ユビオサエ、 ナデ	ナデ、ユビオ サエ	口唇は面をなす。摩耗顕著。	
56	C	ST6	弥生 土器	壺	口縁～ 頸部	8.2	(4.4)	-	-	1mm前後の砂 粒をやや多く 含む。	10YR 7/4 にぶい黄橙 色	7.5YR 6/6 橙色	ユビナデ、ユ ビオサエ、ナ デ	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	若干外方へ開く口縁。口唇は稜をなす部 分もあるが、全体に丸みを帯びた印象であ る。貼付口縁。	
57	C	ST6 Ⅲ層	弥生 土器	壺	口縁～ 頸部	16.8	(6.2)	-	-	精選された胎 土。1mm大のチ ャート砂粒を少 量含む。	10YR 6/3 にぶい黄橙 色	10YR 7/4 にぶい黄橙 色	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	貼付口縁。口唇は面をなし、下端に刻目。 頸部に5条1単位のクシ描直線文が残る。	



表5 遺物観察表(土器) 3

図版 番号	区	遺構 層位	器種	器形	部位	法量 (cm)				胎土	色調		調整		特徴 文様・形態・製作技法他	備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		
58	C	ST6	弥生 土器	甕	口縁～ 頸部	17.0	(5.0)	-	-	微細粒砂を多 く含む。	2.5Y 6/4 にふい黄色	10YR 6/4 にふい黄橙 色	ナデ	ナデ	器壁の厚さ5mm前後と薄い。貼付口縁。口 唇は面をなし、下端に刻目。口縁部外面に 微隆起帯状に粘土紐を貼付する。ハケ状 原体による縦方向のハケ調整により、縦位 の沈線状のラインを施文、頸部を加飾する。	
59	C	ST6	弥生 土器	甕	口縁部	-	(4.6)	-	-	1mm前後のチャ ート砂粒をや や多く含む。	2.5YR 8/4 浅黄色	2.5YR 6/3 にふい黄色	不明	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	口縁部外面に刻目あり。	
60	C	ST6	弥生 土器	甕	頸部	-	(5.3)	-	-	1mm前後の砂 粒を多量に含 む。	10YR 7/4 にふい黄橙 色	10YR 6/4 にふい黄橙 色			上胴部にクシ描直線文を施文、直上の頸 部に縦位の沈線を連続して加飾する。	
61	C	ST6	弥生 土器	壺	頸部・ 小片	-	(4.5)	-	-	精選された胎 土。2mm大の 砂粒を少量含 む。	10YR 7/4 にふい黄橙 色	7.5YR 7/6 橙色			クシ描直線文を施文、直線文の間に刺突 による刻目を巡らせる。	
62	C	ST6	弥生 土器	壺	胴部・ 小片	-	(4.2)	-	-	精選された胎 土。1mm大の 砂粒を少量含 む。	10YR 7/4 にふい黄橙 色	10YR 7/6 明黄褐色	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	5条1単位のクシ描文。簾状文と直線文を 交互に施文する。	
63	C	ST6 Ⅲ層	弥生 土器	壺	胴部片	-	(5.3)	-	-	精選された胎 土。砂粒をほと んど含まない。	10YR 7/6 明黄褐色	10YR 7/6 明黄褐色	ナデ、ユビオ サエ	ハケ、ナデ、 ヘラミガキ	13条1単位のクシ描直線文を施文、クシ描 直線文の間はヘラミガキで仕上げる。	
64	C	ST6	弥生 土器	壺	上胴部 ～底部	-	(15.5)	14.1	5.8	胎土は精選さ れており、1mm 大の砂粒をこ く少量含む。 微細粒砂あり。	10YR 6/4 にふい黄橙 色	10YR 6/4 にふい黄橙 色	ユビナデ、ユ ビオサエ	ハケ、ヘラミ ガキ	平底。卵形の胴部であり、内外面とも丁寧 に仕上げる。口縁部形状は不明。	
65	C	ST6	弥生 土器	壺	下胴部 ～底部	-	(10.3)	-	7.2	胎土は精選さ れており、1mm 大の砂粒を少 量含む。微細 粒砂多い。	2.5Y 4/1 黄褐色	10YR 6/4 にふい黄橙 色	ナデ、ユビナ デ、ユビオサ エ、板ナデ	ハケ、ヘラミ ガキ	わずかに上げ底気味。外面は全面にヘラミ ガキが残り、丁寧に仕上げられている。	
66	C	ST6	弥生 土器	壺	下胴部 ～底部	-	(7.5)	-	9.6	1mm大の砂粒 をやや多く含 む。微細粒砂 多い。	10YR 7/4 にふい黄橙 色	10YR 7/4 にふい黄橙 色	ユビナデ、ユ ビオサエ	ハケ、ユビオ サエ、ヘラミ ガキ	底部は高台状で、1～1.3cm幅の溝が底面 に周状に巡っている。	
67	C	ST6 (TR6)	弥生 土器	壺	底部	-	(7.1)	-	10.6	2～3mm大のチャ ート砂粒をや や多く含む。	7.5YR 8/2 灰白色	7.5YR 7/4 にふい橙色	不明	タタキ、ハケ、 ユビオサエ、 ナデ、ヘラミ ガキ	内面は摩擦顕著で調整不明。外面にタタ キ目の痕跡がわずかに残る。	
68	C	ST6	弥生 土器	壺	底部	-	(3.9)	-	11.3	1～2mm前後の チャート砂粒 をやや多く含 む。	10YR 7/4 にふい黄橙 色	10YR 7/6 明黄褐色	ユビナデ、ユ ビオサエ	ナデ、ヘラミ ガキ	平底。底面に圧痕あり。外面はヘラミガキ で丁寧に仕上げられている。	
69	C	ST6	弥生 土器	壺	底部	-	(3.8)	-	6.7	1mm大以下の 細粒砂少量、 微細粒砂を多 く含む。	2.5Y 4/1 黄灰色	5YR 7/6 橙色	ユビナデ、ユ ビオサエ	ヘラミガキ	平底。	
70	C	ST6 (TR)	弥生 土器	壺	底部	-	(3.9)	-	(8.2)	0.5～1mm前後 の細粒砂を多 く含む。	10YR 7/2 にふい黄橙 色	10YR 8/4 浅黄褐色	ナデ、ヘラミ ガキ	ハケ、ナデ、 ヘラミガキ	平底。底面に繊維圧痕あり。器表面の剥 離が顕著である。	
71	C	ST6 (TR)	弥生 土器	壺? 甕?	底部	-	(4.5)	-	7.3	0.5～1mm大の チャート砂粒 をやや多く含 む。	10YR 6/1 褐灰色	10YR 8/3 浅黄褐色	ナデ、ユビオ サエ、ヘラミ ガキ	ハケ、ナデ、 ユビオサエ、 ヘラナデ	平底。	
72	C	ST6	弥生 土器	甕	底部	-	(2.6)	-	5.2	1mm大の砂粒 をやや多く含 む。	10YR 5/2 灰黄褐色	2.5Y 5/2 暗灰黄色	ユビナデ、ユ ビオサエ	ハケ、ナデ、 ユビオサエ	上げ底。	
73	C	ST6	弥生 土器	甕	底部	-	(3.5)	-	(8.2)	1mm大の砂粒 をやや多く含 む。	10YR 5/2 灰黄褐色	10YR 5/2 灰黄褐色	不明	ハケ	平底。内面は摩擦顕著で調整不明。	外面に煤状 炭化物付着。
74	C	ST6	弥生 土器	甕	底部	-	(3.4)	-	(10.4)	1～2mm大の砂 粒を少し含む。	5Y 4/1 灰色	10YR 6/4 にふい黄橙 色	ユビナデ	ハケ、ユビオ サエ	底面は外周があつく高台状になる。摩擦 顕著。	底面から外 面にかけて 煤状炭化物 が付着する。
75	C	ST6	弥生 土器	鉢	口縁部	-	(5.4)	-	-	胎土は精選さ れており、1mm 大の砂粒を少 量含むのみ。	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/6 橙色	ナデ、ユビオ サエ	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	貼付口縁。	
76	C	ST6	弥生 土器	蓋	天井部 付近のみ	4.3	(3.1)	-	-	1mm前後の砂 粒を多く含む。	2.5Y 5/2 暗灰黄色	10YR 6/4 にふい黄橙 色	ユビナデ	ユビオサエ、 ナデ	天井部外周は外方へ若干拡張する。	上端の径を 口径として記 録。
77	C	ST6	弥生 土器	筒袋 状土 製品	ほぼ完 形。一端が 欠けてい る。	-	(8.0)	-	2.2	微細粒砂を多 く含む。	2.5Y 7/3 浅黄色	2.5Y 7/3 浅黄色	ユビオサエ、 ナデ	ユビオサエ、 ナデ	「筒袋状土製品」として報告するが、器種 不明。断面円形の筒状で内部は空洞にな っている。片側のみ閉じており、袋状にな った端部の厚さは1cm弱。	
82	C	ST7	弥生 土器	壺(長 頸壺)	完形	14.7	30.3	23.5	7.4	1～3mm大のチャ ート砂粒をや や多く含む。	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/6 橙色	ナデ、板ナデ、 ユビナデ、ユ ビオサエ	タタキ、ハケ、 ナデ、ヘラミ ガキ	大きく張った球形の胴部から頸部は直立し 、開き気味の口縁に至る。口唇は面をなす。 頸部から上胴部にかけてはタタキ目の痕跡 を残す。口縁外面は器表の剥離著しく、調 整不明瞭。無文。	

表5 遺物観察表(土器) 4

図版番号	区	遺構層位	器種	器形	部位	法量 (cm)				胎土	色調		調整		特徴 文様・形態・製作技法他	備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		
83	C	ST7	弥生土器	壺(長頸壺)	口縁～下胴部	14.5	(25.5)	19.2	-	1~3mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	2.5YR 7/2 灰黄色	2.5YR 7/3 浅黄色	ハケ、ユビオサエ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	大きく張った球形の胴部から頸部は直立し、開き気味の口縁に至る。口唇は丸みを帯びた面をなす。口縁部はヨコナデで頸部～胴部はハケで仕上げる。無文。胴部中位から下胴部にかけて煤状炭化物付着。	煤状炭化物付着。
					底部	-	(5.2)	-	5.8	1~3mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	7.5Y 3/1 オリーブ黒色	10YR 7/3 におい黄橙色	ハケ、ユビオサエ	ハケ、ユビオサエ	平底。底面に焼成時の黒斑あり。	
84	C	ST7	弥生土器	壺(長頸壺)	口縁～上胴部	11.5	(11.4)	-	-	2~3mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	2.5YR 6/2 灰黄色	7.5YR 7/4 におい黄橙色	ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	なで肩の上胴部。頸部は直立し、開き気味の口縁に至る。	上胴部に煤付着。
85	C	ST7	弥生土器	壺(長頸壺)	口縁～頸部	12.1	(9.1)	-	-	精選された胎土。2mm大のチャート砂粒を少量含む。	5YR 7/6 橙色	5YR 7/6 橙色	ユビオサエ、ナデ	ナデ、ユビオサエ	頸部は直立し、開き気味の口縁に至る。口唇は面をなす。器表面の摩滅顕著で調整不明瞭。	
86	C	ST7	弥生土器	壺(長頸壺)	口縁～頸部	14.3	(11.5)	-	-	1~2mm前後のチャート砂粒を多く含む。	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 8/6 浅黄橙色	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	頸部は直立し、開き気味の口縁に至る。口唇は面をなし、端部下端がわずかに肥厚する。	
87	C	ST7	弥生土器	壺(長頸壺)	口縁～頸部	13.8	(6.2)	-	-	2~5mm大のチャート砂粒・小礫をやや多く含む。	7.5YR 7/4 におい黄橙色	7.5YR 7/6 橙色	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	頸部は直立し、開き気味の口縁に至る。口唇は面をなし、端部下端がわずかに肥厚する。	
88	C	ST7	弥生土器	壺(長頸壺)	口縁～頸部	12.6	(8.2)	-	-	2mm大前後の砂粒を少し含む。	7.5YR 6/3 におい褐色	5YR 6/6 褐色	ハケ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ	頸部は直立し、口縁はわずかに外反する。口唇は面をなす。	
89	C	ST7	弥生土器	壺(長頸壺)	頸部	-	(7.9)	-	-	1~3mm大の砂粒を少し含む。	5YR 7/4 におい黄橙色	5YR 7/4 におい黄橙色	ハケ、ユビオサエ、ユビナデ	ハケ、ナデ	頸部下方に絞り目状のシワが確認できる。	
90	C	ST7底	弥生土器	壺(長頸壺)	頸部～上胴部	-	(7.7)	-	-	胎土は精選されており、1~2mm大のチャート砂粒を少量含む。	10YR 4/2 灰黄褐色	7.5YR 6/4 におい黄橙色	ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	頸部は直立する。頸胴界に羽状列点文。	
91	C	ST7	弥生土器	壺(長頸壺)	口縁～頸部	19.9	(18.2)	-	-	胎土は精選されており、1mm前後のチャート細粒砂を少量含む。	7.5YR 7/6 褐色	7.5YR 7/6 褐色	ナデ、ユビナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	ナデ、ヘラミガキ	頸部は直立し、開き気味の口縁に至る。口唇は面をなし、端部下端がわずかに肥厚する。口縁部内面と口縁～頸部外面はヘラミガキで仕上げられる。内面は横方向、外面は縦方向で、外面は口縁と頸部に2段に暗文状に施文されている。	
92	C	ST7	弥生土器	壺	口縁～頸部	(10.0)	(8.9)	-	-	2mm大前後の粗粒砂を含む。褐色(赤色)チャートが目立つ。	10YR 7/4 におい黄褐色	10YR 7/4 におい黄褐色	ハケ、ユビオサエ、ユビナデ	ハケ、ナデ	頸部は直立し、口縁はわずかに外反する。口唇は面をなす。口縁下端が肥厚し丸みを帯びる。	
93	C	ST7	弥生土器	壺	口縁～頸部	11.8	(8.3)	-	-	2mm前後の砂粒を含む。砂粒含有量は少なめ。	7.5YR 7/6 褐色	7.5YR 7/6 褐色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	タタキ、ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	頸部は直立し、口縁はわずかに外反する。口唇は丸みを帯びる。外面にタタキ目が観察される。	
94	C	ST7	弥生土器	甕?	完形	16.8	32.4	26.4	10.0	1~3mm大のチャート砂粒を多く含む。	2.5Y 6/1 灰黄色	2.5YR 7/4 浅黄色	ナデ、ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	ナデ、ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	口唇は凹状の面をなす。口縁部内面は強いヨコナデにより稜をなす。胴部最大径は胴部中位にある。内面胴部下半ヘラズリ、外面板ナデにより砂粒が移動する。	
95	C	ST7	弥生土器	壺	口縁～上胴部	17.1	(1.9)	-	-	2mm前後のチャート砂粒を少し含む。	7.5YR 5/1 褐色	7.5YR 6/4 におい黄褐色	ハケ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ	口縁部は大きく外反、口唇は面をなす。口縁部下端は丸みを帯びる。	
96	C	ST7	弥生土器	壺	口縁～頸部	19.4	(5.8)	-	-	2~3mm大前後のチャート砂粒をやや多く含む。	10YR 7/4 におい黄褐色	10YR 7/3 におい黄褐色	ユビオサエ、ナデ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	口縁部は大きく外反、口唇は面をなす。口縁部下端は肥厚する。	
97	C	ST7	弥生土器	壺	口縁～頸部	14.0	(6.9)	-	-	精選された胎土。1~2mm大の砂粒を少量含む。	7.5YR 8/4 浅黄褐色	5YR 7/6 褐色	ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	口縁部は大きく外反、口唇は面をなす。口縁部下端は肥厚する。	
98	C	ST7土器集中	弥生土器	壺	口縁～頸部	14.0	(5.9)	-	-	1~2mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	10YR 6/3 におい黄褐色	10YR 7/4 におい黄褐色	ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	口唇はわずかに凹状の面をなし、上下端を拡張する。	
99	C	ST7	弥生土器	壺	口縁部	23.0	(5.7)	-	-	精選された胎土。1~2mm大のチャート砂粒を多く含む。	7.5YR 7/4 におい黄褐色	10YR 4/1 褐色	ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	口唇は上下に拡張、3条の浅い凹線が認められる。凹線に直交し、3条1単位で棒状原体により施文。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は不定方向のヘラミガキで仕上げる。	
100	C	ST7	弥生土器	壺	口縁～頸部	20.0	(7.0)	-	-	胎土は精選されており、1~2mm大のチャート砂粒を少量含むのみ。	5YR 6/6 褐色	7.5YR 7/4 におい黄褐色	ハケ、ユビナデ、ナデ	ハケ、ナデ	口唇は面をなし、2~3条の浅い凹線が残る。凹線に直交し2条1単位で棒状原体を使って施文する。頸部にクシ描波状文(原体の単位は3条)、波状文の下に2条の棒状原体により沈線が入る。	
101	C	ST7	弥生土器	壺	口縁～下胴部	18.6	(28.0)	29.8	-	1~5mm大のチャート砂粒を多量に含む。	10YR 7/4 におい黄褐色	7.5YR 7/6 褐色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	口唇に3条の凹線。頸部にクシ描波状文、頸胴界に列点文を施し、上胴部から胴部中位にかけて、クシ描直線文と波状文を交互に施文する。クシ描の単位は9条1単位。胴部は球状に大きく張り出す。底部は確認できていないが、最大径は胴部中位にあると考えられる。	
102	C	ST7	弥生土器	壺	胴部	-	(11.2)	-	-	1~2mm前後のチャート砂粒を多く含む。	7.5YR 7/6 褐色	10YR 7/3 におい黄褐色	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	上胴部破片。頸胴界に列点文をめぐらせ、5条1単位のクシ描波状文を3段に分けて施文する。	

表5 遺物観察表(土器) 5

図版 番号	区	遺構 層位	器種	器形	部位	法量 (cm)				胎土	色調		調整		特徴 文様・形態・製作技法他	備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		
103	C	ST7	弥生 土器	壺	口縁～ 上胴部	17.6	(19.0)	29.2	-	2～6mm大のチャ ート砂粒・小 礫をやや多く 含む。	10YR 7/4 に ぶい黄橙 色	10YR 7/4 に ぶい黄橙 色	ハケ、ユビナ デ、ユビオサ エ、ナデ、板 ナデ	ハケ、ナデ、 ヘラミガキ	卵形の胴部から頸部は直立し、口縁部は大きく開く。口唇は強いヨコナデにより、凹状の面となる。上胴部内面に板ナデによる砂粒の移動が認められる。外面はハケ調整とナデ調整により仕上げるが、最後はヘラミガキ(単位は不明瞭)で仕上げている。頸胴界に列点文を巡らせる。	
104	C	ST7	弥生 土器	壺	口縁～ 頸部	(12.9)	(5.4)	-	-	1～5mm大の砂 粒・小礫をや や多く含む。	7.5YR 6/6 橙 色	5YR 6/6 橙 色	ハケ、ユビナ デ、ナデ	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	口縁部は上方へ拡張、下端も肥厚する。口唇は面をなし、3条の浅い凹線(摩耗のため痕跡はわずか。)	
105	C	ST7	弥生 土器	壺	口縁～ 頸部	(15.0)	(7.5)	-	-	2～4mm大前後 の粗粒砂を多 く含む。	7.5YR 7/4 に ぶい橙 色	7.5YR 7/6 橙 色	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	口唇は面をなし、下端を拡張する。口唇に3条の凹線。	
106	C	ST7	弥生 土器	壺	頸縁～ 上胴部	-	(9.0)	-	-	2～3mm大の粗 粒砂をやや多 く含む。	10YR 7/3 に ぶい黄橙 色	10YR 7/4 に ぶい黄橙 色	ヘラケズリ、 ハケ、ユビナ デ、ナデ	ハケ	頸胴界に列点文を巡らせる。頸部下内面にヘラケズリ。	
107	C	ST7	弥生 土器	壺	上胴部	-	(3.5)	-	-	胎土は精選さ れており、1mm 大の砂粒を少 量含む。	2.5Y 4/1 黄 灰色	2.5Y 5/3 黄 褐色	ハケ、ユビナ デ、ユビオサ エ	ハケ、ナデ	クシ描直線文・波状文、竹管文で施文。	
108	C	ST7 土器 集中	弥生 土器	壺	胴部	-	(12.6)	21.6	-	胎土は精選さ れており、1～2 mm大のチャ ート砂粒を少 量含むのみ。	2.5Y 5/1 黄 灰色	5YR 7/6 橙 色	ハケ、ユビナ デ、ユビオサ エ	ハケ、ナデ	ソロバン玉状に胴部中位から上胴部にかけて大きく張り出している。外面ハケで仕上げ、張り出し部以下に煤状炭化物が付着している。	
109	C	ST7	弥生 土器	壺	上胴部 ～底部	-	(16.1)	17.4	6.4	1～2mm大のチャ ート砂粒をや や多く含む。	2.5Y 3/1 黒 褐色	10YR 6/3 に ぶい黄橙 色	ハケ、ユビナ デ、ユビオサ エ、ナデ	タタキ、ハケ、 ナデ、ユビオ サエ	上げ底。上胴部が大きく張り出し、屈曲した後内傾する。	
110	C	ST7	弥生 土器	甕	完形	20.0	32.6	21.7	7.1	1～3mm大のチャ ート砂粒をや や多く含む。	10YR 7/3 に ぶい黄橙 色	10YR 6/4 に ぶい黄橙 色	ハケ、ユビナ デ、ナデ、板 ナデ	ハケ、板ナデ、 ナデ	最大径は胴部上半にある。無文の甕。頸部で短く屈曲、口唇は面をなす。平底。外面は板ナデにより成形痕を消すが、胴部下半底部付近にタタキ目の痕跡がわずかに残る。内面には板状工具による成形・調整の痕跡が認められる。	外面胴部中央下に煤状炭化物付着。
111	C	ST7	弥生 土器	甕	口縁～ 下胴部	14.7	(18.5)	18.7	-	1～3mm大のチャ ート砂粒をや や多く含む。	10YR 7/6 明 黄褐色	5YR 6/6 橙 色	ナデ、ユビオ サエ	板ナデ、ユビ オサエ、ヘラ ミガキ	頸部で強く屈曲、口縁は外反する。口唇は丸みを帯びる。胴部最大径は、上胴部1/3ほどの位置にある。下胴部にタタキ目の痕跡はあるものの、丁寧な板ナデにより仕上げられており、ほとんど残っていない。	口縁部外面と胴部中位以下に部分的に煤付着。
112	C	ST7	弥生 土器	甕	口縁～ 下胴部	12.1	(12.2)	15.3	-	1～2mm大のチャ ート砂粒を多 く含む。	5YR 7/6 橙 色	7.5YR 7/6 橙 色	ナデ、ユビナ デ、ユビオサ エ、ヘラケズ リ	ナデ、ユビオ サエ	頸部でく字状に強く屈曲、口唇は丸みのある面をなす。外面上胴部以下器表面の剥落顕著。内面胴部下半ヘラケズリ。	
113	C	ST7	弥生 土器	甕	口縁～ 下胴部	(13.8)	(8.7)	-	-	微細粒砂が多 い。火山ガラス などのガラス質 鉱物や角閃石 を含む。	10YR 7/2 に ぶい黄橙 色	7.5YR 6/4 に ぶい橙 色	ヘラケズリ、 ハケ、ユビオ サエ、ナデ	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	口縁は外反し、口唇は面をなす。内面にヘラケズリ。	上胴部に煤状炭化物付着。胎土が在地産とは異なる。搬入土器。
114	C	ST7	弥生 土器	甕	口縁～ 胴部	15.0	(10.0)	-	-	1～3mm大の砂 粒をやや多く 含む。	7.5YR 7/6 橙 色	10YR 7/4 に ぶい黄橙 色	ハケ、ユビナ デ、ユビオサ エ	タタキ、ナデ、 ユビオサエ	頸部はゆるやかに屈曲し、短く外反して口縁に至る。口唇は面をなす。胴部外面全面にタタキ目が残る。	上胴部以下に煤状炭化物付着。
115	C	ST7	弥生 土器	甕	口縁～ 胴部	16.0	(15.6)	24.0	-	1～3mm大のチャ ート砂粒をや や多く含む。	7.5YR 6/6 橙 色	7.5YR 5/3 に ぶい褐色	ハケ、ユビナ デ、ユビオサ エ、ナデ	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	頸部はゆるやかに屈曲し、短く外反して口縁に至る。口唇は粗いハケ調整により面をなす。	
116	C	ST7	弥生 土器	甕	口縁～ 頸部	(17.8)	(4.8)	-	-	胎土は精選さ れているが、3 ～5mm大の小 礫を少量含む。	5YR 7/6 橙 色	5YR 7/6 橙 色	ハケ、ユビナ デ、ナデ、ヘ ラミガキ	ハケ、ナデ、 ユビオサエ	口縁は大きく外反し、口唇は面をなす。	口縁部外面に煤状炭化物付着。吹きこぼれの痕跡あり。
117	C	ST7	弥生 土器	甕	口縁～ 胴部	20.0	(12.0)	19.1	-	2～3mm大前後 のチャート砂 粒をやや多く 含む。	7.5YR 7/6 橙 色	7.5YR 7/6 橙 色	ユビナデ、ユ ビオサエ、ナ デ	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	口縁は大きく外反し、口唇は面をなす。口縁部下部端がわずかに肥厚する。	上胴部に煤状炭化物付着。吹きこぼれの痕跡あり。
118	C	ST7	弥生 土器	甕	口縁～ 胴部	21.2	(11.5)	20.2	-	1～3mm大の砂 粒をやや多く 含む。7mm大の 小礫あり。	5YR 6/6 橙 色	7.5YR 6/6 橙 色	ハケ、ユビナ デ、ユビオサ エ、ナデ	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	口縁は大きく外反し、口唇は面をなす。口縁部下部端がわずかに肥厚する。	上胴部に煤状炭化物付着。
119	C	ST7	弥生 土器	甕	口縁～ 頸部	(14.6)	(5.0)	-	-	1～3mm大のチャ ート砂粒をや や多く含む。	7.5YR 7/4 に ぶい橙 色	7.5YR 7/4 に ぶい橙 色	ユビオサエ、 ナデ	ハケ、ナデ	口縁は外反し、口唇は面をなす。口縁部外面に肥厚する部分がある。	
120	C	ST7 土器 集中	弥生 土器	甕	口縁部	(22.6)	(4.7)	-	-	2～3mm大の砂 粒をやや多く 含む。	7.5YR 6/6 橙 色	7.5YR 6/6 橙 色	ハケ	ハケ	口唇はわずかに凹状の面をなし、上下端が若干肥厚する。	
121	C	ST7	弥生 土器	甕	口縁～ 上胴部	(16.5)	(9.7)	(20.0)	-	1mm大の砂粒 をやや多く含 む。	10YR 7/2 に ぶい黄橙 色	7.5YR 7/3 に ぶい橙 色	ハケ、ユビオ サエ、ユビナ デ、ナデ	ハケ、ナデ	口縁は外反し、口唇は面をなす。	上胴部に煤状炭化物付着。

表5 遺物観察表(土器) 6

図版 番号	区	遺構 層位	器種	器形	部位	法量 (cm)				胎土	色調		調整		特徴 文様・形態・製作技法他	備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		
122	C	ST7	弥生 土器	甕	口縁～ 上胴部	18.4	(9.1)	-	-	2~4mm大の砂 粒を少量含む。	10YR 7/6 明黄褐色	10YR 7/6 明黄褐色	ハケ、ユビナ デ、ユビオサ エ、ナデ	ハケ、ナデ	口縁端部は上方へわずかに拡張、下端も 肥厚する。	
123	C	ST7	弥生 土器	甕	口縁～ 上胴部	16.0	(8.5)	-	-	精選された胎 土。1~2mm大 の砂粒を少量 含む。	2.5YR 7/3 浅黄色	10YR 7/3 にぶい黄橙 色	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	頸部で屈曲し、口縁部は外反する。口唇は 面をなす。	吹きこぼれ跡 あり。
124	C	ST7	弥生 土器	甕	口縁～ 胴部	18.4	(15.3)	19.9	-	1~2mm大の砂 粒を含むが、 含有量は少な い。	5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	ハケ、ユビナ デ、ユビオサ エ、ナデ	タタキ、ハケ、 ナデ、ユビオ サエ	頸部で屈曲し、口縁部は外反する。口唇は わずかに凹状の面をなし、下端が若干肥 厚する。	吹きこぼれ跡 あり。口頸部 には部分的 に、上胴部以 下には全面 に煤状炭化 物が付着す る。
125	C	ST7	弥生 土器	甕	口縁～ 胴部	15.2	(10.0)	17.2	-	1~4mm大のチ ャート砂粒を多 く含む。特に3 mm前後の砂粒 が多い。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	7.5YR 7/6 橙色	ハケ、ユビオ サエ、ナデ、 板ナデ	タタキ、ユビ オサエ、ナデ	頸部で屈曲し、口縁部は外反する。口唇は 面をなす。頸部下はナデによりタタキ目を消 すが、胴部にはタタキ目がそのまま残る。内 面にハケと同様の工具を用いた板ナデ。	
126	C	ST7	弥生 土器	甕	口縁～ 胴部	13.8	(8.9)	(16.0)	-	1~3mm大の砂 粒をやや多く 含む。	10YR 7/3 にぶい黄橙 色	10YR 7/3 にぶい黄橙 色	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	タタキ、ハケ、 ユビオサエ、 ナデ	タタキ目の痕跡をハケとナデにより丁寧に消 している。	吹きこぼれ跡 あり。口頸部 に部分的に 煤状炭化物 付着。
127	C	ST7	弥生 土器	甕	口縁～ 胴部	22.5	(14.2)	25.2	-	1~3mm大のチ ャート砂粒をや や多く含む。	7.5YR 7/3 にぶい橙色	10YR 6/4 にぶい黄橙 色	ユビオサエ、 ナデ	タタキ、ナデ、 ユビオサエ	内面に板状工具による条線が残っている。 外面にタタキ目がそのまま残る。口唇は面を なす。	胴部中位に 煤状炭化物 付着。
128	C	ST7	弥生 土器	甕	口縁～ 上胴部	-	(5.5)	-	-	1~2mm大の砂 粒を少し含む。	10YR 5/3 にぶい黄褐 色	10YR 6/3 にぶい黄橙 色	ハケ、ユビナ デ、ナデ	ハケ、ナデ	口唇は面をなす。頸胴界に列点文。	
129	C	ST7 土器 集中	弥生 土器	甕	口縁～ 胴部	(15.6)	(12.1)	(28.4)	-	2mm前後のチ ャート砂粒を少 し含む。	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/6 橙色	ユビナデ、ユ ビオサエ、ナ デ	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	口唇は面をなし、下端を拡張する。口縁部 は強いヨコナデのため、内面に稜をなす。 頸部～上胴部に列点文。	口縁部外面 と胴部中位 に部分的に 煤状炭化物 付着。
130	C	ST7	弥生 土器	甕	口縁～ 上胴部	18.1	(8.3)	-	-	1~3mm大のチ ャート砂粒をや や多く含む。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	7.5YR 6/6 橙色	ハケ、ユビナ デ、ユビオサ エ	タタキ、ハケ、 ナデ	頸部で緩やかに屈曲し、口縁部は外反す る。口唇はごくわずかに上方へ拡張、凹状 の面をなす。頸胴界に列点文。上胴部に 残るタタキ目の痕跡をハケで消している。	外面に煤状 炭化物付着。
131	C	ST7 土器 集中	弥生 土器	甕	口縁～ 上胴部	(18.0)	(5.4)	-	-	2mm大の粗粒 砂をやや多く 含む。5~6mm 大の小礫も散 見される。	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ハケ、ユビオ サエ、ユビナ デ、ナデ	ハケ、ナデ	口唇はわずかに凹状の面をなし、1条の凹 線が認められる。	
132	C	ST7	弥生 土器	甕	口縁～ 胴部	19.4	(9.7)	20.0	-	1~2mm大の砂 粒をやや多く 含む。	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/6 橙色	ヘラケズリ、 ハケ、ユビナ デ、ナデ	ハケ、ナデ	口唇はわずかに凹状の面をなし、端部上下 端わずかに拡張。頸部下に列点文を施文、 列点文の施文原体の方向は柁目である。 胴部下半ヘラケズリ。	
133	C	ST7	弥生 土器	甕	口縁～ 上胴部	(19.0)	(6.3)	-	-	1~2mm大の砂 粒をやや多く 含む。	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 7/6 橙色	ハケ、ユビナ デ、ユビオサ エ、ナデ	ハケ、ナデ	口唇はわずかに凹状の面をなし、端部上下 端わずかに拡張。頸部下に列点文を施文、 列点文の施文原体の方向は柁目である。	
134	C	ST7	弥生 土器	甕	口縁～ 上胴部	(16.2)	(5.7)	-	-	0.5~2mm大の チャート砂粒を やや多く含む。	10YR 7/3 にぶい黄橙 色	7.5YR 7/6 橙色	ユビナデ、ユ ビオサエ、ナ デ	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	口唇は上下に拡張、3条の浅い凹線が認め られる。口縁～頸部で厚さ2.5~5.0mmときわ め薄いつくりである。	
135	C	ST7	弥生 土器	甕	口縁～ 上胴部	15.4	(6.8)	-	-	1mm大以下の 砂粒、0.5mm以 下の微細粒砂 を多量に含む。	10YR 6/4 にぶい黄橙 色	10YR 7/4 にぶい黄橙 色	ハケ、ユビナ デ、ユビオサ エ、ナデ	ハケ、ナデ	頸部で稜をなしてくの字状に強く屈曲、口 縁は外反する。口唇は面をなし、端部が上 方へわずかに拡張する。	
136	C	ST7	弥生 土器	甕	口縁～ 上胴部	(14.8)	(5.2)	-	-	1~3mm大の砂 粒をやや多く 含む。	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ハケ、ナデ、 ヘラケズリ	ハケ、ナデ	口縁は外反し、口唇は面をなす。頸部は内 面で稜をなし、頸部下までヘラケズリ(右下 →左上)が確認できる。	
137	C	ST7	弥生 土器	甕	口縁～ 胴部	(14.0)	(8.6)	(13.2)	-	1~3mm大の砂 粒をやや多く 含む。	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/6 橙色	ユビナデ、ユ ビオサエ、ユ ビナデ	ハケ、ナデ	口縁は外反し、口唇は面をなす。	
138	C	ST7	弥生 土器	甕	口縁～ 胴部	(15.0)	(8.2)	(14.9)	-	2~5mm大の粗 粒砂をやや多 く含む。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	10YR 6/3 にぶい黄橙 色	ハケ、ユビオ サエ、ユビナ デ、ナデ	ハケ、ナデ	口縁は外反し、口唇は面をなす。器表面の 剥離著しい。	
139	C	ST7	弥生 土器	甕	口縁～ 下胴部	(11.8)	(9.9)	(11.1)	-	1~2mm大の砂 粒を少し含む。	7.5YR 7/4 にぶい橙色	10YR 7/4 にぶい黄橙 色	ナデ、ユビナ デ、ユビオサ エ	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	頸部で緩やかに屈曲し、口縁部は外反す る。口唇は丸く仕上げる。砂粒の移動が確 認されるほどの強いナデ。	
140	C	ST7 土器 集中	弥生 土器	甕(小 型甕)	完形	10.0	12.6	9.6	5.0	1~2mm大の砂 粒を少し含む。	5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ユビオサエ、 ナデ	タタキ、ハケ、 ユビオサエ、 ナデ	口縁は外反し、内面稜をなす。口唇は丸く 仕上げる。	胴部中位下 半に煤状炭 化物付着。
141	C	ST7	弥生 土器	壺	下胴部 ～底部	-	(9.6)	-	8.2	2~3mm大のチ ャート砂粒を多 く含む。	7.5YR 8/6 浅黄褐色	5YR 7/6 橙色	ユビナデ、ユ ビオサエ	ハケ、ナデ、 ヘラミガキ	外面は器表の剥落のため部分的に確認で きるのみ。	
142	C	ST7 土器 集中	弥生 土器	壺	底部	-	(4.4)	-	8.3	1~4mm大のチ ャート砂粒を多 量に含む。褐色 チャートが目 立って多い。	10YR 7/3 にぶい黄橙 色	10YR 7/4 にぶい黄橙 色	ユビナデ、ユ ビオサエ	不明	外面は摩耗顕著で調整を観察できない。	

表5 遺物観察表(土器) 7

図版 番号	区	遺構 層位	器種	器形	部位	法量 (cm)				胎土	色調		調整		特徴 文様・形態・製作技法他	備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		
143	C	ST7	弥生 土器	壺	底部	-	(4.0)	-	7.5	1~3mm大の砂粒をやや多く含む。	7.5YR 5/1 褐灰色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ハケ、ユビオサエ、ユビナデ	ハケ、ナデ	上げ底気味。底面にもハケ、ナデが観察される。	
144	C	ST7 土器 集中	弥生 土器	壺	底部	-	(5.0)	-	7.2	1~3mm大前後の砂粒をやや多く含む。	7.5YR 7/4 にぶい橙色	10YR 6/3 にぶい黄橙色	ユビナデ、ユビオサエ	タタキ、ハケ、ナデ、ヘラミガキ	平底。外面にタタキ目がわずかに痕跡をとどめる。	
145	C	ST7	弥生 土器	壺	下胴部 ~底部	-	(14.8)	(25.8)	10.0	1~2mm大前後のチャート砂粒をやや多く含む。	2.5Y 6/1 黄灰色	10YR 7/4 にぶい黄橙色	ナデ、ユビナデ、ユビオサエ、板ナデ	タタキ、ハケ、ユビオサエ、ナデ、ヘラミガキ	タタキ目はハケ調整で丁寧に消されており、器表面の凹凸でタタキ目の存在を確認できる。内面は板ナデにより砂粒が下から上方方向に動く。	
146	C	ST7	弥生 土器	壺	底部	-	(7.2)	-	(8.6)	1~2mm大の砂粒をやや多く含む。	10YR 7/3 にぶい黄橙色	10YR 7/4 にぶい黄橙色	ユビナデ、ユビオサエ	ヘラミガキ	平底。外面全面ヘラミガキ。	
147	C	ST7	弥生 土器	壺	底部	-	(6.0)	-	(6.4)	2~3mm大の粗粒砂を多く含む。	2.5Y 2/1 黒色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ユビナデ、ユビオサエ、ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ヘラミガキ	平底。底面にヘラミガキが残る。	
148	C	ST7	弥生 土器	壺? 甕?	底部	-	(4.9)	-	(7.8)	1~2mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	10YR 4/1 褐灰色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ハケ	ユビナデ、ユビオサエ	平底。	
149	C	ST7	弥生 土器	壺	底部	-	(5.8)	-	(8.1)	1mm前後の砂粒を少し含む。	10YR 7/3 にぶい黄橙色	10YR 8/3 浅黄橙色	ユビナデ、ユビオサエ	タタキ、ナデ、ユビオサエ	底面に繊維痕。底部は外縁が丸みを帯びる。タタキ目はナデにより、丁寧に消されている。	
150	C	ST7	弥生 土器	壺	底部	-	(3.5)	-	(7.6)	1~2mm大の砂粒を多く含む。	10YR 8/3 浅黄橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ユビナデ	ハケ、ヘラナデ、ユビオサエ	上げ底。外周は工具を使ったナデ。	
151	C	ST7	弥生 土器	壺	底部	-	(5.3)	-	7.8	1~2mm大の砂粒を多く含む。	10YR 4/2 灰黄褐色	5YR 6/8 橙色	ハケ、ユビオサエ、ナデ	タタキ、ハケ、ユビオサエ、ナデ	底面は中央が凹み、高台状となる。	
152	C	ST7 土器 集中	弥生 土器	壺	底部	-	(3.1)	-	10.0	1~2mm大のチャート砂粒を少量含む。	10YR 8/4 浅黄褐色	10YR 8/4 浅黄褐色	ユビオサエ、ナデ、ヘラミガキ	ユビナデ、ユビオサエ	外周は板状の原体を使ったナデ、ミガキ。	
153	C	ST7	弥生 土器	壺	下胴部 ~底部	-	(10.2)	-	8.8	1~2mm前後の砂粒を多く含む。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	7.5Y 3/1 オリープ黒色	ユビナデ、ユビオサエ	タタキ、ハケ、ナデ、ユビオサエ	平底。底部外周は外方へ拡張。	
154	C	ST7 底	弥生 土器	壺	下胴部 ~底部	-	(6.3)	-	7.1	1~2mm大のチャート砂粒を少量含む。	10YR 1.7/1 黒色	7.5YR 7/6 橙色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	ナデ、ユビオサエ	平底。丁寧にナデで仕上げている。	
155	C	ST7 土器 集中	弥生 土器	壺	下胴部 ~底部	-	(8.9)	-	6.2	2~3mm大の砂粒をやや多く含む。	5YR 4/2 褐灰色	7.5YR 6/6 橙色	ユビナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	平底。ヘラミガキで仕上げる。	
156	C	ST7	弥生 土器	壺	下胴部 ~底部	-	(8.1)	-	7.4	1~2mm大の砂粒をやや多く含む。	10YR 7/4 にぶい黄橙色	7.5YR 6/6 橙色	ハケ、ユビオサエ、ナデ	タタキ、ハケ、ナデ	平底。わずかにタタキ目の痕跡が残る。	
157	C	ST7 土器 集中	弥生 土器	壺	下胴部 ~底部	-	(9.1)	-	(8.3)	1~2mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	10YR 7/3 にぶい黄橙色	10YR 6/3 にぶい黄橙色	ハケ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ	平底。	
158	C	ST7	弥生 土器	甕	底部	-	(5.1)	-	4.5	1~3mm大の砂粒を多く含む。	2.5Y 4/1 黄灰色	2.5YR 6/6 橙色	ハケ、ユビオサエ、ユビナデ、ナデ	ハケ、ナデ	平底。底面にナデ調整。摩耗顕著で、器表面の大半が剥落する。	
159	C	ST7	弥生 土器	甕	底部	-	(6.2)	-	5.5	2~3mm大の砂粒を多く含む。	10YR 7/3 にぶい黄橙色	10YR 8/3 浅黄褐色	ヘラケズリ、ユビナデ、ナデ	ハケ、板ケズリ	外面は工具を使った調整で砂粒が移動する。平底。	
160	C	ST7	弥生 土器	壺	底部	-	(7.6)	-	(6.4)	2~3mm大の粗粒砂を多く含む。	10YR 6/1 褐灰色	10YR 6/3 にぶい黄橙色	ユビナデ	タタキ、ハケ、ナデ	外面に棒状原体の圧痕とモミ圧痕がある。底面は剥落している。	
161	C	ST7	弥生 土器	甕	胴部 ~底部	-	(16.2)	-	6.8	1~2mm大のチャート砂粒を多く含む。	2.5YR 7/3 浅黄褐色	7.5YR 7/6 橙色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ	タタキ、ハケ、ナデ	平底。タタキ調整で成形後、ハケ、ナデによりタタキ目を消す。ハケは下→上へ放射状に入る。	
162	C	ST7	弥生 土器	甕	下胴部 ~底部	-	(15.7)	-	7.2	1~3mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	10YR 7/6 明黄褐色	2.5YR 5/2 暗灰黄色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	タタキ、ハケ、ユビナデ、ユビオサエ	平底。外面底部付近にタタキ目が残る。	外面に煤状炭化物附着。
163	C	ST7	弥生 土器	甕	下胴部 ~底部	-	(9.7)	-	6.0	1~2mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	5YR 5/6 明赤褐色	7.5YR 5/4 にぶい褐色	ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	上げ底気味の底部。ヘラミガキで仕上げる。	煤状炭化物附着。
164	C	ST7	弥生 土器	甕	下胴部 ~底部	-	(11.0)	(17.2)	5.4	1~2mm前後のチャート砂粒を含む。含有量は少ない。	7.5YR 7/6 褐色	7.5Y 5/1 褐灰色	ハケ、ユビオサエ	タタキ、ハケ、ナデ、ユビオサエ	平底。胴部内面は器表面の剥落顕著で、調整不明。外面は丁寧に仕上げられ、タタキ目の痕跡はほとんど残っていない。	
165	C	ST7	弥生 土器	甕	下胴部 ~底部	-	(8.1)	-	6.5	2~4mm前後のチャート砂粒を多く含む。	10YR 7/6 明黄褐色	10YR 6/4 にぶい黄橙色	ハケ、ユビオサエ	タタキ?、ハケ、ナデ	平底。底面に繊維圧痕あり。ハケとナデにより丁寧に仕上げ、タタキ目の痕跡をほとんど残さない。	胴部下半に部分的に煤状炭化物附着。
166	C	ST7	弥生 土器	甕	底部	-	(5.4)	-	6.2	1~2mm大の砂粒をやや多く含む。	7.5YR 5/4 にぶい褐色	10YR 7/4 にぶい黄橙色	ユビオサエ、ナデ	ナデ	上げ底で、一旦くびれた後、外上方へたちあがる。	
167	C	ST7	弥生 土器	甕	底部	-	(2.5)	-	4.3	2~3mm大の粗粒砂を多く含む。	10YR 4/1 褐灰色	7.5YR 6/4 にぶい褐色	ユビナデ、ユビオサエ	ナデ	平底。底面に繊維圧痕あり。	

表5 遺物観察表(土器) 8

図版 番号	区	遺構 層位	器種	器形	部位	法量 (cm)				胎土	色調		調整		特徴 文様・形態・製作技法他	備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		
168	C	ST7	弥生 土器	甕	底部	-	(3.8)	-	5.2	2~3mm大の砂粒をやや多く含む。	2.5Y 5/1 黄灰色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ハケ、ユビオサエ、ユビナデ	不明	平底。底面に繊維圧痕あり。外面は器表面の大半が剥離している。	
169	C	ST7	弥生 土器	甕	底部	-	(4.5)	-	7.8	1~3mm大のチャート砂粒を多く含む。	10YR 5/1 褐灰色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ハラケズリ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ユビオサエ、ナデ	平底。中央部が若干凹む。	底部外周に煤状炭化物付着。
170	C	ST7	弥生 土器	甕	底部	-	(4.3)	-	(8.6)	1~3mm大の砂粒をやや多く含む。	5Y 3/1 オリーブ黒色	5YR 7/4 にぶい橙色	不明	ハケ、ユビオサエ、ナデ	平底。外面は大部分が剥落している。	
171	C	ST7	弥生 土器	甕	底部	-	(2.2)	-	6.2	1~2mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	2.5Y 3/1 黒褐色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ユビオサエ	ハケ、ナデ	外縁部の内側に幅1~1.2cmの周状に凹んだ部分がある。	
172	C	ST7	弥生 土器	甕	底部	-	(4.2)	-	8.7	2mm大のチャート砂粒を少し含む。	10YR 6/4 にぶい黄橙色	10YR 3/1 黒褐色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	平底。底面にハケ調整あり。	
173	C	ST7 土器 集中	弥生 土器	甕	底部	-	(2.7)	-	(4.6)	3mm大前後の粗粒砂をやや多く含む。	7.5YR 4/1 褐灰色	7.5YR 5/2 灰褐色	ハケ、ユビナデ、ナデ	タタキ、ハケ、ユビオサエ、ナデ	上げ底。内面は強いナデにより砂粒が移動する。	
174	C	ST7	弥生 土器	甕?	底部	-	(3.9)	-	(5.6)	2~3mm大の砂粒を少量含む。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	5Y 6/6 橙色	ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ	底面の中央部が凹む。外面は丁寧な仕上げ、タタキの痕跡をとどめない。	
175	C	ST7	弥生 土器	高坏	坏部	27.6	(6.8)	(25.1)	-	胎土は精選されており、1~2mm大のチャート砂粒を少量含む。	7.5YR 7/4 にぶい橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ナデ、ヘラミガキ	ナデ、ヘラミガキ	坏部で稜をなして一旦屈曲した後、口縁は大きく外反する。口唇は丸く仕上げる。内面にヘラミガキが放射状に施される。	坏部の稜線を胴径として計測。
176	C	ST7	弥生 土器	高坏	坏部	27.2	(4.9)	24.3	-	胎土は精選されており、1mm大の砂粒を少量含むのみ。	5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/6 橙色	ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	坏部で稜をなして一旦屈曲した後、口縁は外反する。口唇は面をなす。内面にヘラミガキが放射状に施される。内底部分はヘラミガキが密である。	
177	C	ST7	弥生 土器	高坏	坏部	23.0	(4.8)	(20.6)	-	胎土は精選されており、1~3mm大のチャート砂粒を少量含む。	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/6 橙色	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	坏部で稜をなして一旦屈曲した後、口縁は外反する。口唇は面をなす。内外面ヘラミガキで仕上げる。口縁部外面は横方向のヘラミガキ。	
178	C	ST7	弥生 土器	高坏	坏部	-	(3.5)	-	-	2mm大のチャート砂粒を少量含む。	10YR 7/4 にぶい黄橙色	10YR 4/1 褐灰色	ユビオサエ、ナデ	ユビオサエ、ナデ	口縁部外面わずかに肥厚する。	
179	C	ST7	弥生 土器	高坏	坏部口縁	(14.8)	(4.8)	-	-	1mm大の砂粒をやや多く含む。	2.5Y 6/8 橙色	5Y 7/6 橙色	ハケ、ナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	坏部は碗状の形態で、ごくわずかに段を形成する。口唇は丸く仕上げる。内面にヘラミガキが放射状に施される。	
180	C	ST7	弥生 土器	高坏	坏部	16.6	(3.8)	-	-	胎土は精選されており、1mm大の砂粒を少し含む。	10YR 6/3 にぶい黄橙色	7.5YR 5/3 にぶい褐色	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	内外面ともヘラミガキが放射状に施される。坏部は碗状の形態である。口唇は丸く仕上げ、外面がわずかに肥厚する。	残存1/8程度。
181	C	ST7	弥生 土器	高坏	坏部	16.8	5.0	-	-	2~3mm大の砂粒を少量含む。	5YR 7/6 橙色	5YR 7/6 橙色	ナデ、ヘラミガキ	ナデ、ヘラミガキ	内面に工具による圧痕が残る。坏部は碗状の形態である。口唇は丸く、内外面ともヘラミガキで仕上げる。	
182	C	ST7	弥生 土器	高坏 あるいは鉢	坏部あるいは鉢の口縁	-	(3.7)	-	-	精選された胎土。2mm大の砂粒を少量含む。	10YR 7/4 にぶい黄橙色	10YR 7/6 明黄褐色	ユビオサエ、ナデ	ユビオサエ、ナデ	坏部は碗状の形態である。口唇は丸く仕上げる。	
183	C	ST7	弥生 土器	高坏	坏部	-	(4.9)	-	-	精選された胎土。微細粒砂を含むが、砂粒はほとんど含まない。	2.5Y 4/1 黄灰色	10YR 7/3 にぶい黄橙色	ハケ、ユビナデ	ハケ、ヘラミガキ	碗状の坏部。内面は放射状にユビナデ、外面は全面ヘラミガキ。坏部下脚部外面に沈線を巡らせる。(3条確認できる。)	
184	C	ST7	弥生 土器	高坏	脚部	-	(9.8)	-	(13.4)	1~2mm大のチャート砂粒を多く含む。	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/6 橙色	ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	坏部下(脚部上端)に3条の沈線が巡る。沈線は金属等鋭利な原体による。器表面の摩耗顕著だが、部分的にヘラミガキが残る。透孔は4孔。脚端部は面をなし、上方にわずかに拡張する。	
185	C	ST7	弥生 土器	高坏	脚部	-	(5.1)	-	14.3	1mm前後のチャート砂粒をやや多く含む。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	10YR 7/4 にぶい黄橙色	ハケ、ユビオサエ、ナデ	ヘラミガキ	外面は摩耗のため、単位をはっきり捉えられないものの、ヘラミガキが確認できる。脚端部は面をなし、上方へ拡張。透孔は4孔だと推定される。	
186	C	ST7	弥生 土器	高坏	脚部	-	(8.9)	-	12.7	1~3mm大の砂粒をやや多く含む。	7.5YR 7/4 にぶい橙色	7.5YR 7/6 橙色	ナデ、ユビナデ	ナデ、ヘラミガキ	脚端部は面をなし、上方へ拡張する。透孔は4孔だと推定される。	高坏は、脚端部の径を底径として計測する。以下同様。
187	C	ST7	弥生 土器	高坏	脚部	-	(4.7)	-	-	精選された胎土。1mm前後の砂粒を含む。	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/6 橙色	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	ヨコナデにより、脚端部は凹状の面をなし、端部は上方に拡張する。	
188	C	ST7 底	弥生 土器	高坏	脚部	-	(7.1)	-	-	胎土は精選されている。1~3mm大の粗粒砂をやや多く含む。	5YR 6/6 橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	内底にもヘラミガキ。脚部内面、ナデにより、砂粒が上→下方向に移動。外面は全面に縦方向のヘラミガキ。透孔は3孔、孔径は9mm前後。	

表5 遺物観察表(土器) 9

図版 番号	区	遺構 層位	器種	器形	部位	量法 (cm)				胎土	色調		調整		特徴 文様・形態・製作技法他	備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		
189	C	ST7	弥生 土器	高坏	脚部	-	(10.1)	-	-	1~2mm前後の チャート砂粒を 多量に含む。	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ユビナデ、ユ ビオサエ、ナ デ	ハケ、ナデ、 ユビオサエ、 ヘラミガキ	器表面の摩耗が著しく、ミガキの痕跡をほと んど確認できない。脚部端は欠けており、形 状不明。絞り目あり。	摩耗顕著で ヘラミガキは 痕跡が確認 できるのみで ある。
190	C	ST7	弥生 土器	高坏	脚部	-	(8.4)	-	9.9	1~2mm大のチャ ート砂粒を多く 含む。	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/6 橙色	ナデ、ユビナ デ	ナデ、ヘラミ ガキ	坏部は碗状で、内底にも全面にヘラミガキ が残る。脚部外面に縦方向のヘラミガキ。 脚部端は面をなし、わずかに上方に肥厚す る。内面に絞り目。透孔は6孔。脚部上端に ヘラ描沈線により凹線状の文様(偽凹線) 施文。	
191	C	ST7	弥生 土器	高坏	脚部	-	(6.2)	-	9.3	1~2mm大のチャ ート砂粒を少量 含む。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ハケ、ユビナ デ、ユビオサ エ、ナデ	ハケ、ナデ、 ユビオサエ、 ユビオサエ	脚部は下半で屈曲した後、大きく開く。脚 部端は面をなす。ハケおよびナデにより仕 上げる。絞り目あり。透孔は認められない。	
192	C	ST7 床面	弥生 土器	鉢	口縁~ 胴部	30.0	(9.4)	(28.8)	-	1~3mm大の砂 粒をやや多く 含む。5mm大の 小礫あり。	7.5YR 5/6 明褐色	7.5YR 6/6 橙色	ナデ、ユビオ サエ	ハケ、ナデ	口唇は面をなし、下端が肥厚する。口唇面 に1条の沈線(偽凹線)が認められる。外面 にタタキ目の痕跡。ハケ調整も確認される が、調整痕はほとんど残らない。	部分的だが、 煤状炭化物 付着。
193	C	ST7	弥生 土器	鉢	口縁部	-	(3.9)	-	-	胎土は精選さ れており、微細 粒砂を含むのみ。	7.5YR 5/3 にぶい褐色	7.5YR 5/3 にぶい褐色	ナデ	ハケ、ナデ、 ユビオサエ、 ヘラミガキ	貼付口縁。口唇は凹状の面をなす。外面 にヘラミガキが認められる。胎土は微細粒 砂を含むのみであり、火山ガラスは含むもの の角閃石は認められない。在地の土器とは 明らかに異なる。	搬入品。
194	C	ST7	弥生 土器	鉢あ るいは 台付鉢	口縁部	10.4	(4.6)	-	-	精選された胎 土。1~3mm大 のチャート砂粒 を少量含む。	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/6 橙色	ハケ、ナデ、 ヘラミガキ	ハケ、ユビナ デ、ユビオサ エ、ナデ	碗状の形態であり、口唇は丸く仕上げる。 内面にヘラミガキ。底部形状は不明だが、 短い脚部が付く台付鉢の可能性もある。	
195	C	ST7	弥生 土器	台付 鉢	脚部	-	(3.0)	-	6.2	精選された胎 土で、砂粒をほ とんど含まない。	7.5YR 5/4 にぶい褐色	7.5YR 6/4 にぶい褐色	ユビオサエ、 ナデ、ヘラミ ガキ	タタキ?、ナデ、 ユビオサエ	台付鉢の脚部。内面にヘラミガキ。	
196	C	ST7	弥生 土器	蓋	天井部 ~体部	6.1	9.7	-	-	1~2mm大の砂 粒をやや多く 含む。	7.5YR 6/4 にぶい褐色	7.5YR 6/4 にぶい褐色	ユビオサエ、 ナデ、ヘラミ ガキ	ユビオサエ、 ナデ、ヘラミ ガキ	外面摩耗顕著で器表が剥落する部分あり。 天井部は凹み、外周をつまみ出す。外面は 縦方向、内面は横方向のヘラミガキで仕上 げる。	裾部内外面に 煤状炭化 物付着。
197	C	ST7 土器 集中	弥生 土器	小型 土器 (甕)	完形	2.0	2.6	1.9	2.0	1mm大の砂粒 を少量含む。	10YR 4/2 灰黄褐色	10YR 4/2 灰黄褐色	ナデ、ユビオ サエ	ナデ、ユビオ サエ	手づくねで成形したミニチュア土器。内部 の空洞をあえてつくり出そうとはしていない。	
198	C	ST7	弥生 土器	小型 土器 (壺)	完形	6.9	9.3	6.4	3.2	1~2mm大のチャ ート砂粒を多く 含む。	5YR 7/6 褐色	7.5YR 7/6 褐色	ユビナデ、ユ ビオサエ、ナ デ	ハケ、ナデ、 ユビオサエ	器表面の摩耗が著しく、調整は部分的に わかるのみ。ヘラミガキを観察することが できる。	
199	C	ST7	弥生 土器	小型 土器	底部	-	(2.2)	-	2.6	1~2mm大の砂 粒を若干量含 む。	10YR 6/1 褐色	7.5YR 7/6 褐色	ユビオサエ	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	わずかに上げ底の小型土器底部。	
202	C	ST8	弥生 土器	壺	口縁部	16.4	(1.8)	-	-	精選された胎 土。1~2mm大 の砂粒を少し 含む。	10YR 7/4 にぶい黄 褐色	10YR 7/4 にぶい黄 褐色	ナデ	ナデ、ユビオ サエ	口縁部内面に断面三角形の微隆起帯を 貼付、口唇上端に刻目。	
203	C	ST8	弥生 土器	壺	口縁部	-	(2.6)	-	-	1mm前後の砂 粒をやや多く 含む。	10YR 7/6 明黄褐色	7.5YR 6/6 褐色	ナデ	ハケ、ユビオ サエ	貼付口縁。摩耗顕著。ヘラ状原体により内 面に羽状に施文。口縁部外面に刻目あり。	
204	C	ST8	弥生 土器	壺	口縁部	-	(5.0)	-	-	精選された胎 土。微細粒砂 を含む。	10YR 7/6 明黄褐色	10YR 7/6 明黄褐色	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	貼付口縁。口唇は面をなす。	
205	C	ST8	弥生 土器	壺	口縁部	-	(3.0)	-	-	精選された胎 土。1~2mm大 の砂粒を少し 含む。	10YR 7/6 明黄褐色	10YR 7/4 にぶい黄 褐色	ナデ	ハケ、ナデ、 ユビオサエ	貼付口縁。口唇はわずかに凹状の面をな す。端部外面肥厚。	
206	C	ST8	弥生 土器	壺	底部	-	(4.7)	-	9.6	1~2mm大のチャ ート砂粒をや や多く含む。	2.5Y 8/3 淡黄色	2.5Y 8/3 淡黄色	ハケ、ユビナ デ、ユビオサ エ	ナデ、ヘラナ デ、ヘラミガ キ	上げ底。外周はヘラナデ、ヘラミガキで仕上 げる。	
207	C	ST8	弥生 土器	壺	底部	-	(7.0)	-	9.1	1~3mm大のチャ ート砂粒を多く 含む。	5Y 6/1 灰色	7.5YR 7/4 にぶい褐色	ユビナデ、ユ ビオサエ	不明	平底。底面に繊維圧痕あり。外面は摩耗 顕著で調整を観察できない。	
208	C	ST8	弥生 土器	壺	下胴部 ~底部	-	(13.5)	-	7.8	胎土は精選さ れており、1mm 前後のチャート 細粒砂、微細 粒砂を含む。	5YR 7/4 にぶい褐色	5YR 7/6 褐色	ユビナデ、ユ ビオサエ、ヘ ラミガキ	ハケ、ナデ、 ヘラナデ、ヘ ラミガキ	わずかに上げ底気味。外周はヘラナデで 成形、内外面にヘラミガキ。	
209	C	ST8	弥生 土器	小型 土器 (鉢)	完形	6.5	6.2	-	3.4	精選された胎 土。砂粒はほ とんど含まない。	7.5YR 6/4 にぶい褐色	7.5YR 6/4 にぶい褐色	ユビオサエ、 ナデ	ユビオサエ、 ナデ	ユビオサエ、ユビナデで成形・仕上げを行 う。短い脚部が付いた小型鉢(小型土器)	
210	C	ST8 床面	弥生 土器	甕	底部	-	(4.7)	-	4.8	1mm前後の砂 粒を多量に含 む。	10YR 4/1 褐色	10YR 6/4 にぶい黄 褐色	不明	不明	底面に直径8mmの孔を穿つ。焼成前穿孔。 甕として利用されたと推定される。摩耗顕 著で調整不明。	

表5 遺物観察表(土器) 10

図版 番号	区	遺構 層位	器種	器形	部位	法量 (cm)				胎土	色調		調整		特徴 文様・形態・製作技法他	備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		
213	A	ST9	弥生 土器	壺	頸部	-	(3.4)	-	-	精選された胎土。	2.5Y 4/2 明灰黄色	7.5YR 5/4 にぶい褐色	ユビオサエ、 ナデ	ナデ	竹管文と7条1単位のクシ描沈線。	
214	A	ST9	弥生 土器	壺	上胴部	-	(4.9)	18.0	-	微細粒砂および1mm以下の砂粒を多く含む。	2.5Y 6/1 黄灰色	7.5YR 5/4 にぶい褐色	ユビオサエ、 ナデ	ハケ、ナデ	ソロバン玉状の大きく張り出した壺の上胴部。	
215	A	ST9	弥生 土器	壺	底部	-	(2.9)	-	9.3	1~2mm大の砂粒を多量に含む。	7.5YR 7/2 明褐色	7.5YR 6/2 灰褐色	ハケ、ユビオ サエ	不明	平底。	
216	A	ST10 P1	弥生 土器	壺	胴部	-	(4.3)	-	-	1mm前後の砂粒をやや多く含む。	2.5Y 7/3 浅黄色	10YR 6/3 にぶい黄橙 色	ユビナデ、ユ ビオサエ	ユビオサエ、 ナデ	クシ描文(簾状文・直線文)を施文、クシ描の単位は4条1単位で、簾状文は2段に重ねる。扁平な刻目を持つ粘土帯を巡らせる。この扁平な刻目突帯の上に断面三角形の突帯を貼付する。この三角形の突帯は全周に巡らず、上下方向の穿孔により加飾する。	
217	A	ST10	弥生 土器	壺	頸部小片	-	(2.3)	-	-	精選された胎土。1~2mm大の砂粒を少量含む。	10YR 4/2 褐黄灰色	5YR 6/6 橙色			ヘラ描沈線。扁平な断面四角形の刻目突帯貼付。	
218	A	ST10	弥生 土器	壺	頸部小片	-	(3.1)	-	-	精選された胎土。1mm大のチャート砂粒を少量含む。	10YR 3/1 黒褐色	10YR 6/3 にぶい黄橙 色	ユビオサエ、 ナデ	ナデ	紐状の細い粘土帯を貼付し刻目施文。色の異なる粘土帯を貼付。クシ描直線文。	
219	A	ST10	弥生 土器	壺	胴部小片	-	(2.5)	-	-	1mm大のチャート砂粒を少量含む。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	5YR 6/4 にぶい橙色			クシ描簾状文。	
220	A	ST10	弥生 土器	壺	胴部	-	(5.5)	-	-	胎土は精選されており、砂粒はわずかに含むのみ。	7.5YR 7/4 にぶい橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ユビオサエ、 ナデ	ナデ	クシ描文。直線+波状+直線+簾状+直線+波状+直線。	
221	A	ST10	弥生 土器	甕	胴部	-	(4.3)	-	-	1~2mm大の砂粒をやや多く含む。	5Y 6/6 橙色	7.5YR 6/6 橙色	不明	不明	縦位と横位の微隆起帯を組み合わせて施文する。	
222	A	ST10 P2	弥生 土器	壺	下胴部 ~底部	-	(10.4)	-	7.5	微細粒砂を多量に含む。	10YR 4/1 褐灰色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ユビナデ、ユ ビオサエ	ハケ、ユビオ サエ、ヘラミ ガキ	平底。外面はヘラミガキで仕上げる。	
228	A	ST11 土器1	弥生 土器	壺	口縁~ 上胴部	20.2	(20.6)	-	-	1~2mm前後のチャート砂粒を多量に含む。褐色(赤色)チャートが目立っている。	2.5YR 7/3 浅黄色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ハケ、ユビナ デ、ユビオサ エ、ナデ	ハケ、ナデ、 ユビオサエ、 ヘラミガキ	貼付口縁。口唇は面をなし、上下に刻目。頸部に2条1単位のクシ描沈線を6段重ね、12条の直線文とする。直線文の下、上胴部にはクシ描波状文。2条1単位で2段重ね、4条とする。	
229	A	ST11 土器4	弥生 土器	壺	完形	22.5	49.0	32.6	9.0	1~2mm大前後の砂粒をやや多く含む。	7.5YR 7/4 にぶい橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ハケ、ユビナ デ、ユビオサ エ、ナデ	ハケ、ナデ、 ユビオサエ、 ヘラミガキ	平底。卵形の胴部から屈曲した後、頸部は直立、ラッパ状に開口縁部に至る。貼付口縁。口唇は凹状で、上下端に刻目を施す。口縁部内面に3条の色の異なる刻目を持つ扁平粘土帯を貼付する。口唇上端の刻目と内面粘土帯の刻目は同時に施したものである。頸部から上胴部にかけてクシ描沈線による簾状文・直線文・波状文を施文、クシ描直線文の間に扁平な断面四角形のクシ描突帯を貼付する。クシ描直線文と波状文は2条1単位のクシ描、簾状文は4条1単位。	
230	A	ST11 SD56	弥生 土器	壺	下胴部	-	(8.4)	17.4	-	1~3mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	5YR 4/1 褐灰色	5YR 6/6 橙色	ハケ、ユビナ デ、ヘラミガ キ	ハケ、ナデ、 ヘラミガキ	胴部は球形に大きく張る。中位が最大径で、扁平な断面逆台形状の粘土帯を貼付し刻目を施す。粘土帯の下方に9条のヘラ描沈線による直線文。ヘラ描沈線より下位は外面全体に横方向のヘラミガキが確認される。器表面剥落のため底部形状不明。	
231	A	ST11 土器2	弥生 土器	壺	底部	-	(6.2)	-	14.5	1~5mm大のチャート砂粒を多量に含む。	10YR 7/3 にぶい黄橙 色	10YR 7/4 にぶい黄橙 色	ユビナデ、ユ ビオサエ	ハケ、ユビオ サエ	底面に小礫や植物繊維の圧痕が残る	
232	A	ST11 土器3	弥生 土器	甕	口縁~ 上胴部	19.5	(11.9)	(10.6)	-	1~3mm大のチャート砂粒を多量に含む。	10YR 6/4 にぶい黄橙 色	7.5YR 6/6 橙色	ナデ	ユビオサエ、 ナデ	摩耗顕著で調整不明瞭。	
233	A	ST11 土器4	弥生 土器	甕	口縁~ 胴部	24.4	(18.5)	-	-	1~2mm大のチャート砂粒を多く含む。	10YR 6/4 にぶい黄橙 色	10YR 7/4 にぶい黄橙 色	ユビナデ、ユ ビオサエ、ナ デ	ハケ、ナデ	摩耗顕著で調整は全体に不明瞭。	
234	A	ST11 土器4	弥生 土器	甕	下胴部 ~底部	-	(7.9)	-	8.4	1~2mm大のチャート砂粒を多く含む。	10YR 5/2 灰黄褐色	7.5YR 6/3 にぶい褐色	不明	不明	平底。器表面の摩耗顕著で、調整不明。	
235	A	ST11	弥生 土器	壺	口縁~ 頸部	11.0	(9.4)	-	-	1mm大の砂粒をやや多く含む。	5Y 6/6 橙色	5Y 6/6 橙色	ハケ、ナデ、 ヘラミガキ	ハケ、ナデ、 ヘラミガキ	貼付口縁。口唇は面をなし、端部外面肥厚。ハケ状原体の角を用いて、口唇内には斜行文を、口縁内面には羽状文を施文。内外面ともヘラミガキできわめて丁寧仕上げる。	



表5 遺物観察表(土器) 11

図版 番号	区	遺構 層位	器種	器形	部位	法量 (cm)				胎土	色調		調整		特徴 文様・形態・製作技法他	備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		
236	A	ST11	弥生 土器	甕	口縁部	-	(3.7)	-	-	砂粒をほとんど 含まず、微細 粒砂および1mm 大の砂粒を少量 認められる のみである。	2.5Y 5/2 暗灰黄色	2.5Y 5/2 暗灰黄色	ナデ	ナデ、ハケ	口縁部外面に刻目。口縁外面に微隆起 帯を1条巡らせる。	搬入品・薄手 土器。
237	A	ST11	弥生 土器	壺	底部	-	(2.8)	-	(6.2)	1mm大の砂粒 をやや多く含 む。	10YR 7/1 灰白色	7.5YR 6/6 橙色	ユビオサエ、 ナデ	ハケ、ナデ、 ユビオサエ	摩耗顕著。	
238	A	ST11	弥生 土器	壺	底部	-	(7.7)	-	(7.8)	1mm大のチャ ート砂粒、微細 粒砂を多量に含 む。	5YR 6/6 橙色	10YR 7/4 にぶい黄橙 色	ユビナデ、ユ ビオサエ	ハケ、ヘラミ ガキ	外面は摩耗のため調整痕はほとんど残ら ず、ごく一部観察できるのみ。	
239	A	ST11	弥生 土器	甕	底部	-	(5.1)	-	5.0	1~2mm大の砂 粒を多く含む。	2.5Y 4/1 黄灰色	10YR 6/3 にぶい黄橙 色	ユビナデ	ユビオサエ、 ナデ	上げ底。底部外縁は外方へ肥厚する。	
240	A	ST11	弥生 土器	壺	底部	-	(4.2)	-	(8.0)	1~2mm大の砂 粒をやや多く 含む。	2.5Y 6/1 黄灰色	5YR 6/6 橙色	ユビナデ、ユ ビオサエ	ハケ、ナデ、 ユビオサエ、 ヘラミガキ	平底。	
241	A	ST11	土師 器	椀	底部	-	(1.8)	-	6.2	胎土は精選さ れており、砂粒 はほとんど含ま ない。	2.5Y 7/3 浅黄色	5YR 6/4 にぶい橙色			ハの字状に開く、断面逆台形の輪高台。	他時期の混 入資料。
246	C	SK4	弥生 土器	壺	下胴部 ~底部	-	(14.3)	-	(7.9)	1~2mm大のチャ ート砂粒を多く 含む。	2.5Y 4/1 黄灰色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ハケ、ユビナ デ、ユビオサ エ、板ナデ、 ナデ	タタキ、ナデ	内面は工具を使ったナデにより砂粒が移動 する。外面全面にタタキ目が残る。平底。	
247	C	SK4	弥生 土器	甕	底部	-	(5.5)	-	5.4	2~4mm大の砂 粒を多く含む。	10YR 5/2 灰黄褐色	10YR 5/4 にぶい黄橙 色	ハケ、ユビナ デ、ヘラナデ	ハケ、ユビナ デ、ユビオサ エ、ナデ	底面もヘラナデ(工具を使ったナデ)により 仕上げる。	
248	C	SK8	弥生 土器	壺	下胴部 ~底部	-	(13.2)	-	8.7	1~8mm大のチャ ート砂粒、小 礫を多量に含 む。褐色チャ ートが多い。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	5Y 6/6 橙色	ナデ、ユビナ デ、ユビオサ エ	ハケ、ナデ、 ヘラミガキ	上げ底。底面に繊維圧痕。摩耗による器表 面の剥落のため、調整は部分的に確認で きるのみ。	
249	D	SK11	弥生 土器	壺	口縁 ~底部	16.0	43.8	30.0	10.6	1~2mm大の砂 粒をやや多く 含む。微細粒 砂多量に含み 褐色チャート も目立つ。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ハケ、ユビナ デ、ユビオサ エ、ナデ、ヘ ラミガキ	ハケ、ユビナ デ、ユビオサ エ、ナデ、ヘ ラミガキ	最大径が胴部中位にある卵形の胴部から、 頸部は直立し口縁は短く外反する。ヨコナ デにより口唇は凹状を呈し、上下端に刻目 を巡らせる。貼付口縁。上胴部に6条1単位 のクシ描文を施し、上から籬状文、小さい振 幅の波状文(2段)、大きい振幅の波状文 の順に文様を構成する。	
250	D	SK11	弥生 土器	甕	完形	15.1	23.1	15.5	6.2	1~2mm前後の チャート砂粒を 多量に含む。	7.5YR 5/4 にぶい褐色	7.5YR 5/4 にぶい褐色	ハケ、ユビナ デ、ユビオサ エ、ナデ	ハケ、ナデ、 ユビオサエ	貼付口縁。口唇は面をなす。頸部界にくさ び形の列点文を施す。平底。	
251	D	SK11	弥生 土器	甕	口縁部	27.2	(5.0)	-	-	1mm以下のチャ ート細粒砂を 多量に含む。	7.5YR 8/6 浅黄褐色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ユビオサエ、 ナデ	ナデ	口縁部外面に粘土帯を貼付、粘土帯上に 刻目を施文する。器壁は5~6mm前後と薄 い。	
252	D	SK19	弥生 土器	甕	底部	-	(3.9)	-	6.2	1~3mm大の砂 粒をやや多く 含む。	10YR 6/4 にぶい黄橙 色	2.5Y 3/1 黒褐色	ナデ	ケズリ?ミガキ ?	底面も外縁部と同じ調整。砂粒が下→上 方向に移動する。	
253	C	SK25	弥生 土器	壺	口縁 ~頸部	26.6	(7.1)	-	-	1mm以下の砂 粒、微細粒砂 を多量に含む。	5Y 6/6 褐色	5Y 6/6 褐色	ナデ	ユビオサエ、 ナデ	摩耗顕著で調整不明瞭。口縁部内面に4 条1単位のクシ描波状文。口唇はヨコナ デとユビオサエにより、わずかに凹状の面をな す。	
254	C	SK35	弥生 土器	壺	頸部 ~上胴部	-	(15.8)	-	-	1mm大の砂粒 をやや多く含 む。褐色チャ ートが目立つ。微 細粒砂が多く、 精選された印 象である。	2.5Y 7/3 浅黄色	10YR 7/4 にぶい黄橙 色	ハケ、ユビナ デ、ユビオサ エ、ナデ	ハケ、ナデ、 ユビオサエ、 ヘラミガキ	上胴部はなで肩で頸部は直立する。口縁 部は開くが形状不明。	
258	B	SK50	弥生 土器	壺	口縁 ~頸部	16.0	(6.4)	-	-	精選された胎 土。1mm前後の 砂粒を少量含 む。	5YR 6/6 褐色	5YR 6/4 にぶい褐色	ハケ、ユビナ デ	ハケ、ナデ、 ユビオサエ	貼付口縁。口唇は凹状の面をなし、口唇面 全面にハケ状原体による刻目を巡らせる。	
259	B	SK50 底	弥生 土器	甕	口縁 ~下胴部	13.2	(13.7)	(14.8)	-	精選された胎 土。1mm前後の 砂粒を少量含 む。	7.5YR 6/6 褐色	7.5YR 5/4 にぶい褐色	ハケ、ナデ、 ヘラミガキ	ハケ、ユビオ サエ、ヘラミ ガキ	膨らんだ胴部から、わずかに内傾して立ち 上がった後、口縁は外反。口縁部外面 がわずかに拡張。	
260	B	SK50	弥生 土器	甕	口縁部	-	(5.0)	-	-	0.5~1mm大の 細粒砂を多量 に含む。	10YR 6/4 にぶい黄橙 色	7.5YR 5/4 にぶい褐色	ナデ	ナデ	口唇は面をなし、外端が丸みを帯びる。口 縁部外面に刻目、その下に爪痕状の刻目 を施文する。爪痕状の刻目は、上胴 部にも施文する。口縁部外面には縦位の みみず腫れ状の微隆起帯を有する。	
261	B	SK50	弥生 土器	甕	口縁部	-	(5.0)	-	-	0.5~1mm大の 細粒砂を多量 に含む。	10YR 6/4 にぶい黄橙 色	7.5YR 5/4 にぶい褐色	ナデ	ナデ	口縁部。端部外面の刻目と爪痕状の刻 目が確認できる。	
262	B	SK50	弥生 土器	甕	頸部 ~上胴部 文様	-	(5.7)	-	-	0.5~1mm大の 細粒砂を多量 に含む。	10YR 6/4 にぶい黄橙 色	7.5YR 5/4 にぶい褐色	ナデ	ナデ	上胴部の爪痕状の刻目あり。	

表5 遺物観察表（土器）12

図版 番号	区	遺構 層位	器種	器形	部位	法量 (cm)				胎土	色調		調整		特徴 文様・形態・製作技法他	備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		
263	B	SK50	弥生 土器	甕	頸部～ 上胴部	-	(4.6)	-	-	0.5～1mm大の 細粒砂を多量 に含む。	10YR 6/4 にぶい黄橙 色	7.5YR 5/4 にぶい褐色	ナデ	ナデ	縦位のみみず腫れ状の微隆起帯と上胴部 の爪痕状の刻目が確認できる。	
264	B	SK50	弥生 土器	壺	下胴部 ～底部	-	(7.6)	-	(10.4)	1mm大の砂粒 を少し含む。	10YR 7/4 にぶい黄橙 色	7.5YR 6/4 にぶい褐色	ナデ、ユビナ デ、ユビオサ エ	ハケ、ナデ、 ヘラミガキ	平底。底部外周部は強い横方向のナデに よって仕上げる。外面には強いナデによる 砂粒の移動が確認され、底面にもナデの跡 が残る。	
265	B	SK50	弥生 土器	壺	底部	-	(6.3)	-	9.0	1～2mm大の砂 粒をやや多く 含む。	2.5Y 6/1 灰褐色	7.5YR 6/4 にぶい褐色	ナデ、ユビナ デ、ユビオサ エ	ヘラナデ、ナ デ、ヘラミガ キ	平底。底面にケズリ調整あり。	
266	B	SK50	弥生 土器	甕	底部	-	(5.2)	-	6.0	1mm大の砂粒 を少し含む。	2.5Y 4/1 灰褐色	10YR 7/3 にぶい黄橙 色	ユビナデ、ユ ビオサエ	ハケ、ナデ、 ヘラミガキ	上げ底気味の底部。	
267	B	SK61	弥生 土器	壺	底部	-	(4.0)	-	10.0	精選された胎 土。微細粒砂 を含み、5～7 mm大の小礫も 認められる。	10YR 5/2 灰黄褐色	10YR 7/4 にぶい黄橙 色	ユビナデ、ユ ビオサエ	ハケ、ナデ、 ユビオサエ、 ヘラナデ	平底。底部外周ヘラナデにより面を形成す る。	
268	B	SK68	弥生 土器	壺	口縁～ 頸部	15.5	-	-	-	1mm大の砂粒 を少量含む。	5YR 6/6 褐色	5YR 6/6 褐色	ハケ、ユビナ デ、ナデ	ハケ、ナデ、 ユビオサエ	貼付口縁。口唇は凹状の面をなし、上下端 に刻目。頸部界わずかに隆起し刺突文を 巡らせる。	
269	B	SK70	弥生 土器	壺	口縁～ 上胴部	19.8	(12.0)	-	-	1～2mm大の砂 粒をやや多く 含む。	10YR 4/1 褐灰色	10YR 8/2 灰白色	ハケ、ユビナ デ、ユビオサ エ、ナデ	ハケ、ナデ、 工具による 圧痕	頸部界に3条のクシ描直線文。口縁は貼付 口縁で上下端に刻目を施す。	
270	B	SK70	弥生 土器	壺	口縁～ 頸部	(19.4)	(6.8)	-	-	1～2mm大の砂 粒を少量含む。	10YR 7/4 にぶい黄橙 色	10YR 7/6 明黄褐色	ハケ、ユビオ サエ、ユビナ デ	ハケ、ナデ、 ユビオサエ	貼付口縁。口唇はわずかに凹状の面をな す。器表面の摩耗顕著。	
271	B	SK70	弥生 土器	甕	口縁～ 上胴部	31.8	(12.9)	-	-	1mm大のチャ ート砂粒をや や多く含む。	10YR 6/4 にぶい黄橙 色	10YR 6/4 にぶい黄橙 色	ハケ、ユビナ デ、ユビオサ エ、ナデ	ハケ、ナデ、 ユビオサエ、 ヘラミガキ (ごく一部に 痕跡あり)	貼付口縁。口唇はわずかに凹状の面をな す。上胴部にハケ状原体による列点文。口 唇部上端に刻目あり。	
272	B	SK70	弥生 土器	甕	頸部～ 上胴部	-	(9.1)	(31.0)	-	1mm大の砂粒 を少し含む。	10YR 6/3 にぶい黄橙 色	10YR 6/3 にぶい黄橙 色	ハケ、ナデ	ナデ	頸部に縦位のミズ腫れ状の微隆起帯(13 条)と横位の扁平な刻目を持つ粘土帯より 施文する。上胴部に断面三角形の微隆 起帯とその下に豆粒状の粘土を貼付し浮 文として加飾する。胴部外面の器面は粗 い状態であり、ナデにより仕上げられては いない。	器壁は5mm前 後と薄い。
273	B	SK70	弥生 土器	甕	頸部～ 胴部	-	(17.3)	(21.6)	-	1～3mm大の砂 粒を少量含む。	10YR 5/2 灰黄褐色	10YR 5/2 灰黄褐色	ハケ、ユビオ サエ、ナデ、 ユビナデ、ヘ ラミガキ	タタキ、ハケ、 ナデ	無文で、口縁形状は不明。膨らんだ胴部か ら、頸部は直立する。	胴部外面に 煤状炭化物 付着。
274	B	SK70	弥生 土器	甕	上胴部 ～胴部	-	(15.0)	24.9	-	精選された胎 土。1～2mm大 の砂粒を若干 量と微細粒砂 を含むのみ。	7.5YR 6/4 にぶい褐色	7.5YR 4/1 褐灰色	ユビナデ	ハケ	上胴部に列点文がわずかに残る。外面は 全面をきめの細かいハケ調整で仕上げる。	外面に煤状 炭化物付着。
275	B	SK70	弥生 土器	甕	下胴部 ～底部	-	(10.5)	-	8.0	精選された胎 土。1～2mm大 の砂粒を若干 量と微細粒砂 を含むのみ。	7.5YR 6/4 にぶい褐色	7.5YR 4/1 褐灰色	ユビナデ、ユ ビオサエ、板 ナデ、ヘラミ ガキ	板ケズリ、ハ ケ、ヘラミガ キ	底面は板ケズリにより砂粒が移動、ヘラミガ キで仕上げる。外面はきめの細かいハケ調 整で仕上げる。	外面に煤状 炭化物付着。
276	B	SK70	弥生 土器	甕	胴部～ 底部	-	(11.1)	-	4.7	0.5～1mm大 のチャート砂 粒を少量含む。	10YR 7/3 にぶい黄橙 色	10YR 7/4 にぶい黄橙 色	ユビナデ、ユ ビオサエ、ヘ ラミガキ	ハケ、ユビオ サエ、ナデ、 板ケズリ(ナ デ)	平底。底面にケズリ調整あり。外面板ケズ リにより砂粒が左→右方向に移動する。	
277	B	SK70	弥生 土器	壺	底部	-	(3.5)	-	7.3	1～2mm大の砂 粒をやや多く 含む。	10YR 6/3 にぶい黄橙 色	7.5YR 6/4 にぶい褐色	ナデ、ユビオ サエ	ハケ、ナデ、 ヘラミガキ	平底。	
278	B	SK70	弥生 土器	甕	底部	-	(4.0)	-	6.7	1mm大の砂粒 を少し含む。	10YR 5/2 灰黄褐色	10YR 5/3 にぶい黄褐 色	ユビナデ、ユ ビオサエ、ナ デ、ヘラミガ キ	ハケ、ナデ、 ユビオサエ	平底。	
279	B	SK70	弥生 土器	甕	底部	-	(4.7)	-	5.7	1mm大の砂粒 をやや多く含 む。	10YR 6/4 にぶい黄橙 色	10YR 7/3 にぶい黄橙 色	ユビオサエ	ユビオサエ	摩耗顕著で調整不明瞭。確認できるのは 内外面のユビオサエのみ。底部外周が外 側へ拡張。平底。	
280	B	SK70	弥生 土器	甕	底部	-	(3.2)	-	6.9	1mm大の砂粒 を少し含む。	5Y 3/1 オリープ黒 色	10YR 7/3 にぶい黄橙 色	ユビオサエ	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	外面は摩耗顕著。	
285	A	SK82	弥生 土器	壺	口縁～ 頸部	20.4	(9.3)	-	-	精選された胎 土。1mm前後 の砂粒を少量 含む。4mm大 の小礫も認め られる。	10YR 6/4 にぶい黄橙 色	10YR 6/4 にぶい黄橙 色	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	貼付口縁。口唇は面をなし、全面に刻目。 頸部にクシ描文を施文する。太めの直線 文に波状文が一部重なっている。残り5条 が確認できる。	
286	A	SK82	弥生 土器	壺	頸部～ 上胴部	-	(3.5)	-	-	精選された胎 土。微細粒砂 を含むのみ。	10YR 6/4 にぶい黄橙 色	10YR 6/4 にぶい黄橙 色	ハケ、ナデ	ハケ	クシ描波状文と直線文。	

表5 遺物観察表 (土器) 13

図版 番号	区	遺構 層位	器種	器形	部位	法量 (cm)				胎土	色調		調整		特徴 文様・形態・製作技法他	備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		
287	A	SK82	弥生 土器	壺	胴部	-	(3.2)	-	-	精選された胎土。微細粒砂を含むのみ。	2.5Y 7/4 浅黄色	10YR 6/4 にぶい黄橙色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ナデ	クシ描波状文と直線文。波状文は4条1単位。	
288	A	SK82	弥生 土器	甕	底部	-	(2.9)	-	(4.3)	1mm前後のチャート砂粒を少量含む。	7.5YR 7/4 にぶい橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	平底。外周に炭化物付着。摩耗顕著。	炭化物付着。
289	A	SK82	弥生 土器	壺	底部	-	(3.0)	-	(7.1)	精選された胎土。1mm前後の砂粒を少量含む。	7.5YR 8/4 浅黄褐色	5YR 6/6 褐色	ユビナデ	工具を使ったナデ(ヘラナデ?)	平底。	
290	A	SK82	弥生 土器	鉢	口縁部	(19.4)	(7.1)	-	-	1mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	7.5YR 8/4 浅黄褐色	7.5YR 8/4 浅黄褐色	ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	貼付口縁。口縁部外面に扁平な粘土帯を貼付する。ハケ調整は、右下→左上方向。	
291	A	SK83	弥生 土器	壺	底部	-	(3.9)	-	12.5	1~3mm大のチャート砂粒を多く含む。	10YR 7/4 にぶい黄橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ヘラケズリ、ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	丁寧なナデで仕上げ。	
292	A	SK83	弥生 土器	壺	底部	-	(3.2)	-	(8.3)	1mm大の砂粒をやや多く含む。	10YR 6/3 にぶい黄褐色	10YR 4/3 にぶい黄褐色	ナデ	ナデ、ヘラミガキ	内面は強いナデにより砂粒が移動。底面にも砂粒の移動が認められる。	
293	A	SK85	弥生 土器	壺	底部	-	(8.4)	-	(14.6)	1mm大の砂粒を少量含む。	10YR 6/2 灰黄褐色	10YR 4/1 褐灰色	ナデ、ユビナデ、ヘラミガキ	板ナデ(ケズリ)、ヘラミガキ	内面は強いナデにより砂粒が移動。底面にも砂粒の移動が認められる。底部付近の外周も板ケズリによって砂粒が移動する。	
294	A	SK85	弥生 土器	壺	底部	-	(6.6)	-	(11.0)	1mm前後の砂粒を少し含む。	2.5Y 7/3 浅黄色	10YR 7/2 にぶい黄褐色	ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	平底。	
295	A	SK87	弥生 土器	蓋	天井部 ~裾部	4.4	(5.3)	-	12.4	精選された胎土。1mm前後の砂粒を少量含む。	2.5YR 6/6 褐色	5YR 6/6 褐色	ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	端部上下に刻目。天井部は凹み、外縁を拡張する。内外面に環状の黒斑が残る。	
296	C	土器9	弥生 土器	鉢	完形	39.8	31.2	18.0	11.8	1~3mm大のチャート砂粒を多く含む。円礫が多い。	7.5YR 7/6 褐色	7.5YR 7/6 褐色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	貼付口縁。口径は凹状の面をなす。底面は直径9.5cm前後の粘土盤をベースに周囲に粘土帯を積み上げて成形する。外面底部付近に一部ヘラミガキが残る。底面に繊維圧痕。	土器棺
297	C	土器9-10	弥生 土器	甕	胴部	-	(18.0)	-	-	1~2mm大の砂粒をやや多く含む。	10YR 3/2 黒褐色	2.5YR 6/6 褐色	ナデ、ヘラミガキ	不明	最大径は胴部上半にある。無文の甕胴部。外面は摩耗顕著で調整不明。	後期前半。
298	C	土器10	弥生 土器	壺	頸縁~ 底部	-	(40.0)	32.8	-	2~3mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	10YR 1/4 褐灰色	7.5YR 2/4 灰褐色	ヘラケズリ、ハケ、ユビオサエ、ナデ、ヘラミガキ	タタキ、ハケ、ナデ	頸部で強く屈曲し、口縁は外反する。口縁部形状は不明。頸部に列点文。外面は細かいハケ調整の後、粗いハケ調整で仕上げ。上胴部のみヘラミガキで仕上げている。内面上胴部以下、下→上方向のヘラケズリ、上胴部よりは、横方向の細かいハケ調整の後、粗いハケ調整で仕上げている。底部付近の外面にタタキ目が残る。	
299	C	土器10	弥生 土器	甕	口縁~ 頸部	16.8	(6.8)	-	-	2~4mm大の粗粒砂をやや多く含む。	10YR 6/4 にぶい黄褐色	10YR 7/4 にぶい黄褐色	ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ	口縁部は外反、口径は面をなす。頸部に1条微隆起帯が残る。	口頸部外面に炭化物付着。
300	C	土器10	弥生 土器	甕	底部	-	(4.3)	-	(7.4)	2~3mm大の砂粒をやや多く含む。	10YR 5/3 にぶい黄褐色	7.5YR 5/3 にぶい褐色	ハケ、ユビオサエ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	底面中央部が凹状で高台状の形状を呈する。	
301	C	土器10	弥生 土器	壺? 甕?	底部	-	(5.7)	-	5.8	1~2mm大の砂粒を多く含む。	10YR 2/1 黒色	10YR 7/3 にぶい黄褐色	ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ	わずかに上げ底気味。	底面に穿孔があった可能性が指摘されているが、確認はない。
302	C	土器10内	弥生 土器	高坏	口縁~ 坏体部	28.1	(6.4)	-	-	1~2mm大のチャート砂粒を多く含む。	7.5YR 7/6 褐色	7.5YR 7/6 褐色	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	口縁部外面にヨコナデによる弱い段部が形成される。内面は摩耗のため、調整痕はほとんど残らない。	
303	C	SD3-2 石列	弥生 土器	壺	胴部	-	(3.3)	-	-	1~2mm大前後の砂粒をやや多く含む。	10YR 7/4 にぶい黄褐色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ユビナデ	ナデ	双線による格子目文と太めのクシ描原体によるクシ描直線文。	
304	C	SD3-2 石列	弥生 土器	壺	胴部	-	(5.5)	-	-	1~2mm大前後の砂粒をやや多く含む。	10YR 7/4 にぶい黄褐色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ユビナデ	ナデ	双線による格子目文と太めのクシ描原体によるクシ描直線文。	
305	C	SD3-2 石列	弥生 土器	壺	胴部	-	(7.1)	-	-	1~2mm大前後の砂粒をやや多く含む。	10YR 7/4 にぶい黄褐色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ユビナデ	ナデ	双線による格子目文と太めのクシ描原体によるクシ描直線文。	
306	C	SD3-2 石列	弥生 土器	壺	胴部	-	(6.0)	-	-	精選された胎土。2~4mm大の粗粒砂を若干含む。	7.5YR 6/4 にぶい褐色	5YR 6/6 褐色	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	ナデ	3条1単位のクシ描直線文と列点文。	
307	C	SD3-2 石列	弥生 土器	壺	胴部	-	(2.4)	-	-	2mm大前後の砂粒を少量含む。	10YR 6/4 にぶい黄褐色	5YR 6/4 にぶい褐色	ユビナデ、ユビオサエ	ユビオサエ	ミズ腫れ状の微隆起帯4条をユビオサエで圧着する。その際に爪形の圧痕が残る。	

表5 遺物観察表(土器) 14

図版 番号	区	遺構 層位	器種	器形	部位	法量 (cm)				胎土	色調		調整		特徴 文様・形態・製作技法他	備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		
308	C	SD3-2 石列	弥生 土器	壺	底部	-	(6.1)	-	12.1	1~3mm大の砂粒をやや多く含む。	10YR 7/3 にぶい黄橙色	10YR 3/1 黒褐色	ユビナデ、ヘラナデ、ナデ	ヘラケズリ、ヘラミガキ	平底。底面にケズリ調整とナデ調整。底部外周にヘラケズリ、砂粒は左→右に移動する。	
309	C	SD3-2 石列(サブ トレ)	弥生 土器	壺	底部	-	(7.8)	-	8.4	2~5mm大の粗粒砂を多量に含む。	10YR 5/4 にぶい黄褐色	7.5YR 6/6 橙色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	上げ底気味。	
310	C	SD3-2 石列	弥生 土器	壺	底部	-	(5.9)	-	8.4	1~3mm大の砂粒を多く含む。5~6mm大の粗粒砂も認められる。	5YR 7/6 橙色	7.5YR 8/4 浅黄褐色	ナデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	底部は高台状で周縁が高くなる。底面にナデが残る。内面は器表面が剥落する部分が多い。	
311	C	SD3-2 石列	弥生 土器	甕	底部	-	(3.4)	-	6.4	1~2mm大の砂粒をやや多く含む。	10YR 6/3 にぶい黄橙色	7.5YR 6/3 にぶい褐色	ユビオサエ、ナデ	ユビオサエ、ナデ	上げ底気味。	
312	C	SD3-2 石列	弥生 土器	甕	底部	-	(3.7)	-	(6.4)	2~3mm大の砂粒をやや多く含む。	10YR 7/4 にぶい黄橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ユビナデ、ユビオサエ	ユビオサエ、ナデ、ヘラミガキ	上げ底。器表面の剥落顕著。	
313	C	SD3-2 石列上	弥生 土器	甕	口縁~ 上胴部	15.1	(7.2)	-	-	2~5mm大の粗粒砂をやや多く含む。	5YR 6/6 橙色	5YR 6/4 にぶい橙色	ハケ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ	口唇は面をなし、下端を拡張する。	
314	C	SD3-2 石列上	弥生 土器	壺	胴部	-	(3.5)	-	-	1mm大前後の砂粒をやや多く含む。	10YR 7/3 にぶい黄橙色	10YR 7/3 にぶい黄褐色	ユビナデ、ユビオサエ	ナデ	双線による重弧文、クシ描直線文と扁平刻目突帯。	
322	C	P134	弥生 土器	壺	胴部	-	(5.8)	-	-	粘土帯の色が異なる。10YR 8/2 灰白色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ユビナデ	不明	クシ描直線文。クシ描直線上に色の異なる扁平な刻目を持つ粘土帯を貼付する。	
323	C	P145	弥生 土器	壺	胴部	-	(6.6)	-	-	2~3mm大の砂粒を若干量含む。	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ユビナデ	ナデ	双線による格子目文、クシ描直線文、扁平刻目粘土帯。	
324	C	P149	弥生 土器	壺	口縁部	(16.4)	(1.6)	-	-	0.5~1mm前後の細粒砂を多く含む。	10YR 7/4 にぶい黄褐色	7.5YR 7/6 橙色	ナデ	ナデ	口唇は上下に拡張し、3条の凹線を施す。	
325	C	P149	弥生 土器	甕	口縁~ 上胴部	(17.8)	(7.6)	-	-	1~2mm大の砂粒をやや多く含む。	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ハケ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ	頸部でくの字状に強く屈曲。口唇は上下に拡張、2条の凹線を持つ。	上胴部外面に煤状炭化物。
326	C	P149	弥生 土器	甕	底部	-	(2.8)	-	4.7	1~4mm大の砂粒・小礫をやや多く含む。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ハケ、ユビナデ、ナデ	ハケ、ナデ	平底で底面には周縁に沿ったナデが確認される。	
327	C	P149	弥生 土器	壺	底部	-	(5.2)	-	8.5	2~5mm大の粗粒砂を多く含む。	10YR 6/4 にぶい黄褐色	5YR 6/4 にぶい橙色	ハケ、ヘラケズリ	タタキ、ナデ	平底。内面は板状の工具を使ったナデまたはケズリのため砂粒が移動(下→上)。	
328	C	P173	弥生 土器	甕	底部	-	(3.5)	-	(6.8)	1mm大の砂粒をやや多く含む。	7.5YR 4/1 褐灰色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ユビオサエ	ユビオサエ、ナデ、ヘラミガキ	平底。底面に圧痕あり。	
329	C	P173	弥生 土器	甕	底部	-	(3.8)	-	6.9	2~5mm大の粗粒砂を多く含む。	10YR 7/4 にぶい黄褐色	10YR 6/4 にぶい黄褐色	ナデ、ユビオサエ	ナデ、ヘラナデ	わずかに上げ底気味。	
330	C	P174	弥生 土器	土器 転用 紡錘車	完形	4.9 (長径)	4.7 (短径)	- (厚)	0.35 (孔径)	1mm大の砂粒をやや多く含む。	10YR 7/3 にぶい黄褐色	10YR 4/2 灰黄褐色	ユビオサエ、ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ	直径4.7~4.9cmの円盤、孔径3.5mm。	
331	C	P176	弥生 土器	壺	口縁部	13.0	(2.0)	-	-	胎土は精選されており、1mm大の砂粒を若干含むのみ。	5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	ナデ	ハケ、ナデ	口唇に刻目。口縁部外面に断面三角形の微隆起帯を2条貼付する。	
332	C	P176	弥生 土器	甕	口縁~ 胴部	14.8	(12.5)	-	-	2~3mm大のチャート砂粒を含む。砂粒の含有量は多くはない。	10YR 7/6 明黄褐色	7.5YR 7/6 橙色	ハケ、ナデ、ヘラケズリ	タタキ、ハケ、ナデ	口唇は面をなし、強いヨコナデにより条線が認められる。(凹線ではない。)内面ヘラケズリ、砂粒は左→右、上→下に移動する。	外面に煤状炭化物付着。吹きこぼれの痕跡が認められる。
333	C	P176	弥生 土器	甕	口縁~ 上胴部	15.2	(9.1)	(18.0)	-	1~3mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	10YR 6/4 にぶい黄褐色	5Y 6/6 褐色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	タタキ、ハケ、ユビオサエ、ナデ	頸部でゆるやかに屈曲し、口縁は外反する。口唇は面をなし、端部が外方へわずかに肥厚する。	頸部以下外面に煤状炭化物付着。
334	C	P176	弥生 土器	甕	口縁~ 上胴部	21.0	(7.0)	-	-	2~3mm大のチャート砂粒を多く含む。	10YR 5/3 にぶい黄褐色	10YR 5/3 にぶい黄褐色	ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ	頸部はゆるやかに屈曲、口唇は面をなす。胴部外面は器表面が剥落、調整不明。	頸部外面に炭化物付着。
335	C	P176	弥生 土器	甕	口縁~ 上胴部	(12.0)	(4.9)	-	-	1~2mm大のチャート砂粒を多く含む。3~4mm大の粗粒砂も認められる。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	7.5YR 6/3 にぶい褐色	ヘラケズリ、ナデ	ナデ	頸部でくの字状に強く屈曲。口唇はヨコナデにより凹状の面をなす。内面頸部以下ヘラケズリ。砂粒は下→上方向に移動。	後期前半~ 中葉。
336	C	P176	弥生 土器	甕	口縁~ 上胴部	11.4	(7.0)	(10.5)	-	1~2mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	7.5YR 5/4 にぶい褐色	7.5YR 6/3 にぶい褐色	ヘラケズリ、ユビオサエ、ナデ	ナデ	頸部以下内面ヘラケズリ。口縁は外反し、口唇は面をなす。	外面頸部以下に部分的に煤状炭化物付着
337	C	P176	弥生 土器	鉢	口縁~ 上胴部	(35.5)	(8.1)	-	-	1~3mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	7.5YR 7/6 褐色	10YR 6/3 にぶい黄褐色	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	碗状で口縁は短く外反、口唇は面をなす。胴部外面中に炭化物付着。	残存率1/12程度。

表5 遺物観察表（土器）15

図版 番号	区	遺構 層位	器種	器形	部位	法量 (cm)				胎土	色調		調整		特徴 文様・形態・製作技法他	備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		
338	C	P176	弥生 土器	鉢	口縁～ 体部	20.0	(6.0)	-	-	2～3mm大の粗 粒砂をやや多 く含む。	10YR 5/2 灰黄褐色	10YR 6/2 灰黄褐色	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	タタキ、ハケ、 ユビオサエ、 ナデ	タタキ目は痕跡をとどめるのみ。口唇は丸み を帯びる。	
339	C	P176	弥生 土器	高坏	坏部	24.5	(4.0)	21.4	-	胎土は精選さ れている。1mm 前後の砂粒を 少量含む。5mm 大の小礫も認 められる。	5Y 7/6 橙色	7.5YR 7/6 橙色	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	口縁は稜をなしていったん屈曲した後外 反、端部は丸みを持つ面をなす。	
340	C	P176	弥生 土器	甕	底部	-	(6.5)	-	6.2	3～5mm大前後 の粗粒砂を多 く含む。	7.5YR 3/1 黒褐色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	不明	ハケ、ナデ	摩耗顕著。平底。無文の土器底部。	
341	C	P176	弥生 土器	甕	底部	-	(5.6)	-	4.0	1～2mm大のチ ャート砂粒を やや多く含む。	7.5YR 7/4 にぶい橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ユビナデ、ユ ビオサエ	タタキ、ハケ、 ナデ	平底。底面に圧痕あり。	
342	C	P176	弥生 土器	甕	底部	-	(3.9)	-	3.6	1mm前後の砂 粒を少し含む。	2.5YR 6/6 橙色	5YR 7/4 にぶい橙色	ユビナデ、ユ ビオサエ	ハケ、ナデ	平底。	
343	C	P176	弥生 土器	甕	底部	-	(3.8)	-	4.6	1～2mm大の砂 粒を少し含む。	7.5YR 3/1 黒褐色	7.5YR 5/4 にぶい褐色	ユビナデ、ユ ビオサエ	タタキ、ハケ	平底。	
344	C	P254	弥生 土器	甕	口縁部	-	(3.1)	-	-	1～2mm大の砂 粒を少量含む。	10YR 7/6 明黄褐色	7.5YR 7/6 褐色	ナデ	ハケ、ナデ	口唇はわずかに凹状の面をなし、上下端に 刻目を施す。	
345	C	P254	弥生 土器	壺	胴部	-	(2.5)	-	-	1mm大の砂粒 を少し含む。	7.5YR 7/6 褐色	7.5YR 7/4 にぶい褐色	ハケ、ナデ	ナデ	クシ描直線文と刺突文。クシ描の1条の幅 は広目で約2.8mmほどである。	中期前半。
346	C	P305	弥生 土器	甕	口縁部	-	(2.8)	-	-	1～2mm大の砂 粒を少し含む。	7.5YR 7/6 褐色	10YR 3/2 黒褐色	ナデ	ナデ、ユビオ サエ	ユビオサエで、口縁部外面に粘土帯を貼 付する。口唇には深さ1mmの溝が巡る。	
347	C	P305	弥生 土器	蓋	完形	20.2	10.8	-	5.8	1～2mm前後の チャート砂粒を やや多く含む。	7.5YR 7/6 褐色	10YR 7/6 明黄褐色	ハケ、ユビナ デ、ユビオサ エ、ナデ	ハケ、ユビオ サエ、ナデ、 板ナデ	内面はナデにより、外面は板ナデにより丁寧 に仕上げる。外面の板ナデは、上半が縦方 向、下半が横方向。裾部端部はわずかに 凹状を呈する面をなす。	裾部内面から 裾部外端 にかけて、煤 状炭化物が 付着する。
348	B	P369	弥生 土器	壺	口縁部	19.6	(3.4)	-	-	1～2mm大のチ ャート砂粒を やや多く含む。	10YR 7/4 にぶい黄橙 色	7.5YR 6/4 にぶい褐色	ハケ、ナデ、 ヘラミガキ	ハケ、ナデ	口唇は凹状の面をなし、下端を拡張して刻 目を施す。頸部に扁平な刻目を持つ粘土帯 (残1条)を貼付する。口縁部内面に3条の 扁平な刻目を持つ粘土帯を貼付する。	
349	B	P377	弥生 土器	甕(小 型)	頸部～ 上胴部	-	(5.1)	(9.8)	-	精選された胎 土。1mm前後の 砂粒を若干含 むのみ。	7.5YR 6/6 褐色	7.5YR 6/4 にぶい褐色	ユビオサエ、 ナデ	ハケ、ナデ、 ユビオサエ	頸部でゆるやかに屈曲する。口縁部形状 不明。	胴部以下に 煤状炭化物 付着。
350	B	P402	弥生 土器	壺	口縁部	16.8	(3.3)	-	-	精選された胎 土。1mm前後の 砂粒を少量含 む。	5YR 6/4 にぶい褐色	5YR 6/6 褐色	ユビオサエ、 ナデ	ハケ、ナデ、 ユビオサエ	貼付口縁。口唇はヨコナデにより砂粒が移 動する。(右→左)	
351	B	P402	弥生 土器	壺? 甕?	口縁部 ・小片	-	(1.8)	-	-	精選された胎 土。1mm前後の 砂粒を少量含 む。	7.5YR 6/4 にぶい褐色	7.5YR 6/4 にぶい褐色	ハケ、ユビオ サエ	ハケ、ナデ	貼付口縁。ハケ状原体を使って口縁部外 面に刻目を巡らせる。	
352	B	P402	弥生 土器	鉢	完形	15.4	13.0	-	8.6	1mm大前後の 砂粒を多く含 む。	7.5YR 5/1 褐灰色	7.5YR 6/6 褐色	ユビナデ、ナ デ、ヘラミガ キ	ケズリ、ハケ、 ヘラミガキ	底部外周に板ケズリ、砂粒の移動あり。平 底で底面にも板ケズリが認められる。ポー ル状の鉢で、口唇は丸みを帯びる。	
353	B	P421	弥生 土器	甕	口縁～ 頸部	16.9	(5.9)	-	-	精選された胎 土。1mm前後の 砂粒を若干量 含むのみ。	7.5YR 6/4 にぶい褐色	7.5YR 6/4 にぶい褐色	ハケ、ユビナ デ、ユビオサ エ、ナデ	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	丁寧に仕上げる。貼付口縁。口縁は面をな し、口唇全面に刻目を施す。	
354	B	P425	弥生 土器	壺	胴部	-	(7.0)	-	-	精選された胎 土。1mm前後の 砂粒をやや多 く含む。	10YR 7/2 にぶい黄橙 色	10YR 8/3 浅黄褐色	ナデ	ハケ、ナデ、 ヘラミガキ	クシ描文(簾状文・直線文)を施文、クシ描 の単位は4条1単位である。	
355	B	P425	弥生 土器	甕	頸部～ 胴部	-	(14.0)	(18.5)	-	1～2mm大の砂 粒をやや多く 含む。	10YR 5/2 灰黄褐色	7.5YR 7/6 褐色	ハケ、ユビナ デ、ユビオサ エ、ナデ	ハケ、ユビオ サエ、ユビナ デ、ナデ、板 ナデ	上胴部にユビオサエにより、微隆起帯を貼 付する。胴部外面は工具を使った縦方向 のナデにより仕上げる。	胴部外面に 炭化物と微 細粒砂付着。 内面にコゲ 状の炭化物 付着。
363	B	P429	弥生 土器	壺(長 頸壺)	完形	11.2	20.8	16.1	5.6	0.5～1mm大の 砂粒、微細粒 砂を多く含む。 チョコレート色 に発色し、ガラ ス質鉱物も多 く含んでいる。	10YR 5/4 にぶい黄褐 色	10YR 5/4 にぶい黄褐 色	ハケ、ユビナ デ、ユビオサ エ、ナデ	ハケ、ユビオ サエ、ナデ、 ヘラミガキ	胴部中位に最大径がある。頸部は直立し、 口縁はラッパ状に大きく開く。貼付口縁。口 唇は横方向のハケ調整の後、ユビオサエ により仕上げ、凹状の面をなす。底面はヘ ラケズリにより砂粒が移動、外縁部に粘土 が残り、上げ底状となる。	

表5 遺物観察表（土器）16

図版番号	区	遺構層位	器種	器形	部位	法量 (cm)				胎土	色調		調整		特徴 文様・形態・製作技法他	備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		
356	B	P442	弥生土器	壺	胴部	-	(4.0)	-	-	精選された胎土。1mm前後の砂粒を若干含むのみ。	7.5YR 5/2 褐灰色	7.5YR 6/6 橙色	ハケ、ユビオサエ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	クシ描文(簾状文)を施文、クシ描の単位は4条1単位である。	
357	C	P453	弥生土器	壺	胴部	-	(2.8)	-	-	精選された胎土。1mm前後の砂粒を少量含む。	10YR 8/3 浅黄橙色	10YR 8/3 浅黄橙色	ユビオサエ	ハケ	クシ描直線文・波状文、連続した刺突文で加飾する。	
358	C	P459	弥生土器	壺	口縁部	(24.5)	(1.5)	-	-	1mm大の砂粒を少量含む。	5YR 6/6 橙色	5YR 6/8 橙色	ハケ、ナデ	ユビオサエ、ナデ	貼付口縁。口唇全面に刻目を施す。摩耗顕著で調整不明瞭。	残存1/10程度。
359	C	P459	弥生土器	壺	胴部	-	(5.0)	-	-	1mm前後の砂粒を少量含む。	2.5Y 6/2 灰黄色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ユビナデ	ナデ	胴部小片。断面三角形の微隆起帯。その上方にクシ描波状文と直線文を交互に施文。クシ描は8条1単位。	
360	C	P460	弥生土器	甕	口縁～頸部	16.0	(5.9)	-	-	1～3mm大の砂粒をやや多く含む。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	7.5YR 7/6 橙色	ハケ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	貼付口縁。口唇は面をなし、上下端に刻目を施す。	
361	A	P492	弥生土器	甕	胴部	-	(4.5)	-	-	精選された胎土。砂粒はほとんど含まない。	2.5Y 6/3 にぶい黄色	2.5Y 6/3 にぶい黄色	ユビオサエ、ナデ	ハケ	クシ描波状文の下に楔形の刺突文を巡らせる。	
362	A	P494	弥生土器	壺	底部	-	(3.8)	-	9.8	1mm大前後の砂粒をやや多く含む。	5Y 4/1 黄灰色	10YR 6/4 にぶい黄橙色	ユビオサエ、ナデ	不明	平底で底面に圧痕あり。外周から底面にかけて炭化物付着。摩耗顕著。	炭化物付着。
367	C	SX1	弥生土器	壺	口縁～頸部	(17.6)	(5.5)	-	-	2mm大前後の砂粒を少し含む。	10YR 7/2 にぶい黄橙色	10YR 6/3 にぶい黄橙色	ナデ、ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ	やや開き気味に直立する口縁。口唇は丸く仕上げる。	
368	D	SX3	弥生土器	壺	頸部	-	(4.7)	-	-	精選された胎土。1mm前後の砂粒を少量含む。	5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	色の異なる扁平な刻目突帯を貼付し、突帯間には幅広のクシ描直線文。	
369	D	SX3	弥生土器	壺	胴部	-	(3.2)	-	-	1mm大の砂粒をやや多く含む。	10YR 4/1 褐灰色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	不明	不明	摩耗顕著で調整不明。クシ描簾状文・末端扇状文。	
370	D	SX3	弥生土器	壺	胴部	-	(4.0)	-	-	1～3mm大の砂粒を少量含む。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	7.5YR 6/6 橙色	ナデ	ハケ、ナデ	クシ描直線文。粘土塊貼付。	
371	D	SX3	弥生土器	壺	底部	-	(5.7)	-	9.9	0.5～2mm前後の砂粒を多量に含む。	2.5Y 5/2 暗灰黄色	7.5YR 7/6 橙色	不明	不明	平底。器表面の摩耗顕著で、調整不明。	
372	B	SX10	弥生土器	甕	上胴部	-	(9.3)	-	-	0.5～2mm前後の細粒砂を多量に含む。	10YR 4/1 褐灰色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ユビオサエ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	摩耗のため調整は不明瞭。外面のヘラミガキは部分的に残っていることがわかる。器壁は4mm前後とさきわて薄い。	
373	B	SX10	弥生土器	壺	底部	-	(3.2)	-	(9.2)	0.5～1mm大の微細粒砂を多く含む。	10YR 6/1 褐灰色	10YR 7/6 明黄褐色	ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ユビオサエ	平底。外面は大部分が剥落している。	
374	A	土器5	弥生土器	壺	口縁～頸部	26.6	(9.6)	-	-	胎土は精選されており、チャートの微細砂粒を若干含むのみ。	10YR 8/3 浅黄橙色	10YR 8/3 浅黄橙色	ハケ、ユビオサエ、ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	大きくラップ状に開く口縁。貼付口縁で、口唇は凹状の面をなす。口唇にハケ状原体の押圧による刻目を施し、全周に巡らせる。	
375	A	土器6	弥生土器	壺	口縁～上胴部	19.2	(11.9)	-	-	1～2mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	10YR 7/4 にぶい黄橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	上胴部にクシ描簾状文とクシ描直線文を施文する。クシ描の単位は3条。口縁は素口縁で、口唇はココナデによりわずかに凹状の面をなす。	
376	A	土器6	弥生土器	壺	胴部	-	(5.7)	-	-	精選された胎土。2mm前後の砂粒を少量含む。	10YR 6/4 にぶい黄橙色	5YR 7/6 橙色	ナデ	ハケ、ナデ	クシ描文。簾状文+直線文+廉状文。	
377	A	土器6	弥生土器	甕	口縁部・小片	-	(1.5)	-	-	精選された胎土。	10YR 6/3 にぶい黄橙色	10YR 7/3 にぶい黄橙色	ハケ	ハケ	貼付口縁。口縁部小片。	
378	A	土器6	弥生土器	甕	口縁部・小片	-	(1.6)	-	-	精選された胎土。	10YR 7/4 にぶい黄橙色	5Y 6/6 橙色	ハケ、ユビオサエ	ハケ	貼付口縁。口縁部小片。	
379	B	土器11	弥生土器	甕	下胴部～底部	-	(7.9)	-	(6.1)	精選された胎土。1mm前後の砂粒を少量含む。	5YR 6/4 にぶい橙色	5YR 6/6 橙色	ナデ、ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	底面は強いナデあるいはケズリにより砂粒が移動する。	
381	C	SD-A	弥生土器	甕	口縁～胴部	(15.7)	(16.1)	(19.2)	-	1mm大の砂粒および3mm大の小礫を少し含む。	5YR 4/6 赤褐色	7.5YR 5/4 にぶい褐色	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	上胴部に3条の微隆起帯。頸部は縦方向のハケ、上胴部は縦方向の粗いナデ。口縁は素口縁で、口唇はココナデによりわずかに凹状の水平面をなす。	口縁内面と胴部中位に煤状炭化物付着。
382	C	SD-H	弥生土器	土器転用紡錘車	完形	3.8 (長径)	3.6 (短径)	- (厚)	0.3 (孔径)	1～2mm大の砂粒を少量含む。4mm大の小礫も認められる。	5YR 6/6 橙色	2.5Y 4/1 黄灰色	ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ	土器転用紡錘車、直径3.6～3.8cmの円盤、孔径3mm。	
383	C	SD-H	弥生土器	小型土器器台	完形	1.6	1.7	-	1.6	1mm前後の砂粒を少量含む。	10YR 6/3 にぶい黄橙色	10YR 6/4 にぶい黄橙色	ユビオサエ	ユビオサエ	上底、下底ともに凹状を呈する。	器台のミニチュア土器。
384	C	SD-J	弥生土器	壺	胴部	-	(3.5)	-	-	胎土は精選されている。	7.5YR 7/4 にぶい橙色	7.5YR 7/6 橙色	ユビナデ	ヘラミガキ	13条1単位のクシ描波状文。小破片だが、三段に分けて施文されている。	

表5 遺物観察表（土器）17

図版 番号	区	遺構 層位	器種	器形	部位	法量 (cm)				胎土	色調		調整		特徴 文様・形態・製作技法他	備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		
385	B	SD-K	弥生 土器	壺	胴部	-	(3.5)	-	-	1mm大の砂粒 を少量含む。	10YR 7/2 にぶい黄橙 色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ユビナデ、ユ ビオサエ	ナデ	胴部小片。クシ描籐状文・波状文・直線文。	
386	B	SD-K	弥生 土器	甕	胴部	-	(7.0)	-	-	1mm大の砂粒 をやや多く含 む。ガラス質の 微細粒砂も認 められる。	7.5YR 7/6 橙色	10YR 6/4 にぶい黄橙 色	ナデ、ユビオ サエ	ハケ、ナデ	2条1単位の双線による直線文を2段に配 し、その上にハケ状原体による縦位の押圧 文を連続させる。	籐状文を意 識した文様 か。
387	C	SD 14・15	弥生 土器	甕	口縁～ 上胴部	16.4	(5.2)	-	-	2～5mm大の粗 粒砂をやや多 く含む。	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ユビナデ、ユ ビオサエ、ナ デ	ユビオサエ、 ナデ	口径は丸みを帯びた面をなし、口縁端部は 上方に若干拡張する。	
391	A	Ⅲ層	弥生 土器	壺	口縁部	-	6.6	-	-	精選された胎 土。1mm前後の 砂粒を少量含 む。	5Y 6/6 橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ヘラミガキ	ナデ	口縁部内面に1.5cm幅で色調が異なる部 分がある。粘土帯等が貼付されていた可 能性もある。口縁端部は面をなし、上下端 に刻目を施す。外面に断面三角形の刻目 を持つ突帯を貼付する。外面に4条1単位の クシ描による籐状文、直線文、波状文を連 続して施文する。	類似例なし。
392	A	Ⅲ層 下	弥生 土器	壺	口縁～ 頸部	(16.2)	(7.2)	-	-	精選された胎 土。1mm前後の 砂粒を少量含 む。	7.5YR 7/4 にぶい橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ハケ、ユビナ デ、ユビオサ エ、ナデ	ハケ、ユビオ サエ、工具 による圧痕、 ナデ	ナデにより丁寧仕上げ。	
393	A	Ⅱ層	弥生 土器	壺	口縁～ 頸部	16.1	(4.1)	-	-	1mm大のチャ ート砂粒をや や多く含む。	10YR 8/4 浅黄褐色	10YR 7/4 にぶい黄橙 色	不明	不明	摩耗顕著で調整不明。貼付口縁で、口縁 外面に刻目。	
394	A	Ⅱ層	弥生 土器	壺	頸部～ 上胴部	-	(7.2)	-	-	精選された胎 土。1mm前後の 砂粒を少量含 む。	10YR 7/6 明黄褐色	10YR 7/4 にぶい黄橙 色	ユビナデ、ユ ビオサエ	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	頸部界に断面三角形の突帯をユビオサエ により貼付する。突帯の下方にクシ描籐状 文がわずかに確認できる。	
395	A	Ⅲ層	弥生 土器	甕	口縁～ 下胴部	13.4	(19.5)	13.0	-	1～2mm前後の チャート砂粒 をやや多く含む。	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/6 橙色	ユビナデ、ユ ビオサエ、ナ デ	ハケ、板ナデ、 ナデ	口径は凹状の面をなす。胴部外面は強い ナデにより砂粒が移動する。	
396	A	Ⅲ層	弥生 土器	鉢	完形	17.2	15.0	15.7	6.6	1～2mm前後の チャート砂粒 を多量に含む。	10YR 6/3 にぶい黄橙 色	10YR 6/2 灰黄褐色	ユビナデ、ユ ビオサエ	ハケ、ナデ、 ユビオサエ、 ヘラミガキ	平底。上胴部は上方へ立ち上がった後、 頸部で短く屈曲して口縁に至る。無文。	
397	A	Ⅱ・Ⅲ層	弥生 土器	小型 土器 鉢	完形	8.2	5.2	-	4.8	胎土は精選さ れており、少量 の微細砂粒を 含むのみ。	7.5YR 7/4 にぶい橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	口縁下に穿孔。上げ底。鉢形土器の小型 土器であり、貼付口縁も表現されている。	
398	A	Ⅲ層	弥生 土器	高坏	口縁部 (坏部)	19.2	(3.0)	(17.8)	-	0.5～1mm大前 後のチャート 砂粒をやや多 く含む。	2.5Y 8/2 灰白色	10YR 7/2 にぶい黄橙 色	ハケ、ナデ	ナデ	坏部で一旦屈曲した後、口縁は外反する。 口径は丸く仕上げる。	残1/8程度 から復元。
399	A	Ⅲ層	弥生 土器	壺	胴部～ 底部	-	(15.0)	22.0	9.8	0.5～1mm大の 砂粒、微細粒 砂を多く含む。 3～5mm大の小 礫も認められ る。	10YR 7/4 にぶい黄橙 色	10YR 7/6 明黄褐色	ナデ、板ナデ、 ユビナデ、ユ ビオサエ	タタキ、ハケ、 ナデ、ヘラミ ガキ	上げ底気味。底面に繊維・種子・小礫等の 圧痕が残る。外面のヘラミガキは底部付 近のみ。内面は器表の剥離顕著。	
400	A	Ⅲ層	弥生 土器	壺	下胴部 ～底部	-	(7.4)	-	8.5	微細粒砂およ び1mm大の砂 粒を多量に含 む。	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	不明	ヘラミガキ	摩耗顕著。平底。	
401	A	Ⅲ層	弥生 土器	壺	底部	-	(3.7)	-	(6.6)	1mm前後のチャ ート砂粒を少 量含む。	2.5Y 6/2 灰黄色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ユビナデ、ユ ビオサエ	ハケ、ナデ	平底。	
402	A	Ⅲ層	弥生 土器	壺	底部	-	(3.3)	-	(12.3)	1～2mm前後の チャート砂粒 を多量に含む。	N 4/ 灰色	5YR 7/6 橙色	剥落のため 不明	ユビオサエ	平底。内面は摩耗顕著で器表面が剥落す る部分が多い。	
403	A	Ⅲ層 下	弥生 土器	壺	底部	-	(3.6)	-	8.2	2mm前後のチャ ート砂粒を多 く含む。	2.5Y 7/2 灰黄色	10YR 7/3 にぶい黄橙 色	ユビナデ、ユ ビオサエ	ハケ、ユビオ サエ	わずかに上げ底気味の底部。	
404	A	Ⅱ層	弥生 土器	甕	底部	-	(5.5)	-	5.6	1～2mm大の砂 粒を少し含む。	10YR 7/4 にぶい黄橙 色	10YR 7/4 にぶい黄橙 色	ハケ、ユビオ サエ、ナデ、 ヘラミガキ	ユビオサエ、 ナデ	平底。底部周縁は外方へ拡張。底部で一 旦屈曲した後、胴部は立ち上がる。底部付 近内面はヘラミガキで仕上げる。	
405	B	Ⅲ層	弥生 土器	壺	底部	-	(6.8)	-	12.2	1mm大前後の チャート砂粒 を少し含む。	10YR 6/3 にぶい黄橙 色	10YR 5/3 にぶい黄褐 色	ユビナデ、ユ ビオサエ、ナ デ、ヘラミガ キ	ハケ、ナデ、 ユビオサエ、 ヘラミガキ	底面には凸凹があり、周縁は高台状に高ま っている。内外面ともヘラミガキで仕上げる。	
406	C	Ⅲ層	弥生 土器	壺	口縁部	(23.1)	(2.2)	-	-	1～2mm大の砂 粒を少量含む。	10YR 5/2 灰黄褐色	10YR 5/2 灰黄褐色	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	口縁外面に断面三角形の微隆起帯を2条 貼付する。口径は面をなす。外面にヘラ 先状工具によるナデのため沈線状の圧痕 が残る。	

表5 遺物観察表(土器) 18

図版 番号	区	遺構 層位	器種	器形	部位	法量 (cm)				胎土	色調		調整		特徴 文様・形態・製作技法他	備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		
407	C	Ⅲ層	弥生 土器	壺	口縁～ 頸部	19.2	(8.7)	-	-	0.5～1mm前後 の砂粒を少量 含む。	10YR 7/4 にぶい黄橙 色	10YR 7/4 にぶい黄橙 色	ハケ、ユビオ サエ、ナデ、 ヘラミガキ	ハケ、ナデ、 ユビオサエ、 ヘラミガキ	貼付口縁。口唇は面をなす。素口縁。	
408	C	Ⅲ層	弥生 土器	甕	口縁～ 上胴部	-	14.3	-	-	1～3mm大のチ ャート砂粒をや や多く含む。	10YR 6/6 明黄褐色	10YR 6/4 にぶい黄橙 色	ハケ、ナデ、 ヘラミガキ	ハケ、ナデ、 ユビオサエ	頸部～上胴部内面全面にヘラミガキ。頸 部は直立し、口縁はゆるやかに外反。口唇 は丸みを帯びた面をなす。	外面に煤状 炭化物付着。
409	C	Ⅲ層 掘I	弥生 土器	壺	上胴部	-	(7.3)	-	-	0.5mm前後の 微細粒砂を多 量に含む。1～ 2mm大の砂粒 も少量あり。	10YR 3/3 暗褐色	10YR 5/3 にぶい黄褐 色	ユビナデ	ハケ、ユビオ サエ、ナデ	3段に微隆起帯をユビオサエで圧着、その 際に爪形の圧痕をのこす。	
410	C	Ⅲ層	弥生 土器	壺	底部	-	(7.4)	-	8.7	1～3mm大の砂 粒をやや多く 含む。5～7mm 大の小礫も認 められる。	5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ユビナデ、ユ ビオサエ	ハケ、ナデ、 ヘラミガキ	底部の厚さは30mmを超え、内底中央部が へそ状に盛り上がる。平底で底面がナデに よりシワ状になる。	
411	C	Ⅲ層 上	弥生 土器	壺	底部	-	(4.3)	-	9.5	1～2mm大前後 の砂粒をやや 多く含む。	2.5Y 5/1 黄灰色	10YR 7/4 にぶい黄橙 色	ナデ、ユビオ サエ	ユビオサエ、 ユビナデ、ナ デ	上げ底。底面にナデ。底部外面に稜を形 成する。	
429	D	SB2 (SK13)	土師 器	坏	口縁～ 体部	(16.5)	(3.0)	-	-	胎土は精選さ れており、砂粒 をほとんど含ま ない。	5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	ナデ	ナデ	口縁を強く外方へ折り曲げ、端部は丸く仕 上げられる。口縁部内面に沈線が残る。内 面のナデは底部付近より口縁部へ斜め方 向に施される。	畿内産。8世 紀中葉。
430	D	SB2 (SK13)	須恵 器	坏蓋	裾部	-	(1.7)	-	12.3	精選された胎 土。微細粒砂 を含むのみ。	5Y 7/1 灰白色	5Y 7/1 灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ	裾部外面が凹状になる。	8世紀
431	D	SB2 (SK13)	須恵 器	坏蓋	裾部	-	(1.6)	-	13.6	精選された胎 土。微細粒砂 を含むのみ。	5Y 7/1 灰白色	5Y 7/1 灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ	裾部外面が凹状になる。	8世紀
432	D	SB2 (SK13)	須恵 器	坏蓋	裾部	-	(2.0)	-	-	精選された胎 土。微細粒砂 を含むのみ。	5Y 4/1 灰色	5Y 5/2 灰オリーブ 色	ロクロナデ	ロクロナデ	裾部下方へ拡張。	8世紀
434	D	SB3 (P79)	土師 器	甕(長 胴甕)	口縁部	(23.1)	(5.2)	-	-	0.5～3mm前後 の砂粒を多く 含む。	7.5YR 3/4 暗褐色	7.5YR 3/3 暗褐色	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ、 ユビオサエ	頸部で稜をなして屈曲、口縁は外上方へ 立ち上がる。内面は横方向のハケ、胴部外 面は縦方向のハケ、口縁はコナデで仕上 げる。	律令期の長 胴甕。外面 に煤状炭化 物付着。
435	D	SB3 (P78)	須恵 器	坏蓋	裾部	-	(2.0)	-	-	精選された胎 土。微細粒砂 を含むのみ。	5Y 6/1 灰色	5Y 6/1 灰色	ロクロナデ	ロクロナデ	裾部は下方へ拡張、外面は凹状を呈する。	8世紀中葉～ 後半
436	C	SB4 (P326)	須恵 器	皿	口縁～ 底部	(19.0)	1.8	-	(18.1)	1～2mm大の砂 粒を若干含む。	2.5Y 6/2 灰黄色	2.5Y 6/2 灰黄色	ロクロナデ	ロクロナデ	底部へラ切。口縁部外方へわずかに拡 張。	
437	C	SB4 (P328)	須恵 器	坏	底部	-	(2.0)	-	-	1～2mm大の砂 粒を少量含む。	2.5Y 6/1 黄灰色	2.5Y 6/1 黄灰色	ロクロナデ	ロクロナデ	ハの字状に開く高台の痕跡が確認できる。	
438	C	SB4 (P329)	弥生 土器	壺	底部	-	(5.4)	-	7.2	微細粒砂およ び1mm大の砂 粒を少量含む。	2.5Y 5/2 暗灰黄色	10YR 6/3 にぶい黄橙 色	ユビナデ、ユ ビオサエ	ヘラミガキ	底面に平行圧痕と指頭圧痕(ユビオサエ) 残る。	弥生時代後 期前半。SB を構成する ピット・弥生 時代遺物。
439	C	SK42	白磁	碗	底部	-	(2.2)	-	6.3	胎土 5Y 7/1 灰白色	5Y 7/2 灰白色	5Y 7/1 灰白色			高台は削りだして作出、断面逆台形でハの 字に開く。内面見込みに胎土目。内面に施 釉、圏線が巡る。	12世紀 白磁碗Ⅳ類。
440	C	SK76	土師 器	皿(小 皿)	完形	8.9	2.4	-	5.5	胎土は精選さ れており、砂粒 をほとんど含ま ない。	5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	ユビオサエ、 ナデ	ユビオサエ、 ナデ	手づくねの皿。底面に平行圧痕残る。	中世前期
441	C	SK76	土師 器	皿(小 皿)	完形	9.0	3.1	-	6.0	胎土は精選さ れており、砂粒 をほとんど含ま ない。	5YR 7/6 橙色	5YR 7/6 橙色	ユビオサエ、 ナデ	ユビオサエ、 ナデ	手づくねの皿。底面に平行圧痕残る。	中世前期
442	C	SK76	弥生 土器	壺	口縁部	-	(3.7)	-	-	1mm大の砂粒 をやや多く含 む。	5YR 7/6 橙色	5YR 6/6 橙色	ユビナデ、ナ デ	ナデ、ヘラミ ガキ	直立した口縁部。口唇は丸く収める。	SBを構成す るピット・弥 生時代遺物 混入。
444	C	SD2	土師 器	碗	底部	-	(1.5)	-	(6.6)	胎土は精選さ れている。	10YR 8/3 浅黄褐色	10YR 8/3 浅黄褐色	不明	不明	高台はハの字状にわずかに開く。摩耗顕 著で調整不明瞭。	11～12世紀。
445	C	SD2	白磁	皿	口縁部	(14.6)	(2.8)	-	-	胎土 5Y 7/1 灰白色	5Y 7/2 灰白色	5Y 7/2 灰白色			白磁の皿Ⅳ類。端部は細く仕上げ、稜をな す。内外面に圏線。内面にハケ目。	12世紀 白磁皿Ⅳ類。
446	C	SD23 肩	土師 器	碗	口縁～ 体部	14.8	(3.6)	-	-	胎土は精選さ れており、砂粒 をほとんど含ま ない。	10YR 7/4 にぶい黄橙 色	10YR 7/4 にぶい黄橙 色	ロクロナデ、 ヘラミガキ	ロクロナデ	口縁はわずかに外反し、端部を丸く仕上 げる。ロクロ目あり。	11～12世紀。



表5 遺物観察表（土器）19

図版 番号	区	遺構 層位	器種	器形	部位	法量 (cm)				胎土	色調		調整		特徴 文様・形態・製作技法他	備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		
447	B	SD55	須恵器	坏	完形	12.8	3.8	-	9.0	胎土は精選されており、砂粒をほとんど含まない。	2.5Y 6/3 にぶい黄色	2.5Y 6/3 にぶい黄色	ロクロナデ	ロクロナデ	底部ヘラ切。須恵器で還元炎焼成だが、軟質であり、一部酸化炎焼成のため黄橙色に発色する部分がある。	8世紀後半
448	C	SD-H	須恵器	坏	底部	-	(2.3)	-	7.6	胎土は精選されている。	10YR 6/1 褐灰色	2.5Y 6/1 黄灰色	ロクロナデ	ロクロナデ	断面逆台形の高台を貼付する。	9世紀
449	C	SD-H	土師器	羽釜	口縁部	(20.0)	(3.6)	-	-	褐色チャート砂粒を多く含む。砂粒の径は0.5~1mm前後。	10YR 7/3 にぶい黄橙色	10YR 7/3 にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	口縁部は強いヨコナデによって仕上げる。口縁部外面に断面四角形で長さ2cmほどの罫をもつ。チャート砂粒は多いが、角閃石や火山ガラスなど火山由来の鉱物は含まない。	10世紀。摂津型であるが在地産の可能性。
450	C	SD-H	土師器	羽釜	口縁部	(23.7)	(4.2)	-	-	微細粒砂を多量に含む。チャート主体だが、ガラス質鉱物も確認される。3~5mm大の粗粒砂もある。	7.5Y 5/3 にぶい褐色	7.5Y 5/3 にぶい褐色	ユビナデ、ナデ	ハケ、ナデ	口唇は丸く仕上げる。口縁部外面に断面台形の罫(長さ1.5cm)を貼付する。	10世紀。搬入品。摂津
451	C	SD-H	土師器	皿	口縁~ 底部	10.0	2.0	-	7.0	胎土は精選されており、砂粒をほとんど含まない。	5YR 7/6 橙色	5YR 7/6 橙色	ナデ、ユビオサエ	ナデ、ユビオサエ	手づくねの皿。	中世
452	C	SD-H	須恵器	碗	底部	-	(1.7)	-	6.0	精選された胎土。	10YR 7/3 にぶい黄橙色	10YR 7/3 にぶい黄橙色	ロクロナデ	ロクロナデ	底部回転糸切り痕。摩耗顕著だが、ロクロ目は観察可能。軟質だが還元炎焼成だと考えられる。	12世紀?
453	C	SD-H	瓦質土器	風炉	頸部~ 上胴部	-	(6.8)	(13.8)	-	2mm大の粗粒砂を少量含む。0.2mmほどの微細粒砂を多く含む。ガラス質の微細粒砂も多い。	5Y 3/1 オリーブ黒色	5Y 3/1 オリーブ黒色	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	胴部は大きく張り出す。頸部は強く屈曲した後、若干内傾気味に立ち上がる。胴部外面に沈線により3重の弧文を施文。	中世・大和型瓦質土器
454	C	P149	土師器	坏?	底部	-	(1.8)	-	11.6	微細粒砂を若干量含む。	2.5Y 7/2 灰黄色	2.5Y 7/2 灰黄色	ロクロナデ	ロクロナデ	内面不定方向のナデ。高台形状は断面四角形。底部ヘラ切。	8世紀
455	C	P463	土師器	碗	口縁~ 体部	(14.9)	(4.1)	-	-	精選された胎土。1mm前後の砂粒を若干量含むのみ。	7.5YR 8/4 浅黄橙色	10YR 8/4 浅黄橙色	ナデ	ナデ	碗状の体部。口縁はわずかに外反し、端部を丸く仕上げる。体部中位に稜あり。	12世紀
456	A	P488	土師器	坏	口縁部	-	(3.5)	-	-	精選された胎土。砂粒はほとんど含まない。	7.5YR 8/4 浅黄橙色	10YR 7/4 にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	ロクロ目がはっきり残る。	中世前期
457	D	黒色シルト	土師器	皿	底面・ 墨書、 暗文	-	-	-	-	精選された胎土。微細粒砂以外、砂粒はほとんど含まない。	2.5Y 5/6 明赤褐色	2.5Y 5/6 明赤褐色	ナデ、ヘラミガキ	ナデ	土師器皿の底面で、内面にヘラミガキによる暗文、外面に墨書文字が確認される。	8世紀。6cm×5cmの破片(底面)。
458	D	I-II層	土師器	皿	完形	9.4	(2.3)	-	6.0	精選された胎土。	7.5YR 7/4 にぶい橙色	7.5YR 7/6 橙色	ロクロナデ	ロクロナデ	底部ヘラ切。口縁端部は丸く仕上げる。	10世紀中葉
459	D	I-II層	土師器	碗	底部	-	(2.1)	-	6.8	精選された胎土。5mm大の小礫も認められる。	7.5YR 7/4 にぶい橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ナデ、ヘラミガキ	ナデ	断面四角形の高台。内面見込みに暗文状のヘラミガキ。	10世紀後半~末
460	D	I-II層	須恵器	碗	底部	-	(2.2)	-	7.0	精選された胎土。	2.5Y 8/2 灰白色	2.5Y 8/2 灰白色	ナデ	ナデ	軟質の須恵器。高台は内面が肥厚する。	10世紀
461	D	TR3包含層	須恵器	皿?	口縁~ 底部	(13.4)	(2.8)	-	(8.0)	0.5~1mm大前後のチャート砂粒をやや多く含む。	2.5Y 5/1 黄灰色	2.5Y 5/1 黄灰色	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁はいったん外反した後、上方へ立ち上がる。	古代末?
462	A	III層	須恵器	貯蔵具(壺)	底部	-	(8.9)	-	(19.2)	精選された胎土。微細粒砂をやや多く、1~2mm大の砂粒を少量含む。	7.5Y 6/1 灰色	5YR 5/2 灰オリーブ色	ユビナデ、ヘラナデ	タタキ、ヘラナデ、ケズリ	須恵器の貯蔵具。外面にタタキ目が残る。底部外周にはケズリに伴う工具の圧痕が残る。	古代

表6 遺物観察表(石器) 1

図版 番号	整理 番号	器種	石材	調査 区	遺構・層名	全長 (cm)	全幅 (cm)	全厚 (cm)	重量 (g)	特徴・備考
19	S 1	打製石包丁	頁岩	C	ST1-④	11.7	5.1	1.4	(98.4)	平坦剥離により側縁に刃部を作出、左右両端には挟りを入れる。
-	S 2	敲石	砂岩	C	ST1 床面	19.4	7.2	5.2	1323.0	不整形の棒状楕円礫。端部・表裏面に敲打痕。
20	S 3	砥石・磨石・敲石・ 台石	砂岩	C	ST1 床面	21.3	15.2	3.5	-	うすく扁平な大型の砂岩円礫を素材とする。表面には擦痕が残り、わずかに凹状になる。裏面には中央部に敲打痕が残る。また、縁辺は敲打による剥離が認められる。
-	S 4	剥片	頁岩	C	ST1	6.2	0.6	0.4	5.2	使用に際して破損したものだと考えられる。
-	S 5	剥片	サスカイト	C	ST1	3.3	2.2	0.1	2.9	サスカイトの剥片。
21	S 6	石剣か	泥岩質の堆積岩 が変成を受け層 状になっている	C	ST1	(4.8)	4.5	1.1	43.3	全面に擦痕が残る。先端・基部とも折損し、全体形状は不明。弥生時代の石剣の一部だと考えられる。
24	S 7	打製石包丁	緑色片岩	C	ST2 床面	(6.7)	5.1	0.6	46.0	板状の礫を素材とし、両側縁と端部を直接打撃により成形、一側縁を刃部とする。中央部で折損し、全体形状は不明。端部には挟りが入る。刃部、背部ともに直線的。
-	S 8	被熱赤変砂岩礫	砂岩	C	ST3 床面	6.9	5.4	5.2	197.0	被熱赤変部あり。
37	S 9	石鏃	サスカイト	B	ST4	2.9	1.8	0.2	2.3	板状の剥片を素材とし、押圧剥離により刃縁を全周に作出する。刃縁を形成する剥離は縁辺にとどまる。素材剥片の剥離軸は、剥片の背面・腹面ではほぼ直交する。凹基であり、脚長は左右で異なっている。
38	S 10	剥片	サスカイト	B	ST4	3.0	3.5	0.2	0.5	風化した礫面を打面とした剥片で、背面と腹面で剥片剥離軸はほぼ直交している。剥片末端部は階段状。左辺・右辺ともに面をなす。石鏃の素材とすることを意図した目的剥片である
39	S 11	剥片	サスカイト	B	ST4	2.8	2.4	0.5	8.4	背面と腹面で剥片剥離軸は異なり、背面でも2方向が確認できる。打面転移を繰り返したことがわかる。剥片末端部は階段状。左辺・右辺ともに面をなす。石鏃の素材とすることを意図した目的剥片である。
40	S 12	剥片	サスカイト	B	ST4	4.1	1.7	0.5	6.7	縦長剥片。
-	S 13	剥片	サスカイト	B	ST4	3.2	4.5	0.6	11.1	横長剥片。
41	S 14	敲石	砂岩	B	ST4	11.3	2.4	1.6	86.6	棒状の円礫で両端にわずかに敲打痕が認められる。
42	S 15	軽石	軽石	B	ST4	8.4	5.2	5.0	35.8	使用痕等は観察できない。
52	S 16	磨製石斧 (加工具)	酸性凝灰質頁岩	B	ST5	(5.1)	2.1	0.7	12.1	石材は白っぽく、粒子は細かい。酸性凝灰岩だと考えている。岩脈が入る。刃部周辺のみでの研磨で刃部を作出する加工斧。刃部に接する側縁にも、研磨により面をつくり出す。
-	S 17	使用痕のある 剥片	泥質片岩	B	ST5	5.9	4.3	1.0	26.0	不規則な微細剥離が認められる。
53	S 18	剥片	サスカイト	B	ST5	2.9	2.1	0.7	3.6	石鏃の素材薄片。両側縁に対向する剥離が認められる。

表6 遺物観察表(石器)2

図版 番号	整理 番号	器種	石材	調査 区	遺構・層名	全長 (cm)	全幅 (cm)	全厚 (cm)	重量 (g)	特徴・備考
78	S 19	磨製石斧	蛇紋岩 (超塩基性岩)	C	ST6 (IHSD24)	(6.1)	3.8	1.4	50.4	両刃の磨製石斧。研磨は刃部に限定される。側縁は通常の剥離および平坦剥離によって作出する。
79	S 20	磨製石斧素材	御荷鉾緑色岩	C	ST6 (IHSD24)	17.6	6.2	3.9	811.0	敲石または磨製石斧の素材。厚みのある棒状礫を素材とする。
81	S 21	石核	珪質緑色片岩?	C	ST6 床面	8.2	6.0	2.3	168.0	扁平な分割礫を素材とし、打面を分割面に設定、周縁から剥片を剥離する。目的剥片は小型の横長剥片である。
80	S 22	敲石	御荷鉾緑色岩	C	ST6 (IHSD24)	12.7	5.2	2.0	216.8	2cmほどの厚みを持つ扁平な棒状礫を素材として選択。磨製石斧の製作を意図して、直接打撃により両側縁および端部を敲打、成形する。321など、同様な礫を選択、剥離箇所も同じものもある。
-	S 23	打製石器	砂岩	C	ST6 (IHSD24)	8.5	5.1	1.7	125.0	周縁に剥離痕がめぐる。長方形の平面形状。
-	S 24	剥片	砂岩・泥岩が圧力変成を受け、層状の構造(片理)を持つ	C	ST6	11.0	7.7	1.0	115.0	土掘り具として使われた可能性もある。
-	S 25	棒状自然礫	層状の構造を持つ緑色岩系の堆積岩	C	ST6 肩	6.5	2.0	1.9	17.7	黒い岩脈(ペイン)の入った自然石。
-	S 26	端部に微細剥離の連続する礫	チャート	C	ST6Ⅲ層	11.5	5.4	3.2	234.0	使用された可能性もあるが、定形的な石器ではない。
-	S 27	砥面(擦痕のこる)がある砂岩剥片	砂岩	C	ST6 床面	2.8	1.1	1.0	3.7	砥石の剥片。
-	S 28	円礫	泥岩もしくはより硬質	C	ST6	5.4	4.3	0.4	10.6	きめの細かい砂岩である。
-	S 29	石片	結晶片岩	C	ST6 床面	5.5	3.2	1.1	27.3	剥片ではない。
-	S 30	石片	砂岩	C	ST6	5.3	4.1	1.6	31.9	褐色に発色する砂岩。
-	S 31	石片	頁岩	C	ST6	5.7	1.6	0.5	3.8	剥片ではない。
-	S 32	石片	砂岩?	C	ST6	4.7	2.0	0.4	4.2	剥片ではない。
200	S 33	磨製石包丁	頁岩	C	ST7(IHKS1)	(5.6)	5.3	0.5	(26.8)	両端が欠ける。全面に擦痕がのこる。紐孔は2孔。刃部は両刃で、背部にも研磨による面を作出。
201	S 34	台石	砂岩	C	ST7(IHKS1)	17.5	15.8	4.4	1843.6	中央部が皿状にわずかに凹み、敲打痕ものこるものの、明瞭ではない。作業台として使われた台石だと考えられる。
-	S 35	棒状円礫	砂岩	C	ST7	3.9	1.6	1.1	6.6	自然石。
211	S 36	磨製石斧(基部)	御荷鉾緑色岩	C	ST8	(13.2)	7.2	4.6	(945.2)	大型蛤刃石斧の基部か。刃部は折損のため形状不明。全面を研磨し、丁寧に仕上げられる。側縁および表裏面の境界には稜は確認できない。

表6 遺物観察表(石器) 3

図版 番号	整理 番号	器種	石材	調査 区	遺構・層名	全長 (cm)	全幅 (cm)	全厚 (cm)	重量 (g)	特徴・備考
-	S 37	剥片	泥質片岩	C	ST8	3.9	2.4	0.5	6.1	片理が発達する。
-	S 38	剥片 (蔽石の使用に 伴う)	砂岩	A	ST9	4.4	4.5	1.3	19.8	扁平な円形の剥片で、周縁に微細剥離がのこる。
212	S 39	軽石		C	ST8 床面	6.3	4.2	3.0	20.9	使用痕等は観察できない。
223	S 40	磨製石包丁	緑色岩系の層理 が発達した石材 が風化し、表面 が白くなったもの か?	A	ST10	8.1	3.8	0.6	(26.6)	扁平で薄いへら状の素材から作り出す。風化により白っぽく発色する。片理の発達した緑色片岩系の石材である。紐孔は中央部に1孔のみ。片刃である。
224	S 41	磨製石器	泥質片岩	A	ST10 床面	(9.3)	(3.7)	1.3	45.8	擦痕が確認される。磨製石器であり、石斧の可能性もある。折損のため全体形状は不明。側縁は剥離により稜を形成する。また、その稜には使用痕とみられるイレギュラーな剥離ものこる。
225	S 42	打製石器	結晶片岩	A	ST10 床面	(6.0)	(3.4)	0.9	14.1	一側縁に剥離を連続、刃縁を形成する。不規則な剥離であり、定型的な石器でない可能性もある。
226	S 43	(陰陽石- 陰形自然石)	砂岩	A	ST10	13.8	11.0	7.3	1126.3	硬質の砂岩で、構成する砂粒の粒径は比較的大きく、粗い。自然石であり、加工の痕跡は全く認められない。ただし、住居(S T10)内には意図的に持ち込まれたものであり、同じ住居内から出土した自然石(227)とセットとなる陰陽石だと捉えている。ゴロツとした印象の不整形自然石であり、割れ目部分(加工なし)を陰部とみためた陰石として祭祀行為に使用された可能性はあるものの、断定はできない。
227	S 44	(陰陽石- 陽形自然石)	砂岩	A	ST10	14.9	3.7	1.8	112.0	自然石であり、全く加工の痕跡は認められない。226(陰石)とセットで竪穴住居内から出土した陰陽石の可能性もある。
-	S 45	剥片	砂岩	A	ST10 P2	(6.7)	(5.1)	(1.4)	74.8	褐色に発色する。
242	S 47	使用痕の剥片	サスカイト	A	ST11(土キ4)	3.4	2.7	0.5	5.4	剥片の末端辺に、不規則に微細剥離が連続する。
-	S 48	自然石	砂岩	A	ST11(土キ4)	3.8	3.4	0.5	8.6	扁平な板状で、平面は不整形。
243	S 50	磨製石包丁	砂岩	C	SK2	10.7	4.2	0.9	63.6	刃部は両刃で、直刃・直背。刃部の摩滅顕著。使用によるものと考えられる。側縁と背部に研磨により面を形成する部分がある。
244	S 49 S 51	磨製石包丁	極細粒砂岩	C	SK2	11.1	4.2	0.9	61.6	泥岩と細粒砂岩の中間、極細粒砂岩。黒い岩脈(ベイン)が入る。両刃の石包丁で、直刃・弧背。紐孔は2孔。
245	S 52	蔽石	砂岩	C	SK3	10.2	(5.8)	3.7	413.0	扁平円盤を素材とする。被熱赤変部を持つ。表裏面及び周縁全周に蔽打痕が認められる。中央で割れ、半分ほどが欠けている。
255	S 53	バチ状扁平円盤	砂岩	C	SK38	4.7	2.1	1.6	8.7	平面形バチ状で、厚さ5mm前後と薄く扁平な盤。側縁の一部が赤変している。明確な使用痕等は確認できない。土器づくり等何らかの用途で使用された工具の可能性はあるが、いかなる用途に用いられたものか、はっきりと断定することはできない。
-	S 54	円盤(四角形)	砂岩	C	SK40	8.7	5.0	1.9	118.0	長方形の平面形を呈している。
256	S 55	扁平な棒状盤	砂岩?	C	SK41	4.3	1.1	0.6	2.6	長さ4.3cmの小型で細長い棒状扁平盤。明確な使用痕等は確認できない。土器づくりの際のヘラミガキ等の作業のための原体ではないかと考えているが、断定はできない。

表6 遺物観察表(石器) 4

図版 番号	整理 番号	器種	石材	調査 区	遺構・層名	全長 (cm)	全幅 (cm)	全厚 (cm)	重量 (g)	特徴・備考
257	S 56	砥石	砂岩	C	SK45	20.8	18.7	7.0	3428.3	定形で見事な砥石。表裏面3箇所ずつ、側面1箇所ずつ、計8箇所にわずかに凹状の砥面を形成する。また、端部と表面には敲打痕が残る。
-	S 57	剥片	砂岩	B	SK66	9.0	5.8	1.0	97.0	敲打石として使用の際、生じた剥片か。
-	S 58	敲打石	砂岩	C	SK70	16.1	6.4	4.5	613.0	棒状の礫素材・赤変・端部に敲打痕・炭化物付着
281	S 59	敲打石	砂岩	C	SK70	11.5	2.8	2.6	159.9	断面四角形の角棒状礫素材の敲打石。一面に敲打による凹状の痕跡多数。
282	S 60	軽石	軽石	B	SK70	7.3	6.0	4.1	34.4	使用痕等は観察できない。
283	S 61	小型棒状礫 (自然礫)	砂岩	B	SK75	4.6	1.1	0.8	5.5	長さ4.6cmの小型で細長い棒状の自然礫。明確な使用痕は確認できない。土器づくりの際のヘラミガキ等の作業のための原体ではないかと考えているが、断定はできない。
284	S 62	磨製石斧(基部)	御荷鉾緑色岩	A	SK78	(9.8)	8.2	3.7	(604.2)	磨製石斧(大型伐採斧)の基部。刃部形状および全体形は折損のため不明。側縁と基部には成形のための敲打痕がのこり、側縁は研磨により面を作出する。
315	S 63	打製石鏃	サスカイト	C	SD3	3.6	1.7	0.5	2.31	押圧剥離により刃縁を形成し、加工はほぼ全周を巡る。剥離は中央稜付近までのびる。左右対称で、短軸と長軸の比率がほぼ1対2の細長い形態。
316	S 65	砥石	砂岩	C	SD3-2(石列)	(8.3)	(7.1)	2.1	(255.7)	厚みのある板状の砂岩。砥石であり、表裏面と側面の3箇所に擦痕が残る。表裏面はともに凹状を呈している。一部、被熱による赤変が観察される。
317	S 67	台石	砂岩	C	SD3-2(石列)	24.0	21.8	8.5	6800.0	部分的に敲打痕がのこる。被熱赤変が認められる。作業台として利用された台石か?
318	S 66	砥石・敲打石・台石	砂岩	C	SD3-2(石列)	24.0	13.0	9.4	5500.0	端部に敲打痕あり。全体的に被熱赤変。擦痕が観察される面があり、砥面が形成される。砥石・敲打石・台石として利用されたものか。
319	S 82	敲打石	砂岩 (灰色で硬質)	C	石列	20.7	12.0	6.2	1995.0	不整形の砂岩。表面に擦痕、両端に敲打痕あり。片方の端部のみ被熱赤変
320	S 68	大型蛤刃石斧	緑色岩	C	石列横・ 黒シルト	14.4	6.5	6.6	605.6	大型蛤刃石斧。表裏面および側縁の一部に成形時の敲打痕があり、全面に擦痕が残る。基部と側縁には研磨により面を形成する。刃部は使用による摩滅のため、鈍くなっている。
321	S 46	敲打石	御荷鉾緑色岩	A	ST11(SD59)	13.5	5.0	2.0	253.1	粒度は細かいが御荷鉾緑色岩である。白い岩脈(ベイン)が入る。端部に敲打痕がある。端部に続く両側縁には直接打撃により生じた剥離が認められる。扁平な棒状礫を素材とした石斧の素材。
-	S 69	自然石	砂岩	B	SD41	3.8	1.7	0.8	5.5	粗い粒子で、加工の痕跡なし。
-	S 70	剥片	泥質片岩	B	SD51	16.8	4.5	0.9	112.0	うすく、細長い長楕円形の平面形。周縁に微細剥離がのこる。
-	S 71	敲打石	砂岩	C	P44	8.0	2.8	3.6	87.7	不整形の円礫の破片。敲打痕がのこる。
364	S 72	打製石包丁	頁岩	C	P132	9.8	4.5	1.0	70.0	石材は頁岩あるいは泥質砂岩。礫分割により形成された剥片の縁辺を刃部として利用した打製石包丁。刃縁には微細剥離(使用痕)が観察される。また背部と両側縁は通常の剥離および平坦剥離によって成形される。

表6 遺物観察表(石器) 5

図版 番号	整理 番号	器種	石材	調査 区	遺構・層名	全長 (cm)	全幅 (cm)	全厚 (cm)	重量 (g)	特徴・備考
-	S 73	石片(破損の際に生じたかけらか?)	緑色岩系の石材	C	P149	4.2	4.1	1.3	21.4	破損の際に生じたかけらか?
365	S 74	敲石	砂岩	C	P217	8.9	3.9	3.4	106.0	粗い粒子の砂岩。端部に敲打痕あり。全体に赤変しており、被熱によるものだと考えられる。
366	S 75	打製石器 (打製石包丁)	泥質砂岩	C	P462	(6.7)	6.4	0.9	61.9	黒い岩脈(ベイン)の入った砂岩と泥岩の中間のような片理の発達した堆積岩。泥質砂岩。直接打撃により刃縁を形成。
-	S 76	敲石	砂岩 (きめの細かい)	C	P462	7.6	5.8	1.3	91.7	不整隅丸四角扁平円礫素材
-	S 77	磨製石器 (破片)	頁岩	C	P462	5.9	1.1	1.1	7.0	磨製石包丁の可能性はあるが、破片のため詳細は不明。
-	S 78	石片	泥質片岩系	C	P462	7.0	2.1	1.6	35.9	片理が発達する。
-	S 79	円礫	砂岩	A	土器 5(F)	5.4	5.0	1.5	83.2	小型の扁平な砂岩円礫。使用痕等は確認できない。
380	S 80	(平坦剥離で成形し刃部も作出するが、器種は不明)	砂岩	A	土器 6(G)	15.6	8.9	2.9	(453.1)	きめの粗い砂岩製の石器。平坦剥離あるいは通常の剥離により側縁を成形する。
388	S 81	砥石	砂岩	C	SD2	(17.7)	10.0	7.3	2299.0	断面四角形の、4面で研磨が確認される砥石。きめの細かい砂岩。被熱赤変し、黒化部分がある。
389	S 64	敲石	砂岩(褐色)	C	SD13	19.6	14.0	4.1	1990.0	扁平な楕円形の円礫素材。両端に敲打痕が残る。
390	S 83	打製石器	泥質砂岩	C	SD23	7.1	3.8	1.5	44.3	片理の発達した泥質砂岩(わずかに黒い岩脈が入る)。直背・直刃の打製石包丁。
412	S 84	磨製石鏃	泥質片岩	C	黒シルト	3.2	1.0	0.3	1.25	泥質砂岩あるいは頁岩の磨製石鏃。両側縁は面をなす。全面に擦痕が残る。
413	S 85	磨製石包丁	頁岩	A	北壁サブトレ	8.3	3.0	0.8	31.9	極細粒砂岩に近い石材(安井さんの指摘)。硬質の砂岩(泥岩に近い)。背部に面を形成する。全面に擦痕が認められる。片刃の石包丁である。直刃・弧背。
414	S 86	磨製石包丁	酸性凝灰質頁岩	A	Ⅲ層	(3.2)	3.3	0.7	11.3	刃部はわずかに内湾する。両刃。折損のため全体形状は不明。石材は片理が発達し、白っぽい。酸性凝灰岩か?
415	S 87	磨製石包丁	泥質片岩?	B	試掘TR10	(6.1)	3.1	0.4	20.5	刃部はわずかに内湾する。両刃で、刃部以外も全面を磨き、丁寧に仕上げている。片理の発達した泥岩質の石材。背部は少したけ弧状であり、面を形成する。表面に敲打痕が残り、穿孔途上で中絶した深さ1mmの孔が残る。紐孔は2孔。
416	S 88	磨製石包丁	泥質片岩	A	Ⅲ層	8.5	6.1	1.1	82.7	表裏面、側縁の挟入部ともに擦痕が認められる。刃部は弧状(外湾)で、背部は直線的。背部は部分的に面が形成される。両刃の磨製石包丁で、紐孔はない。片理の発達した泥質砂岩。
417	S 89	磨製石包丁	頁岩	C	黒シルト	(7.5)	3.8	0.9	(30.9)	3分の1程度欠ける。413と同じ石材で、片理の発達した極微細粒砂岩。表裏面に擦痕が残る。素材とする扁平な板状礫の形を整える過程で成形に失敗、部分的に磨いた後、放棄したものか、あら仕上げの製品として使用した後、破損したものか、いずれか。
418	S 90	磨製石斧(基部)	御荷鉾緑色岩	B	黒シルト	(13.3)	6.7	3.3	(633.8)	磨製石斧の基部。厚みのある扁平な棒状の礫を素材とする。折損のため、刃部形状不明。全面に擦痕が観察され、側縁は面をなす。

表6 遺物観察表(石器) 6

図版 番号	整理 番号	器種	石材	調査 区	遺構・層名	全長 (cm)	全幅 (cm)	全厚 (cm)	重量 (g)	特徴・備考
419	S 91	磨製石斧(基部)	御荷鉢緑色岩	A	Ⅲ層	(13.2)	7.2	4.6	(936.8)	磨製石斧の基部。厚みのある扁平な棒状の礫を素材とする。折損のため、刃部形状不明。全面に擦痕が観察され、側縁は面をなす。
-	S 92	磨製石斧(基部)	御荷鉢緑色岩	D	試掘TR2 Ⅱ・Ⅲ層	(9.9)	(7.4)	(3.9)	354.0	磨製石斧の基部だと考えられる。擦痕が観察される。割れており、全体形状不明。
-	S 93	磨製石斧(基部)	御荷鉢緑色岩	B	ホⅢ層	(10.5)	(6.0)	(3.4)	204.0	磨製石斧の基部。擦痕が残る。敲打痕もあり、敲石として利用された可能性もある。
420	S 94	磨製石斧(基部)	緑色岩	B	ホⅢ層	(9.0)	(6.1)	(4.1)	342.0	一部被熱赤変箇所あり。磨製石斧の基部か。側縁に敲打痕があり、敲石として利用された際の使用痕か、石斧成形時の加工痕か、いずれかだと考えられる。
421	S 95	削器 (スクレイパー)	サヌカイト	A	Ⅲ層	12.8	5.4	1.2	(95.7)	一端に石匙と同様の挟入部を持つ。挟入部分を基にすると、縦長の石匙状石器(挟入石器)と見ることができる。素材剥片の剥離軸は背腹同一方向である。
422	S 96	削器 (スクレイパー)	サヌカイト	A	Ⅲ層	6.9	8.7	0.7	42.3	剥片の末端辺に、剥離を連続させ刃部とする。刃縁は弧状である。素材剥片の剥離軸は同方向である。
423	S 97	削器 (スクレイパー)	サヌカイト	B・ C	表採	6.1	4.0	0.9	27.0	サヌカイトのスクレイパー。両側縁を刃部として成形する。
-	S 98	使用痕のある 剥片	泥質片岩	A	Ⅲ層	7.0	9.5	1.1	115.0	剥片末端2分の1の範囲に使用痕と考えられる剥離が連続する。土掘り用に使われた可能性あり。
424	S 99	打製石器	泥質片岩	A	Ⅱ・Ⅲ層	6.2	4.5	0.9	23.7	土掘り具の可能性あり。
-	S 100	打製石器・ 周縁加工あり	泥質片岩	A	Ⅲ層・ ST10の上	8.1	8.8	0.7	131.0	円盤状。周縁に剥離痕あり。2次加工?使用痕?
-	S 101	打製石器	泥質片岩?	A	Ⅲ層	7.4	4.1	0.7	45.80	石材に片理発達。土掘り具の可能性。
-	S 102	使用痕のある 剥片	砂岩	A	Ⅲ層	7.1	4.3	0.8	45.1	周縁に使用痕と考えられる剥片が連続する。
425	S 103	敲石	砂岩	A	Ⅲ層	(4.3)	5.9	4.7	260.9	硬質砂岩の敲石。割れて、楕円の円柱状となる。
426	S 104	磨製石斧未製品	緑色岩	A	Ⅲ層	12.2	4.5	2.8	307.7	両極打法による対向剥離が認められる。磨製石斧の未製品。
427	S 105	敲石	砂岩	C	I・Ⅱ層	9.8	9.0	3.2	445.4	表裏面と側縁全周に敲打痕。表面は敲打により凹状になる。
-	S 106	敲石	砂岩	B	Ⅲ層	(6.7)	(4.6)	(1.7)	87.0	一部に敲打痕が残るが、明瞭ではない。
-	S 107	剥片	サヌカイト	A	Ⅱ層	(6.9)	3.3	1.3	37.8	厚さ1cm以上の剥片。
-	S 108	剥片	サヌカイト	A	Ⅱ・Ⅲ層	3.0	3.3	0.6	3.3	剥離方向は背腹同方向。縦長剥片。

表6 遺物観察表(石器) 7

図版 番号	整理 番号	器種	石材	調査 区	遺構・層名	全長 (cm)	全幅 (cm)	全厚 (cm)	重量 (g)	特徴・備考
-	S 109	剥片	サヌカイ	A	Ⅲ層	3.0	2.1	0.1	4.0	縦長剥片。
-	S 110	剥片	頁岩	A	Ⅲ層	—	—	—	2.1	特記事項なし。
-	S 111	剥片	砂岩	A	Ⅲ層	—	—	—	37.7	特記事項なし。
-	S 112	剥片	砂岩	A	Ⅲ層	8.1	4.4	1.7	53.8	使用に際して生じた剥片。
-	S 113	剥片	砂岩	A	Ⅲ層	9.4	6.8	2.0	148.0	円礫素材の敲石使用時に剥離したもの。
-	S 114	剥片	泥質片岩	A	Ⅱ・Ⅲ層	8.5	5.6	0.9	92.6	片理発達。うすい板状の剥片。
-	S 115	剥片	御荷鉾緑色岩	A	Ⅱ層	—	—	—	14.1	石器製作の際生じた剥片か。
-	S 116	剥片	緑色岩	A	Ⅱ層	7.0	3.8	0.8	33.3	使用に際して破損したものだと考えられる。
-	S 117	被熱赤変円礫	砂岩	B	Ⅲ・Ⅳ層	8.3	5.8	3.8	143.0	被熱した円礫。使用の痕跡は不明。
-	S 118	扁平	緑色片岩	B	Ⅲ層	(7.1)	(4.7)	(1.7)	63.7	扁平な棒状礫だったと考えられるが割れており、全体形状不明。石器素材として持ち込まれた可能性がある。
-	S 119	石器素材	泥質片岩	A	Ⅱ・Ⅲ層	7.9	3.6	1.3	50.5	板状に割れている。
428	S 120	石器素材	緑色片岩	A	Ⅲ層・ ST10の上	(13.9)	10.4	3.9	(615.8)	板状の緑色片岩で、端部と側縁に敲打による剥離が認められる。
-	S 121	板状自然石	泥質片岩	D	SB(SK13)	5.1	3.7	0.5	13.9	古代の掘立柱建物から出土。
433	S 122	軽石	軽石	D	SB(SK13)	6.6	4.3	4.0	10.6	古代の掘立柱建物から出土。
443	S 123	砥石	砂岩	C	SK100・101	8.8	5.1	3.2	177.0	砂粒を含む泥岩。4面を砥面として利用する砥石。鉄製品の研磨等金属に利用したと考えられる。





体験学習



体験学習



現地説明会

物部川

北地遺跡



田村遺跡群

北地遺跡とその周辺の地形（航空写真）

## 第IV章 自然科学分析

### 野市町北地遺跡出土金属製品の成分分析結果

(株) 吉田生物研究所

#### 1. はじめに

野市町に所在する北地遺跡から出土した金属製品1点について、以下の通り成分分析を行ったのでその結果を報告する。

#### 2. 資料

調査した資料は表1に示す金属製品1点である。

表1 調査資料一覧

No.	遺物名
1	銅鏡

#### 3. 方法

資料本体に蛍光X線を照射して分析した。分析装置は、理学電機工業(株)製の全自動蛍光X線分析装置3270E(検出元素範囲B~U)を用いた。

#### 4. 分析結果

成分分析結果のスペクトルを付す。金属成分としてはSn,Cu,Pbが検出されている。Al,Si,P,Sなどは土壌に由来する成分と思われる。よって表2に分析結果一覧を示すが、その数値はあくまで参考にすぎない。

表2 成分分析結果表(単位は含有%)

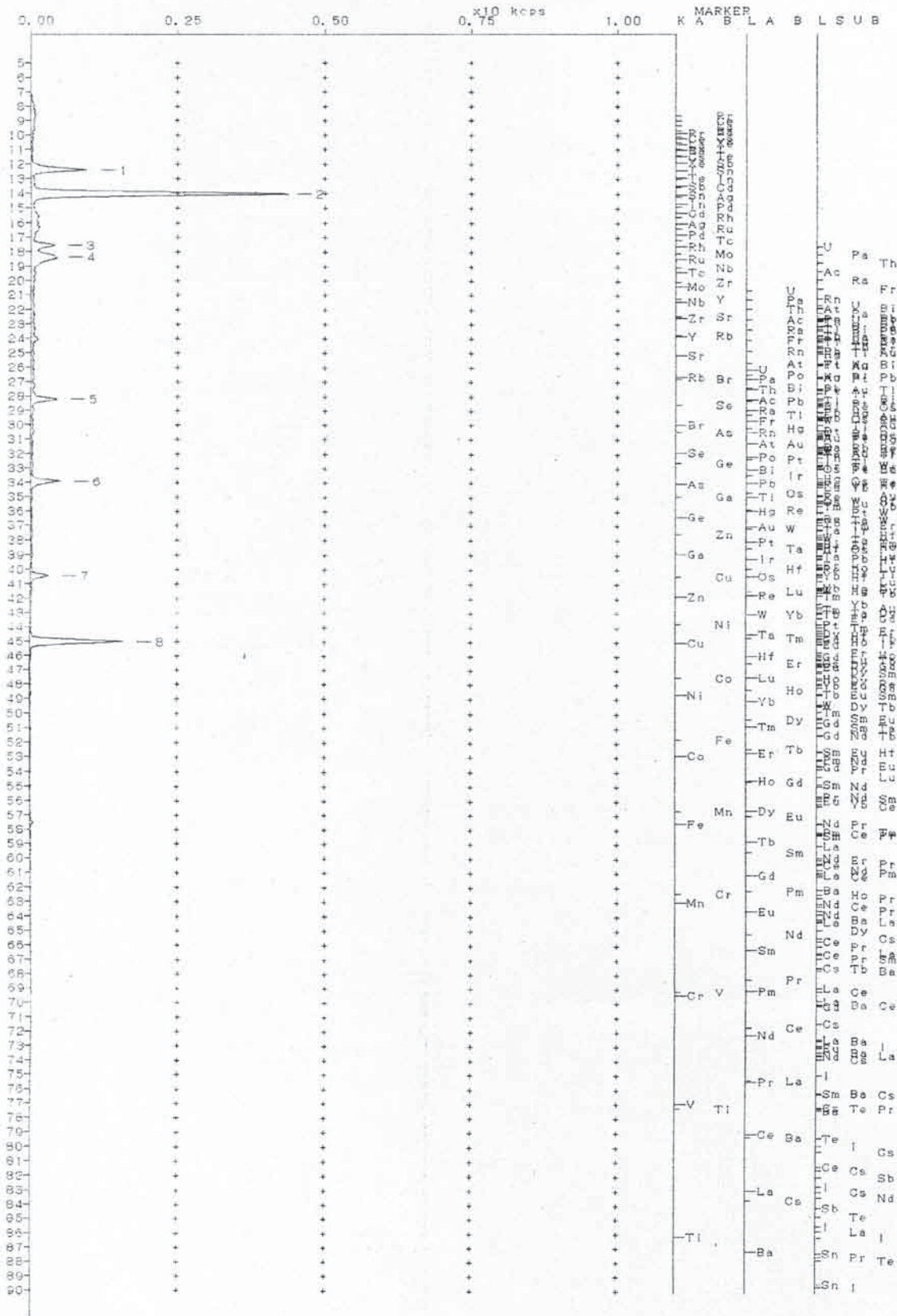
元素	No.1
Al	3.9
Si	3.0
P	0.67
S	0.53
Cu	18
Sn	66
Pb	8.1

\*\*\* 分析 \*\*\*

元素サイクル

2005-03-02 1

T# ジョアコート 試料名 B# 元素コード  
I STP アイロイ エシタマナイ 40 Hv00



## 第V章 まとめ —北地遺跡 集落の変遷—

北地遺跡の今回の調査範囲からは弥生時代から近世にかけての遺構と遺物が確認された。遺物により特定できた主な時期は、(1)弥生時代前期末～中期初頭、(2)弥生時代中期前半、(3)弥生時代中期中葉、(4)弥生時代後期前半～中葉、(5)古代（奈良～平安時代前期・8～10世紀）(6)古代から中世への移行期（平安時代後期・10～11世紀）、(7)中世前期（平安時代後期～鎌倉時代・12～13世紀）、(8)中世後期（室町時代・14～15世紀）、(9)近世（江戸時代後期・19世紀）の各期である。これ以外の時期の遺物は確認されていない。ただし、上述の(6)以降の時期は、遺構・遺物とも大きく減少、(8)(9)の時期には、ほとんど認められなくなる。

これらの9時期をまとめ、

I期 (1)～(3)の弥生時代前期末から中期前半にかけて

II期 (4)弥生時代後期前半～中葉

III期 (5)～(7)の古代から中世前期にかけて

の大きく3つの時期に分けて、調査成果をまとめる。

なお、今回の調査で空白の時期あるいは出土遺物の極めて少ない時期は、①弥生時代前期後半以前（前期末よりも古い時期及び旧石器・縄文時代）、②弥生時代中期後半から後期初頭の時期、③弥生時代後期後半から7世紀にかけての時期、④14世紀以降の4時期である。遺跡の調査対象地は調査前までは水田として耕作されていた。

### I期 弥生時代前期末～中期中葉

#### (1) 遺構

弥生時代前期末の特徴である多条化したヘラ描沈線を持つ土器は出土しているものの、II様式古段階・中期初頭のクシ描沈線を持つ土器と共伴する例が多く、確実に前期末といえる遺構は少ない。遺構は大きく前期末～中期初頭（中期I-1期・II様式古段階併行）、中期前半（中期I-2期・II様式新段階併行）、中期中葉（中期II-1期・III様式古段階併行）の3時期に分けられる。<sup>(1)</sup>

前期末の遺物のみが出土した遺構 土坑 SK63

中期初頭の遺構 竪穴住居 ST3・11、土坑 SK11、溝 SD3/SD3-2

中期前半の遺構 竪穴住居 ST10、土坑 SK2・31・50・82、

中期中葉の遺構 竪穴住居 ST4・5・6、土坑 SK70、

中期前半から中葉にかけての遺構 竪穴住居 ST8、土坑 SK25・66・68・83・85・87

#### (2) 遺物 弥生土器（中期前半の良好な遺構出土資料）

弥生土器の良好な遺構一括資料が得られた。特にII様式古段階のST11・SK11、II様式新段階のSK50、III様式古段階のSK70など一括性が高く、まとまった資料である。ヘラ描沈線も一部残り、竹管状原体による双線や扁平な刻目粘土帯での加飾、簾状文登場以前のクシ描沈線の段階（中期初頭）から、クシ描簾状文が登場し直線文・波状文などを組み合わせたクシ描沈線による加飾が進む



第109図 物部川下流左岸段丘上の遺跡

段階（中期前半）、クシ描簾状文が細かく繊細になり、壺の頸部が伸びてくる段階（中期中葉）への変化を確認することができる。器種構成は、壺・甕・鉢・蓋であり、壺の比率が高くなっていく。主な器種は壺と甕で、鉢・蓋は認められるものの少量である。

2点出土した糸を紡ぐために使われた土器片転用紡錘車もこの時期の所産である。うち1点からは4条のヘラ描沈線が確認されている。

### (3) 北地遺跡での石器製作と弥生時代中期前半の祭祀（陰陽石）

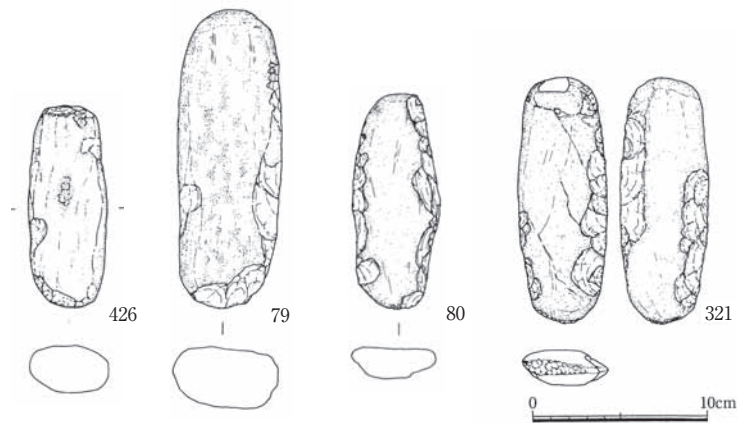
また、出土した石器類から遺跡の性格に関わる重要な知見も得られた。一つは当遺跡で石器製作が行われたことを示す石器類の出土であり、もう一つは中期前半の竪穴住居内床面から出土した祭祀の可能性を示唆する石器類の出土である。

石器製作については、ST4 出土のサヌカイトの石鏃及び剥片の存在から推定できる。ST4 は竪穴住居ではなく竪穴建物あるいは竪穴状遺構ではないかとも考え得る遺構で、規模・形態について十分把握し切れていない。ST4 は、同時期の竪穴住居 ST5 に隣接している。出土したサヌカイト剥片は、背面・腹面の剥片剥離軸（方向）が異なっており、打面転移を繰り返しながら目的剥片を獲得したことがわかる。共伴する石鏃の剥離軸も同様であり、これらサヌカイト剥片は石鏃の目的剥片だと考えられる。この空間で石鏃製作が行われていた可能性が高い。<sup>(2)</sup>

中期初頭の SD3-2（石列状遺構として検出）周辺や中期中葉の竪穴住居 ST6 さらには包含層中からも磨製石斧（太型蛤刃石斧）が出土している。御荷鉾緑色岩および緑色片岩（緑泥石片岩）を素材としており、完形品・刃部破損品・刃部破損品の再加工品・未製品など様々な工程の資料が出土した。磨製石斧の生産に関わる遺跡については、各地で調査事例が蓄積され、まとめて生産する遺跡の例も報告されている。<sup>(3)</sup> 当遺跡では、緑色岩系の石材が全て磨製石斧しかも太型蛤刃石斧に限定して選択され

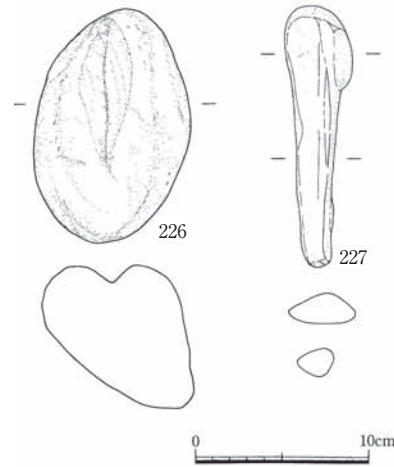
ている。緑色岩系の石片も出土している。磨製石斧関連の遺物は図示していないものも含め、総数 20 点に達する。棒状の原礫の基部や側縁に敲打痕が残るものについては、磨製石斧未製品と捉えて間違いないだろう。当遺跡での石斧の流通は製品（完成品）の形をとった場合もあるかもしれないが、遺跡内からの

未製品の出土を根拠に、原礫の状態で採取してきたものを遺跡内で加工し、製品化したものだと考えている。北地遺跡では太型蛤刃石斧の製作が行われていた。



第 110 図 磨製石斧未製品  
(弥生中期 79・80-ST6、321-SD59、426-包含層)

ST10（Ⅱ様式新段階）からは加工の痕跡の全く認められない自然石が出土している。ごろっとした砂岩円礫で割れ目を持つ石と、棒状で一端が肥厚する形態の砂岩、これらの自然石を陰陽石だと考えている。前者が陰部を象ったもので、後者が男根を象ったもの、竪穴住居の床面から出土したものであり、縄文伝統の石棒を使った祭祀に通ずる何らかの祭祀行為が行われたのではないかと考えている。弥生時代の住居内で陰陽石がセットになった事例については、現段階で確認できていない。この2点の自然石が陰陽石であるかどうかについては、さらに慎重に検討していかなければならない。もしそうであれば、注目すべき祭祀事例といえるのではないだろうか。<sup>(4)</sup>



第111図 祭祀に用いられたと考えられる陰陽石  
（弥生時代中期前半の竪穴住居跡 ST10 出土）

包含層出土だが、1点磨製石鏃が出土している。有茎式であり、田村遺跡群2次調査の際に出土した遺構出土資料の報告によれば、前期末の段階ではほとんどなくなるタイプの磨製石鏃であり、田村遺跡以外ではほとんど出土例のない遺物である。田村遺跡との関連が推察される。

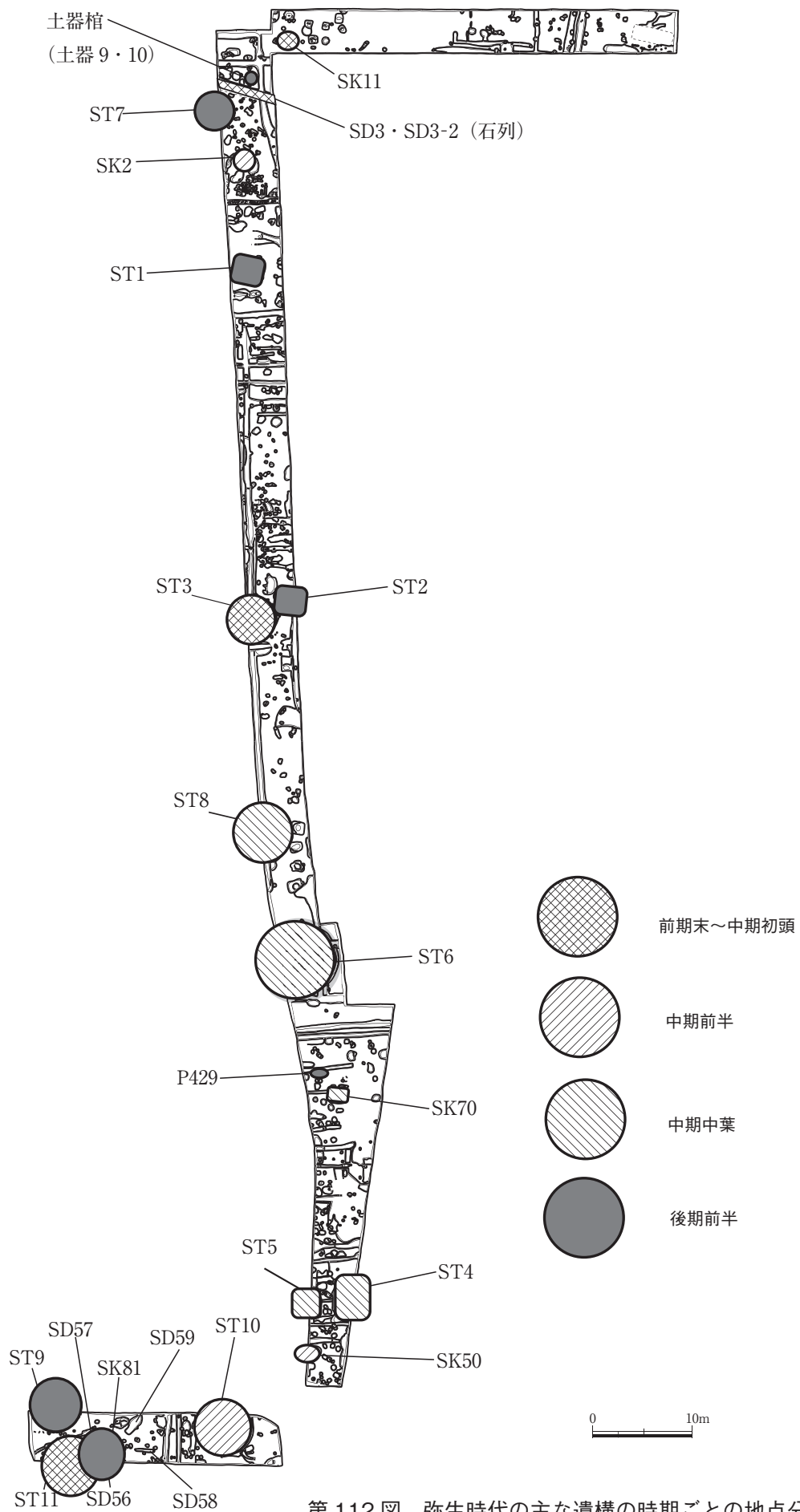
#### (4) 弥生時代前期末～中期中葉の北地遺跡の様相

土器が確認できるのは前期末（田村編年前期Ⅱ－b期・大篠式新段階・Ⅰ様式新段階併行期）からであり、少ないながらも遺構の形成も認められるなど、当遺跡の領域が集落の活動範囲となっていたことがわかる。前期末の段階では集落の中心とはなっておらず、当該期の土器片が大量に出土した、遺跡南隣の上岡遺跡や北隣の西野遺跡群などに集落本体は形成されていたと考えられる。

中期初頭から中葉にかけて、特にⅡ様式併行期の遺構は畿内・中四国周辺でも少なくなる。高知平野では、当該期の遺構が確認されることも今まではほとんどなく、高知平野の拠点集落田村遺跡群においてさえ遺構も僅少、竪穴住居など集落の実態は把握されていない。県内でⅡ様式段階の竪穴住居の例は、田村遺跡群第1次調査の際に検出された1例（Loc.34A ST1）のみ、しかもこの例は中期中葉の可能性があると指摘されており、Ⅱ様式古段階から新段階にかけての竪穴住居の確実な例は、県内にはほとんどない。<sup>(5)</sup>（香南市香我美町下分遠崎遺跡は例外で、大量の土器や豊富な自然遺物等貴重な調査成果が得られている。ただし、下分遠崎遺跡においても竪穴住居は確認されておらず、集落内の居住域はよくわかっていない。）そういう状況下において、今回、竪穴住居6棟をはじめ、この時期の遺構がまとまって確認され、遺跡内で居住域の変遷をたどることが可能な資料が得られたことは、特筆に値する。

遺跡内の居住域は、調査範囲の南、A区からB区にかけての範囲とC区北半からD区西端にかけての2箇所にある。AB区ではST11→ST10→ST4・5・6と南西から北東方向へ竪穴住居を移している。D区西端やC区北半では中期初頭の竪穴住居とともに土坑（SK11）や溝（SD3・SD3-2）が検出されている。今回の調査範囲から集落の全貌を把握することは困難だが、同一時期の住居密度





第 112 図 弥生時代の主な遺構の時期ごとの地点分布

から、前期末～中期中葉の北地遺跡は小規模な集団が生活するムラであり、少数の竪穴住居が点在する集落景観を想定することができる。

この時期（中期中葉）、兎田八幡宮の絵画銅剣（重要文化財・細形銅剣 a 類）が青銅祭器として中部瀬戸内経由で、この地域に持ち込まれたと考えられている。北地遺跡あるいは下分遠崎遺跡の集団が絵画銅剣に関わっていた可能性もある。

周辺の遺跡で出土する同時期の遺物、中でもⅡ様式新段階の指標としている「クシ描簾状文」の分布範囲を考慮すれば、集落は北方向ではなく、南方向（上岡遺跡や南国バイパス・国道 55 号線周辺）に広がっていた可能性が考えられる。<sup>(6)</sup> また、遺跡の東隣は旧野市町による試掘調査の結果、遺構・遺物とも確認されておらず、集落の東側への広がりには北地遺跡の範囲までに限定される。ただし、周辺の出土遺物は僅少であり、当該期集落の様相解明には今後の発掘調査を待たなければならない。

## Ⅱ期 弥生時代後期前半～中葉

(1) 遺構 遺構の時期はほぼ全てがⅤ-2・3期である。

竪穴住居 ST1・2・7・9

土坑 SK6

土器棺墓 土器 9・10

その他の遺構 P429

小型の竪穴住居 ST1・2 と中型の住居 ST7、床面が乱れ実態が不明瞭な ST9 がある。ST1 からは青銅鏡の破鏡が出土し注目される。小型の竪穴住居の性格については、検討を要する。周溝も検出されており竪穴建物であることは間違いがないが、「住居」であったかどうか、また、どういう性格の建物であったのか、今後の検討課題である。

(2) 遺物 Ⅴ-2・3期の土器がまとまって出土した竪穴住居 ST7 出土遺物は注目される。

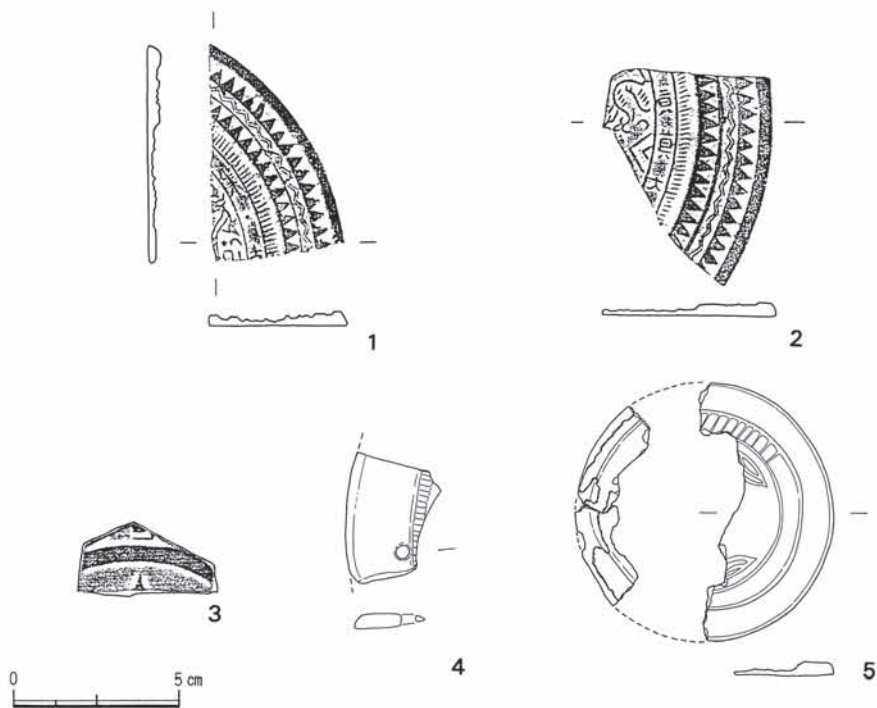
器種組成の中で、壺、特に長頸壺の占める割合が高いことが特徴で、タタキ目を丁寧に消す土器群とタタキ目を多く残す土器群とに分けて捉えることができる。壺は、長頸壺以外に首の短い広口壺がある。後続するⅤ-4期の深淵遺跡 ST3 の土器やタタキ目が顕在化するヒビノキ式（Ⅰ・Ⅱ式）土器と較べると、タタキ目の残存は少ない。

土器棺墓は壺と大型の鉢によって構成され、中には高坏が入っていた。下ノ坪遺跡の土器棺墓と類似、終末期に盛行する土器棺とは様相が異なっている。

ST1 床面から青銅鏡の破鏡が出土している。直径は復元すると 10.2cm、外区の厚さは 0.6cm、内区の厚さは 0.2cm、内区は僅かしか残っていないが、櫛目文が確認される。青銅鏡の正確な鏡式は不明だが、鋳あがりや色調から中国鏡であり、漢代に属することがわかっている。

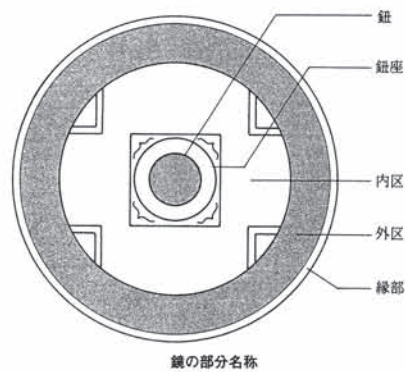
(3) 弥生時代後期前半の北地遺跡の様相

この時期に下ノ坪遺跡はじめ北地遺跡周辺の弥生時代集落は最盛期を迎える。しかし、直後の時期（後期後半）に集落本体は北方（深淵遺跡・西野遺跡群）へ移動、下ノ坪遺跡・北地遺跡・上岡



1・2 田村遺跡(中国鏡 方面規矩四神鏡) 3 介良遺跡(中国鏡) 4 西分増井遺跡(中国鏡)  
5 西分増井遺跡(ぼう製鏡)

高知県出土の弥生時代の鏡



第113図 高知県出土の弥生時代の鏡 (『野市町 北地遺跡 記者発表・現地説明会資料』より転載)

遺跡・上岡北遺跡の領域には、遺物や遺構の痕跡が全くなくなる。

後期前半は出原編年の後期Ⅱ期・V-2・3期である。弥生時代後期をⅠ・Ⅱ・Ⅲ期の3区分し、後期初頭がⅠ期(V-1期)、前半～中葉がⅡ期(V-2～4期)、後半がⅢ期(V-5～7期)である。Ⅱ期はさらに3区分され、Ⅱ-1期、Ⅱ-2期、Ⅱ-3期とされ、各期にV-2～4期が対応する。V-5はヒビノキⅠ式土器、V-6・7にはヒビノキⅡ式土器が対応する。

遺構から出土するV-2期とV-3期の遺物を弁別することが困難な場合もあり、本報告中ではV-2・3期という表現を多用している。

今回の調査では、後期に該当する土器は、ほぼ全てV-2・3期にあたり、前後の時期V-1期やV-4期の遺物は、ほとんど含まれていない。V-4期は、深淵遺跡ST3を標識遺跡とする時期であり、銘々器としての小型の鉢が、器種組成の中で一定の割合を占めはじめる時期である。北地遺跡の東隣の下ノ坪遺跡では、このV-4期の竪穴住居が存在するが、北地遺跡には全くなくなる。

この時期の集落内での遺構配置は、C区北端に土器の集中するベッド状遺構を持つ竪穴住居(ST7)が1棟、C区中央付近に小型の竪穴住居(ST1・2)が2棟、南端のA区に床面形状が乱れた竪穴住居(ST9)が1棟、全域で4棟の竪穴住居と完形の壺が出土したP429、そしてST7の近く(約4m離れた地点)には土器棺墓が形成される。ST7出土土器は合計1,500点以上、今回の調査で出土した土器の10パーセント近くの土器が、この遺構から出土したことになる。

田村遺跡群や下ノ坪遺跡の報告書中には、この時期南四国を襲った大洪水に関する記述が認められる。<sup>(7)</sup> 遺構が砂層やシルト層で覆われるという所見を元に、洪水についての推察が進められている。北地遺跡の発掘調査を担当した更谷大介も同様のことに言及、遺跡の居住地点変更の大きなインパクトになったのではないかと論述している。<sup>(8)</sup> きわめて重要な視点であり、集落の水没が集落移動の契機となった点は十分考えられることである。居住域の選定には環境変化は一定の役割を果たす。ただ、下ノ坪遺跡から北地遺跡への集落移動はなかったのではないかと、ということが出土遺物整理作業を通じて得られた結論である。下ノ坪→北地という出土遺物の先後関係は認められず、逆に北地遺跡から遺物がほとんど確認されなくなったV-4期になっても、下ノ坪遺跡には竪穴住居が残る。このエリアの後期前半(V-2・3期)においては、同時期に上段と下段の段丘面に双方に竪穴住居が点在する集落景観だったのだろう。洪水をきっかけにした集落移動があったとすれば、より北方の深淵・西野遺跡群が、その移転先だったのではないかと考えている。

竪穴住居(あるいは竪穴建物)ST1は1辺2~3mの小型の住居で、床面から青銅鏡の破鏡が出土している。青銅鏡は田村遺跡群の過去2回の大規模調査の際に3点、仁淀川下流域の西分増井遺跡の調査時に2点、高知市介良遺跡から出土している。<sup>(9)</sup> この時期の威信財として青銅鏡の「破鏡」は重要な意味を持っていた。この破鏡の正確な鏡式は不明だが、舶載鏡(中国鏡)である。また、この青銅鏡には表裏面ともに赤色顔料が付着している。断面や裏面の剥離痕にも、赤色顔料は付着しており、割れた後、破鏡となってから付着したことがわかる。その点にも注意が必要である。

西野遺跡群(ルノ丸南A地区)からは銅矛の再加工品など、特異な青銅製品も確認されている。ST1出土破鏡(漢鏡)は、青銅祭祀最終段階にあった高知平野弥生社会の様相の一端を示す重要な資料である。

### Ⅲ期 古代~中世

全体の遺物出土量の中では、3%以下だが、個々の遺物には重要な情報が含まれている。古代の掘立柱建物を中心に遺構も確認されている。先述の、(5)古代(奈良~平安時代前期・8~10世紀)、(6)古代から中世への移行期(平安時代後期・10~11世紀)、(7)中世前期(平安時代後期~鎌倉時代・12~13世紀)の3時期については、量的には少ないが、まとまった資料が得られている。

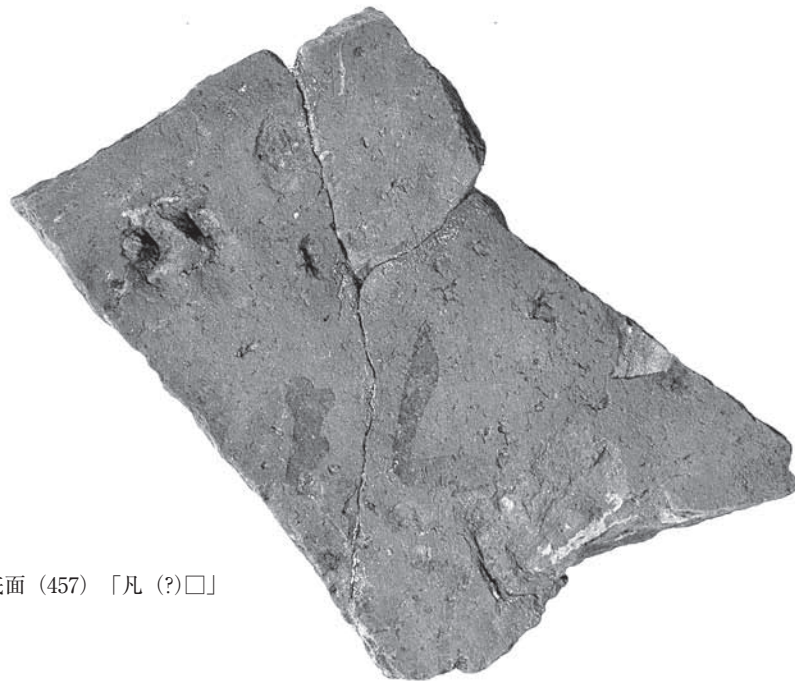
古代（奈良～平安時代前期） 8世紀～9世紀

(1) 遺構 掘立柱建物 SB2・3・4

SB3（8世紀中葉）→SB2（8世紀中葉～後半）→SB4（9世紀前半）

(2) 遺物 8世紀代の遺物としては、土師器の煮炊具（甕）、供膳具（坏・皿）、須恵器の貯蔵具（甕）、供膳具（坏・蓋）が出土している（429～435）。9世紀の遺物は須恵器の坏・皿（436・437）である。

SB2出土の土師器坏（429）は、畿内からの搬入品である。<sup>10）</sup>口縁内面に沈線を持ち、体部内面に口縁部方向へ逃げるナデが観察される。内面沈線が退化する段階の畿内産土師器であり、8世紀中葉から後半にかけての遺物である。SB3出土の須恵器蓋は、下ノ坪遺跡 SK30 段階の資料であり、SB3はSB2にわずかに先行する。SB4出土須恵器皿は、9世紀の初めに比定される遺物である。



土師器・皿底面（457）「凡（？）□」



447「上福」



457「凡？□」

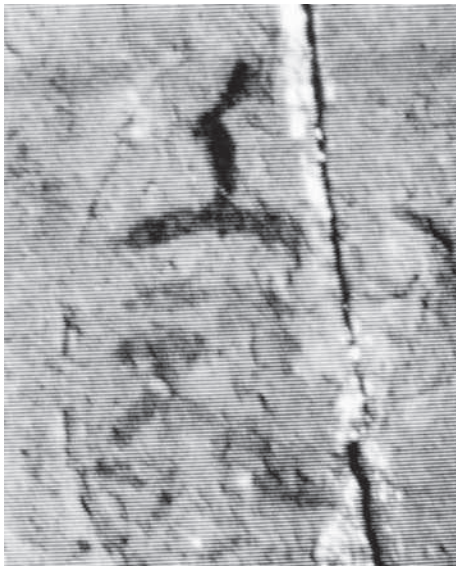
読み取り例1



剥落部分

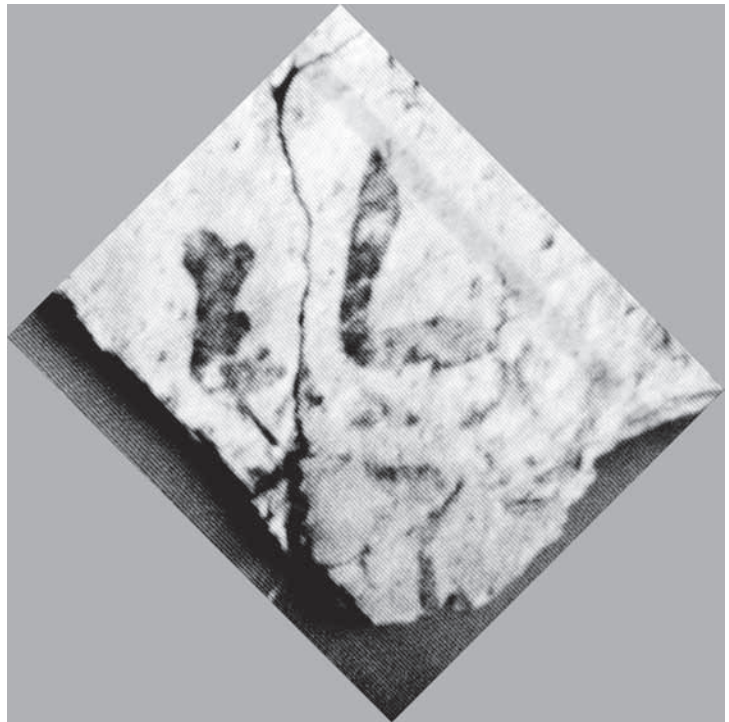
読み取り例2

第114図 墨書実測図（S=1/1）

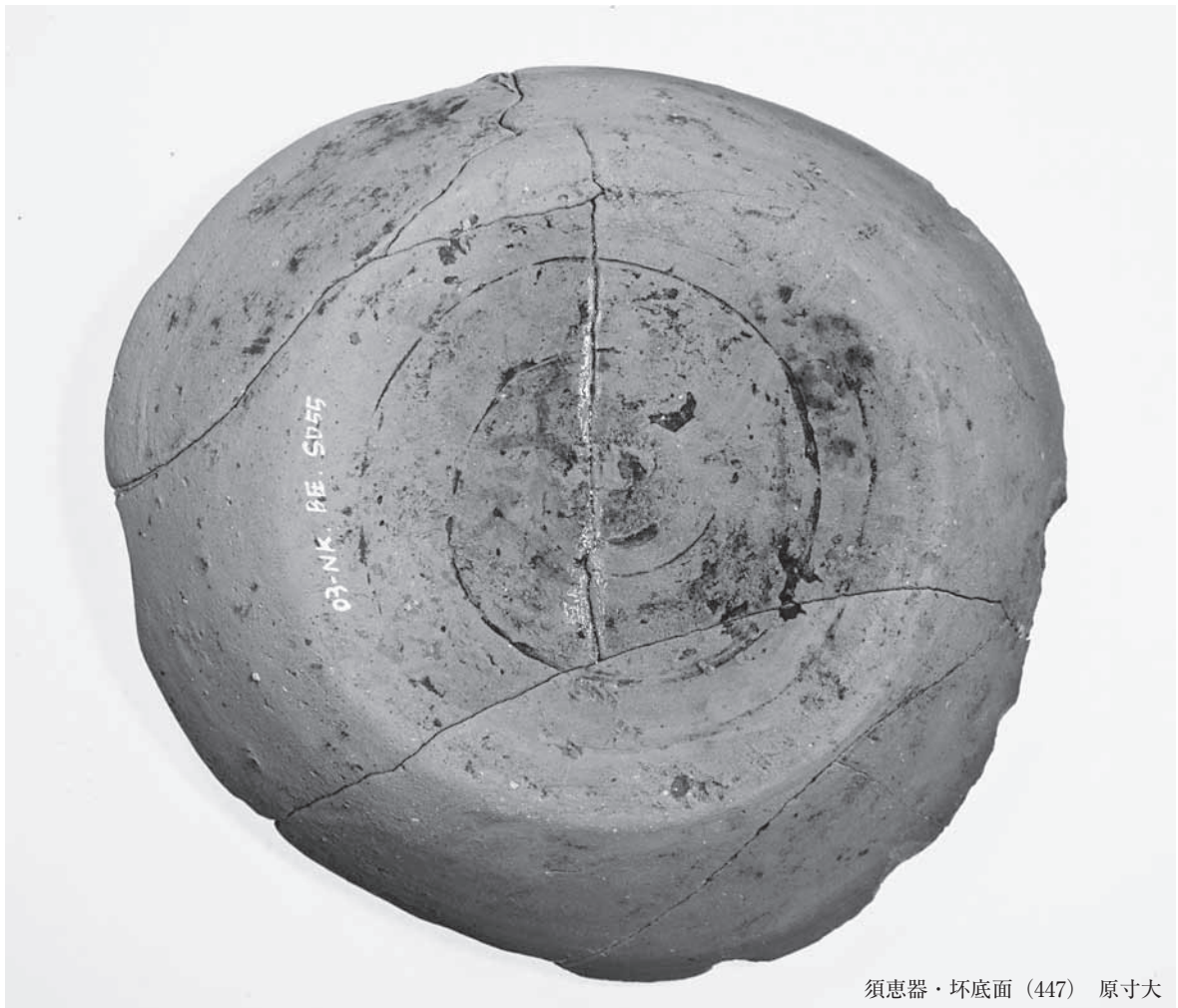


須恵器・坏底面 (447) 「上福」

赤外線で確認した墨書



土師器・皿底面 (457) 「凡 (?) □」



須恵器・坏底面 (447) 原寸大

### ※墨書土器

墨書土器が2点確認されている。いずれも8世紀の遺物で、8世紀中葉前後の時期に位置づけられる。高知県内で出土した墨書土器は類例が少なく、特に8世紀代の資料はほとんどないという点においても注目される資料である。

墨書が確認された遺物は須恵器坏(447)と土師器皿(457)で、いずれも墨書は底面に認められる。447は東西方向の溝(SD55)から出土したもので、底面の墨書は「上福」と読み取ることができる。「上福」という言葉は吉祥句であるというご指摘をいただいた。457はD区の包含層から出土した。内面に暗文が施されている。墨書文字の正確な特定はできない。2文字あることは確認でき、1文字目は「凡」(オホシ)である可能性がある。文字の左右が大きく離れるのは、8世紀よりやや古い時期に多いようだが、「凡」の特徴が現われている。「凡(オホシ)の場合、続く文字が「直」(アタイ)である場合が多いが、2番目の文字を直と読み取るとはできず、「凡?□」としておきたい。<sup>11)</sup>

### (3) 奈良～平安時代かけての北地遺跡の様相

この時期の北地遺跡には、段丘下段の下ノ坪遺跡<sup>12)</sup>の機能を補完する役割があったのではないかと考えられている。下ノ坪遺跡は官衙関連だと考えられるコの字型配置の倉庫群が見つかった遺跡であり、「郡津あるいは郡司物部連氏の私的な津」など遺跡の性格について検討が加えられている<sup>12)-2)</sup>。今回の調査では、下ノ坪遺跡と同様の一辺1m前後の方形ピットを持つ掘立柱建物が3箇所(SB2～4)から確認されている。掘立柱建物は一部のみの検出にとどまり、全体像はわからない。

小破片で図示はできていないが、製塩土器と赤彩土師器も出土している。出土遺物の量は少ないものの、搬入品である畿内産土師器や墨書土器の存在も併せて、これらの遺物と方形ピットを持つ掘立柱建物の存在からも、隣接する段丘下段の下ノ坪遺跡と同じ性格を持つ一連の遺跡だったことが分かる。

この地点での遺構と出土遺物から、8世紀中ごろから9世紀前半ごろまでの存続は確認できるが、それ以降、連続する時期の遺物はほとんど出土していない。

なお、今回の調査で、東西方向と南北方向に走る規格性を持った溝が検出されている。調査された溝の大半が同じ方向に走り、ほぼ直行する。遺跡周辺において行われた計画的な地割りによる溝で、現在の土地区画にも痕跡をとどめている。溝の方向は香長条里と比較すると方向が5～7°ほど西に傾いている。調査担当者は、条里制に関連する溝である可能性について指摘している。<sup>13)</sup> 本報告では十分な検討ができなかったが、重要な指摘であり、今後検証していかなければならない課題である。

### 古代から中世へ(10～11世紀)

律令制の崩壊過程において、調査地点から遺物は減少、9世紀の後半から10世紀の中葉にかけての遺物はほとんどなくなる。458や459は10世紀後半の皿と椀であり、包含層出土遺物である。10世紀後半から続く11・12世紀にかけては、遺物が少量ではあるが確認されている。

### 中世前期(12～13世紀)

SK42から、11世紀後半から12世紀にかけての時期に比定される白磁Ⅳ類が出土している。白

磁は包含層からも出土しており、当該期の建物の存在も予想されるが、復元することはできなかった。

12世紀の土師器小皿が方形の遺構（SK76）から出土している。同時期の遺物として、包含層や遺構中から、糸切り底の底部、輪高台の底部など土師器の底部小片が出土している。

#### 中世後期以降（14世紀以降）

ほとんど出土遺物がなくなり、集落内の居住域ではなくなった段階である。その中で、19世紀の備前・陶磁器類、砥石、瓦が確認されたSK100・101については報告した。これ以外に14世紀以降だと確認できる遺構はない。

出土遺物の中で注目されるものは、包含層出土の大和型瓦質土器（第107図－453）である。上胴部に重弧文を持つタイプで、県内では、四万十川下流域の坂本遺跡<sup>14)</sup>や仁淀川下流域の上ノ村遺跡からの出土例が知られている。一般の中世遺跡から普遍的に出土する遺物ではないが、特別な役割を持つ遺跡から出土することは珍しくないようだ。<sup>15)</sup> 坂本遺跡は四万十川と中筋川の合流点近く、上ノ村遺跡は仁淀川と波介川の合流点近くに立地する遺跡で、遺跡の性格自体は異なるが河川交通の上から似通った場所にある遺跡だといえる。中世の北地遺跡も物部川下流域で特異な役割を担っていたのかもしれない。



上空から見た北地遺跡（平成15年）



## おわりに ～北地遺跡周辺 弥生時代集落の変遷～

北地遺跡の調査成果は、高知平野の弥生時代社会復元へ向けて、いくつかの新たな事実を検討材料として提供した。また、従来考えられてきた通説を追認・補強する資料も数多い。中期前半から中葉にかけての集落は、資料の少ない時期にデータとして貴重なものだし、後期前半の竪穴住居出土の後漢鏡（破鏡）は、新たに発掘調査で確認された青銅器として注目を集めた。古代以降についても、8世紀の墨書土器をはじめ、大型の掘立柱建物など、奈良～平安時代の下ノ坪遺跡の官衙機能が、段丘上段でも確認できたことは大きな成果である。

弥生時代については、周辺の遺跡と比較により、遺跡の様相をある程度までは追求できるようになってきている。一つの遺跡の調査結果だけではわかり得ないダイナミックな集落の変遷が、仁淀川から物部川にかけての「高知平野」という小地域をフィールドとして詳細に描き得る状況になってきたことに、昔日の念を禁じ得ない。昭和50年代後半の第1次田村遺跡群の調査以来蓄積されてきた1000棟に近い竪穴住居の調査事例が、それを可能にした。田村遺跡群では合計600棟におよぶ竪穴住居はじめとする遺構群の分析により、集落内での構造・変遷が見事に描き出されている。<sup>66</sup>

しかし、1000棟に達しようかという住居調査例の中でさえ、第Ⅱ様式併行期の住居は、可能性を持つものを含めても4棟のみ（いずれも田村遺跡群）、しかも、簾状文登場以前のⅡ様式古段階併行期の住居は1棟も確認されていないのである。<sup>67</sup> その意味で、Ⅱ様式併行期の竪穴住居3棟（うち古段階2棟）を検出した今回の北地遺跡の調査成果は、貴重である。

直前の弥生前期末に遺跡数は急増し、拡大し地域性を色濃く打ち出し新たな段階を迎えた高知平野弥生社会は急速に縮小・衰退したのか？しかし、この前期末～中期初頭から中期前半への時期には、画期は認められるものの、次の段階へと続くいくつかの遺跡を確認することができる。香南市下分遠崎遺跡<sup>68</sup>、高知市柳田遺跡<sup>69</sup>、そして北地遺跡など。ただし、これらの遺跡は、例外なく中期中葉で終焉を迎え、次の段階（中期後半）へは続かない。連続して集落の継続が認められるのは、田村遺跡群のみである。この簾状文が消える中期中葉にも一つの画期がある。

中期後半は県内各地に高地性集落が形成されるが、いずれも後期はじめまでの短期間で廃絶、後期初頭～前半には平野部に新たに集落が形成されはじめる。この時期（後期はじめ）に集落が成立し盛期を迎えるのが、下ノ坪遺跡であり、隣接する北地遺跡である。下ノ坪遺跡からはガラス玉80点が集中する高知平野最大級（8m大）の住居（ST11）が確認されているし<sup>70</sup>、北地遺跡ST1から出土した青銅鏡（破鏡）は、青銅祭祀最終段階の高知平野の様相を示すものとして注目される。下ノ坪、北地、田村遺跡群とも後期中葉までに終焉を迎え、後期後半以降古墳時代の初めにかけて、集落は今まで開発できなかった洪積台地など、新たな場所へ一斉に進出する。

もう一つの大きな画期は、弥生時代が終わりを告げ、古墳時代に入った古式土師器Ⅰ期とⅡ期との間の画期である。古式土師器Ⅰ期からⅡ期へと続く遺跡は、高知平野周辺では、全くといっていい程見いだすことができない。絶対年代は正確ではないかもしれないが、3世紀の後半～末の段階が想定される。何らかの大きなインパクトがあったのだろうか。弥生終末期から古墳時代初頭にかけての遺跡数急増に続き、急減、これ以降高知平野ではほとんど遺跡が確認できなくなる。

それにしても、高知平野での集落の存続、廃絶が一斉に起こるいくつかの画期は、何を原因としているのであろうか。



弥生時代前期末～中期初頭の集落



弥生時代中期前半～中葉の集落



弥生時代後期初頭～中葉の集落



弥生後期後半～古墳時代初頭の集落

第116図 北地遺跡周辺の弥生時代集落居住域(推定)の変遷

社会的要因、自然環境要因、様々な側面からのアプローチがされてきたようだが、決定的な決め手はまだないようである。近年の、年輪年代、放射性炭素年代など、自然科学的年代測定法の進展により、従来の年代観が大きく見直され、定着してきたかの観がある。新たな年代観を元に、過去の地球環境の変化と歴史事象との照応により、過去の人類活動と環境変動との因果関係が再整理されている。地球が温暖化した時期には安定した活動が継続、寒冷化した時期には気候の変動幅が大きく（暴風雨などの回数増加）、人類活動に影響を与えることが多いということが指摘されている。太陽の黒点観測により、太陽活動の停滞期には寒冷化が起こり、環境が大きく変化、紀元前 800 年頃のオランダの例（浸水による居住可能域の変化）、フン族の移動、縄文晩期から弥生前期にかけての大陸から日本列島への人口圧、など各地で太陽の黒点活動の停滞期・寒冷化による環境変化が引き金となった歴史上の出来事が紹介されている。<sup>21)</sup>

もとより、環境決定論に陥ってしまう危険は戒めなければならないが、自然環境が人間活動に与える影響の大きさは考慮されなければならない。出原恵三<sup>22)</sup>や更谷大介<sup>23)</sup>が指摘し、遺跡の調査成果から読み取った洪水の痕跡などは、より深く注意を払われるべきであり、考古学の側からの事例の蓄積をしていく必要がある。

あらためて、北地遺跡に目を向けた時、残された課題は多い。ただ、現在までの調査事例の蓄積により、そして今回、高知平野でも極めて例の少なかった弥生時代中期初頭から中葉にかけての竪穴住居を含む集落の事例が加わったことにより、この地域での集落の生活領域の変遷をある程度辿ることができるようになった。当時の集落はどういう範囲に広がっていたのか、遺構や土器の出土地点を手掛かりに推定することで、当時の歴史的景観の復元につながる。北地遺跡という便宜的に設定された遺跡範囲ではなく、有効な集落範囲が見えてくる。

第 116 図に示した地図は、時期ごとの集落居住域の推定範囲である。星印で示したのは遺構や遺物の散布が確認された地点で、上岡山の北側に展開していた集落が、弥生時代後期には深淵地区まで範囲を拡大する。遺構密度・出土する遺物量からも人口増による集落景観の変化が読み取れる。古墳時代初頭に北へ中心が移動した集落は、その直後、廃絶する。この時期以降、北地遺跡周辺では遺物の痕跡を全く確認することができなくなる。次に、遺物の出土が確認できるのは 6 世紀後半になってからであり、北地遺跡周辺には約 250 年間の空白が生じるのである。

常に意識し続けた「田村遺跡群」との比較においても、弥生前期末以降の集落の盛衰の画期は、間違いなく高知平野の弥生集落全体が連動しており、「社会」と無関係ということはありません。

高知平野の弥生～古墳時代にかけての集団の変化を考える上でも、物部川左岸下流域遺跡群（仮称）という集落範囲の捉え方は有効性を持ち得るのではないかと。下ノ坪・上岡・上岡北・北地遺跡、西野遺跡群そして深淵遺跡まで、南北長約 1.5 キロメートル、幅 200～300 m の田村遺跡群よりも狭い範囲内で、居住域の変化をダイナミックに追うことが可能になってきた。そして周辺地域の遺跡の様相と比較することで、弥生・古墳社会の変化の一端が見えてくる。

物部川下流左岸の、このエリアで調査された竪穴住居の合計は 98 棟。地域の歴史を明らかにできるのは、地道な作業の積み重ねだけである。

## 脚注 参考文献・引用文献

- (1) 弥生土器編年には、出原恵三「土佐地域」『弥生土器の様式と編年 四国編』木耳社 2000年を参考にした。
- (2) 遺構出土の剥片類は、報告されることの少ない資料である。県内の竪穴住居出土剥片類は畠中宏一によって集成されている。  
畠中宏一「26. 剥片が出土する竪穴住居跡について」『田村遺跡群Ⅱ 第9分冊 総論』(財)高知県埋蔵文化財センター 2006年  
また、石器全般について同報告書の器種ごとの分類を参考にしてている。  
小野由香・小島恵子・畠中宏一・前田光雄「Ⅷ 石器・石製品」(前出 田村遺跡群Ⅱ 第9分冊)
- (3) 磨製石斧の石材・流通・製作工程などについては、各地の調査事例をもとに研究が進んでいる。  
『季刊考古学 111号 石器生産と流通にみる弥生文化』雄山閣 2010年  
加島次郎「西部瀬戸内」(同書)には、原材から成品に至る細かい工程ごとの資料が示されている。
- (4) 「陰陽石」の可能性を持つ弥生中期前半の資料に関しては、『儀礼と習俗の考古学』(春成秀爾著 塙書房 2007年)を参考にした。以下、「性象徴の考古学」と「男茎形の習俗」は、春成秀爾による同書所収の論考である。

「3 性象徴の考古学」(1995年稿 2003年補遺)では、男根をオハゼ、女陰をホトとし、オハゼ・ホトに関連する縄文・弥生期の出土資料を中心に、国内外の考古資料が集成されている。県内の事例では、中世の芳原城跡出土資料がオハゼ形木製品として紹介されている。論考中では、考古資料のみならず民俗例も含めて検討され、オハゼ・ホトの象徴性や背景にある社会との関連が、時代背景や地域性の分析を通じて示されている。「性象徴と社会」に正面から取り組まれた力作である。

「9 男茎形の習俗」(1999年稿 2005年改稿)では、冒頭で1970年の池上曾根遺跡から出土した弥生時代中期はじめ(Ⅱ期)の「男茎形木製品」とそれに対するアプローチについて取りあげられ、「呪具の中で最も歴史の長い男茎形」について民俗例も含めて整理し、その意味を考えていこうとしている。民俗例が丹念に採録され、時代ごとにまとめられている。縄文伝統の中にも、そして現在の民俗例の中にも、陰部を模した石製品あるいは木製品、土製品と男茎形の同様の製品が対になって、さまざまな祭祀に供されてきた例があることがわかる。

この論考中で谷口康浩の石棒と石皿が対になった例(縄文中期末～晩期)が紹介されている。(同書418ページ) 谷口は「生殖行為が死や祖先をめぐる信仰・祭儀と結びついている」と指摘、「死者に祖霊の強力な力を付与して困難な死の過程を通過させ、祖先たちの世界に再統合するというような信仰が背景になっていた。」と考えている。

また、弥生時代にも池上曾根遺跡の例など様々な性儀礼があることが紹介されている。高知県内の弥生時代の竪穴住居発掘調査件数は、2002年の段階で242棟(出原恵三集成・この時点で未報告の田村遺跡群2次調査分を除く)、田村遺跡群の2次調査で411棟、さらに近年介良野遺跡、西野々遺跡、伏原遺跡、西分増井遺跡、西野遺跡群(55棟)、折年遺跡、東野土居遺跡(80棟以上)など年々調査例が増加、すでに800棟を大きく超え、近い将来には1000棟に達する勢いである。それでも、竪穴住居から性象徴の儀礼を想起させる資料の報告例はない。弥生時代中期前半のST10出土資料は非常に珍しい例には違いない。

- 『介良野遺跡』(財)高知県埋蔵文化財センター 2007年  
 『西野々遺跡Ⅰ』(財)高知県埋蔵文化財センター 2008年  
 『伏原遺跡Ⅰ』・『伏原遺跡Ⅱ』(財)高知県埋蔵文化財センター 2010年  
 『西分増井遺跡Ⅱ』(財)高知県埋蔵文化財センター 2004年  
 『東野土居遺跡 記者発表及び現地説明会資料』(財)高知県埋蔵文化財センター 2010年
- (5) 出原恵三「南四国の竪穴住居」(『四国とその周辺の考古学』犬飼徹夫先生古稀記念論文集刊行会 2002年)  
 その後、Ⅱ様式併行期の住居は、田村遺跡群第2次調査で合計3棟報告されているが、3棟はいずれもⅡ-2期の竪穴住居で、「可能性がある」住居だと報告されており、確実ではない。北地遺跡のST3とST11はⅡ-1期であり、当該期の住居は県内で初めての検出例となる。
- (6) 廣田典夫「原始編 第二章弥生時代」『野市町史 上巻』野市町史編纂委員会 1992年
- (7) 出原恵三「第V章考察1.下ノ坪遺跡の弥生後期土器と集落」『下ノ坪遺跡Ⅱ』野市町教育委員会 1998年
- (8) 更谷大介『北地遺跡試掘調査概要報告書』野市町教育委員会 2003年
- (9) 出原恵三「第三章考察2.青銅器」『西分増井遺跡Ⅱ』(財)高知県埋蔵文化財センター 2004年
- (10) 以下、古代の遺物については、池澤俊幸氏(高知県埋蔵文化財センター)の御教示を受けた。
- (11) 墨書土器の文字解読については、古市晃氏(神戸大学)に赤外線写真と遺物を実見して頂き、御教示を受けた。また、土器の赤外線写真撮影の際には、岡本桂典氏(高知県歴史民俗資料館)、池澤俊幸氏・島内洋二氏(高知県埋蔵文化財センター)にお世話になった。
- (12) 『下ノ坪遺跡Ⅰ』野市町教育委員会 1998年  
 『下ノ坪遺跡Ⅱ』野市町教育委員会 1998年  
 『下ノ坪遺跡Ⅲ』野市町教育委員会 1998年
- (12-2) 森公章「律令体制下の土佐国」『高知県の歴史』山川出版社 2001年
- (13) 『野市町 北地遺跡 記者発表・現地説明会資料』野市町教育委員会 2003年
- (14) 『坂本遺跡』(財)高知県埋蔵文化財センター 2008年
- (15) 池澤俊幸氏の御教示による。

- (16) 出原恵三『南国土佐から問う弥生時代像 田村遺跡』新泉社 2009年  
『田村遺跡群Ⅱ 第1分冊～第8分冊』(財)高知県埋蔵文化財センター 2004年  
『田村遺跡群Ⅱ 第9分冊』(財)高知県埋蔵文化財センター 2006年
- (17) 弥生時代中期初頭～前半であるⅡ期の竪穴住居については「可能性を持つ」ものも含めて報告されており、明確に捉えられるものはほとんどない。『田村遺跡群Ⅱ 第9分冊』の中にも、Ⅱ期の竪穴住居の可能性のある遺構の報告もある一方で「Ⅱ期の遺構はなかった」という記述もある。当該期の遺構が極めて少ないことは間違いない。
- (18) 『下分遠崎遺跡発掘調査報告書(1)』香我美町教育委員会 1989年  
『下分遠崎遺跡』(財)高知県埋蔵文化財センター 1993年  
『下分遠崎遺跡Ⅳ』香南市文化財センター 2010年
- (19) 『柳田遺跡』高知市教育委員会 1994年
- (20) 同(12)
- (21) 今村峯雄・藤尾慎一郎「③炭素14の記録から見た自然環境変動－弥生文化成立期－」『弥生時代の考古学2 弥生文化誕生』同成社 2009年
- (22) 同(7)
- (23) 同(8)

# 写真図版







上空から・2005年撮影

A区調査前（東から）



D区試掘調査時の景観  
（西から）



C区調査前（北から）



B区南端の調査 調査風景（南から）



太型蛤刃石斧 (320) 出土状況



磨製石包丁 (415) 出土状況



試掘調査で確認された溝状遺構と石包丁 (試掘TR10)



石列セクション



C区北端 検出された石列と土器棺墓 (土器9・10)



C区北半の遺構（北から）



SK2 遺物出土状況



SK11 遺物出土状況（東から）



弥生土器・甕 (250)



弥生土器・壺 (249)

SK12  
(SB2)



SK11

SK11・12 遺構完掘（西から）



D区遺構完掘状況  
(東から)



SB2・SB3  
(東から)



D区遺構完掘状況 (西から)



C区 ST1



ST1 パンクセクション



ST1 検出状況



青銅鏡（破鏡）出土状況



C区 ST1 遺物出土状況





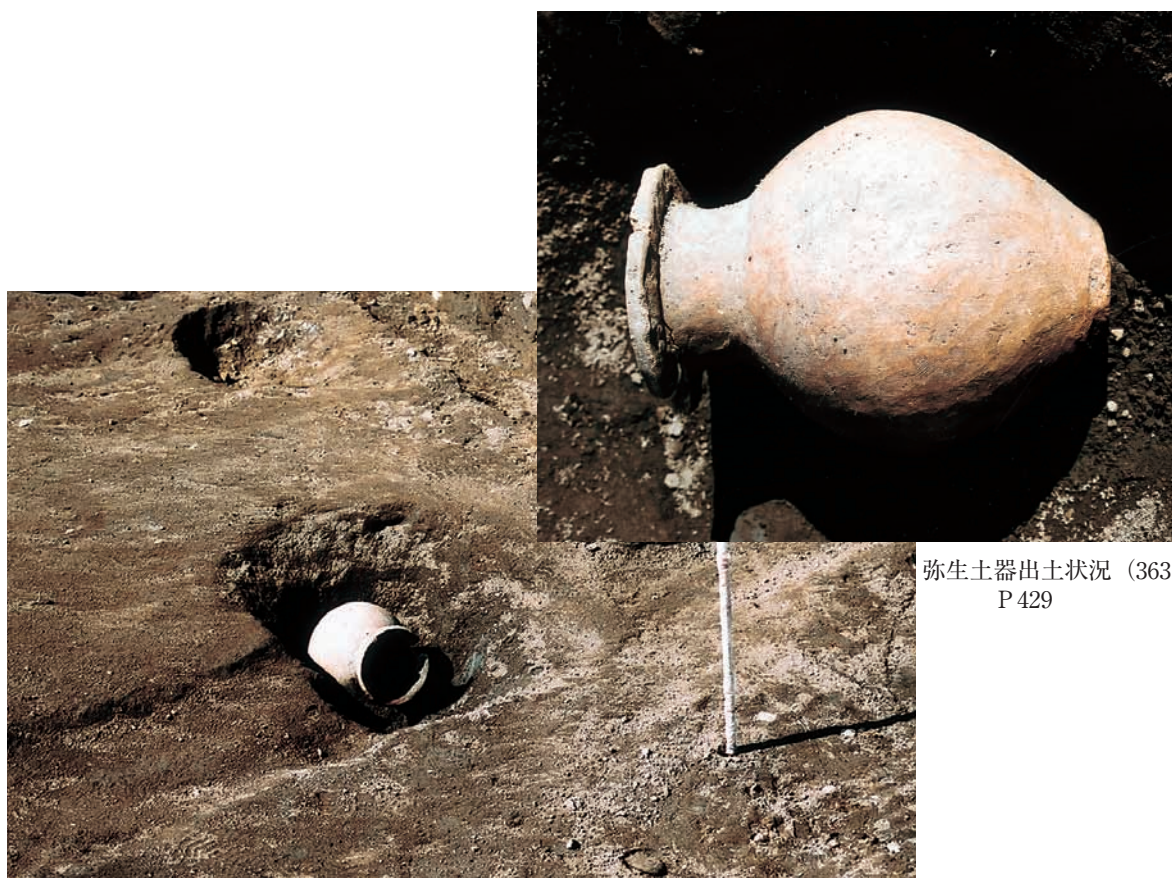
遺跡から西北方向をのぞむ



南からみたC区と周辺の集落景観



C区 弥生土器出土状況



弥生土器出土状況 (363)  
P 429

C区 P429 弥生土器 (313) 出土状況と周辺の遺構



SD23



SD-H



SB4



SB4

SK70



SK70 遺物出土状況



SK70 遺物出土状況



SK50完掘状況

SK50

ST11



ST9

A区西端 調査風景  
検出遺構はST9・11



ST11 遺物出土状況 (P425)



ST9 完掘



壺 228  
(弥生時代中期)

ST11 (P425) 出土遺物

ST11

ST9



ST9・11と周辺遺構



ST10 底面遺構検出状況



ST10 完掘



B区遺構完掘状況（北から）



B区南端遺構完掘状況（北から）





B区遺構完掘（北から）



C区 ST8 完掘 手前のピットはSB4



C区 ST3とST2 (北から)  
(手前)



ST7



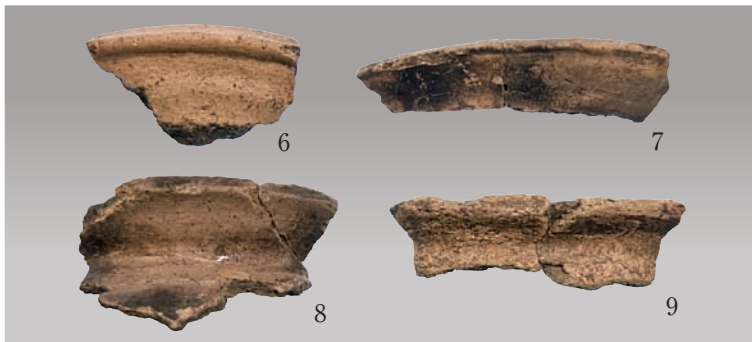
ST7と検出された石列

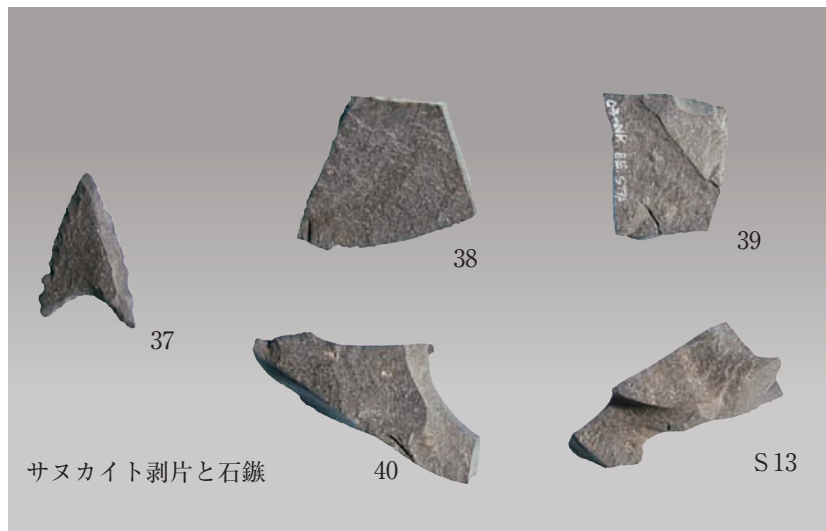
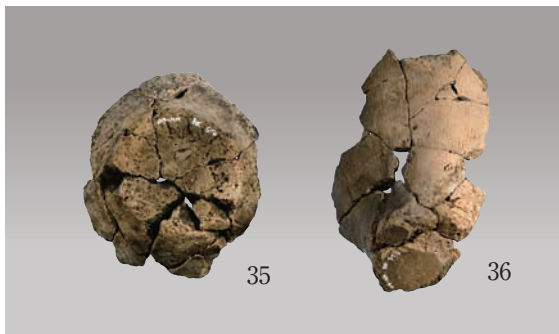
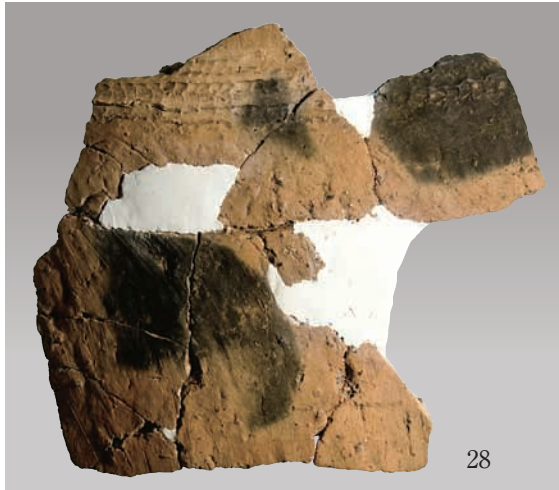


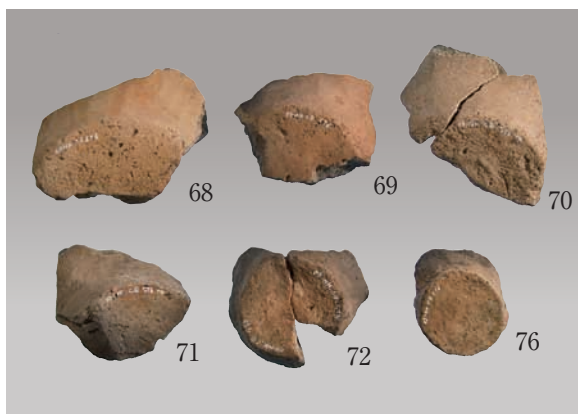
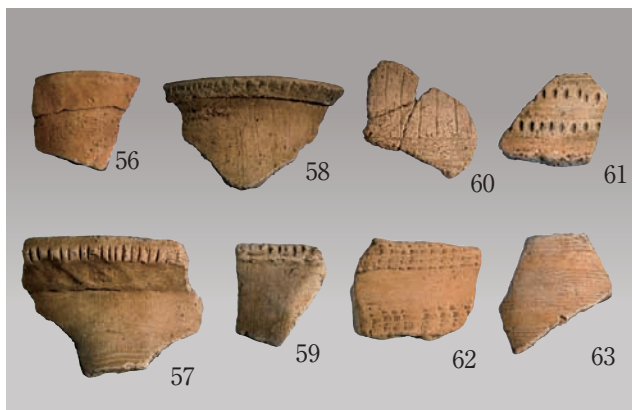
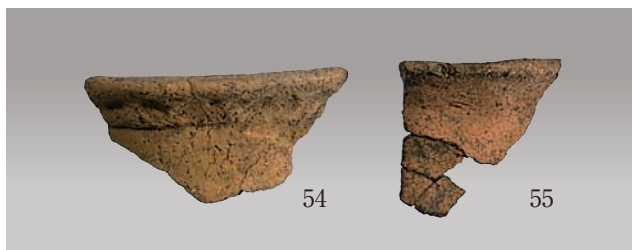
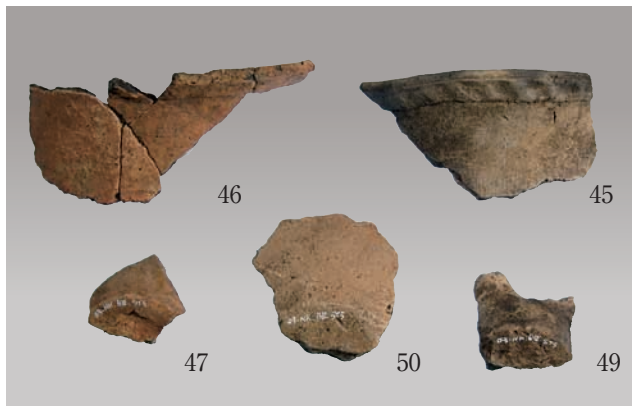
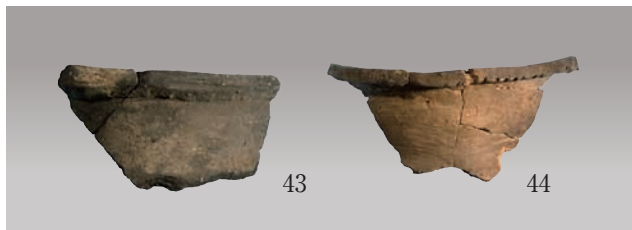
遺物出土状況



C区遺構完掘状況（北から）



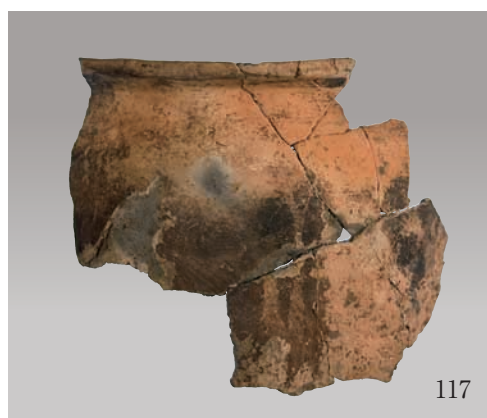


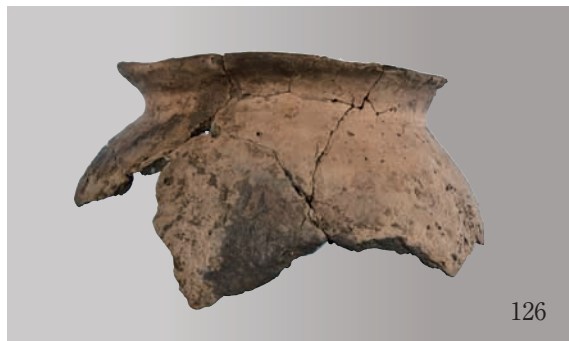




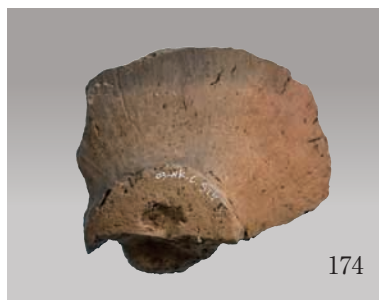




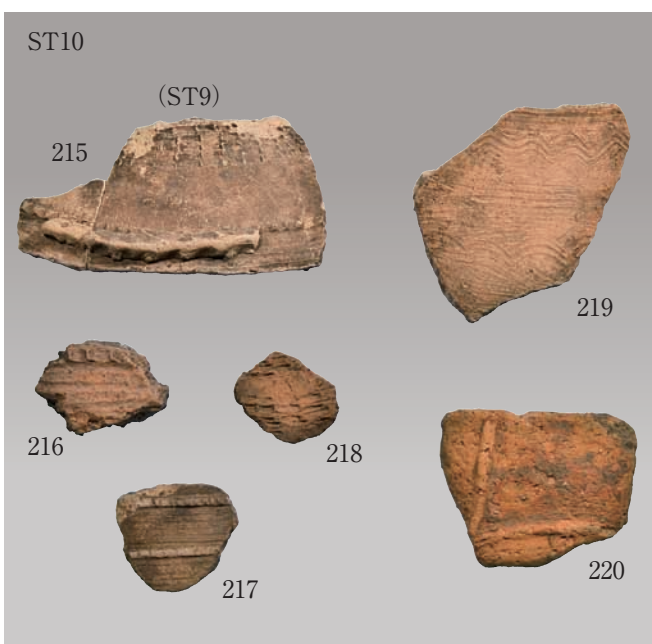
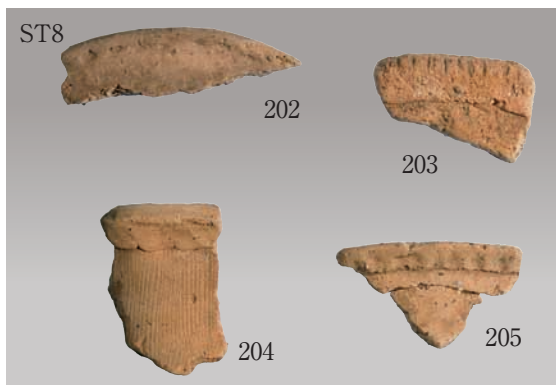












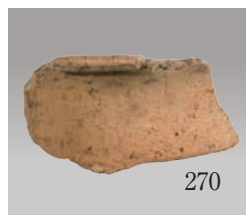
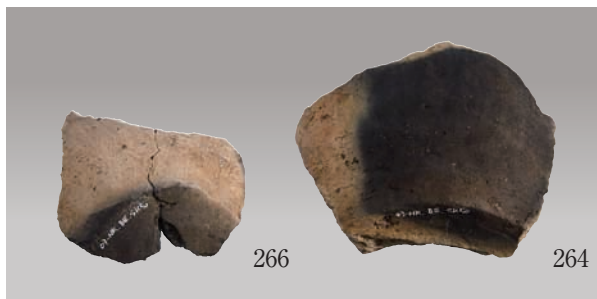
※215のみST9





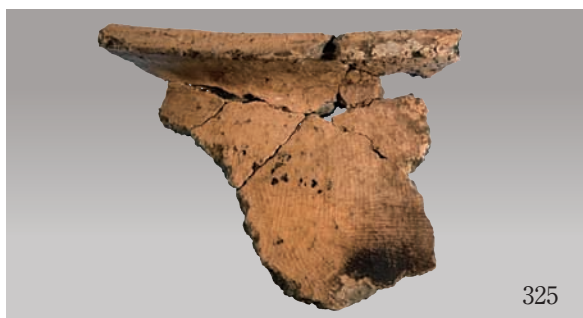
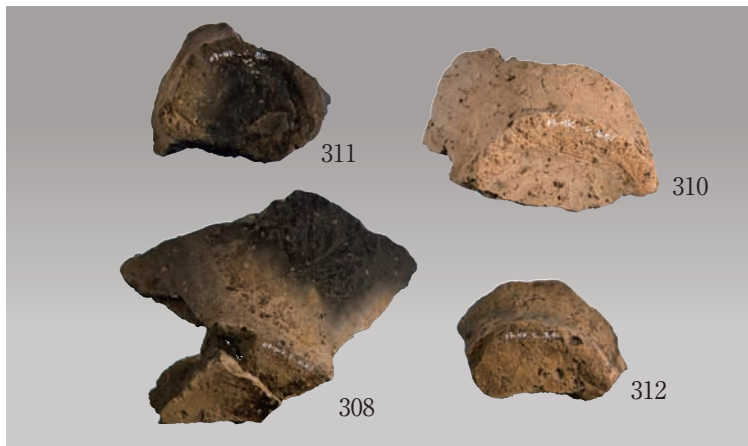


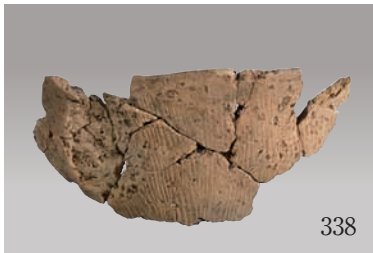














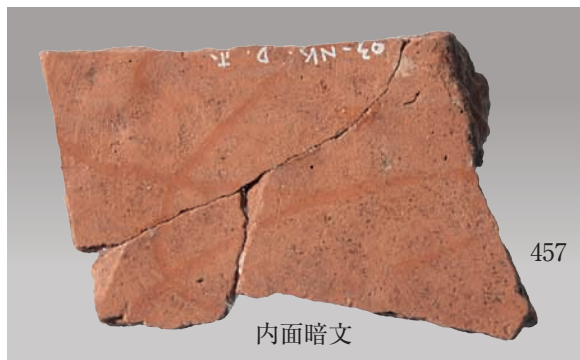






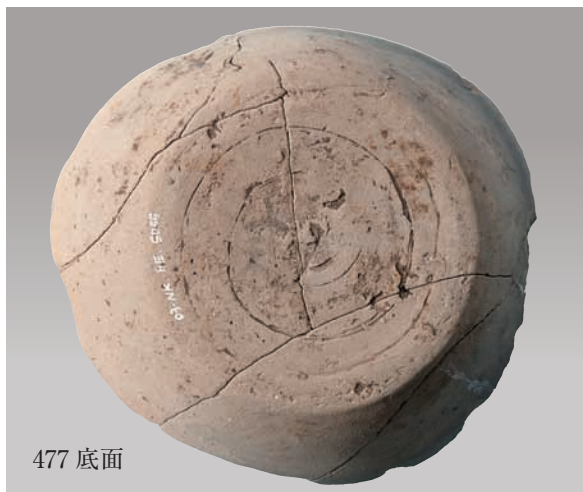


447



457

内面暗文



477 底面



457 外底

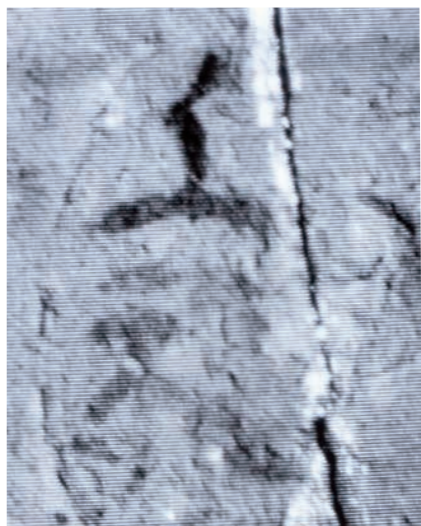


447

墨書拡大

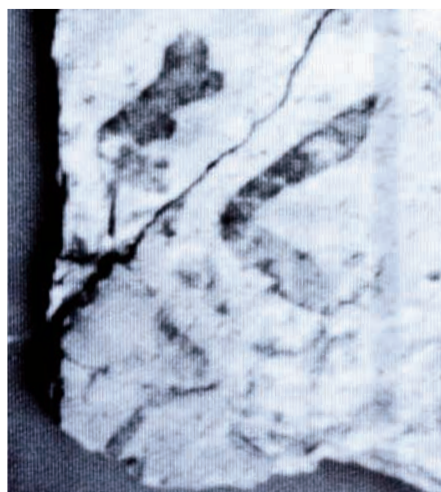


457

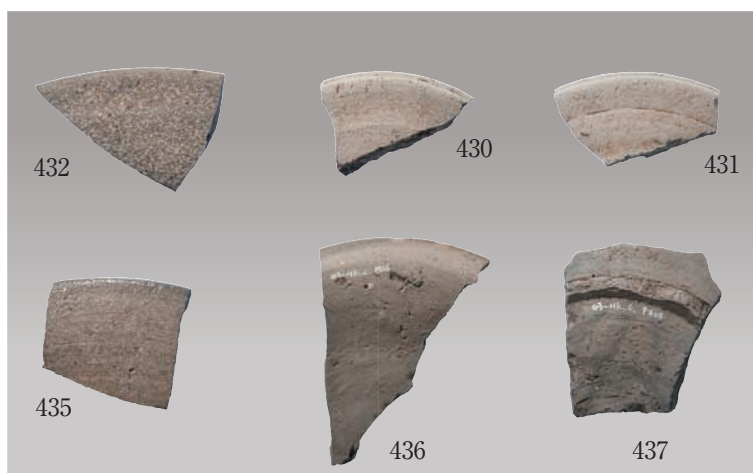


447

赤外線写真



457



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	きた じ い せき							
書 名	北 地 遺 跡							
副 書 名	北地南線農道整備事業に伴う発掘調査報告書							
巻 次								
シ リ ー ズ 名	高知県香南市発掘調査報告書							
シ リ ー ズ 番 号	第5集							
編 著 者 名	松村信博・宮地啓介							
編 集 機 関	高知県香南市文化財センター							
所 在 地	〒781-5453 高知県香南市香我美町山北1553-1 TEL.0887-54-2296							
発 行 年 月 日	西暦 2011年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯 。' "	東経 。' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きた じ い せき 北 地 遺 跡	こうちけんこうなんし 高知県香南市 のいちちょうしもい 野市町下井  555-1番地他	39211	200025	33度 33分 41秒	133度 41分 10秒	試掘調査 H.15.4.21 ～5.30 本発掘調査 H.15.7.1 ～9.30	100  1,000	農道整備 事業
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
北地遺跡	集落遺跡  古代官衙 関連集落	弥生時代 ・前期末 ～中期中葉 ・後期前半  古代 (8～10世紀) 中世 (12～13世紀)	竪穴住居 土坑 土器棺墓 溝 ピット 掘立柱建物	青銅鏡(破鏡) 弥生土器 石器類(磨製石鏃・ 石包丁・磨製石斧・ 削器・敲石類・陰陽 石他) 土師器 須恵器 瓦質土器(大和型) 貿易陶磁(白磁)		・弥生時代中期初頭～中葉 の竪穴住居と土坑確認 ・弥生中期前半住居出土の 陰陽石(祭祀関連遺物) ・弥生時代後期前半ST1 出土青銅鏡(漢鏡・破鏡) ・磨製石鏃、石包丁、磨製 石斧未製品など弥生石器 類 ・8世紀の墨書土器2点		

高知県香南市発掘調査報告書 第5集

# 北 地 遺 跡

－北地南線農道整備事業に伴う発掘調査報告書－

---

2011年3月

発行 高知県香南市教育委員会  
香南市文化財センター  
〒781-5453 高知県香南市香我美町山北 1553-1  
電話 0887-54-2296

印刷 株式会社 飛 鳥